

立花町文化財

調査報告書第10集

小倉谷横穴墓群

八女郡立花町大字北山字茶臼塚所在横穴墓群の調査

1999

立花町教育委員会

こぐらたに 小倉谷横穴墓群

八女郡立花町大字北山字茶臼塚所在横穴墓群の調査

平成10年度

立花町教育委員会



小倉谷横穴墓群俯瞰



小倉谷横穴墓群出土装身具

序

本書は、昭和62年度から平成6年度まで、個人の土取りに伴って発掘調査を実施した小倉谷横穴墓群の調査報告書です。

南筑後地区は、その中でも主に矢部川以南において横穴墓が多く見られる地域で、福岡県下でも有数です。

小倉谷横穴墓群は、「肥後タイプ」と呼ばれる、主体部の内部構造において屍床を「コ」の字状に区画したのが見付き、小倉谷横穴墓群が形成された6世紀中頃から7世紀後半頃の南筑後地区が、肥後文化の影響を受けていたかを考える上で大変重要だといわれています。

最後になりましたが、この調査にあたりまして、県文化課をはじめ、九州歴史資料館、炎天下に発掘作業に携わっていただいた方々と、そのほか多くの皆様のご指導、ご協力に深く感謝いたします。

そして本書が文化財保護の理解のため広く活用いただければ幸いです。

平成11年3月31日

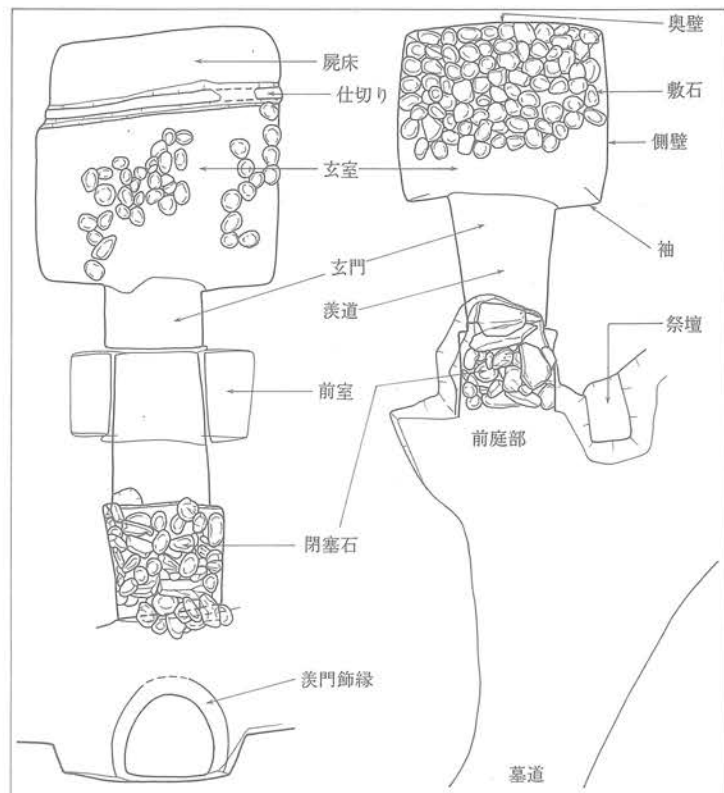
立花町教育委員会

教育長 末継敬一郎

例 言

- 1 本書は、昭和62年から平成3年・6年にかけて調査を実施した、個人の土取りに伴い破壊される小倉谷横穴墓群（県遺跡分布地図NO.720077-720081）の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、昭和62・63年度、平成6年度が町単費、平成元年度から2年度が国・県の補助を受け、立花町教育委員会が事業主体となり福岡県教育委員会の技術援助を受けて実施した。
- 3 横穴墓の実測は、木下 修（現・県立美術館）・新原正典（現・九州歴史資料館）・佐々木隆彦（現・県文化財保護課）・佐々木四十臣（現・県文化財保護指導委員）が分担し、遺物の実測は、佐々木（隆）・今井涼子、県文化財保護課太宰府事務所の平田春美・若松三枝子・久富美智子・田中典子・棚町陽子・坂田順子・堀江圭子・藤原さとみ・江口幸子・堀之内久美子が、トレースは豊福弥生・原かよ子が分担した。
- 4 遺物整理及び鉄器処理は、九州歴史資料館で実施し、写真撮影は、気球写真がフォト大塚と委託契約し、横穴墓内部写真は、九州歴史資料館の石丸洋技術主査にお願いし、その他は佐々木（隆）が撮影した。また、遺物写真は、巻頭写真を石丸洋、その他は県文化財保護課整理指導員の北岡伸一が撮影した。
- 5 出土人骨の鑑定及び執筆は、九州大学比較社会文化研究科の中橋孝博教授にお願いした。
- 6 本書で使用した方位は磁北である。
- 7 轡の分類については、岡安光彦「いわゆる『素環の轡』について」－日本古代文化研究・創刊号：1984を参考にした。
- 8 本書の執筆は下記の通りである。

I……………（佐々木隆）	III……………（佐々木隆）	V……………（佐々木隆）
II……………（永田 寧）	IV……………（中橋孝博）	
- 9 本書の編集は佐々木（隆）が担当した。



横穴墓部分名称

本文目次

I	はじめに	1
II	遺跡の位置と環境	2
III	発掘調査の記録	4
1	遺跡の概要	4
2	横穴墓の調査	6
3	出土遺物	70
IV	小倉谷横穴墓群出土の古墳人骨	114
V	おわりに	115

図版目次

巻頭図版 1	小倉谷横穴墓群俯瞰	図版 8	(1) 11号～15号横穴墓（南から）
2	横穴墓出土装身具	(2)	11号横穴墓玄室
図版 1	(1) 小倉谷横穴墓群俯瞰（気球写真）	(3)	11号横穴墓前庭部遺物出土状態
	(2) 小倉谷横穴墓群遠景（南から）	図版 9	(1) 12号横穴墓（南から）
図版 2	(1) 西側横穴墓群（南西から）	(2)	12号横穴墓玄室
	(2) 1号横穴墓玄室	(3)	12号横穴墓前庭部遺物出土状態
	(3) 2号横穴墓人骨出土状態	図版 10	(1) 12号横穴墓道遺物出土状態
図版 3	(1) 3号横穴墓発見当時の状態	(2)	13号横穴墓玄室
	(2) 5号横穴墓（西から）	(3)	14号横穴墓前庭部祭壇遺物
	(3) 5号横穴墓玄室		出土状態
図版 4	(1) 5号横穴墓道遺物出土状態	図版 11	(1) 14号横穴墓羨道から玄室を望む
	(2) 6号横穴墓玄室	(2)	14号横穴墓玄室
	(3) 7号～12号横穴墓（南から）	(3)	15号横穴墓（南から）
図版 5	(1) 7号横穴墓閉塞状態	図版 12	(1) 15号横穴墓玄室
	(2) 7号横穴墓閉塞除去後の状態	(2)	16号横穴墓（南から）
	(3) 7号横穴墓玄室	(3)	16号横穴墓玄室
図版 6	(1) 8号～11号横穴墓（南から）	図版 13	(1) 16号横穴墓道遺物出土状態
	(2) 8号横穴墓閉塞状態	(2)	17号横穴墓前庭部遺物出土状態
	(3) 8号横穴墓玄室	(3)	17号横穴墓閉塞状態
図版 7	(1) 9号横穴墓玄室	図版 14	(1) 17号横穴墓玄室
	(2) 10号横穴墓羨道から玄室を望む	(2)	18号横穴墓閉塞状態
	(3) 10号横穴墓玄室	(3)	18号横穴墓閉塞除去後の状態

図 版 15	(1) 18号横穴墓玄室	図 版 25	5号・6号横穴墓出土土器
	(2) 19号～21号横穴墓（南西から）	図 版 26	6号・8号横穴墓出土土器
	(3) 19号横穴墓（南西から）	図 版 27	8号・10号・11号横穴墓出土土器
図 版 16	(1) 19号横穴墓玄室	図 版 28	8号・10号・11号横穴墓出土土器
	(2) 20号横穴墓（南西から）	図 版 29	10号・11号横穴墓出土土器
	(3) 20号横穴墓玄室	図 版 30	11号～13号横穴墓出土土器
図 版 17	(1) 21号横穴墓（南から）	図 版 31	12号・13号横穴墓出土土器
	(2) 21号横穴墓玄室	図 版 32	12号・13号横穴墓出土土器
	(3) 22号横穴墓（南西から）	図 版 33	14号・15号横穴墓出土土器
図 版 18	(1) 22号横穴墓玄室	図 版 34	15号・16号横穴墓出土土器
	(2) 第4次調査地点遠景（南から）	図 版 35	8号～13号・16号・17号横穴墓出土土器
	(3) 23号横穴墓（南西から）	図 版 36	17号・18号横穴墓出土土器
図 版 19	(1) 23号横穴墓飾縁部	図 版 37	18号・19号横穴墓出土土器
	(2) 23号横穴墓玄室	図 版 38	19号～23号横穴墓出土土器
	(3) 23号横穴墓玄室から羨道を望む	図 版 39	23号～25号横穴墓出土土器
図 版 20	(1) 23号横穴墓道遺物出土状態	図 版 40	小倉谷横穴墓群出土鉄器
	(2) 24号横穴墓（東南から）	図 版 41	小倉谷横穴墓群出土鉄器
	(3) 24号横穴墓玄室	図 版 42	小倉谷横穴墓群出土鉄器
図 版 21	(1) 25号横穴墓（南から）	図 版 43	小倉谷横穴墓群出土鉄器
	(2) 25号横穴墓玄室	図 版 44	小倉谷横穴墓群出土鉄器
	(3) 26号横穴墓発見当時	図 版 45	小倉谷横穴墓群出土鉄器・装身具
図 版 22	(1) 26号横穴墓（北から）	図 版 46	小倉谷横穴墓群出土装身具
	(2) 26号横穴墓玄室	図 版 47	小倉谷横穴墓群出土装身具
	(3) 3次調査作業風景	図 版 48	小倉谷横穴墓群出土装身具
図 版 23	3号～5号横穴墓出土土器	図 版 49	小倉谷横穴墓群出土装身具
図 版 24	5号横穴墓出土土器		

挿図目次

	対照頁		状態実測図(1/60・1/30)・・7
第1図	小倉谷横穴墓と周辺主要遺跡分布図 (1/25,000) 3	第6図	3号横穴墓実測図(1/60) 8
第2図	小倉谷横穴墓地形測量図(1/500)折り込み	第7図	4号横穴墓実測図(1/60) 9
第3図	小倉谷横穴墓群配置図 (第3次調査・1/300) 5	第8図	5号横穴墓実測図(1/60) 10
第4図	小倉谷横穴墓群配置図 (第4次調査・1/300) 6	第9図	6号横穴墓実測図(1/60) 11
第5図	1号横穴墓、1号・2号横穴墓人骨出土	第10図	7号横穴墓実測図(1/60) 12
		第11図	8号・9号横穴墓実測図(1/60) 14
		第12図	10号横穴墓、8号～11号横穴墓位置関係 実測図(1/60) 15
		第13図	10号横穴墓前庭部遺物出土状態実測図

	(1/30)	16	第41図	8号・10号・11号横穴墓出土土器実測図 (1/3)	46
第14図	11号横穴墓実測図(1/60)	17	第42図	8号・10号・11号横穴墓出土土器実測図 (1/3)	47
第15図	11号横穴墓遺物出土状態実測図 (1/30)	18	第43図	8号・10号・11号横穴墓出土土器実測図 (1/3)	48
第16図	12号横穴墓実測図(1/60)	19	第44図	10号・11号横穴墓出土土器実測図 (1/3)	49
第17図	12号・13号横穴墓前庭部遺物出土状態実測図(1/40)	20	第45図	10号・11号横穴墓出土土器実測図 (1/3)	50
第18図	13号横穴墓実測図(1/60)	21	第46図	11号・12号横穴墓出土土器実測図 (1/3)	51
第19図	13号玄室内遺物出土状態実測図 (1/60)	22	第47図	12号横穴墓出土土器実測図(1/3)	52
第20図	14号横穴墓実測図(1/60)	23	第48図	12号・13号横穴墓出土土器実測図 (1/3)	53
第21図	15号横穴墓実測図(1/60)	24	第49図	12号・13号横穴墓出土土器実測図 (1/3)	54
第22図	16号横穴墓実測図(1/60)	25	第50図	12号・13号横穴墓出土土器実測図 (1/3)	55
第23図	16号横穴墓遺物出土状態実測図 (1/30)	26	第51図	13号横穴墓出土土器実測図(1/3)	56
第24図	17号・18号横穴墓、前庭部遺物出土状態 (1/60・1/30)	28	第52図	14号・15号横穴墓出土土器実測図 (1/3)	57
第25図	18号横穴墓遺物出土状態(1/30)	29	第53図	15号・16号横穴墓出土土器実測図 (1/3)	58
第26図	19号横穴墓実測図(1/60)	30	第54図	15号・16号横穴墓出土土器実測図 (1/3)	59
第27図	20号横穴墓実測図(1/60)	31	第55図	15号～17号横穴墓出土土器実測図 (1/3)	60
第28図	21号横穴墓実測図(1/60)	32	第56図	8号～13号横穴墓出土土器実測図 (1/8)	61
第29図	22号横穴墓実測図(1/60)	33	第57図	8号・10号～13号・15号・16号横穴墓 出土土器実測図(1/3)	62
第30図	23号横穴墓実測図 (第4次調査・1/60)	34	第58図	17号横穴墓出土土器実測図(1/3)	63
第31図	24号・25号横穴墓実測図 (第4次調査・1/60)	35	第59図	17号・18号横穴墓出土土器実測図 (1/3)	64
第32図	26号横穴墓実測図 (第5次調査・1/60)	36	第60図	18号横穴墓出土土器実測図(1/3)	65
第33図	3号横穴墓出土土器実測図(1/3)	38	第61図	18号・19号横穴墓出土土器実測図 (1/3)	66
第34図	3号横穴墓出土土器実測図(1/3)	39	第62図	19号～22号横穴墓出土土器実測図	
第35図	3号～5号横穴墓出土土器実測図 (1/3)	40			
第36図	5号横穴墓出土土器実測図(1/3)	41			
第37図	5号横穴墓出土土器実測図(1/3)	42			
第38図	5号・6号横穴墓出土土器実測図 (1/3)	43			
第39図	8号横穴墓出土土器実測図(1/3)	44			
第40図	8号・10号横穴墓出土土器実測図 (1/3)	45			

	(1/3)67		(1/2) 103
第63図	22号～24号横穴墓出土土器実測図 (1/3)68	第70図	小倉谷横穴墓出土鉄器実測図その5 (1/2) 104
第64図	23号～25号横穴墓出土土器実測図 (1/3)69	第71図	小倉谷横穴墓出土鉄器実測図その6 (1/2) 105
第65図	25号横穴墓出土土器、9号・15号・16号 横穴墓出土埴輪実測図(1/3)70	第72図	小倉谷横穴墓出土鉄器実測図その7 (1/2) 106
第66図	小倉谷横穴墓出土鉄器実測図その1 (1/2)98	第73図	小倉谷横穴墓出土鉄器実測図その8 (1/2) 108
第67図	小倉谷横穴墓出土鉄器実測図その2 (1/2)99	第74図	小倉谷横穴墓出土装身具実測図その1 (1/2) 109
第68図	小倉谷横穴墓出土鉄器実測図その3 (1/2) 101	第75図	小倉谷横穴墓出土装身具実測図その2 (1/2) 110
第69図	小倉谷横穴墓出土鉄器実測図その4		

表目次

第1表	小倉谷横穴墓群出土土器観察表.....71	第4表	主要頭骸骨計測値の比較(女性) 121
第2表	小倉谷横穴墓群出土玉類計測表..... 111	第5表	下肢骨計測値(男性・左) 122
第3表	小倉谷横穴墓群出土人骨一覧..... 114	第6表	下肢骨計測値(女性・左) 122

I はじめに

小倉谷横穴墓は、飛形山（標高449.9m）から北西側に派生する数多くの丘陵上の一角に築造されている。この丘陵が土取りの対象になったのが昭和62年頃からで、土取りのたびに横穴墓が発見され、そのつど町教育委員会から南筑後教育事務所に連絡が入り町単独の費用で調査を実施してきた。町費で調査した横穴墓は総数3基を数えるが、第1次調査は昭和62年度に2基、第2次調査の昭和63年度は1基の調査を行っている。

調査の端緒

しかし、個人の土取りのため漸次的な調査では横穴墓の全容が把握できないことから、地権者及び立花町教育委員会、福岡県教育庁南筑後教育事務所とが協議し、平成元年度から国・県の補助を受け本格的な発掘調査を実施することとなった。

第3次調査は、まず地元での聴き取り調査から実施し、横穴墓が開口していた時点の分布状況を把握した後、発掘調査に着手した。調査は丘陵の南西斜面を対象としたが、調査範囲の中腹に既設の農道があり、その下部は調査が不可能であった。

第3次調査

第4次調査は平成3年度に実施した。調査地点は丘陵頂部の一群を調査対象としたが、ここでも農道のため丘陵下半は調査できていない。

第4次調査

各調査期間は下記の通りである。

第1次調査－昭和62年7月6日～7月9日 第4次調査－平成3年1月8日～2月5日

第2次調査－昭和63年10月25日～11月1日 第5次調査－平成6年5月18日～5月20日

第3次調査－平成元年11月6日～平成2年1月25日

調査関係者は次のとおりである。

調査責任者 立花町教育委員会 教育長 末継 敬一郎

社会教育課 課長 川島 清蔵（前任） 主査 中尾八重子

調査組織

〃 課長 田代 晴繁 主任主事 今村 高一

〃 課長補佐 平島 五男 主事 原 亮一（前任）

〃 主査 田島 一子（前任）

調査担当者 福岡県教育庁文化課 技術主査 木下 修

〃 主任技師 小池 史哲（第2次調査担当）

〃 筑豊教育事務所 技術主査 新原 正典

〃 南筑後教育事務所 〃 川述 昭人（第1次調査担当）

〃 〃 〃 佐々木隆彦（第3・4次調査担当）

〃 〃 〃 伊崎 俊秋（第5次調査担当）

福岡県文化財保護指導委員 佐々木四十臣

整理関係者 立花町教育委員会 教育長 末継 敬一郎 係長 靄 一成

整理組織

社会教育課長 中村 一範 主査 原 敏弘

〃 課長補佐 新地 鈴子 主任主事 永田 寧

（第5次調査・執筆担当）

福岡県教育庁総務部文化財保護課

参事補佐兼調査第2係長 佐々木隆彦（執筆担当）

Ⅱ 遺跡の位置と環境

小倉谷横穴墓群は、福岡県八女郡立花町大字北山字茶臼塚に所在する。

横穴墓の分布

矢部川中流の左岸は豊前、遠賀川流域、筑前とならんで横穴墓が顕著に見られる地域であり、中でも、立花町の西側に隣接する瀬高町には、国指定史跡の女山神籠石内に所在する、昭和34年に調査された長谷横穴墓群をはじめ約160基もの横穴墓が見られる。横穴墓は矢部川の左岸に集中し、最近矢部川に隔てられた北側の八女市の柳島地区で、2基の横穴墓（長浦横穴墓群）が発見されている。

群集する横穴墓

立花町は矢部川を北端とし、町内の古墳や横穴墓は、矢部川の支流である辺春川と白木川が矢部川に注がれるあたりの平野部周辺の低丘陵地に集中し、横穴墓の数は古墳よりはるかに多く、古墳は70基程度なのに対し、横穴墓は150基を越える。

肥後タイプ

横穴墓は、辺春川流域右岸の浦田・後田横穴墓群、左岸の鬼隈・上の山・中通横穴墓群、白木川流域右岸の野広尾・稻荷山横穴墓群・小倉谷横穴墓群、左岸の瀬高町との町境にある山下横穴墓群に大きく分けることができる。その中でも野広尾横穴墓群・稻荷山横穴墓群では小倉谷横穴墓群と同じく玄室内部において屍床を「コ」の字状に配置する、いわゆる肥後タイプが存在することが確認されている。

小倉谷横穴墓群は、立花町のほぼ中央に位置する飛形山(449.9m)から北西に派生する無数の丘陵上の一角に位置し、北に位置する大倉谷に対して小倉谷と称されている。このあたりの丘陵は、鬼隈横穴墓群が存在する一帯の丘陵が硬質砂岩で形成されるのに対して、絹雲母片岩あるいは緑泥片岩で形成される。

白木川流域において小倉谷横穴墓群よりも上流には古墳および横穴墓は存在しないと考えられていた。しかし、平成5年度の白木川右岸のより上流に位置する白木西原遺跡における調査で、縄文時代晩期の竪穴住居跡と古墳時代の竪穴住居跡、掘立柱建物とともに水田下から5世紀末から6世紀中頃に築造されたと考えられる17基もの古墳が発見された。

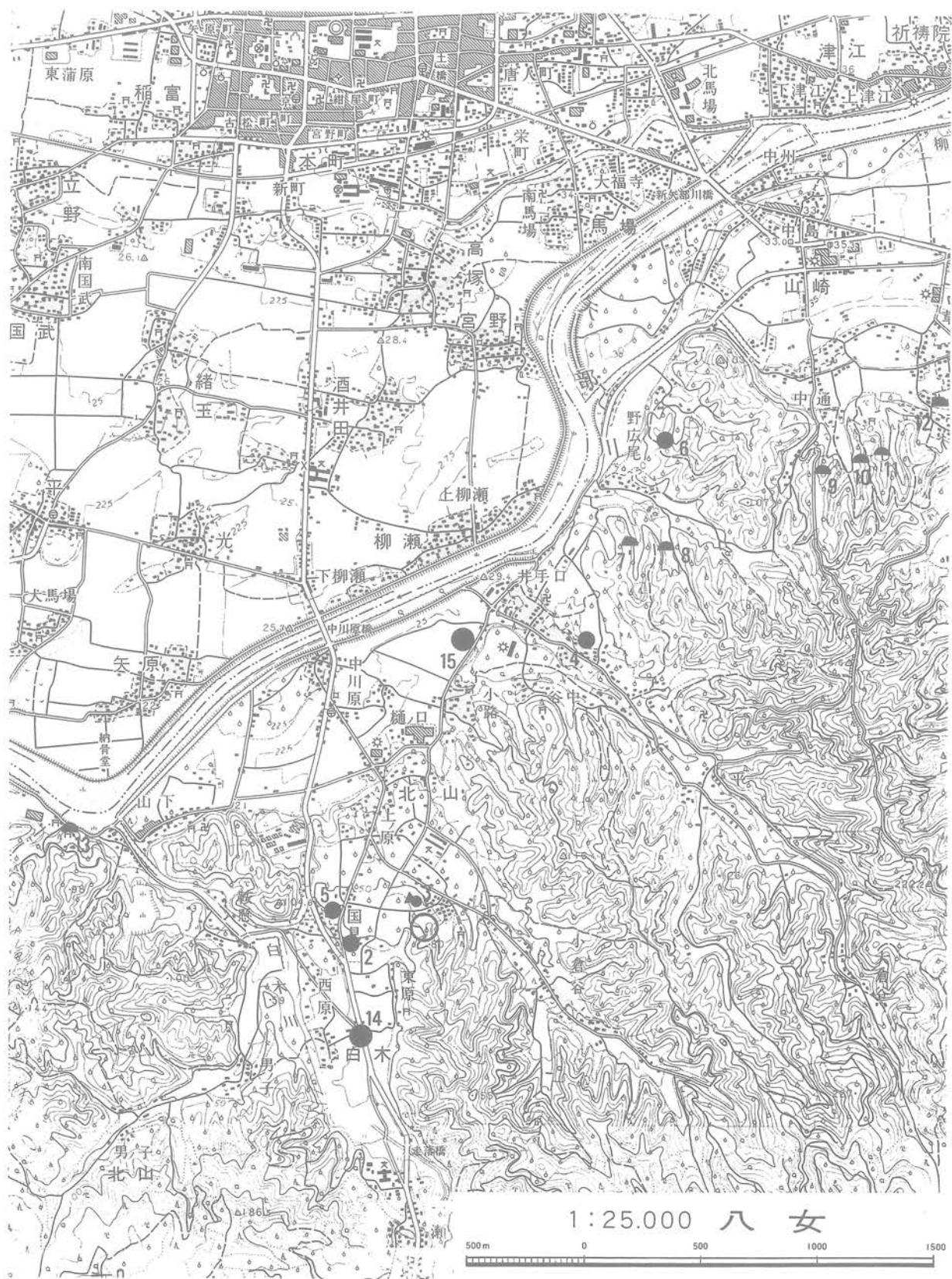
横穴墓の発見

そのほか、平成9年度から11年度にかけて遺跡詳細分布調査を行っており、辺春川流域の光友地区では浦田横穴墓群で新たに19基の横穴墓（浦田12～29号横穴墓）を発見した。さらに、辺春川左岸の草場地区では新たな横穴墓3基を発見し、草場横穴墓群とした。平成10年度には白木川流域の大字北山字枯木谷で尾根沿いに6基の古墳を発見した。

茶臼塚古墳

立花町では、唯一の前方後円墳である茶臼塚古墳が築造された頃、6世紀中頃から横穴墓の築造が開始され、横穴墓の築造が盛行する6世紀後半では、当町最大の石室（全長11.9m）をもつ大塚古墳のような巨石古墳や、玄室に石屋形を有する谷中1号墳が築造される。このような横穴式石室をもつ古墳群と横穴墓群の築造主体にどのような階層の差があったかなどを考える上で、小倉谷横穴墓群は格好の資料となるであろう。

大塚古墳



- | | | | | |
|------------|------------|------------|------------|------------|
| 1. 小倉谷横穴墓群 | 2. 大塚古墳 | 3. 茶臼塚古墳 | 4. 谷中1号墳 | 5. 上の原古墳群 |
| 6. 枯木谷古墳群 | 7. 稲荷山横穴墓群 | 8. 野広尾横穴墓群 | 9. 上の山横穴墓群 | 10. 中通横穴墓群 |
| 11. 鬼隈横穴墓群 | 12. 草場横穴墓群 | 13. 山下横穴墓群 | 14. 白木西原遺跡 | 15. 北山八竜遺跡 |

第1図 小倉谷横穴墓群と周辺主要遺跡分布図(1/25,000)

Ⅲ 発掘調査の記録

(1) 遺跡の概要

第1次調査 の概要

前述したように、土取りで発見するたびに調査を実施し第1次では2基を調査した。単独の調査のため位置関係がはっきりしないが、調査担当者に聞いたところ、第3次で調査した横穴墓群が築造された箇所とは反対側の丘陵東側斜面に位置するとのことで、東側に開口する横穴墓であることから、西側斜面の一群とは別群と考えられる。また、東側に開口する横穴墓はまばらであるらしく、南西斜面ほど密集度はない様である。2基の横穴墓の内1基は丘陵裾部に、もう1基は丘陵の中腹部に築かれていた。両者とも土取り中に天井部が崩落した状態での調査であったため墓道などは不明である。

第2次調査 の概要

第2次調査は1次調査と同様の経緯を辿り、横穴墓の天井部が崩落した段階での調査であり、玄室と羨道部の調査であった。当該横穴墓は、第3次調査で墓道を確認し、3号墓とした横穴墓と一致した。

第3次調査 の概要

第3次調査の段階では、第1・2次調査で横穴墓を3基検出した丘陵の東側部は既に削平され、第1次の2基の横穴墓との位置関係が不明瞭である。また、標高66m付近で検出した4号墓は調査時点で既に削平を受け、墓道の一部が遺存しているのみである。確認できていない数基の横穴墓が消滅した可能性がある。全体の分布状態から3・4号横穴墓が丘陵の頂部付近に築造されていたことは推測される。

第3次調査で検出した横穴墓群は「L」字状に広がる標高70m前後の丘陵で大きく挟まれた鞍部の南斜面に位置する。丘陵の南斜面は「L」字状に地山整形を行い、大半が前庭部や墓道を共有する形で形成されている。墓域は幅55mの範囲内に20基の横穴墓が掘られ、小倉谷横穴墓の大半が当該斜面に集中する。

調査以前の横穴墓の前面には農道が走り、開口部はごみ穴になっており、多くの瓶や空き缶などが投げ込まれていた。農道が設置されている高さは横穴墓の天井レベルにあり、このため前庭部や墓道部の大半が遺存しており、多くの副葬遺物を検出した。大半の横穴墓は閉塞石が除去され激しい盗掘の痕跡を残しており、前庭部に副葬鉄器や墓前祭に使用された土器類が散在していたが、僅かながら閉塞石が完存した横穴墓もあり、古くに埋没したことが推測される。

第4次調査 の概要

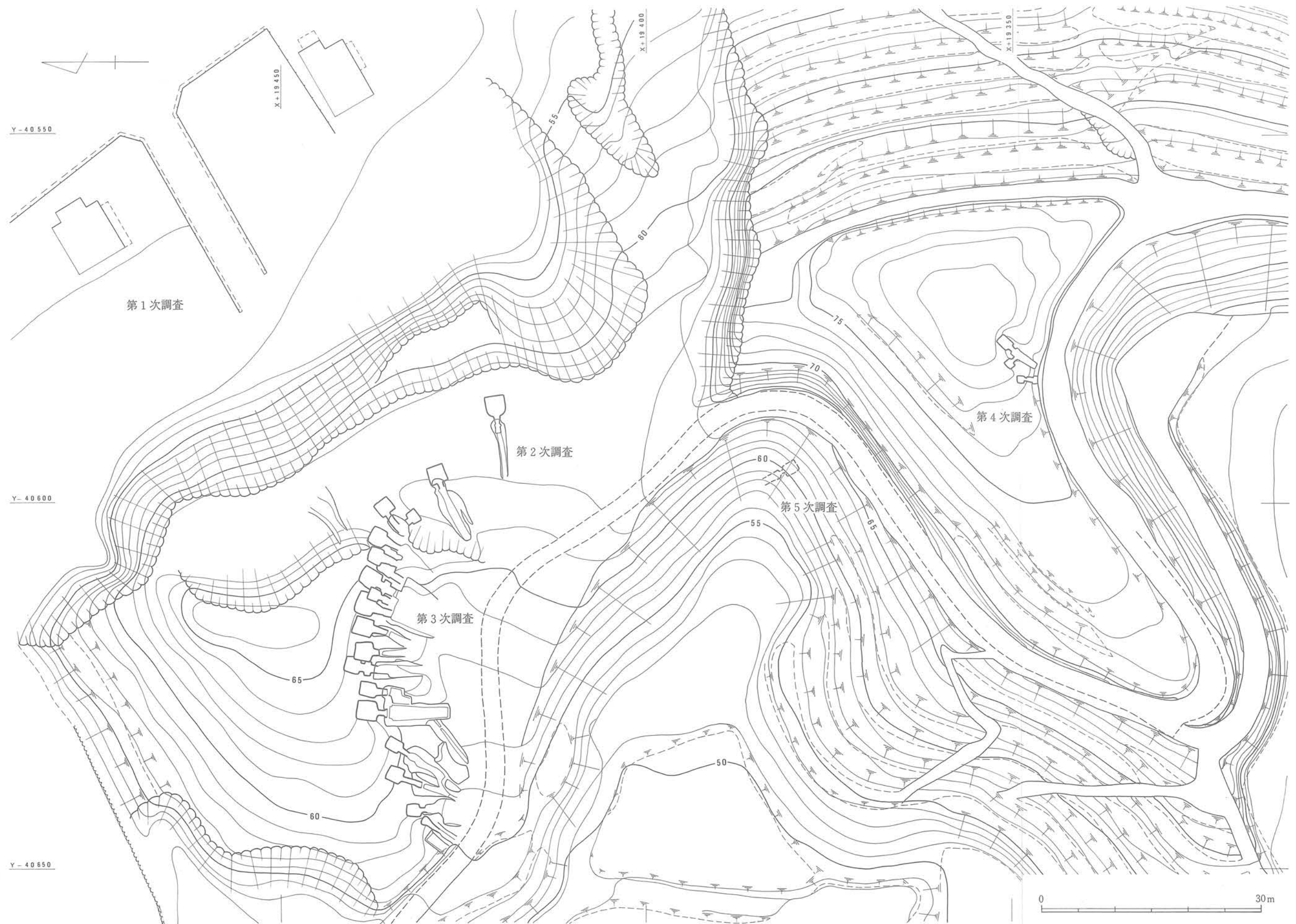
第4次調査は、丘陵の頂部（標高79m）に位置する一群で総数3基を数えるが、その内の2基は墓道を共有し、下から続く農道で削平を受けている。これらはいずれも南側に開口し、農道下にも横穴墓が存在している様で、調査時点で重機の重さで陥没した箇所があることから可能性が指摘できるが、現況では消滅している。この一群は総数が分からないが、第3次調査の一群とは別群の横穴墓であろう。

第5次調査

第1次調査から第4次調査までで総数25基を調査したが、その後さらに1基を立花町教育委員会が直接調査している。しかし、この段階では丘陵の大半が削られており、相互の位置関係が分からない。恐らく、第3次調査地点の南側丘陵斜面と考えられる。

南筑後の横 穴

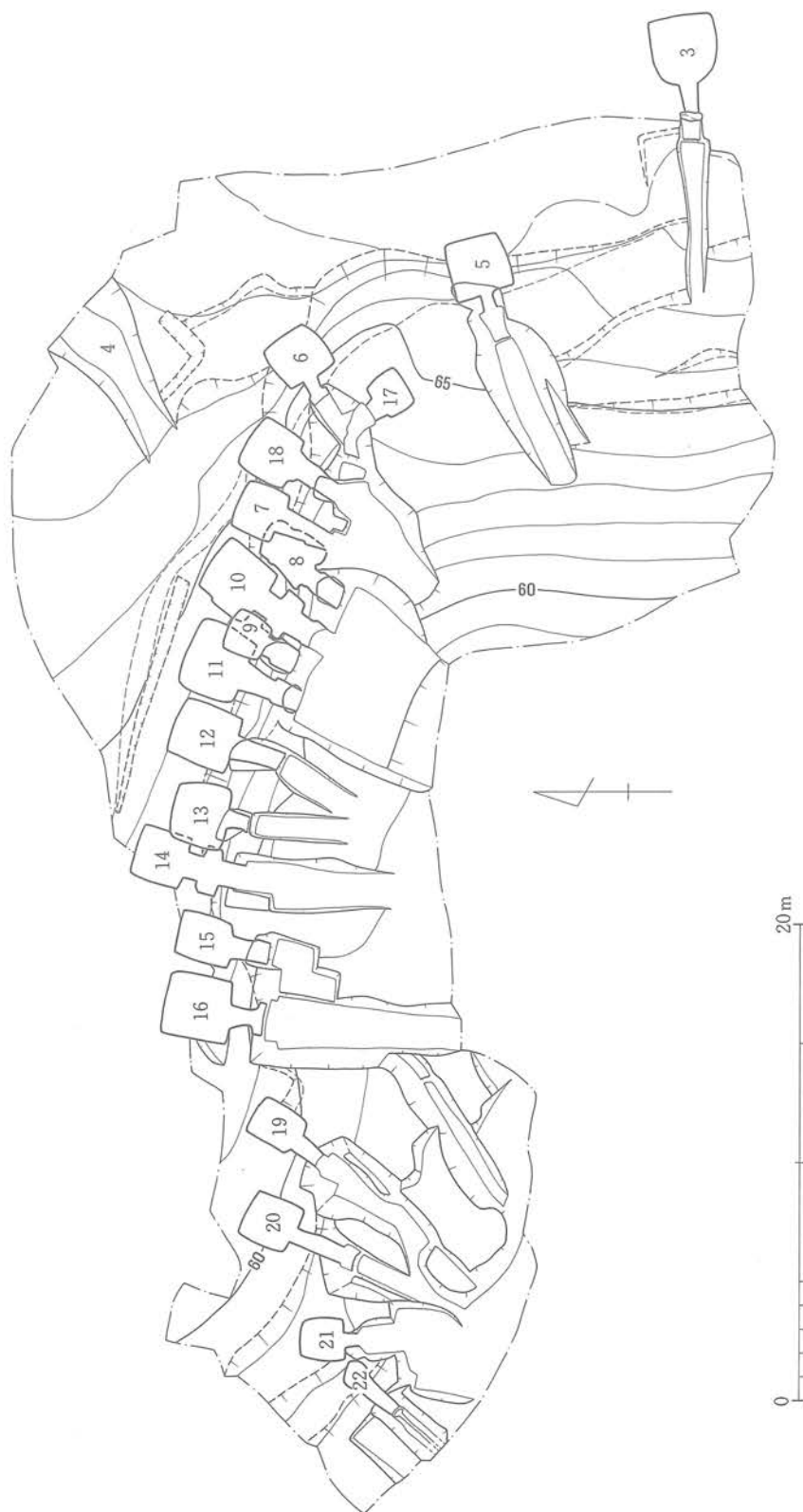
遺跡分布地図でも分かるように、南筑後地域には横穴墓が数多く分布してはいるが、主に立花町と八女市を分ける矢部川を境に南側にしか分布しておらず、立花町・瀬高町・高田町などで横穴墓が確認されている。



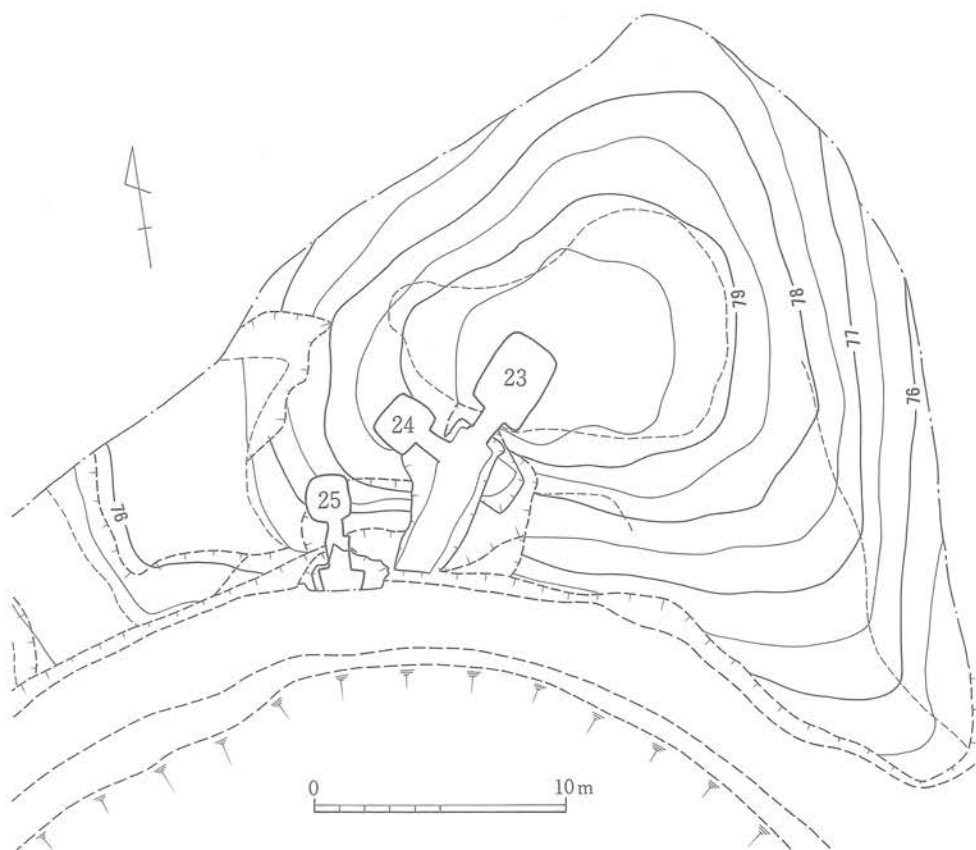
第2図 小倉谷横穴墓群地形測量図(1/500)

立花町では、稲荷山横穴墓群・野広尾横穴墓群・上の山横穴墓群・中通横穴墓群・鬼限横穴墓群などが矢部川の左岸に形成されており、一大横穴墓群が存在する地域的特色を色濃く残す所であり、この中には、小倉谷横穴墓でも確認したように、肥後地方の影響を享受した肥後タイプの構造を有す横穴墓の存在が刮目される。

立花町の横
穴墓



第3図 小倉谷横穴墓群配置図(第3次調査・1/300)



第4図 小倉谷横穴墓群配置図(第4次調査・1/300)

(2) 横穴墓の調査

横穴墓の発見

第1・2次調査は、土取りの最中に発見されたことから、玄室の天井部が崩落し、調査期間も短いため全部の調査が不可能であった。

1次では2基を調査したが、いずれも玄室の天井の一部と床面近くが遺存しているのみで、羨道部・墓道は破壊されていた。2次は1基を調査した。この横穴墓も玄室の天井の一部が崩落していたが全容はつかめた。羨道部分までの調査であったが、第3次調査で羨道の一部と墓道が遺存していることが分かり、2次の調査ポイントが残っていたため接合が可能となった。

1号横穴墓 (図版2-(2)、第5図)

緊急調査

横穴墓群が形成される丘陵の北東側に位置するものと考えられる横穴墓で、緊急調査のため位置関係がはっきりしない。調査した範囲は玄室と羨道の一部で、北東側が重機で破壊されている。

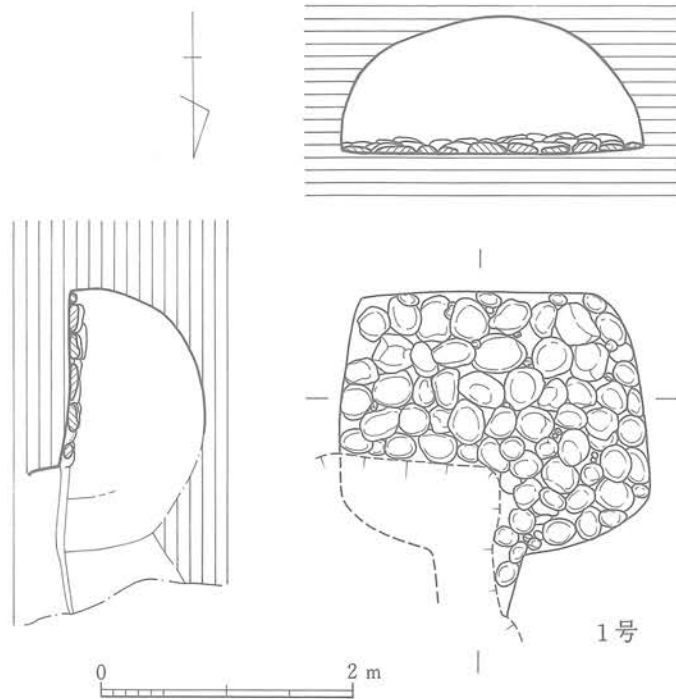
単室横穴墓

遺存した状況から判断すると単室の横穴墓で、玄室の平面形状が奥壁側が若干すばまる方形を呈している。玄室の幅は中央部で2.40m、玄門までの長さは2.02m、天井までの高さは1.10mを測り、断面がドーム状を呈する。玄門から羨道までは細まるようである。

玄室内の床には一面に扁平な河原石が敷き詰められており、床面の南奥には集骨されたような状態で人骨が検出された。

人骨は少なくとも男女あわせて7体が埋葬されており、追葬がなされたことを示しているが、出土土器が分からず時期が特定できない。

出土遺物は、鉄鏃・刀子の他、金銅製の耳環一對と鉄地銀張りと考えられる耳環が1個ある。



集骨された
人骨

7体の埋葬

鉄地銀張耳
環

2号横穴墓

(図版2-(3)、第5図)

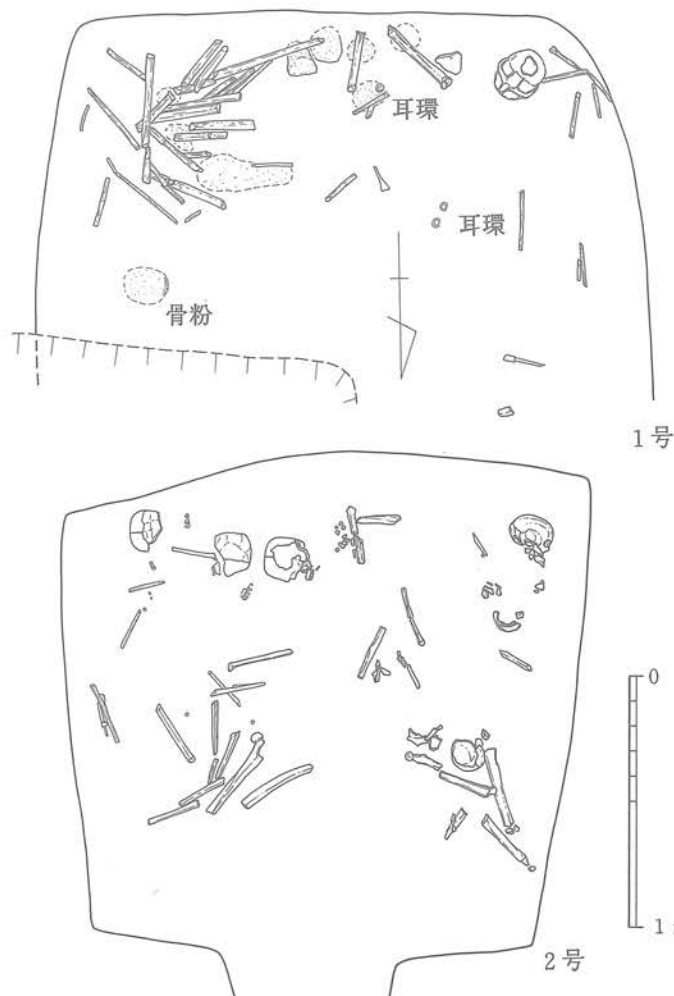
当該横穴墓も土取り中に発見されたことから玄室の調査のみで、詳細な調査結果は得られていない。

築造された位置は丘陵の東側あるいは北東側と推測される。

玄室の平面形状は方形で奥壁側が若干幅広に作られ2.10m、玄門側で1.75m、長さは2.00mほどである。

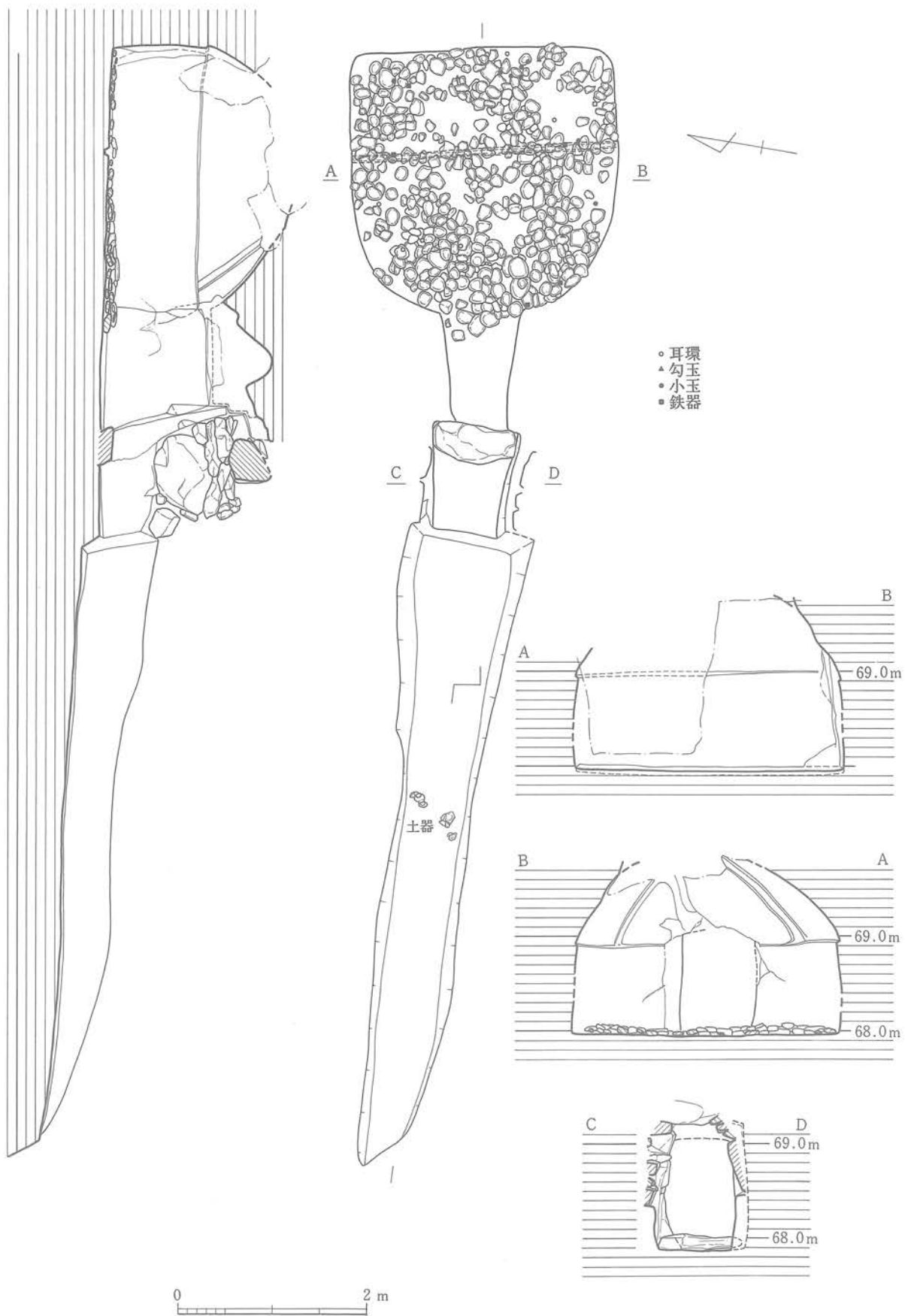
玄室内には、ほぼ全面にわたり人骨が散乱していたが、鑑定結果では最低6体が埋葬されていた。この内の4体は奥壁方向に頭位がある。

出土遺物は刀子があるに過ぎない。



6体の埋葬
骨

第5図 1号横穴墓、1号・2号墓人骨出土状態実測図(1/60・1/30)



第6図 3号横穴墓実測図(1/60)

3号横穴墓（図版3-(3)、第6図）

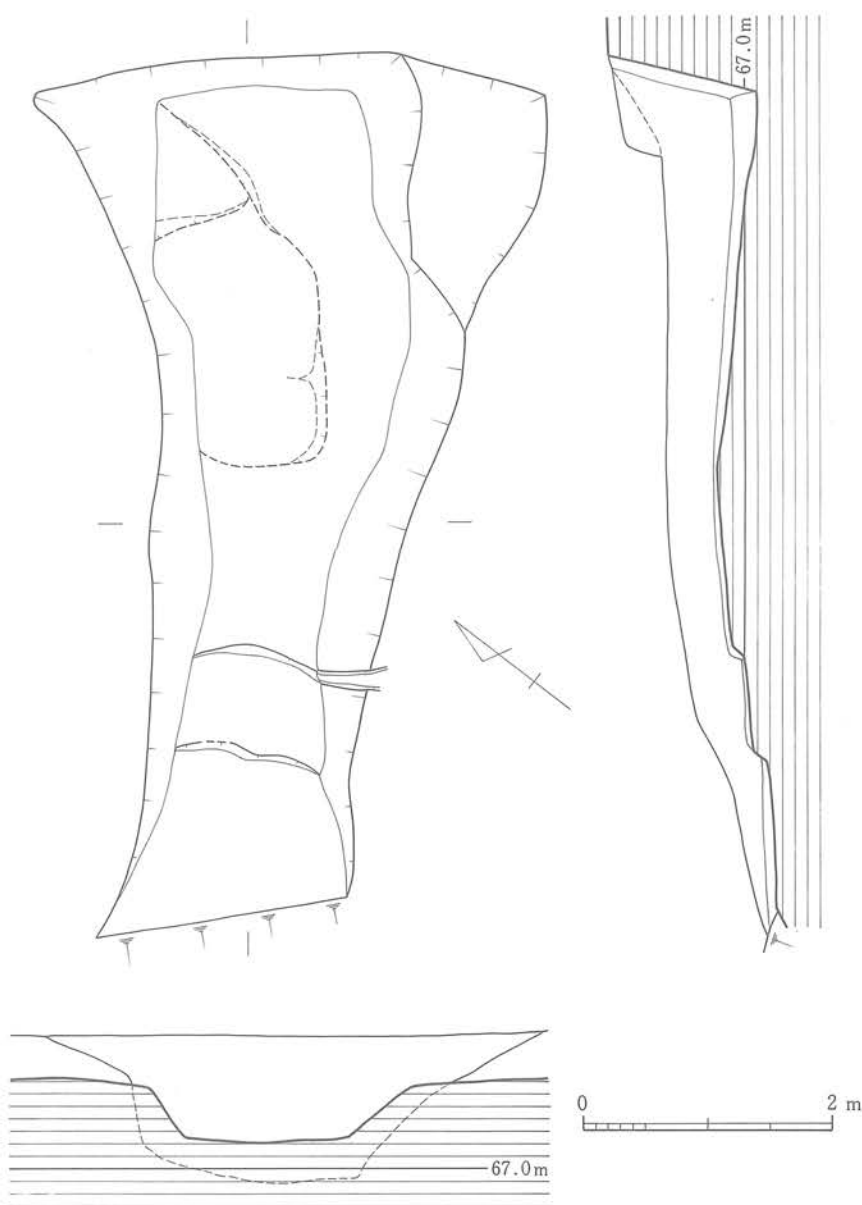
横穴墓群の最も南側の標高69m付近に築造されている。調査時点で横穴墓の南側は既に削平を受けていたが、急斜面の丘陵が続いており横穴墓は遺存しない可能性が強く、当該横穴墓が群の最南端と考えられる。

単室の横穴墓で、玄室の平面プランは奥壁の両隅がやや角ばり、玄門側が丸みを呈する方形に近い形状で、床全面に河原石が敷き詰められている。中央よりやや奥壁寄りには幅10cm弱の溝がプランいっぱい掘られており、排水溝にしては外部に通じる溝がないことから、一種の屍床を表現しているのであろう。

玄室の天井部が土取りで破壊されているが、立面形は寄棟の家形平入を表現していると考えられる。側面には削り出しによる軒を四辺に巡らし整美な横穴墓を造り出している。玄室の幅は2.80m、長さも2.80m、推定の高さは2.00mを測る。

羨道部は狭く60cm～80cm、玄門から1.20mで床面に框石を埋め込み、小さな前庭部を形成している。この両側面には40cmから50cmの高さに地山整形し割り石による木口積みで築造し、飾縁は整美な長方形を呈する珍しい形態を採用する。墓道との高低差は20cmを測り、長さは6.50mを測る。

出土遺物は、既に開口し盗掘を受けていたが、玄室内から耳環・勾玉・小玉などの装身具の他、鉄鏃・刀子・鎌の破片と思われるものなどがあり、耳環の中には純金製のものが1点あり優品である。耳環の出土数や形状から少なくとも6～7体の被葬者を埋葬したと推測される。また、墓道からは数多くの須恵器や土師器が供献されていた。



第7図 4号横穴墓実測図(1/60)

単室横穴墓

寄棟家形平入

框石を埋めた珍しい形態

純金製耳環

6～7体埋葬

優位な被葬者

出土遺物は、須恵器の器台と提瓶がある。

肥後タイプ

Figure 1 consists of two main parts: a plan view (A) and a section view (B). The plan view (A) shows a large rectangular structure with a smaller structure attached to the side. The section view (B) shows the profile of the structures, with a height of 66.0m and a width of 64.0m. A scale bar indicates 2m.

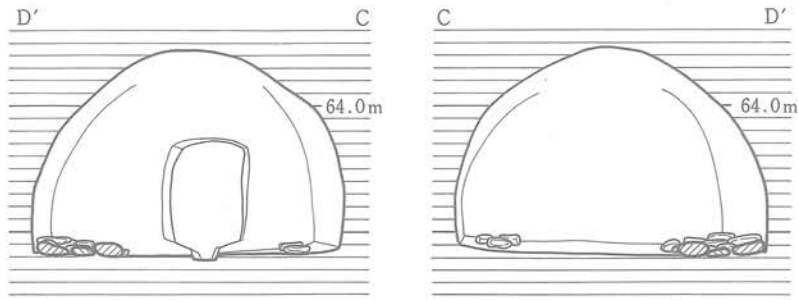
第8图 5号横穴墓实测图(1/60)

内には河原石を全面に敷き詰めていたらしいが、左側の屍床の一部と右隅に遺存しているのみである。中央の床面は盗掘時に抉られ、通路（拝場）と右側の屍床が破壊され排水溝も途中で途切れているが、通路（拝場）は一段低く造られている。

玄室の幅は2.50m、長さは2.30m、各屍床は、奥で長さが2.25m、幅が0.6m、右の長さは1.60m、推定幅が0.7m前後、左の長さは1.70m、幅は0.7mを測る。側壁から天井にかけては、軒を整美に削り出した寄棟の家形平入で、立面形態は3号と同じである。

寄棟家形平入

羨道部は3号同様細く、羨門近くの床面は一段高く造り、中央に幅20cm前後の排水溝を掘り込んでいるが、この高まりは前庭部方向まで削り出され一種の祭壇的用途が考えられる。羨門部の飾縁はアーチ状を呈し、緑泥片岩の板石と地山石、河原石などで閉塞していた。前庭部は0.8m前後で、墓道との境には10cmの高低差がある。



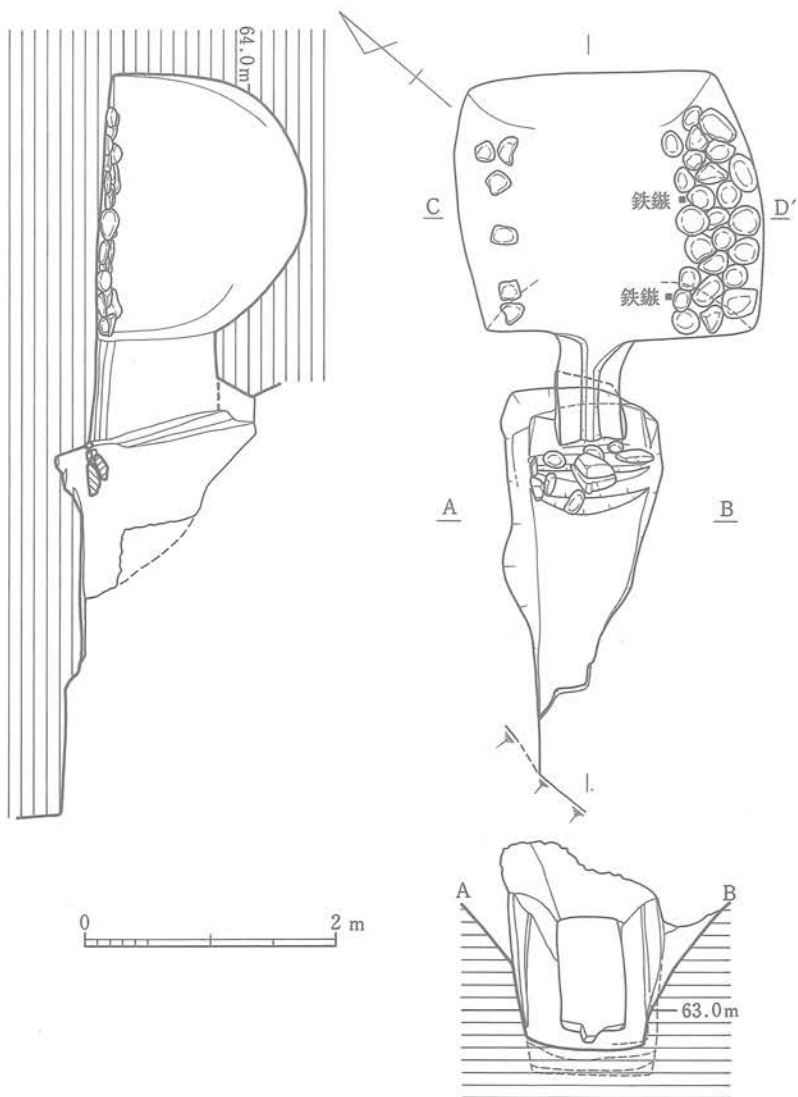
出土遺物は、玄室内から若干の鉄鏃・馬具・大刀の鐔が出土したが、土器や鉄器の大半は羨道部や墓道からの出土で、鉄器は盗掘時や追葬時点で掻き出されたと推測される。

6号横穴墓

(図版4-(2)、第9図)

17号横穴墓と墓道を共有するもので、墓道としては18号とも共有し、18号の前庭部に上がるための段を削り出している。

玄室の平面プランは胴張りの方形で、中央の幅が2.40m、長さは2.10m、天井までの高さが1.60mを測る。床面には全面に河原石を敷き詰めていたと思わ



数少ない大刀

共有する墓道

第9図 6号横穴墓実測図(1/60)

切妻家形妻
入

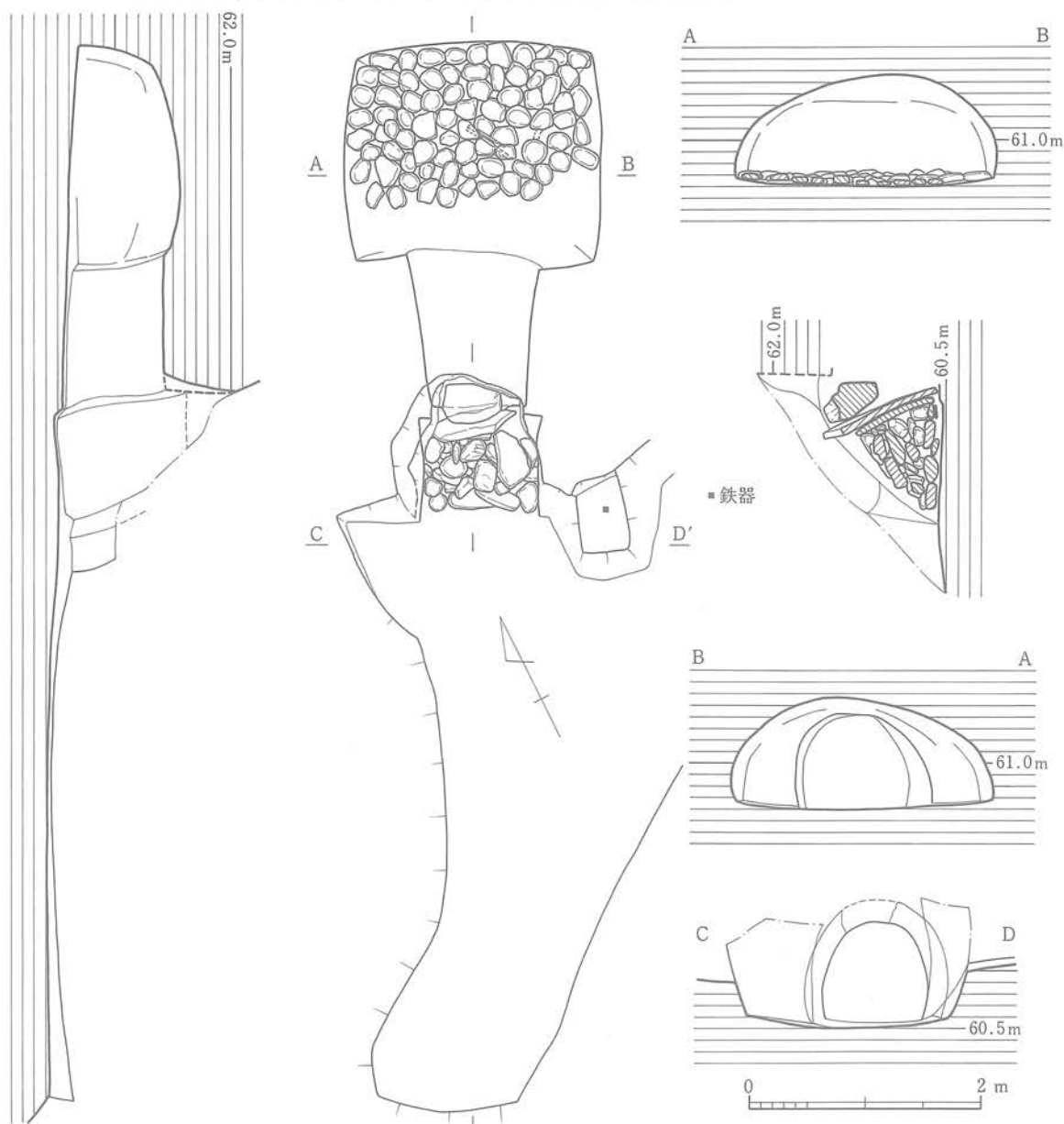
れるが、盗掘の際に掻き出されたためか中央部には残っていない。立面形態は明瞭な棟を表現していないものの、切妻の家形妻入りを表現しているであろう。

羨道部は細く造られ、幅が0.5m、長さは0.9mである。床面には幅15cm、深さ10cmの排水溝を掘り込み、羨門の飾縁は長方形を呈する。前庭部の床面は溝状に掘り込まれ、板石で閉塞していたと考えられ、一部閉塞石が残っていた。

出土遺物は、玄室内から鉄鏃と一对の耳環が、閉塞石付近から馬具、鉄鋤先・土器はすべて墓道からの出土である。

7号横穴墓（図版4-(3)・5-(2)・(3)、第10図）

前庭部と墓道を18号横穴墓と共有した横穴で、直接的な切り合いはないものの、8号横穴墓とは上下の関係で重複している。前庭部から墓道にかけては、8号～11号が共有する前庭部に削られた状態で、階段状などの施設はない。



第10図 7号横穴墓実測図(1/60)

単室の横穴墓で、玄室の平面形状が方形を呈し、幅が2.20m、長さは1.95m、天井までの高さは1.00mを測る。断面形態は四隅に稜線を有するドーム状をなす。床面には奥壁から2/3まで河原石を敷き詰め、玄門側は床が露呈している。床面からは1体の成人人骨が確認されている。

羨道は玄室床面より若干低く造られ、長さは1.25m、天井までの高さは0.85mである。玄門部には緑泥片岩の板石と河原石で閉塞され、数少ない未盗掘の横穴墓である。羨道部床面と飾縁部床面には10cm近い段差をなし、飾縁はアーチ状に削られている。

18号と共有する前庭部右袖には、高さ50cmの方形の祭壇が設けられており、そこからは鉄鏃が出土した。

出土遺物は、玄室から耳環1個、閉塞石内から馬具が出土しているが、土器は出土していない。おそらく、18号前庭部からの出土と一緒にであろう。未盗掘なのに耳環1個の出土が疑問視される。

未盗掘横穴墓
共有する祭壇

8号横穴墓（図版6-(1)~(3)、第11図）

当該横穴墓を含めて4基の横穴と前庭部を共有し、幅6.0mの最も広い前庭部を有す。共有する前庭部の左端に掘られた横穴墓で段差をなして7号墓の一部と重複している。

単室の横穴墓で、玄室の平面形態は長方形に近い形状をなし、通路（拝場）を挟んで削り出しの高まりを造り「コ」字状に屍床を配する所謂「肥後タイプ」の構造である。玄室の規模は中央幅が1.90m、長さは2.50m、天井部はドーム形を呈し高さが1.30mを測る。

屍床を区画する肥後タイプ
楕円形屍床

奥壁側の屍床は平面プランが楕円形で、区画の中央に排水溝を設けている。右側は長さ1.70m、幅0.8mで、同じく中央に排水溝を掘り込んでいる。左側の屍床は幅が狭く、長さは1.50m、幅が0.4~0.5mで排水溝を設けていない。おそらく、女性を埋葬したと推測される。また、左側屍床壁には盗掘時に穴が開けられ、10号と繋がっている。

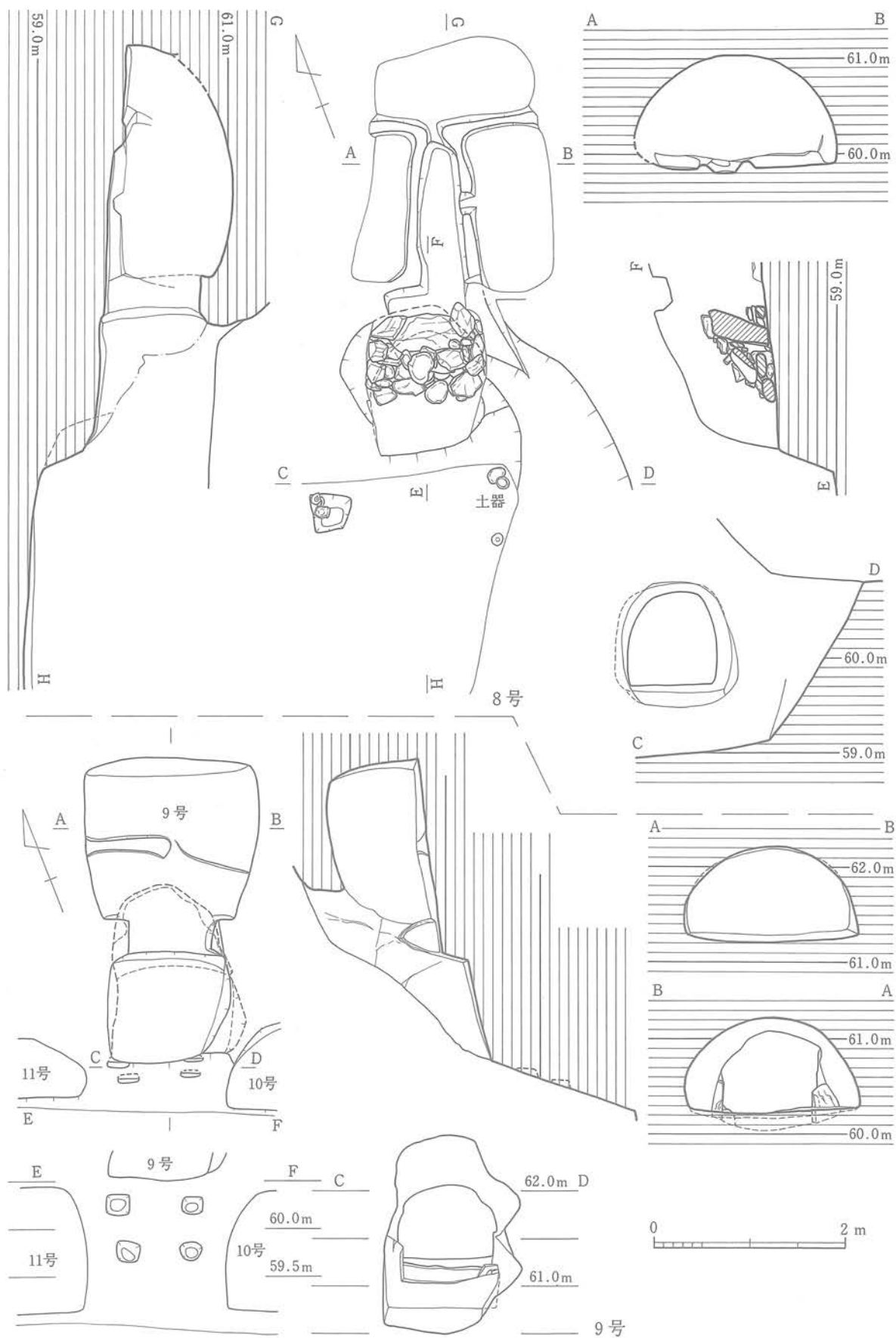
玄室内には敷石は見られず、閉塞石の上部が除去されて盗掘を受けた痕跡があるものの本来敷石はなかったと考えられる。左側の玄門は削り出しで表現し、やや幅広の羨道部を造り出し片袖となる。羨門部の飾縁はアーチ状に削り出され、閉塞された部分の床面は若干低くなる。

閉塞石は厚い花崗岩を立て、外側に地山石と河原石を積み上げているが上部は除去されていた。羨道部床面から60cm下に共有する広い前庭部が造られている。横穴入り口の左側には方形のピットが掘られ、中から須恵器が、右隅にも須恵器が供献されていた。その他には、玄室からは碧玉製の管玉のみで、正面前庭部からは鉄鏃・馬具・大刀の部品・耳環が出土しているが、追葬時に掻き出されたか盗掘時に荒らされたのであろう。

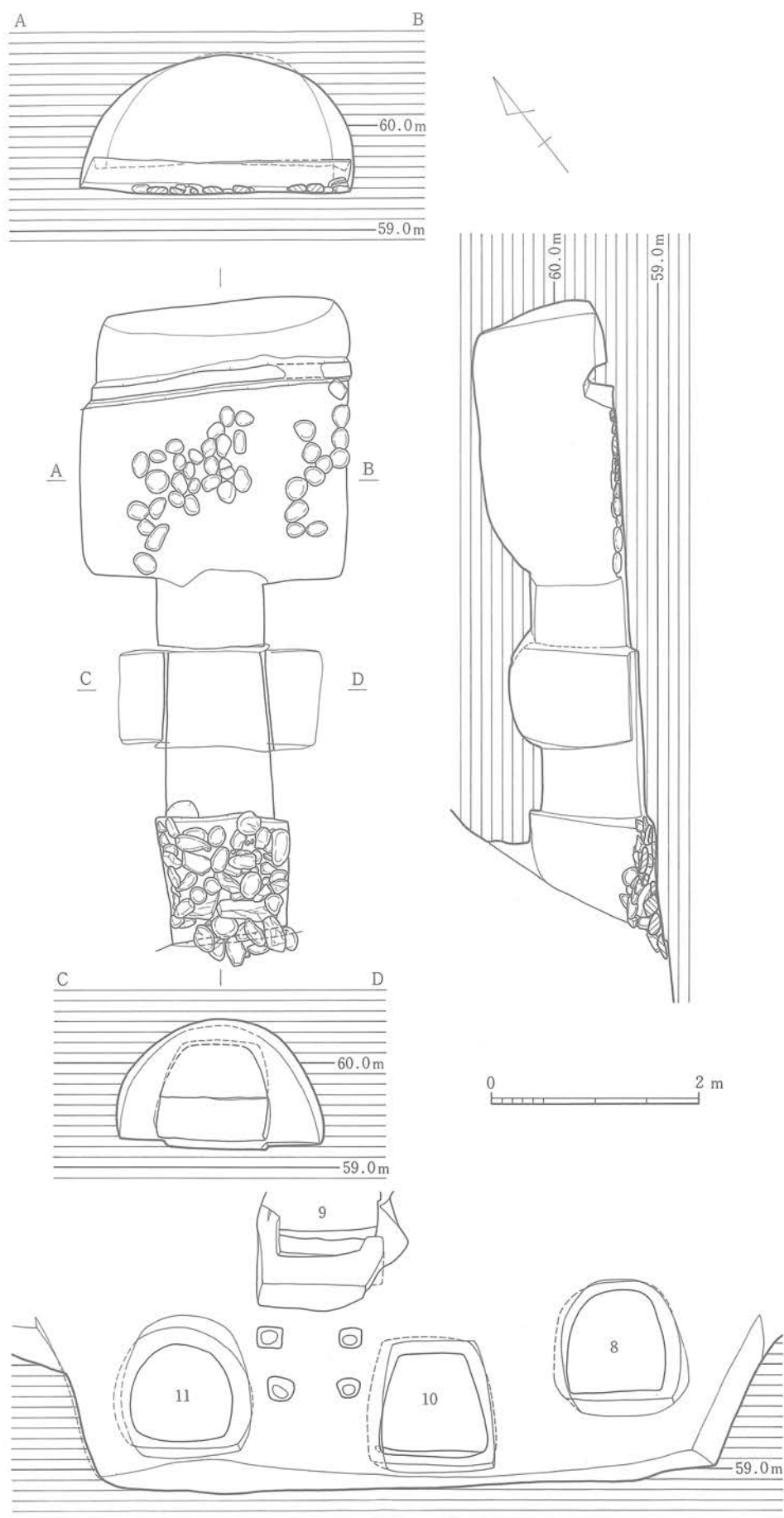
9号横穴墓（図版6-(1)・7-(1)、第11図）

8号~11号横穴と共有する前庭部を有す横穴墓であるが、レベル的には他の3基よりも上段に掘られ、7号横穴墓とほぼ同一の高さにある。前面に走っていた農道と同じ高さにあり、かなり以前から開口していたと思われ、玄室内には産業廃棄物が投棄されており、天井部が玄門付近まで崩落していた。

二段の横穴墓



第11図 8号・9号横穴墓実測図(1/60)



第12図 10号横穴墓、8号～11号墓位置関係実測図(1/60)

ひとつの屍
床

単室の横穴墓で、玄室の平面プランは若干胴張りの方形を呈する。玄室内は中央付近で横断するように高まりが削り出されていることから、奥壁側に屍床を設けていたと考えられる。玄室内の敷石は見られない。

階段状施設

規模は中央幅が1.80m、長さは1.70m、天井部までの断面はドーム状を呈し高さが1.00mを測る。両方の玄門は「コ」字状に削り出され幅が0.8m、その前面に30cm下がって奥行き1.10m、幅1.10mの小さな前庭部を造り出している。羨門部の天井は完全に崩落していたが、下部の飾縁は方形を呈しており、閉塞石は遺存していない。前庭部からは急傾斜をなして共有する広い前庭部に続く。削り出された急斜面の岩盤には、二段の浅いピットが掘り込まれ一種の階段をなす。一段目の高さは前庭部床面から70cm、二段目までの高さは15cm、各々の幅は40cmと55cmを測る。

新旧関係

当該横穴墓と10号・11号との関係を見ると、当初9号横穴墓が掘られ、後に斜面が掘り下げられて8・10・11号が掘られたと推測され、そのため、10号と11号との間が広く取られ、後に階段状の施設が設置されたと考えられる。同一レベルにある7号の墓道がこれらの前庭部に破壊されていることから推し量ることができる。

玄室や羨道、前庭部からの出土遺物はない。供献土器はおそらく共有する前庭部内に混入しているものと思われる。

中央の横穴
墓

10号横穴墓（図版6-(1)・7-(2)・(3)、第12・13図）

前庭部を共有する下段の3基の中央に位置する横穴墓で、レベル的には最も下段に掘られており、8号横穴墓とは55cm、11号とは15cmの高低差がある。

複室構造

横穴墓群の中で2基しかない複室の横穴墓のひとつで、玄室の平面形状は方形を呈し、中央幅が2.55m、長さは2.75m、天井までの高さは1.30mを測る。奥壁寄りには高さ25cmの削り出しによる長さは2.40m、幅が0.6mの屍床を設け、玄室内の屍床部分の幅がやや狭くなる。床面には部分的に河原石が残っていたが、本来は屍床を含めた全面に敷き詰めていたと考えられる。立面形態はドーム状を呈する。

奥壁屍床

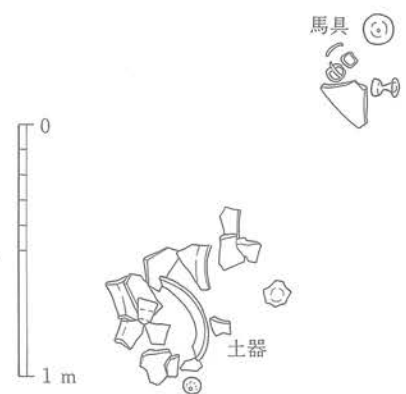
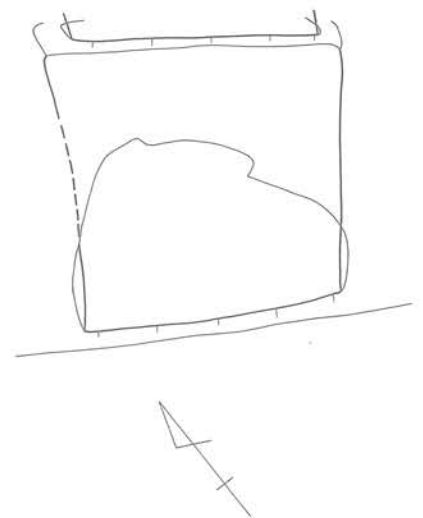
立面ドーム
形

前室に通じる玄門幅は1.05m、高さは0.95mで、前室の床面との段差は10cmである。前室もドーム形をなし、床面幅は2.00m、長さ0.9m、天井までの高さが1.25mである。玄室の通路部分は一段低く掘られているが、両端は玄室の床面と同じレベルの段状になる。羨道部と羨門は段差があり、飾縁は整美な台形を呈し、床面には閉塞に使った河原石が散乱していた。

台形飾縁

多数の副葬
品

玄室内の出土遺物は、勾玉・管玉・耳環などの装身具があり、閉塞石内や前庭部から鉄鏃・刀子・馬具・不明鉄器の他、供献土器が多数出土している。



第13図 10号横穴墓前庭部遺物出土状態実測図(1/30)

11号横穴墓（図版8-(1)~(3)、第14図）

共有する前庭部の西端に位置する単室の横穴墓で、玄室は若干胴張りの隅丸方形を呈する。玄室中央幅は3.10m、長さが2.55m、天井までの高さは1.35mで、四隅に稜を造るが天井中央の棟は表現しておらず、断面形がドーム状をなす。

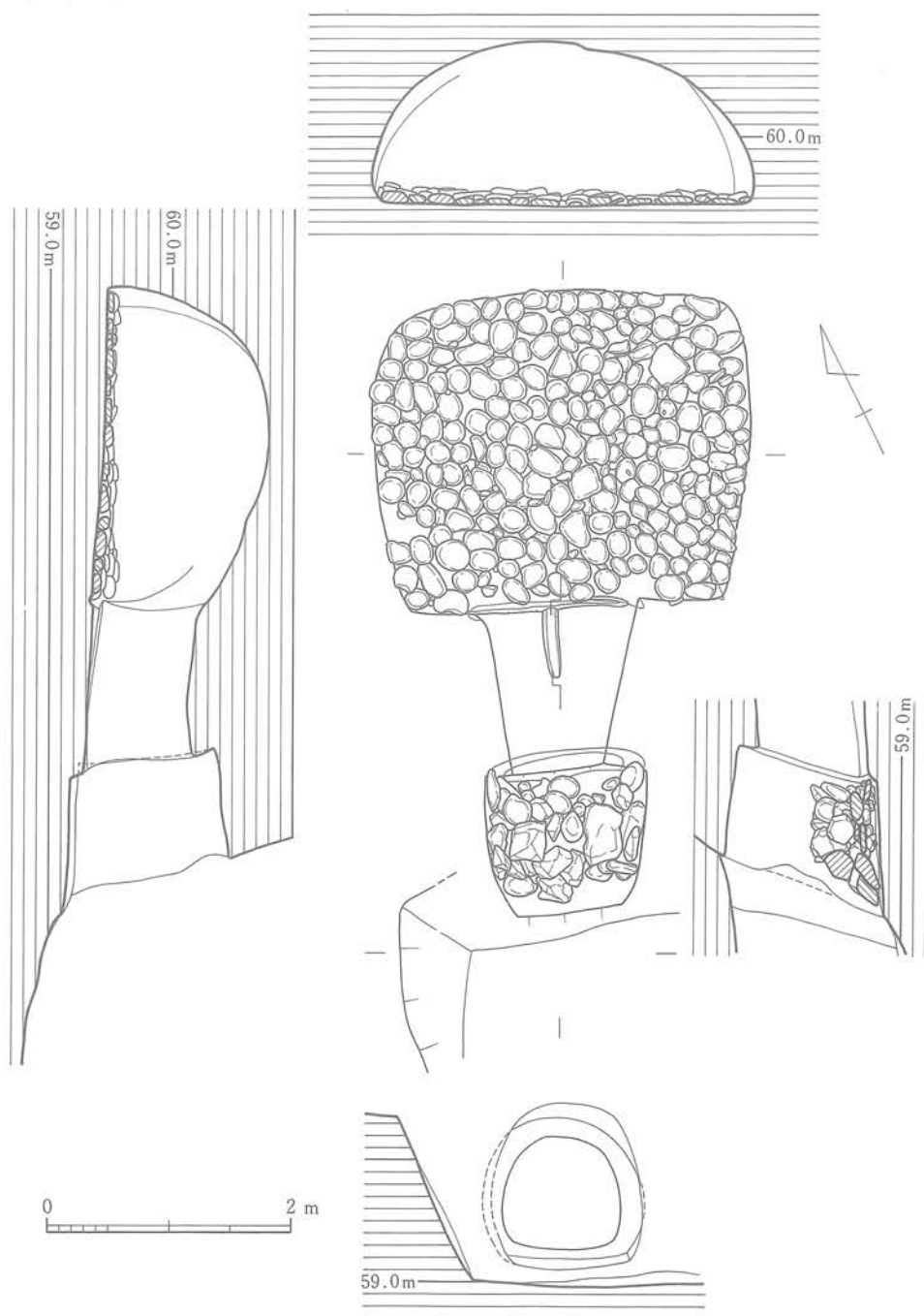
玄室床面には全面に河原石を透き間なく敷き詰め、玄門の床面には細い仕切り溝が掘られ、中央に長さ55cmの排水溝が掘られている。羨道部はやや長めに造られ、玄門付近で幅1.20m、羨門付近の幅は0.75m、天井までは0.80mを測る。

閉塞部は羨道に対して10cmほど下がり、床面には閉塞石に使った地山石や河原石が散乱していた。羨門の飾縁は整美なアーチ形をなす。閉塞の板石が除去されていた割には玄室の状態が良好で、かなり以前に埋没したと推測される。

単室横穴墓

玄門の仕切り溝

アーチ形飾縁



第14図 11号横穴墓実測図(1/60)

玄室内の出土遺物は多く、玄室の床石上や羨道部にまで散乱し、盗掘の痕跡を残しており、頭蓋骨が羨道で検出されたことは、玄室内に水が溜り移動した可能性がある。

豊富な副葬品

イモ貝製貝釧

4体以上の埋葬

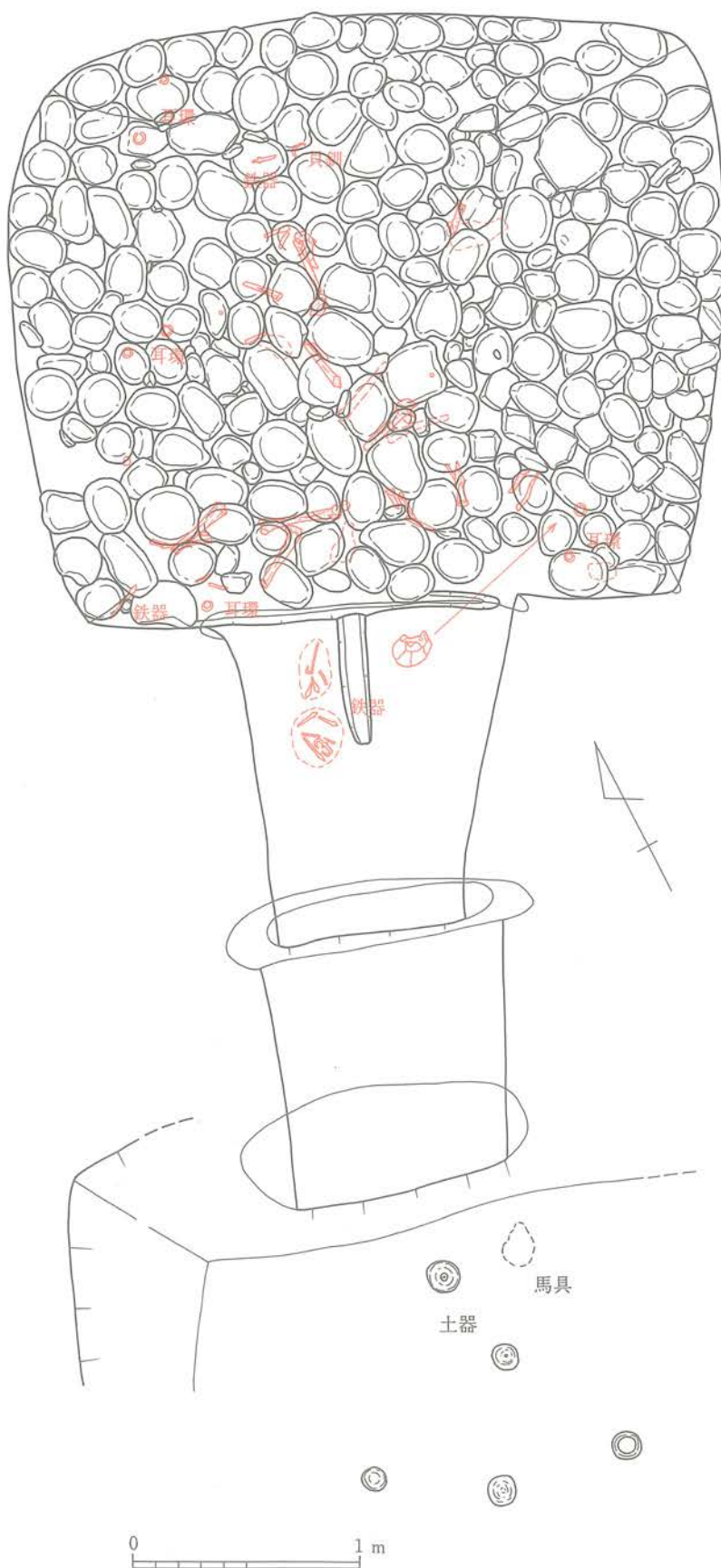
大甕の散在

墓前祭の行為

副葬品の種類は鉄鏃・刀子・馬具などの鉄器、金銅製の耳環7、勾玉・管玉・ガラスや瑪瑙製、滑石製の玉類の他、イモ貝製の釧等があり、人骨鑑定では2体検出されているが少なくとも4体以上が埋葬されていたと考えられる。

この他、前庭部にも土器類や馬具類が供献されていた。

共有する前庭部からは、他にも多数の土器類が出土し、中でも須恵器の大甕の破片は至る個所に散らばって出土している。このことは、埋葬時の墓前祭が執り行われた証と考えられる。



第15図 11号横穴墓遺物出土状態実測図(1/30)

12号横穴墓（図版9-(1)~(3)・10-(1)、第16・17図）

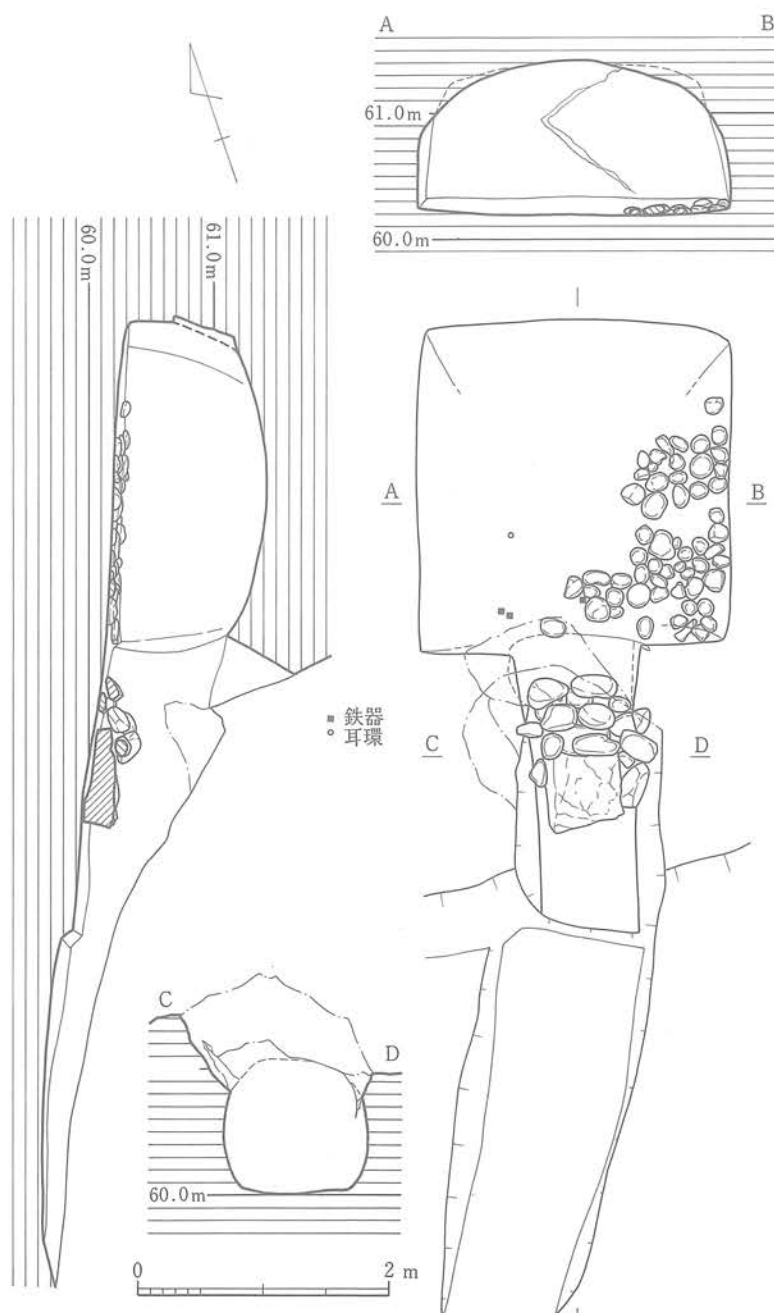
横穴墓群のほぼ中央付近に位置する単室の横穴墓で、9号・13号と同レベルに掘られ、13号横穴と並列している。2基の墓道も周囲の横穴墓よりもレベルが高く、先端部で交差する形で共有する可能性がある。

玄室の平面プランは整った方形を呈し、幅が2.50m、長さが2.60m、天井までの高さは1.20mを測り、玄室の立面形態は、四隅に稜線が入るものの棟を表現しておらずドーム形である。玄室内には、右側壁沿いに河原石の敷石が見られるが、大半が除去されていた。

玄門から羨門部までの天井は崩壊し、羨道の床面は玄門部から徐々に細く長く造られている。玄門付近で幅1.00m、先端では0.75mを測る。羨門の飾縁は完全に崩壊し、床面に

閉塞石に使われた花崗岩の厚手の板石と河原石が散乱している。前庭部ははっきりしないが、12号と13号の間に若干の高まりを造り、そこにも遺物が散乱していることから、両方が共有する前庭部として設置したことも考えられる。墓道の先端は交差する所で不明瞭になる。

出土遺物は、玄室内から3個の金銅製の耳環と若干の馬具が出土している他は、殆どが前庭部付近に供献されたもので、鉄鏃・刀子・馬具が多く、須恵器と一緒に出土している。この中には須恵器の大甕が数点あるが、数基の横穴墓にばらまかれており、盗掘の結果と言うより送葬時の墓前祭の行為と考えたのが穏当であろう。



第16図 12号横穴墓実測図(1/60)

共有の墓道

ドーム形玄室

共有の前庭部

集中する須恵器

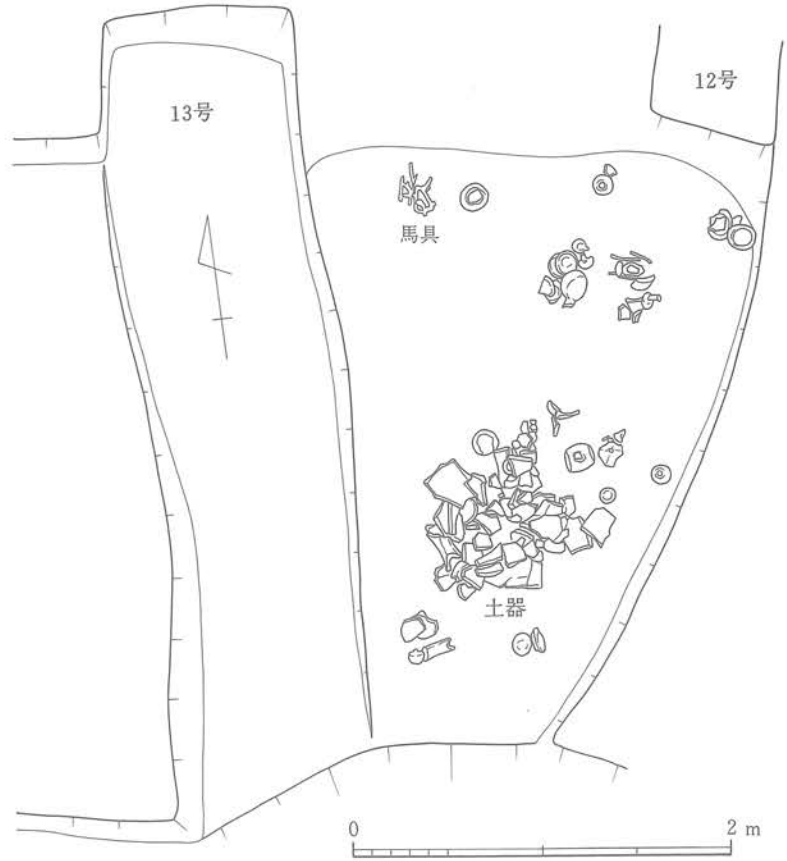
単室横穴墓

13号横穴墓（図版10-
（2）、第18・19図）

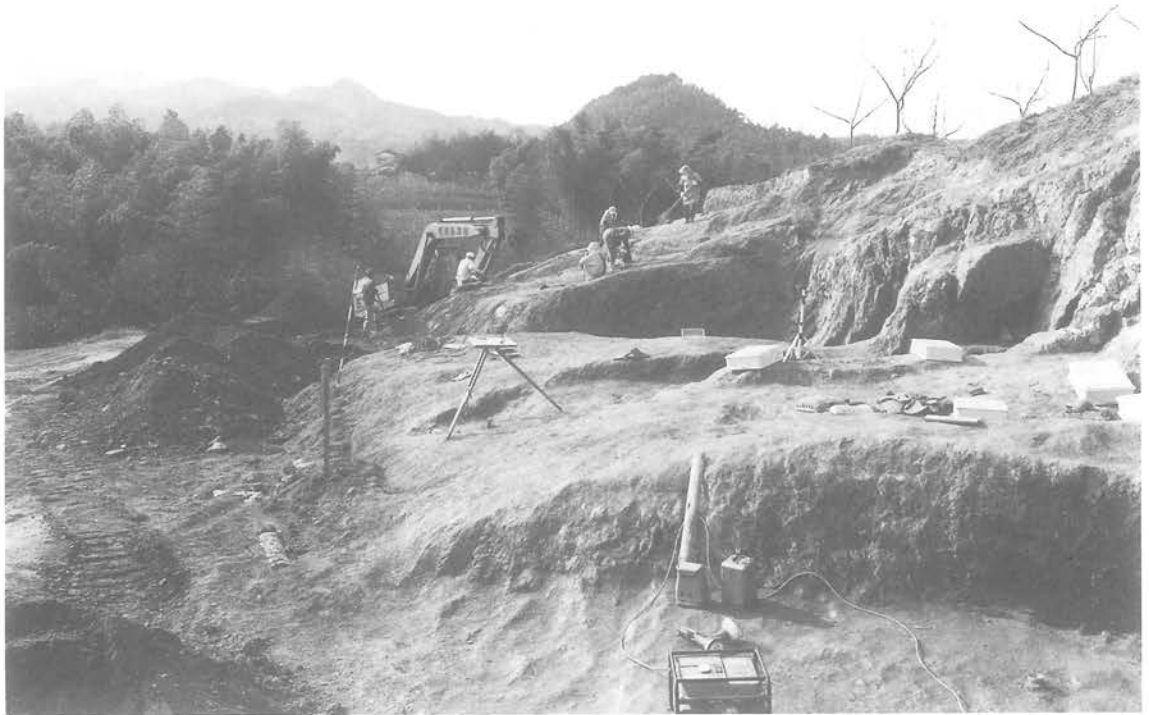
12号横穴墓の西隣に
位置する単室の横穴で
12号と同一レベルにあ
り、この横穴も調査時
には農道の傍に開口し
ていたため多くのごみ
が投棄されていた。12
号横穴墓と前庭部、墓
道を共有することは前
述した。

玄室の平面形態はや
や胴張りの隅丸方形を
呈し、玄門方向が若干
幅広に造られる。中央
付近での幅は2.75m、
長さは2.35m、天井ま
での高さは1.20mを測
る。玄室の立面形は
ドーム形を呈する。

立面ドーム
形



第17図 12号・13号横穴墓前庭部遺物出土状態実測図(1/40)



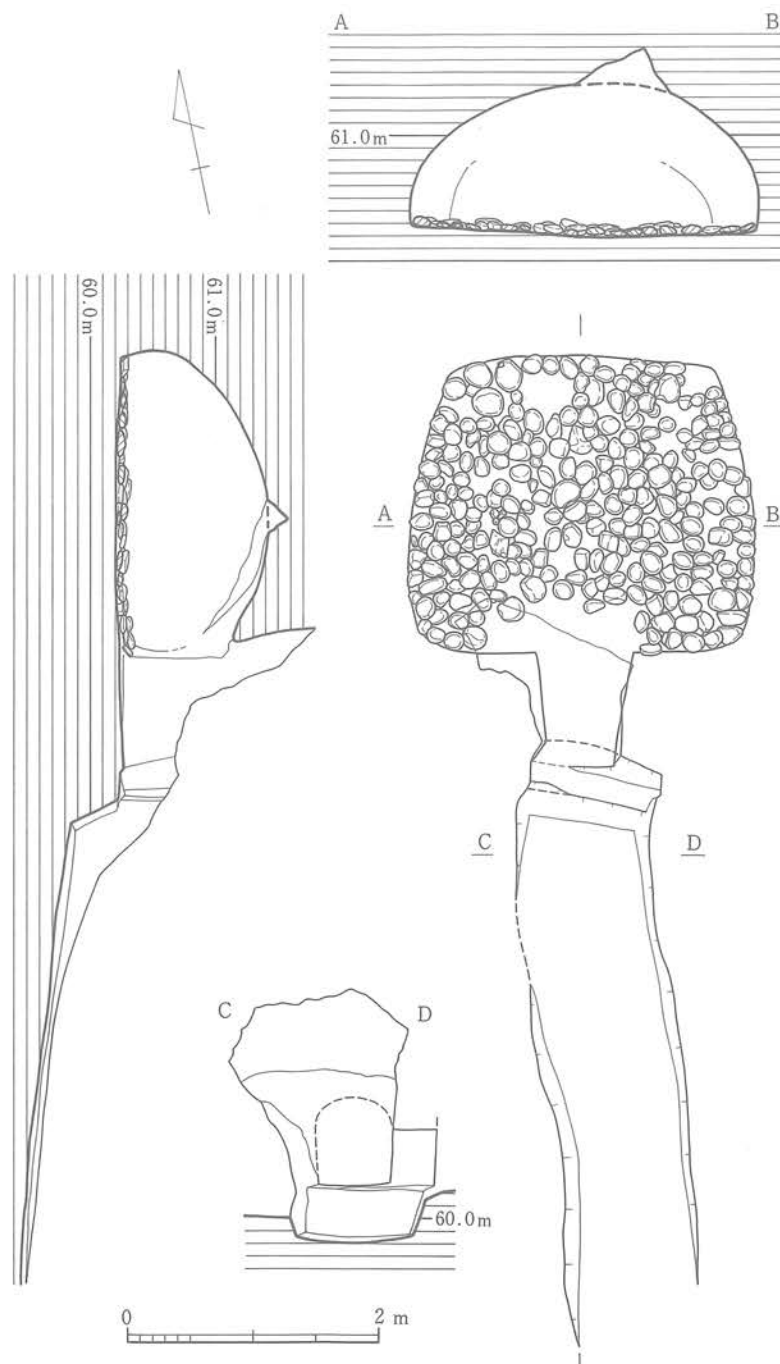
第3次調査作業風景

玄門付近から羨門部までの天井は崩壊し、羨道の幅は玄門近くで0.8m、先端で0.55m、長さは0.9mを測る。羨道と飾縁部とは若干の段差があり、前庭部までは35cmの落差があり、墓道は玄室の主軸に対して若干東に振れている。閉塞部の飾縁の両端は僅かに挟り込みが造られ、アーチ状の形と推測される。

出土遺物は、玄室内から金銅製の耳環6個、銀製の耳環1個が出土し、少なくとも4体の被葬者が埋葬されていたと考えられるが、人骨は1体分しか検出されていない。

この他、鉄鏃・鉞・馬具があり、馬具にはイモ貝製の飾金具が2点が含まれ、同様なものが八女郡

広川町の鬼塚2号墳から出土している。他に、前庭部と墓道から須恵器が出土した。



第18図 13号横穴墓実測図(1/60)

金銅・銀製
耳環

4体以上埋
葬者

貝製飾金具

14号横穴墓 (図版10-(3)・11-(1)・(2)、第20図)

13号横穴の西隣に位置する横穴墓で、墓道は並列するが玄室の主軸が若干東側に振れ、直接ではないが上下関係で重複する形になる。

2基目の複室横穴墓である。全体に整った形をしており玄室は正方形に近い形状を呈し、幅が2.35m、長さが2.15m、天井は低く造り高さは1.00mを測る。四隅の下部には稜線が入るものの、天井に棟の表現がなく立面形がドーム形を呈する。

玄室床面は奥壁側が玄門側に比して10cm程度高く造られる。玄室内には奥壁側の約半

複室横穴墓

低いドーム
形

分に河原石が敷かれているが、もともと全面に敷いていたものが除去されたと考えられる。

床面は玄門部の所で10cmほど下降し、羨道部まで平坦に造る。

玄門の幅は1.05m、天井までの高さは0.9mである。玄門の立面形は整美なアーチ形である。

前室の平面プランは横長の長方形を呈し、幅が2.00m、奥行きが0.85m、天井までの高さが1.08mを測り、断面形が玄室と同じドーム状を呈する。

前門から羨道部までは先細りとなり、前門部での幅が1.05m、羨門部では0.9m、長さは1.00m、高さが0.95mである。前門も立面形がアーチ形である。羨門の飾縁は整ったアーチ形で入り口部分よりも幅広に造られている。前面には幅1.90mの前庭部を造り、左隅には長さ1.60m、幅0.5m、高さが0.4mの祭壇が削り出されている。

祭壇は奥の隅が抉られたように掘られ、その奥行きが0.4mである。当該横穴墓群で明瞭な祭壇を付設する例は7号と18号横穴の共有する前庭部に1例と14号横穴墓のみである。

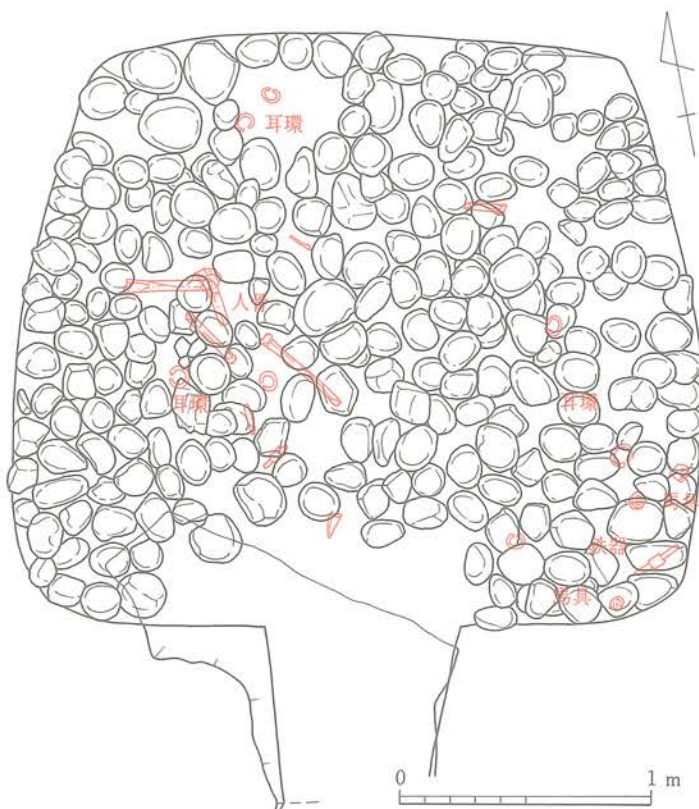
出土遺物は、玄室内に対峙するような形で右側壁沿いから金銅製の耳環が6個、左側壁沿いからは玉類が出土し、玉類と耳環の出土状態から4体以上の被葬者が埋葬されていたと考えられるが人骨は遺存していない。さらに、右袖近くで刀子、右奥で鉄鋤先の他、馬具類が出土しているが、刀子は紛失している。また、玄室や前室からも須恵器が出土している。

その他、前庭部や墓道から鉄鏃・刀子・馬具、土器類の他、祭壇からの大甕片がある。

15号横穴墓（図版11-(3)・12-(1)、第21図）

14号横穴墓の西側に掘られた単室の横穴であるが、レベルとしては14号横穴墓より低くなる。これは丘陵が西側に低くなるため当然のことではあるが、16号横穴墓と関連のありそうな要素を含んでおり高低差も少ない。

玄室の平面形状はやや長方形に近い形で、中央付近の幅が2.05m、長さは2.40m、天井までの高さは1.30mを測る。玄室の立面形態はドーム形である。



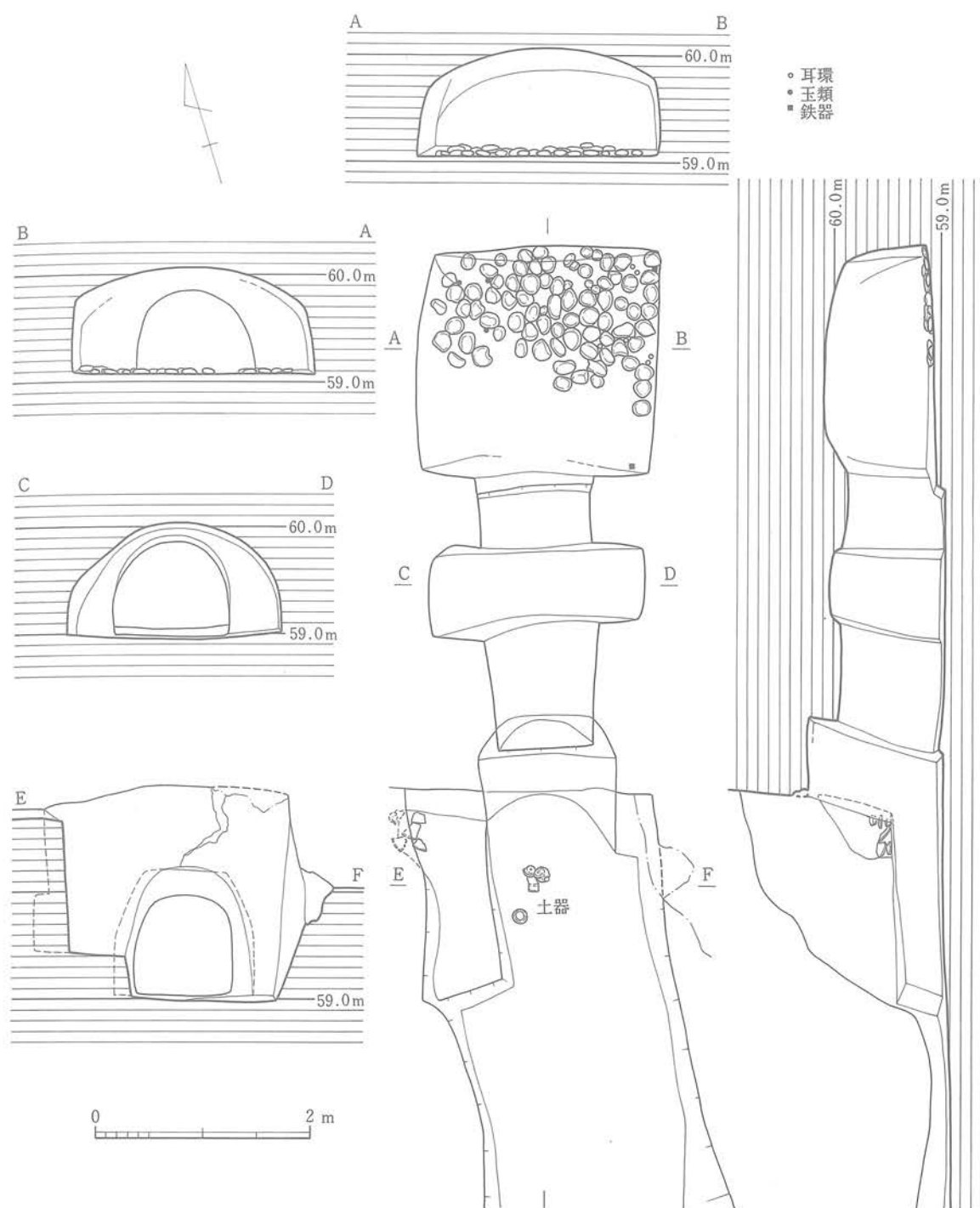
第19図 13号横穴墓玄室内遺物出土状態実測図(1/30)

玄門アーチ形

整美な飾縁

長方形の祭壇

4体以上の埋葬者



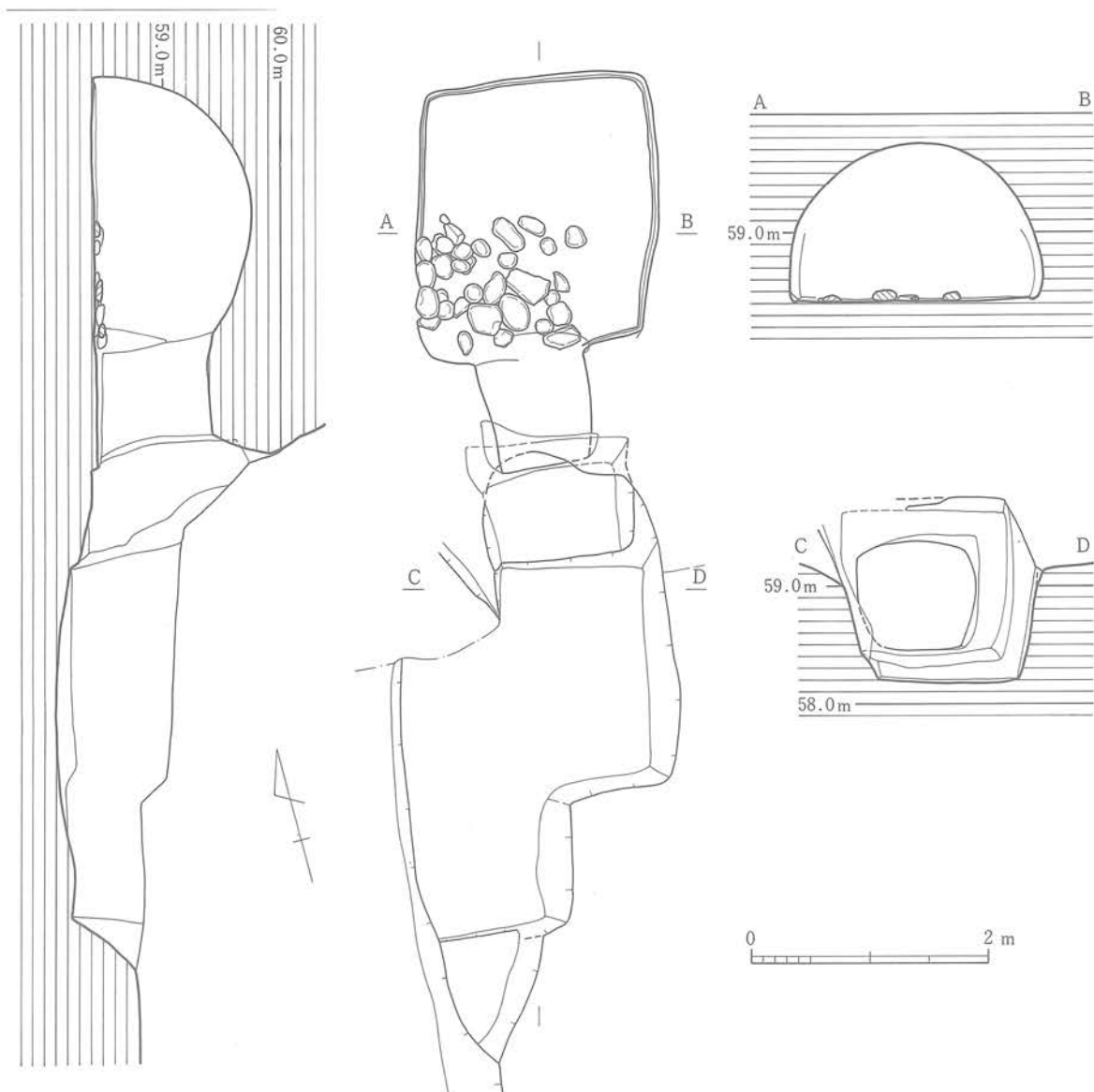
第20図 14号横穴墓実測図(1/60)

玄室内には南西側約1/4に扁平な河原石が残っているが、大半は盗掘の際に除去されたものであろう。南西隅を除く壁際には細くて浅い周溝が巡っている。羨道は玄室の主軸に対してやや東に傾き、玄門付近で幅0.9m、羨門部で0.75m、天井までの高さは0.95mを測り、床面は玄室と同レベルである。

周溝の巡る
玄室

羨門部の飾縁は横穴墓群では珍しい方形を呈し、16号横穴墓と共通性を持つ。羨道に対して閉塞部は約5.0cmの段をなし、前庭部とは20cmの段差がつく。前庭部の西壁は屈曲し、東側は16号の前庭部に破壊された形になる。これは初めに15号横穴墓が掘られ、その墓道は南側に延びず、16号横穴の墓道に交差する形で掘られている。つまり、19号

方形飾縁



第21図 15号横穴墓実測図(1/60)

墓道の変更

と20号横穴墓と同じ方向に掘り、この一群と墓道を一にするかのような感を受ける。後にこの墓道は16号横穴墓を掘削する際に完全に寸断され、16号横穴の墓道と共有する形になったと推察される。

短刀の鐔

出土遺物は、前庭部から馬具の飾金具と短刀の鐔があり、玄室内からは須恵器のみが出土している。おそらく、盗掘時に荒らされたと推測される。

横穴墓の差異

16号横穴墓（図版12-(2)・(3)・13-(1)、第22・23図）

この横穴墓を境に西側の横穴墓群とは墓道の方、横穴の規模など僅かながら差異を示している。西側に隣接する19号横穴墓とも一定の間隔が保たれ、玄室の主軸にも違いが見られる。両者には血縁的な相違、あるいは小単位の違いがあるのかも知れない。

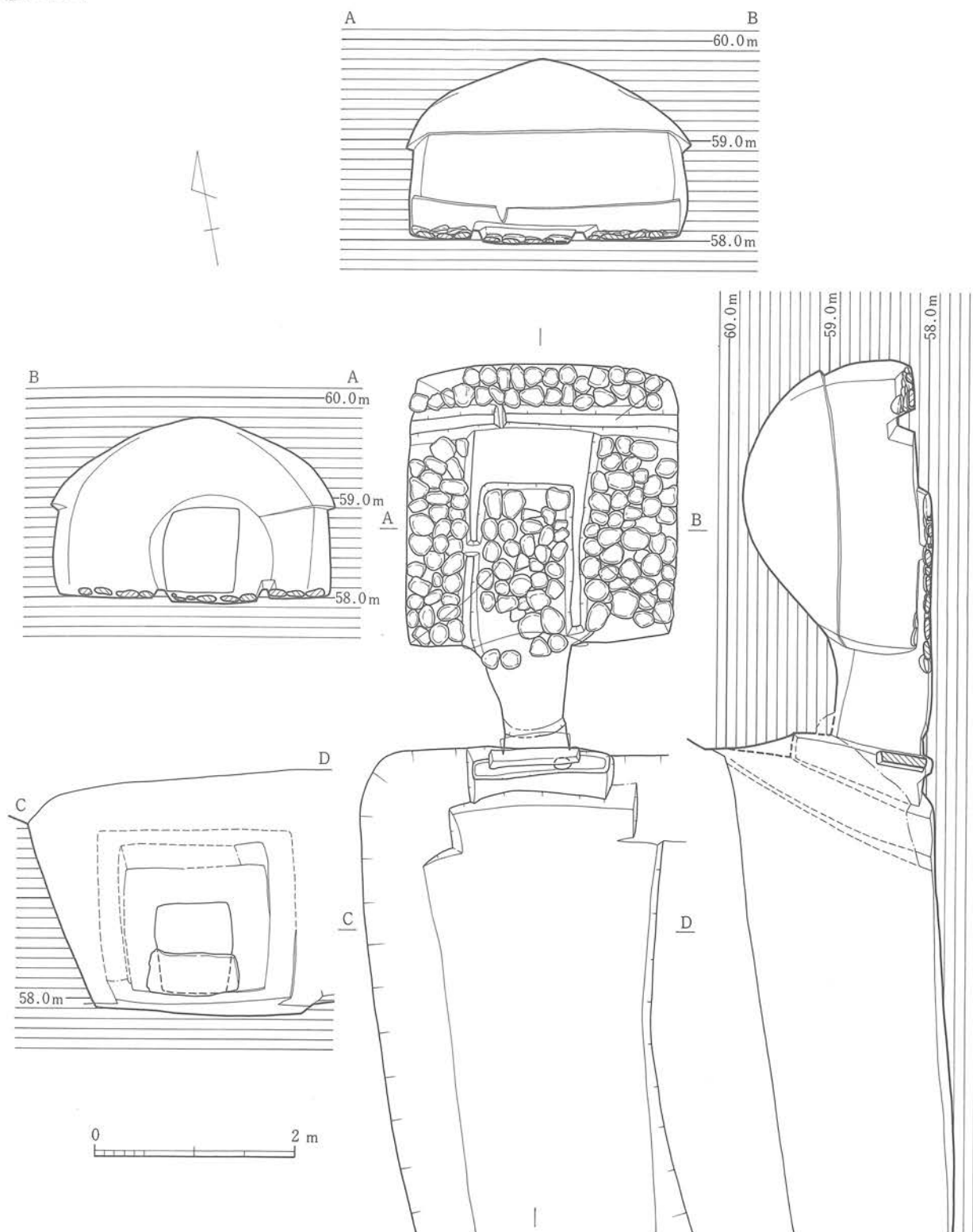
肥後タイプ

単室の横穴墓で、玄室の平面形態は方形を呈する。中央幅は2.70m、長さは2.80m、天井までの高さは1.90mを測り、横穴墓群の中では大型の玄室をなす。玄室内は岩盤を削り出すことにより「コ」字状に屍床を配する所謂「肥後タイプ」の典型で、3個所に

屍床を設けている。

奥壁の屍床は幅が0.40mと狭く、長さは2.60m、仕切りの高さは床面から20cmを測り、他の仕切りに比較して一段高く造る。仕切りの西よりには排水のための溝を掘り込んでいる。床面には2列に河原石を敷き詰めているが、埋葬施設としては狭すぎる感があり、狭い屍床おそらく女性を埋葬したことが考えられる。

左の屍床も一面に河原石を敷き、仕切りの中央に排水溝を設置している。右側の屍床



第22図 16号横穴墓実測図(1/60)

は幅広に造られ、
長さが2.00m、
幅が0.90mを測
り、玄門側に排
水溝を設置して
いる。同じく一
面に河原石を敷
いている。

中央部は長さ
が1.50m、幅が
0.85mの通路(拝
場)を設け、ここ
にも河原石を敷
き詰め、その奥に
は1.20m×0.5m、
高さ0.15mの壇
状の高まりを造
る。

側壁から天井
にかけては寄棟
造の家形を表現
し、妻側を入り
口とする。

玄門は方形で
羨道部は羨門方
向に細まり、長さ
が1.00m、幅は奥
が0.85m、入り口
部で0.60m、天井
までは0.95mで、
天井の両端には
稜が造られ、羨
道の立面形は方
形になる。床面
は玄室とほぼ同
レベルで、玄門
付近が高くなる。

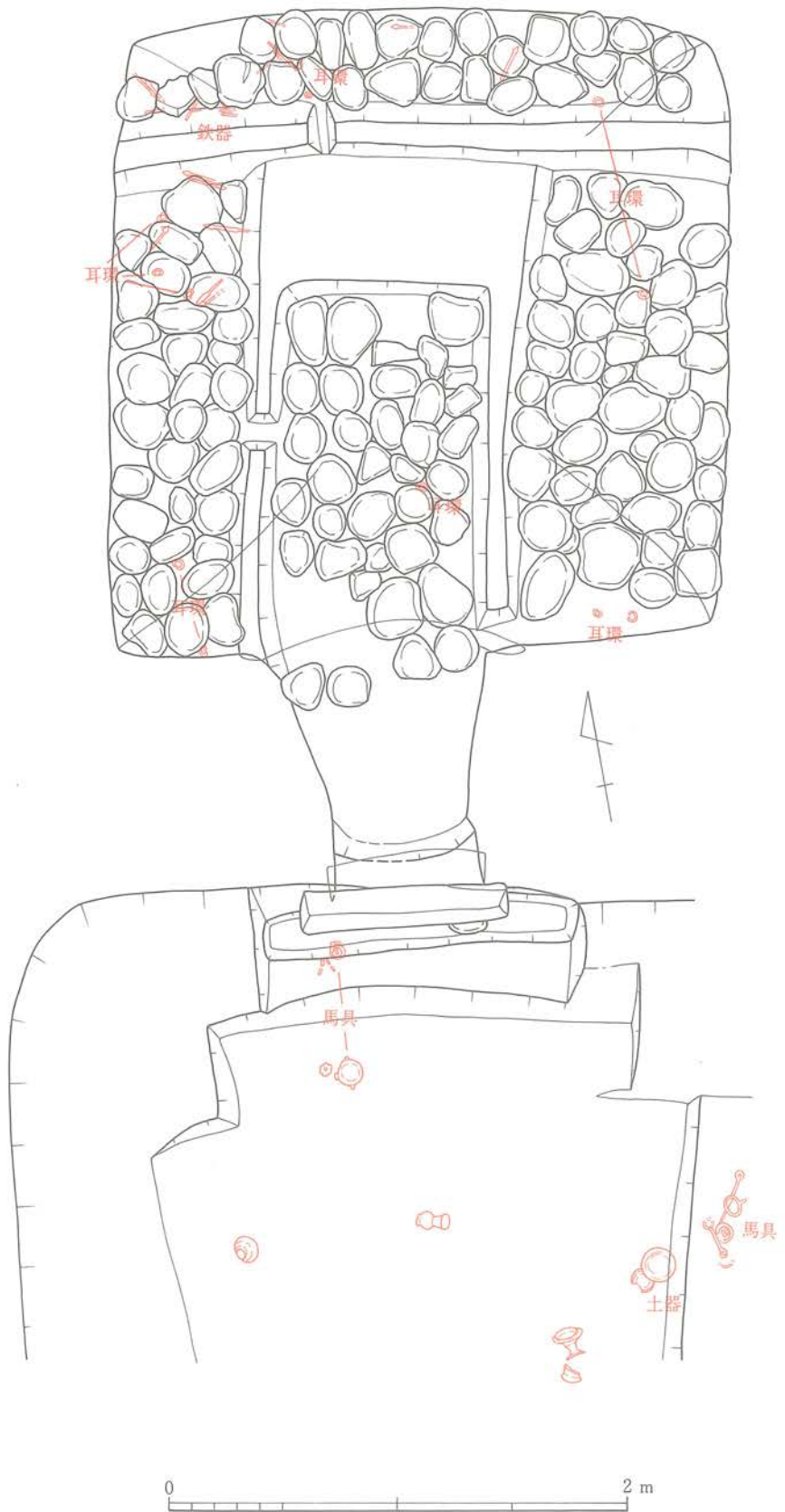
羨門の飾縁は
方形を呈し整美

正面祭壇

寄棟造家形
妻入

立面方形羨
道

方形飾縁



第23図 16号横穴墓遺物出土状態実測図(1/30)

なものに仕上げている。閉塞石は、幅0.20m、長さ1.35mの溝を掘り緑泥片岩の板石を立てているが、上部が破壊されている。しかし、玄室内の乱れがほとんどないことから、古い時期の盗掘と考えられる。羨門と前庭部とは0.15mの段差がある。

前庭部から墓道にかけては殆ど同じ幅に造られ、前述したように、途中で15号の墓道を寸断している。

出土遺物は多く、玄室内から鉄鏃・刀子・鉋が奥と左側の屍床及び羨道部から出土し、玄室床面からは銀製耳環8個、金銅製耳環13個、ガラス玉、滑石製白玉、前庭部からは馬具、須恵器・土師器などが出土した。玄室の耳環の出土数から、少なくとも11体の被葬者が埋葬されていたと推測されるが、人骨は遺存していない。

11体の埋葬者

17号横穴墓（図版13-(2)・(3)・14-(1)、第24図）

6号横穴墓と墓道を共有する単室の横穴で、18号の前庭部に横穴墓に上るテラスを設置している。玄室の平面形態は横長の方形を呈し、中央幅は1.80m、長さは1.45m、天井までの高さは1.05mを測る。立面形態は四隅に稜線をもつものの棟を表現しておらずドーム形である。

玄室ドーム形

玄門床面には細い溝を掘り込んでおり、中央部分が方形に抉られている。排水溝と考えるより玄門部に仕切り状のものの存在が考えられる。羨道部は短く幅広で、玄門部で1.00m、長さは0.40mを測り、羨道部の天井は亀裂が走り危険なため調査時に除去した。羨門には緑泥片岩の割り石で閉塞しており、飾縁は方形をなす。

方形飾縁

出土遺物は、玄室から金銅製の耳環1個と鉄鏃、1体の人骨が出土したが、未盗掘で追葬が行われているにも拘らず耳環1個の出土が疑問視される。

前庭部からは写真図版で示すように、床面から15cmと90cm上層で一括土器が出土しており、上層の土器類は追葬時の墓前祭の跡と推測される。上層の土器の出土状態はレベル的に天井付近に供献されており、一部は埋め土と天井の透き間に刺し込んだ状態を示しており、最終追葬時の墓前祭と見做されるが、出土状態から羨門部を閉塞した後に埋土したと推測される。

追葬墓前祭

埋土した羨門部

18号横穴墓（図版14-(2)・(3)・15-(1)、第24・25図）

7号横穴墓と墓道を共有する単室の横穴であるが、6号・17号とも結果的には共有する形になる。この4基の横穴の被葬者は繋がりのあったことが推定される。

単室横穴墓

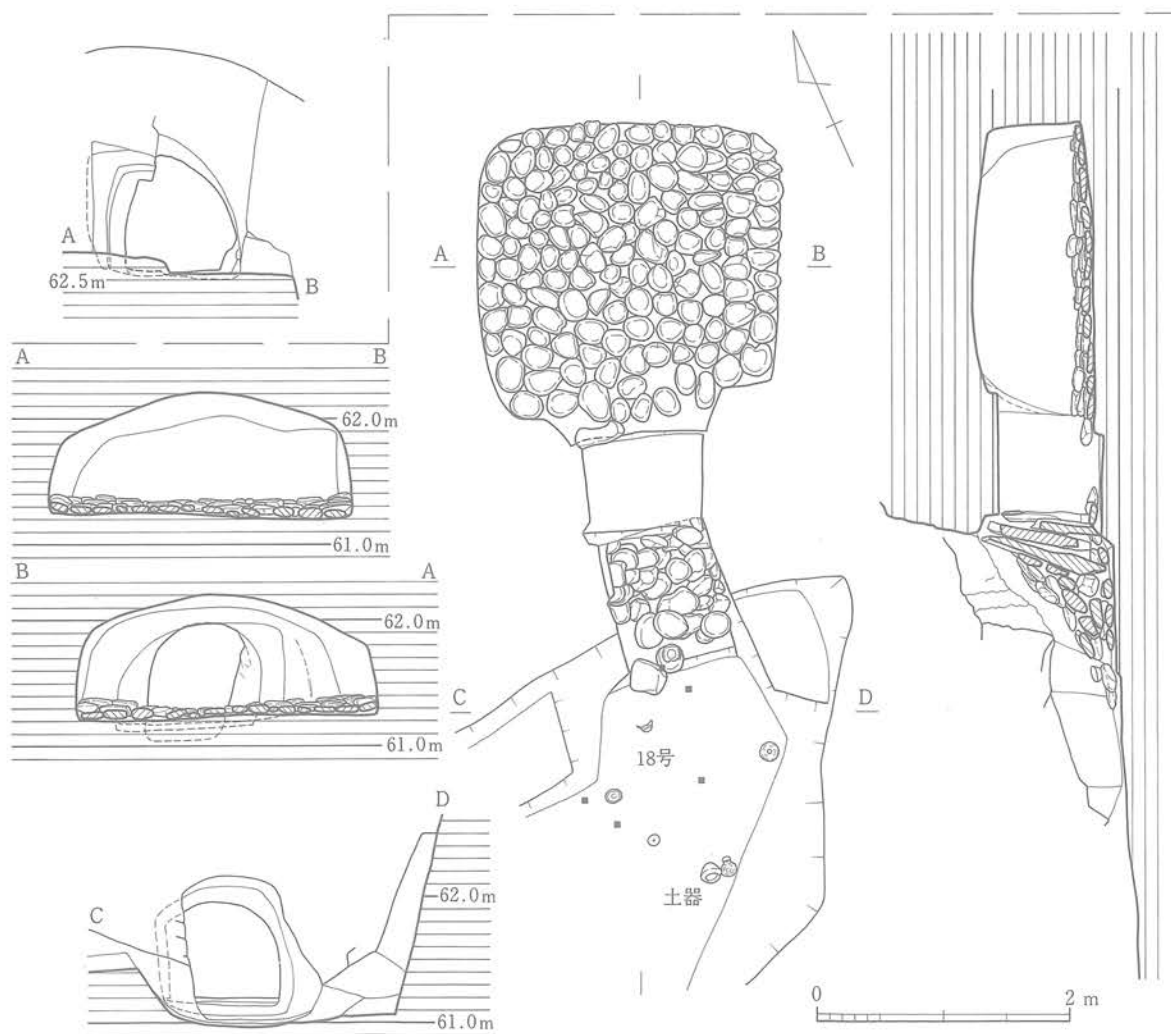
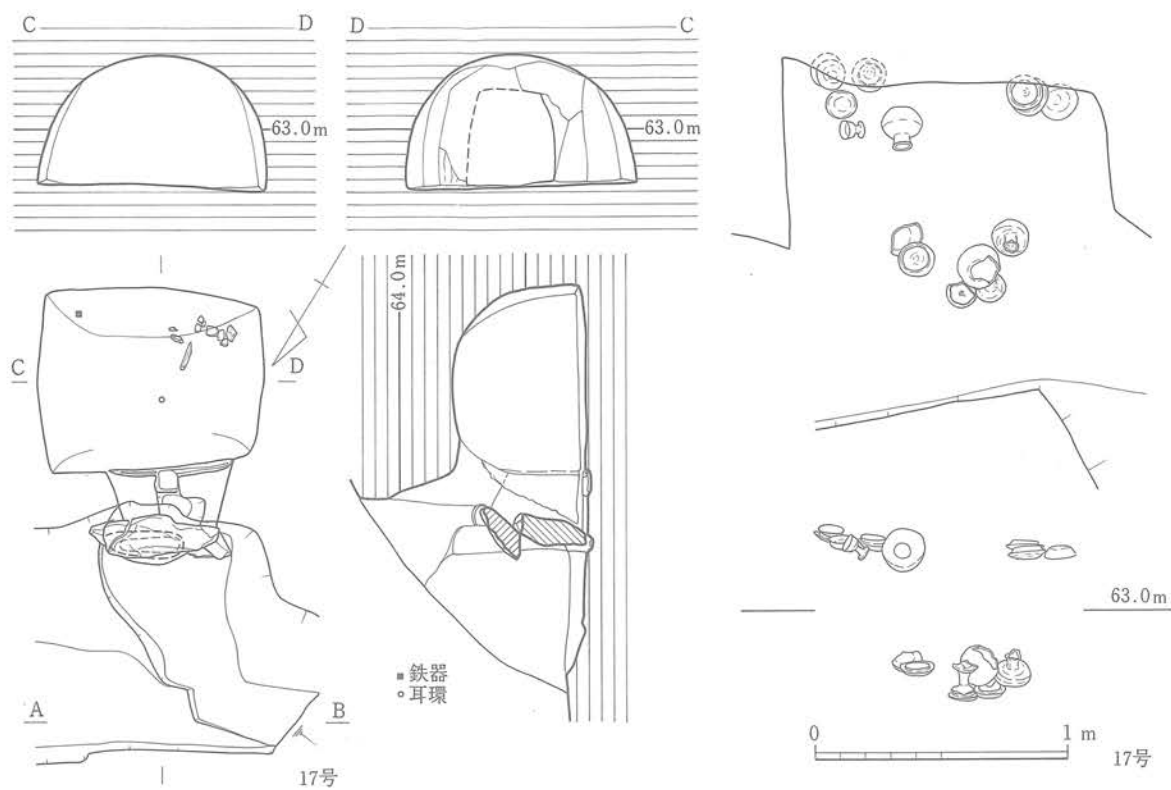
玄室の平面プランは隅丸方形に近い形状で、幅が2.40m、長さは左右の袖が段違いに造られ、右側で2.05m、左側では2.30m、天井までの高さは0.95mを測り、低い玄室を造っている。

立面形態はドーム形で天井部も割と平坦である。床面には扁平な河原石が敷き詰められており、未盗掘で乱れない。玄門部床面と羨道部にかけては10cm弱の段差がつく。羨道の長さは短く0.80m、幅は0.95m、天井の高さは0.85mを測る。

低い天井

羨門の飾縁はアーチ状をなし、羨道床面より10cm低くなる。羨門の閉塞石は緑泥片岩の板石を3枚立てて、外側に河原石を積み上げ乱れていない。閉塞部分のプランは、玄室の主軸に対して東側に振れている。

未盗掘



第24図 17号・18号横穴墓、前庭部遺物出土状態実測図(1/60・1/30)

出土遺物は、玄室内から金銅製の耳環4個3種類が出土しており、人骨の出土状態から4体以上の被葬者が埋葬されていたと推測される。その他、刀子と鉄鏃が出土している。前庭部からは土器類・鉄鏃・馬具の一部があるが、玉類はまったくない。

4体以上の埋葬

19号横穴墓(図版15-(2)・

(3)・16-(1)、第26図)

調査区の西側の一群で4基の内の東端に位置する単室の横穴墓である。20号横穴墓と墓道を共有するが、21号に墓道の一部を削られ、掘られた新旧関係は19・20号→21号の順になる。

新旧関係

隅丸長方形の玄室

玄室の平面形態は隅丸長方形で、幅が1.65m、長さは2.10m、天井までの高さは1.10mを測り、岩盤の状態が悪く奥壁と天井の一部が崩壊している。玄室の立面形状はドーム形を呈する。床面には敷石は見られず、盗掘は受けていたものものもとと石は敷いていない可能性もある。

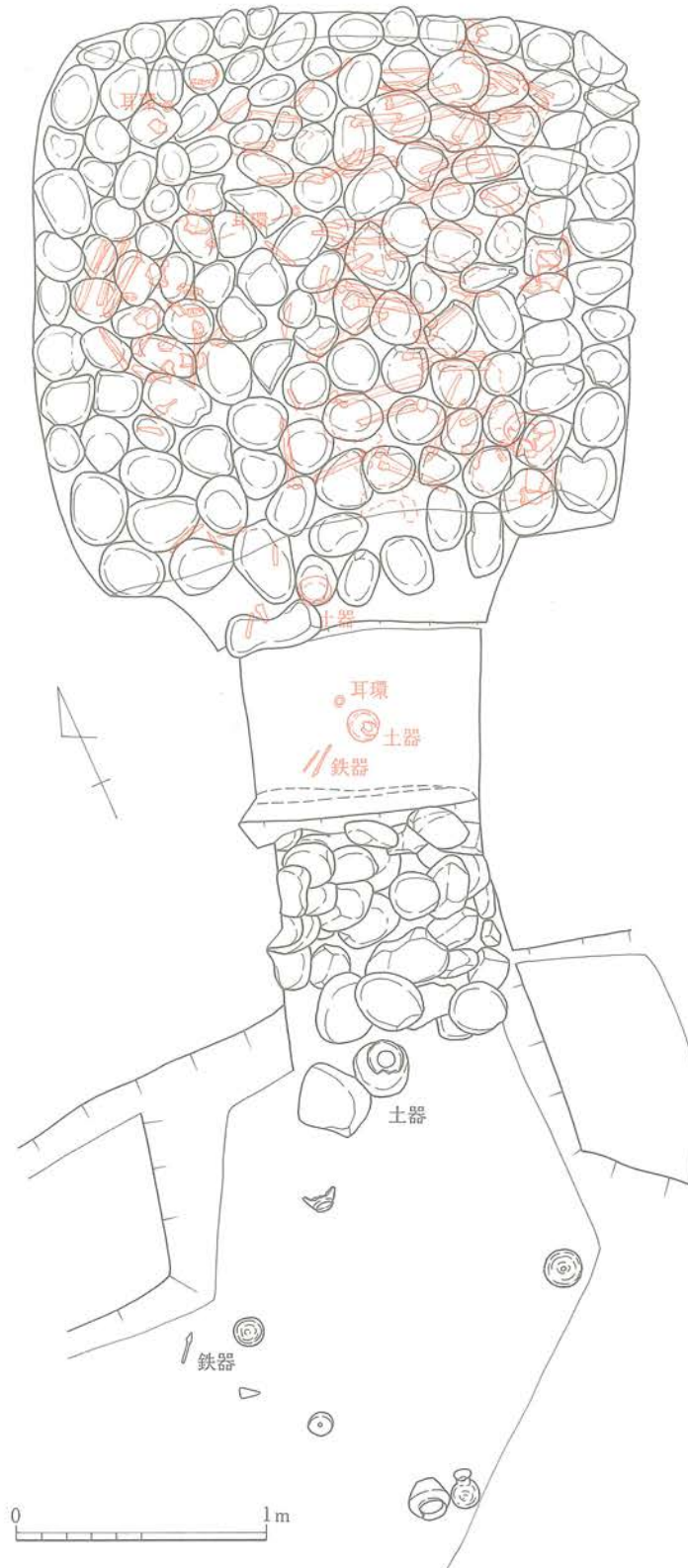
羨道部はやや長く玄室の西側に片寄った形で造られ、幅は0.80m～0.60m、天井の高さは0.85mである。玄室に対して羨道床面10cm弱の高低差がある。

長い羨道部

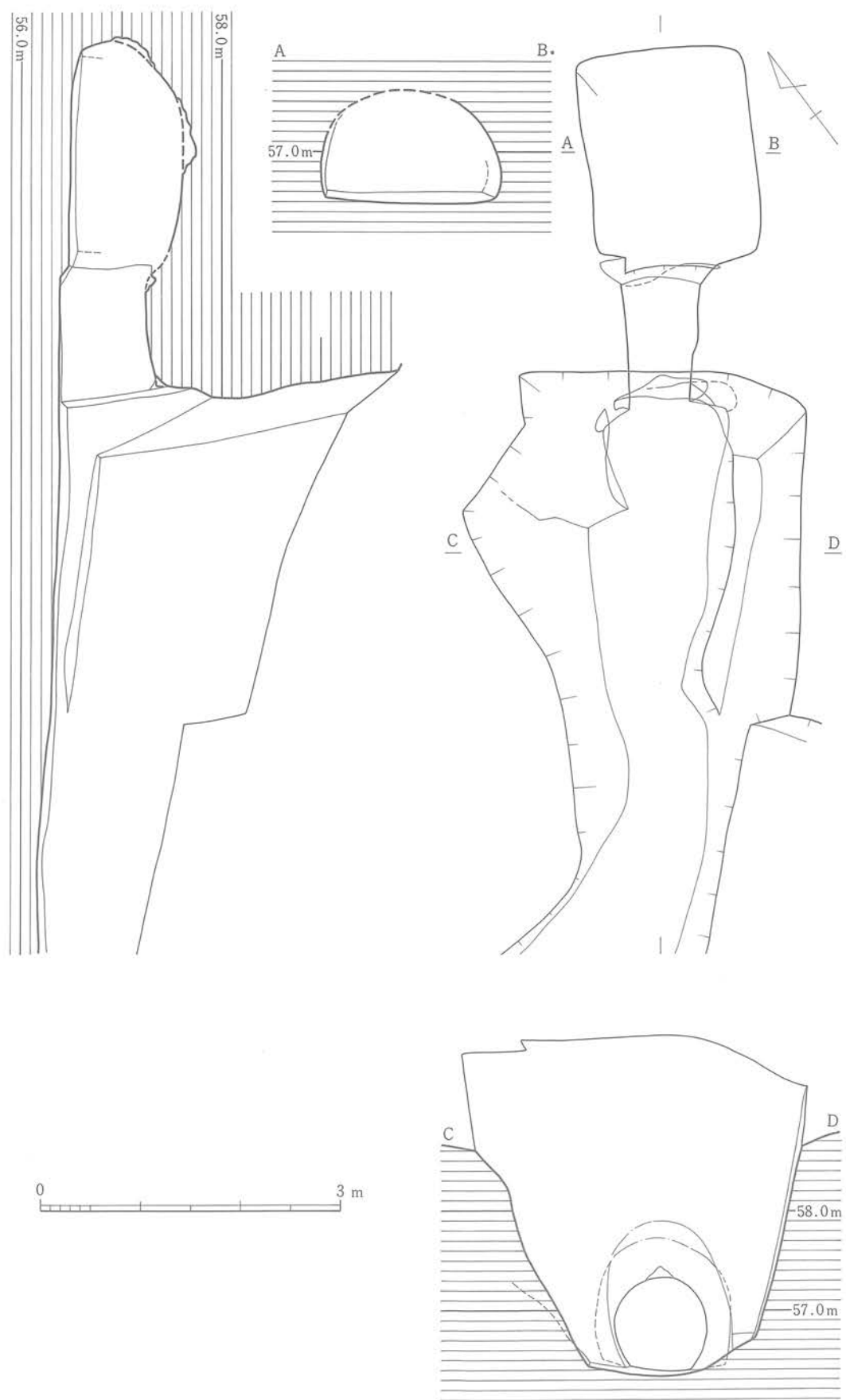
羨門部の飾縁はアーチ形で、閉塞石はまったく遺存していない。前庭部の掘り込み面から床面までが深く、現況で3.40mを測る。

アーチ形飾縁

出土遺物は、玄室から



第25図 18号横穴墓遺物出土状態実測図(1/30)



第26図 19号横穴墓実測図(1/60)

風化した鉛ガラスの丸玉が1点と前庭部から鉄地金銅張辻金具が1点、その他土器類が前庭部から出土している。

鉛ガラス玉
と辻金具

20号横穴墓 (図版16-(2)・(3)、第27図)

19号横穴墓と主軸方向を同じくするもので、単室の横穴墓である。

玄室の平面プランは方形を呈し、幅が2.05m、長さは2.20m、天井の高さは1.20mを測る。

玄室の立面形態はドーム状を呈し、床面は奥壁方向の約2/3に河原石の敷石が残っており、玄門側は除去されている。

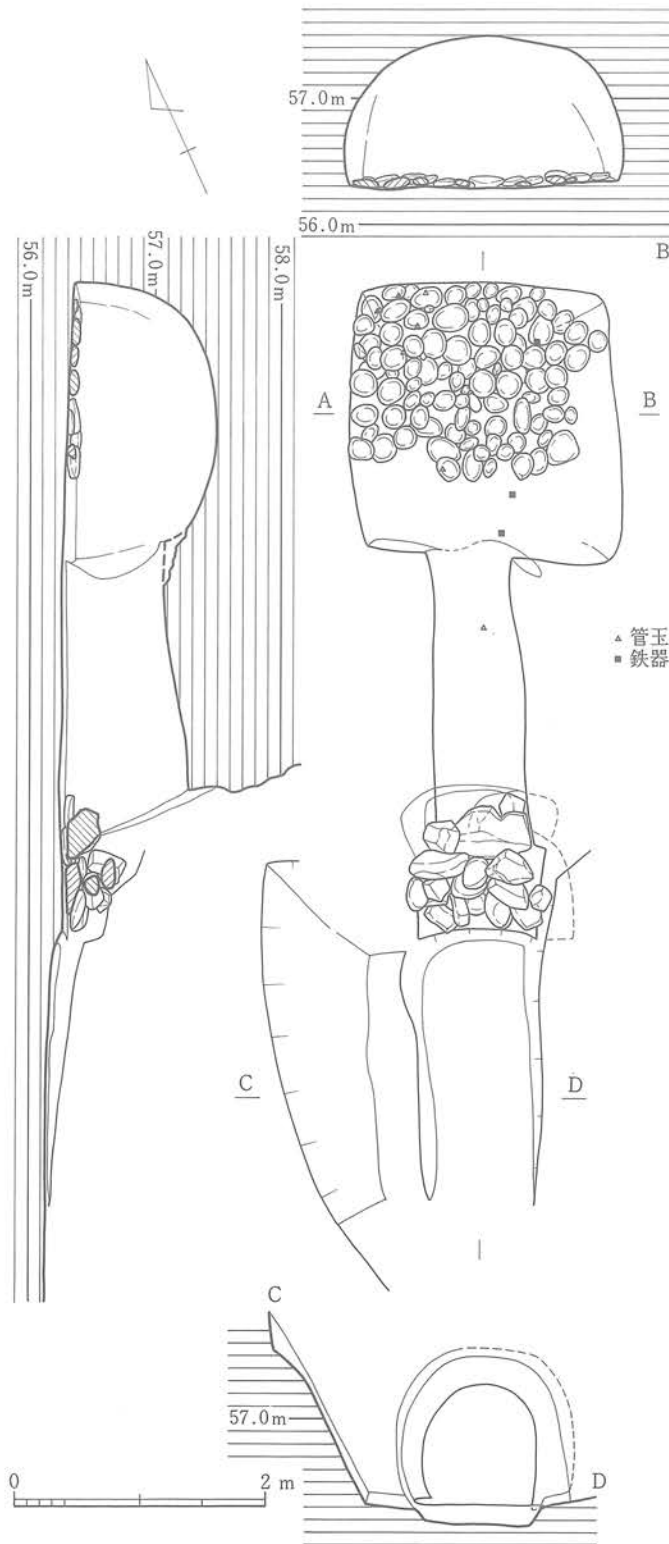
羨道部は細長く造られ、これが当該横穴墓の特徴である。羨道幅は0.6～0.7m、長さは2.25m、天井までの高さは、玄門近くで0.8m、羨門付近で1.00mである。

羨門には河原石と地山石とで閉塞していたらしく、床面に散乱している。羨門の飾縁はアーチ形を呈する。前庭部には低い段差がある。

出土遺物は、左奥壁傍から碧玉製管玉7個と水晶製の切子玉1個、算盤玉2個、中央付近で鉄鏃・刀子・弓付金具などが出土している。また、前庭部から出土した提瓶の破片が19号・22号前庭部出土のものと接合した。おそらく、墓前祭で破碎しばらまかれたのであろう。

21号横穴墓 (図版17-(1)・(2)、第28図)

4基の横穴の中で唯一主軸が異なる単室の横穴墓で、東側の



単室横穴墓

細長い羨道部

水晶切子玉

弓の副葬

土器の破碎

第27図 20号横穴墓実測図(1/60)

一群とほぼ同じである。玄室の平面形態はやや歪な方形を呈し、中央付近の幅が1.85m、両袖が段違いに掘られ、長さが右側では1.80m、左側は1.90mを測る。立面形態は四隅に稜をもつドーム状である。

肥後タイプの
玄室

床面は「コ」字状に屍床を仕切る所謂「肥後タイプ」の玄室で、奥壁と両側の仕切りには排水溝が掘られている。奥壁の屍床の幅は0.30m～0.50m、長さは1.50m、右側の屍床幅は0.50m、長さは1.15m、左側は幅0.45m～0.50m、長さは1.45mを測り、いずれも小型の屍床を造り出す。中央の通路（拝場）は屍床より一段低く掘られている。床面には敷石はない。

羨道は細く、長さが0.60mで幅は0.60mである。玄門には閉塞石は除去されており、飾縁は破損しているが方形に近いアーチ形であろう。

飾縁ドーム
形

前庭部は羨門近くで幅1.20mで、両側が屈折して3.50mの広い前庭部を造り出す。

出土遺物は、盗掘で荒らされており装身具はまったくなく、玄室から高坏の破片が出土したに過ぎない。

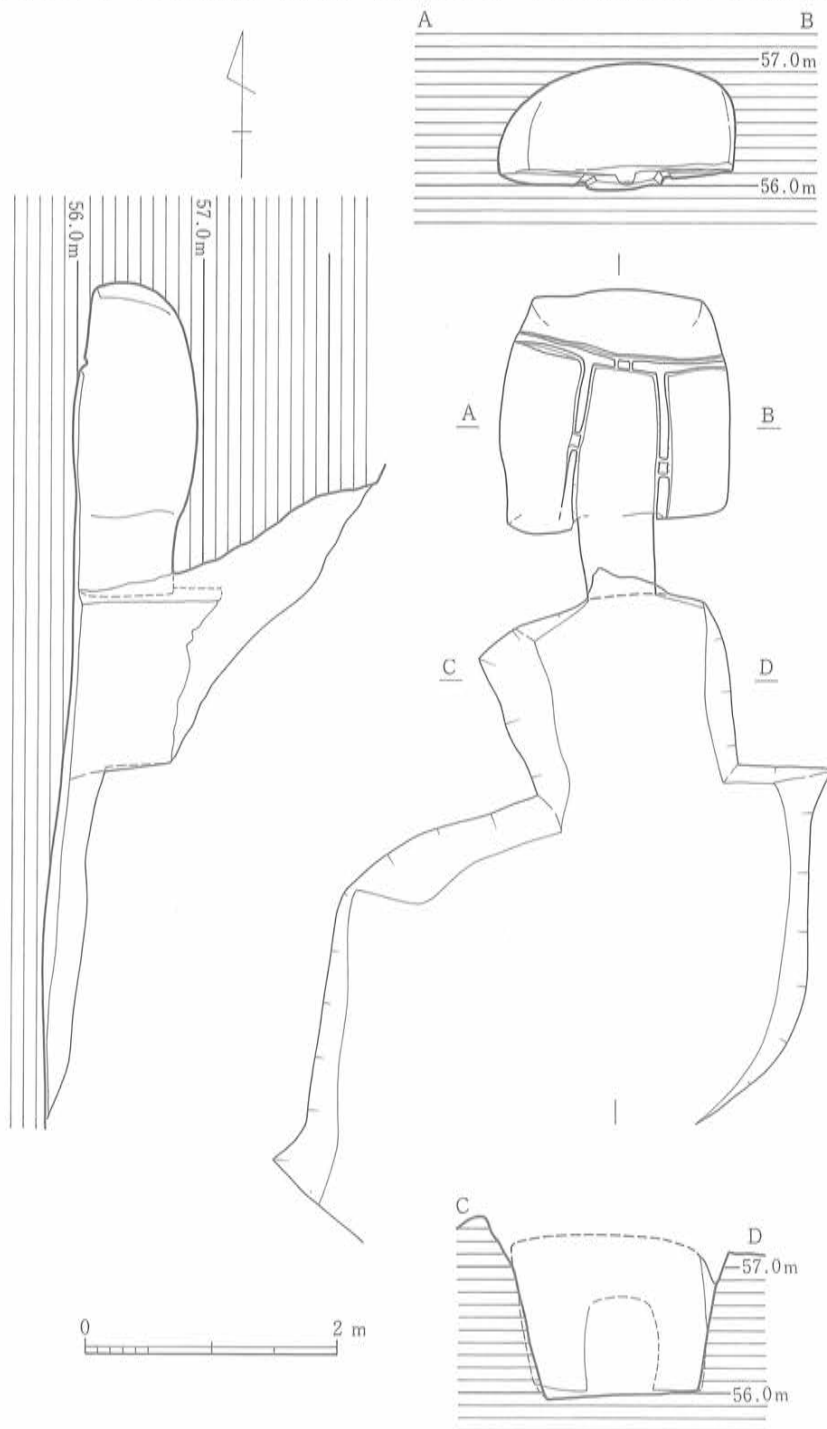
激しい盗掘

22号横穴墓

(図版17-(3)・18
-(1)、第29図)

小型単室横
穴墓

21号横穴墓の西隣に掘られた小型の単室横穴墓で、主軸は19号とほぼ同じ。



第28図 21号横穴墓実測図(1/60)

玄室の平面プランは不整形で、玄門から僅かに膨らむ形で造られるが、羨道の延長のような造りである。

玄室の幅は1.15m、長さは0.80m、天井の高さは0.50mを測り、玄室の規模から成人墓ではなかろう。床面には敷石などはない。

特徴的なこととして玄室の大きさに対して羨道部が長く造られており、長さは1.30m、幅は玄門付近で0.80m、羨門部では0.60m、天井までの高さは0.70mである。床面は羨門部から玄室に向かって緩斜面をなしている。

羨門部の飾縁は上面にのみ長方形の切込を入れているが、閉塞石はなく板で閉塞していたと推測される。

明瞭な前庭部は造らず、掘り込み面で幅1.40m、底面で0.50mの羨道の延長状に造り、床面には0.10mの段差を設けて排水溝を墓道に続けている。

出土遺物は玄室内にはなく、前庭部付近で須恵器が出土している。

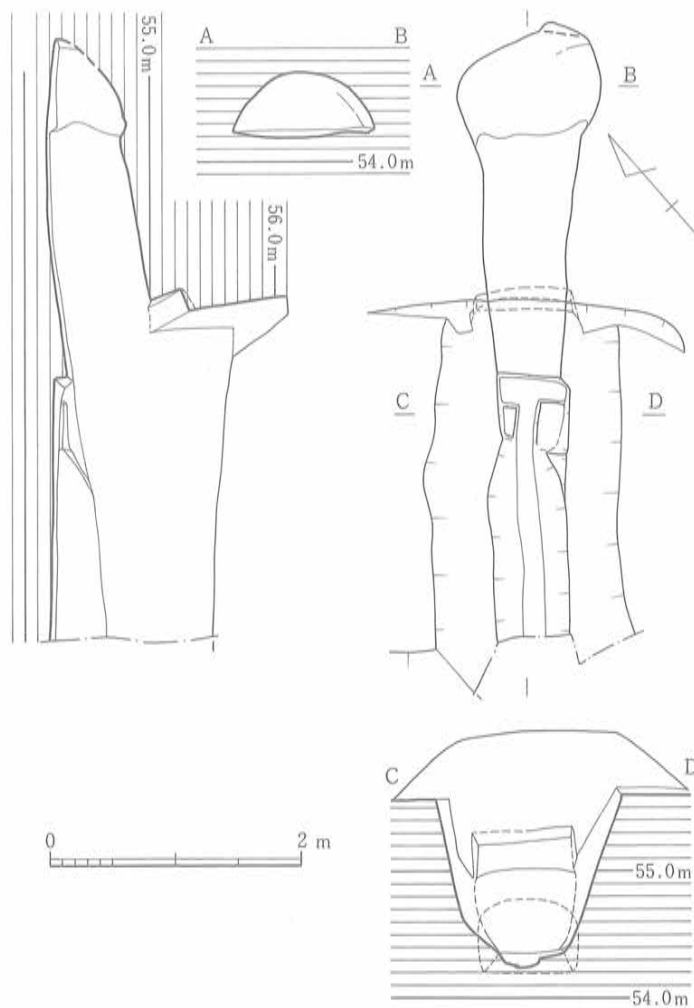
第4次調査では3基の横穴墓を検出した。3基とも第3次で調査した22基の横穴墓群の南側丘陵の頂部（標高79.0m）から南斜面に位置する一群で、他と同じく南側に開口している。横穴墓の下方は既に大きく削平され横穴墓の存在は不明であるが、丘陵の南斜面は自然地形がもともと大きく抉れており、横穴墓を築造するには格好の場所である。斜面の下層は農道が走り調査できなかったが、数基の横穴群を構成していると考えられる。

以下個別を説明する。

23号横穴墓（図版18-(2)・(3)、19-(1)・(2)・(3)、20-(1)、第30図）

当該横穴墓は、第3次で調査した22基の横穴墓群の南側丘陵の標高79.0mの頂部に位置する横穴墓で、南側に開口している。

24号と墓道を共有した単室の横穴墓である。玄室の平面形態は隅丸長方形を呈し、中央幅が2.40m、長さは3.30m、天井の高さは1.10mを測り、規模の大きい玄室にしては



第29図 22号横穴墓実測図(1/60)

子供の埋葬
墓

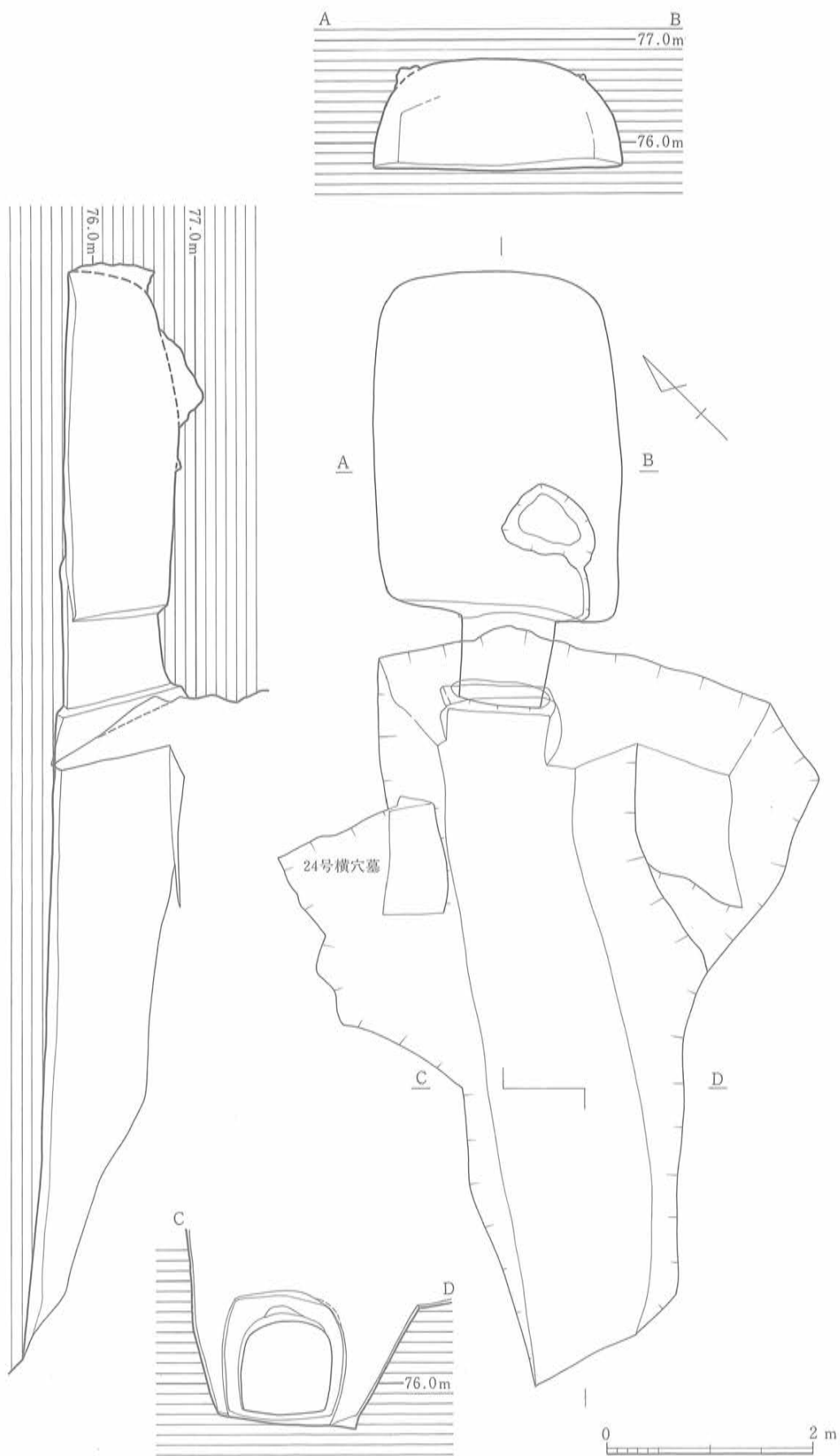
長い羨道部

板の閉塞

第4次調査

別集団の横
穴群

長方形の玄
室



第30図 23号横穴墓実測図(第4次調査・1/60)

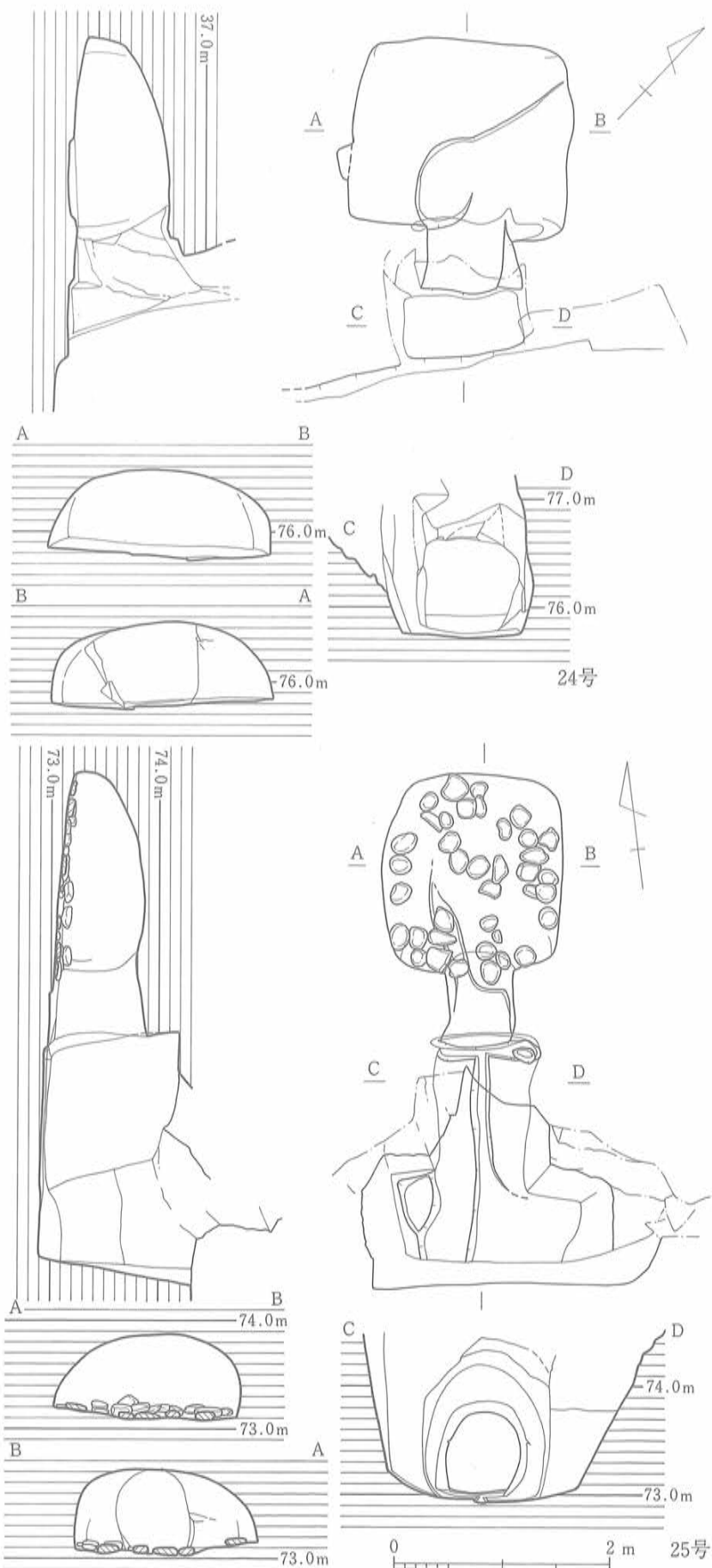
天井が低く造られている。玄室の立面形態はドーム形を呈する。

床面には盗掘のためか敷石はまったくなく、南隅に盗掘時に掘られた窪みがある。

羨道部は短く掘られ、長さが0.80m、幅は0.80m~1.00m、天井までの高さは0.95mを測る。羨門部と前庭部床面には10cmの段差があり、飾縁は方形状飾縁を呈する。

前庭部の底面は墓道と同一幅に掘られているが、右側には底面から1.20m上部に奥行き0.90mのテラスを削り出しており、一種の祭壇機能があった可能性があり、ここからの出土遺物は須恵器の長頸壺がある。

他の出土遺物は玄室から墓道にかけて出土し、多くは祭壇下の墓道付近から出土した。



ドーム形玄室

激しい盗掘

方形状飾縁

祭壇の長頸壺

第31図 24号・25号横穴墓実測図(第4次調査・1/60)

24号横穴墓（図版20-(2)・(3)、第31図）

ドーム形玄
室

23号前庭部の左側に直交する形で掘られた単室の横穴墓である。玄室の平面形態はやや胴張りの方形を呈し、中央部の幅は2.05m、両袖は段違いに掘られており、長さは右側が1.80m、左側は1.70m、天井部は玄門から奥壁方向に緩い傾斜をなし、玄門付近では0.90m、奥壁では0.40mを測る。立面形態はドーム形である。

羨道は短く長さが0.60m、幅が0.70mで、羨門の飾縁は天井部が崩壊し不明瞭であるが方形に近い形であろう。前庭部は狭く、23号と段差をなす。

玄室内からの出土遺物はなく、23号前庭部出土の土器に混入しているのであろう。

25号横穴墓（図版21-(1)・(2)、第31図）

共有の墓道

23号・24号横穴墓の西隣に位置する横穴で、23号の主軸に対して西に振れており、農道で破壊されているが、墓道を共有することが考えられる。

玄室の平面プランは、胴張りの隅丸方形を呈し、中央幅が1.70m、長さは1.80m、天井までの高さは最も高い所で0.80mを測り、24号同様奥壁側が低く掘られている。

断面形態の
酷似

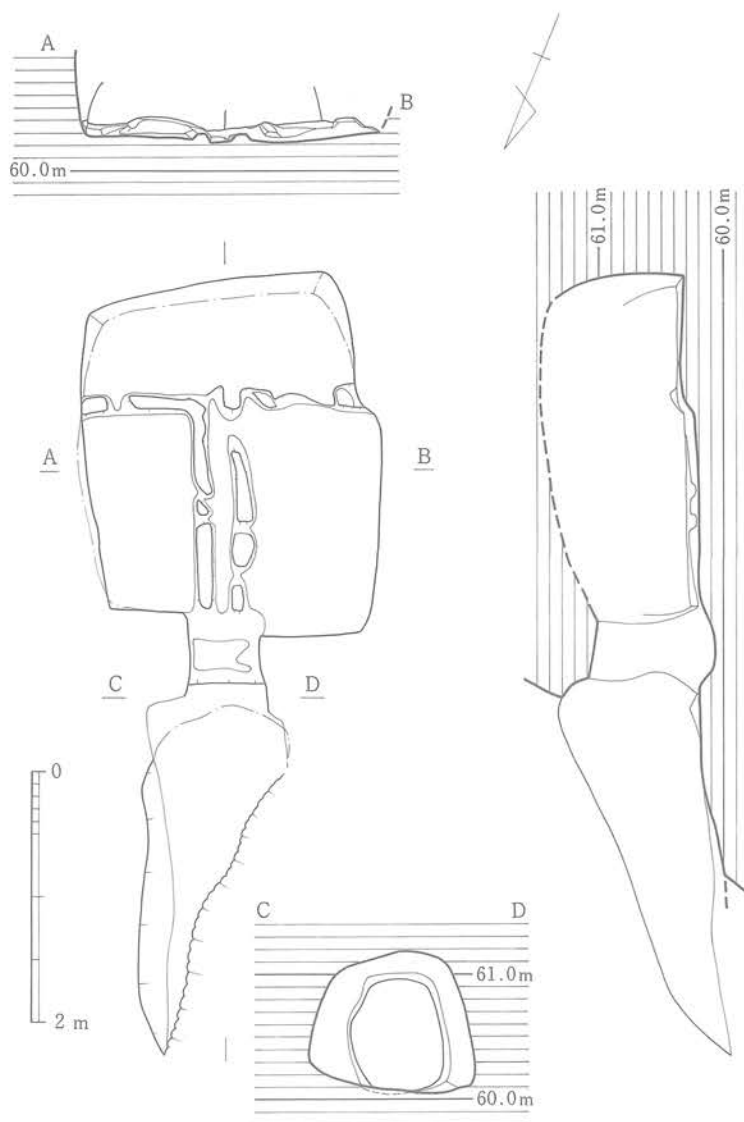
ここで検出した3基の横穴墓は玄室の主軸断面形態が酷似していることが指摘でき、同一のプランで掘られたことが推測される。

玄室床面には、盗掘でまばらになってはいるが、ほぼ全面に扁平な河原石が敷き詰められている。

羨道部は細く、長さは0.65m、幅は0.60mで天井は羨門部方向に高くなる。これも24号との共通点である。

排水溝の掘
削

羨門部には浅い溝が掘られ、前庭部方向に排水溝が延びる。飾縁はアーチ形で、この部分の天井は岩盤の亀裂で崩壊している。



第32図 26号横穴墓実測図(1/60)

出土遺物は、装身具類の出土はなく、玄室内と前庭部から供献された須恵器類が出土している。

第5次調査は、当初、横穴墓は存在しないと考えていた第3次調査の南側の北斜面で土取り中に発見された。第3次調査の南側は急斜面をなし、横穴墓を掘削するには不向きな地形と考えていたからである。発見された横穴は1基のみであるが、調査時点で第3次調査地点は削平を受け位置関係が不明であるが、おそらく、第2図に示した個所と推定される。発見当時は、玄室の天井部が崩壊しており、羨道部の飾縁が単独で遺存していた。しかし、危険なため調査時に写真撮影と実測をしたのち破壊した。飾縁はアーチ形を呈している。

第5次調査

アーチ形飾
縁

26号横穴墓（図版22-(1)~(3)、第32図）

単室の横穴墓である。玄室の平面プランはやや歪な方形を呈し、幅が2.30m、長さは2.60mを測り、床面には不正確な「コ」字状の屍床を設ける「肥後タイプ」である。しかし、既に記述した「肥後タイプ」の玄室に比較して通路部分が極端に狭く、床面には敷石は見られない。

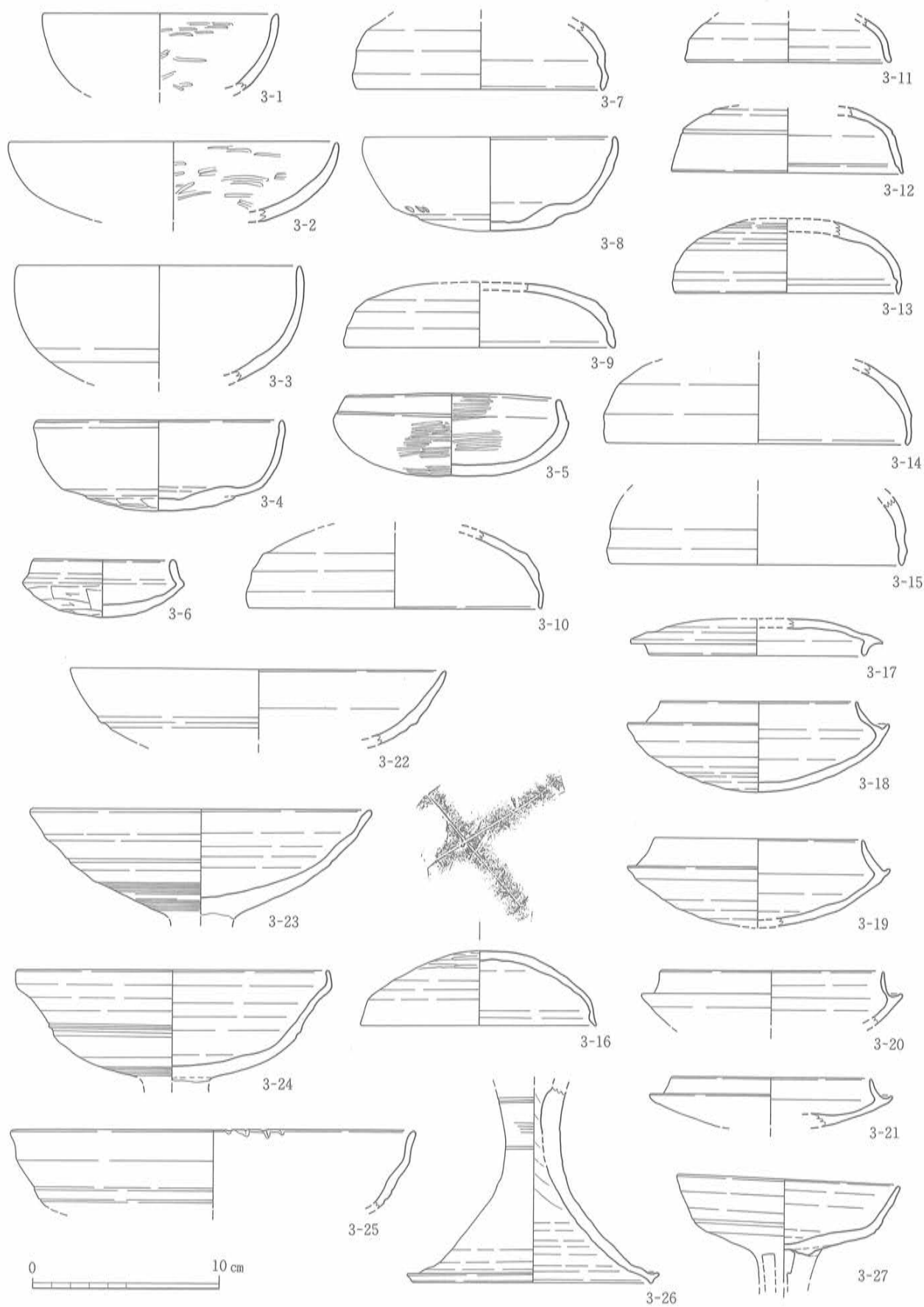
肥後タイプ
の玄室

奥壁の屍床は、長さが2.15m、幅は0.80m前後、右側のそれは長さが1.80m、幅は1.00m、左側の屍床は長さ1.60m、幅は0.80mで、3個所の仕切りには各々排水溝を設けており、両袖は段違いに掘られている。羨道は狭く幅・長さとも0.55mである。

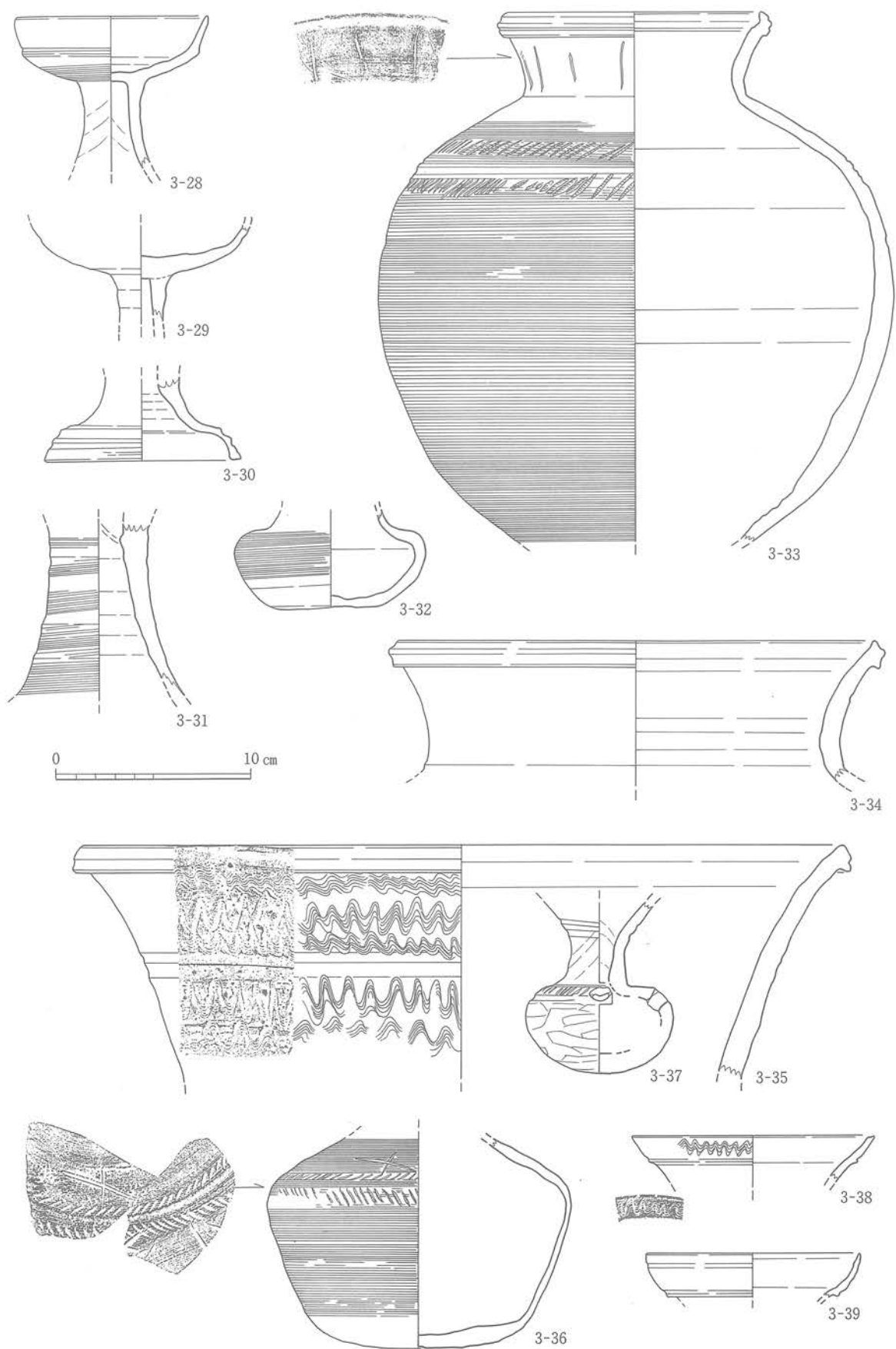
出土遺物は、盗掘されたためか殆どない。



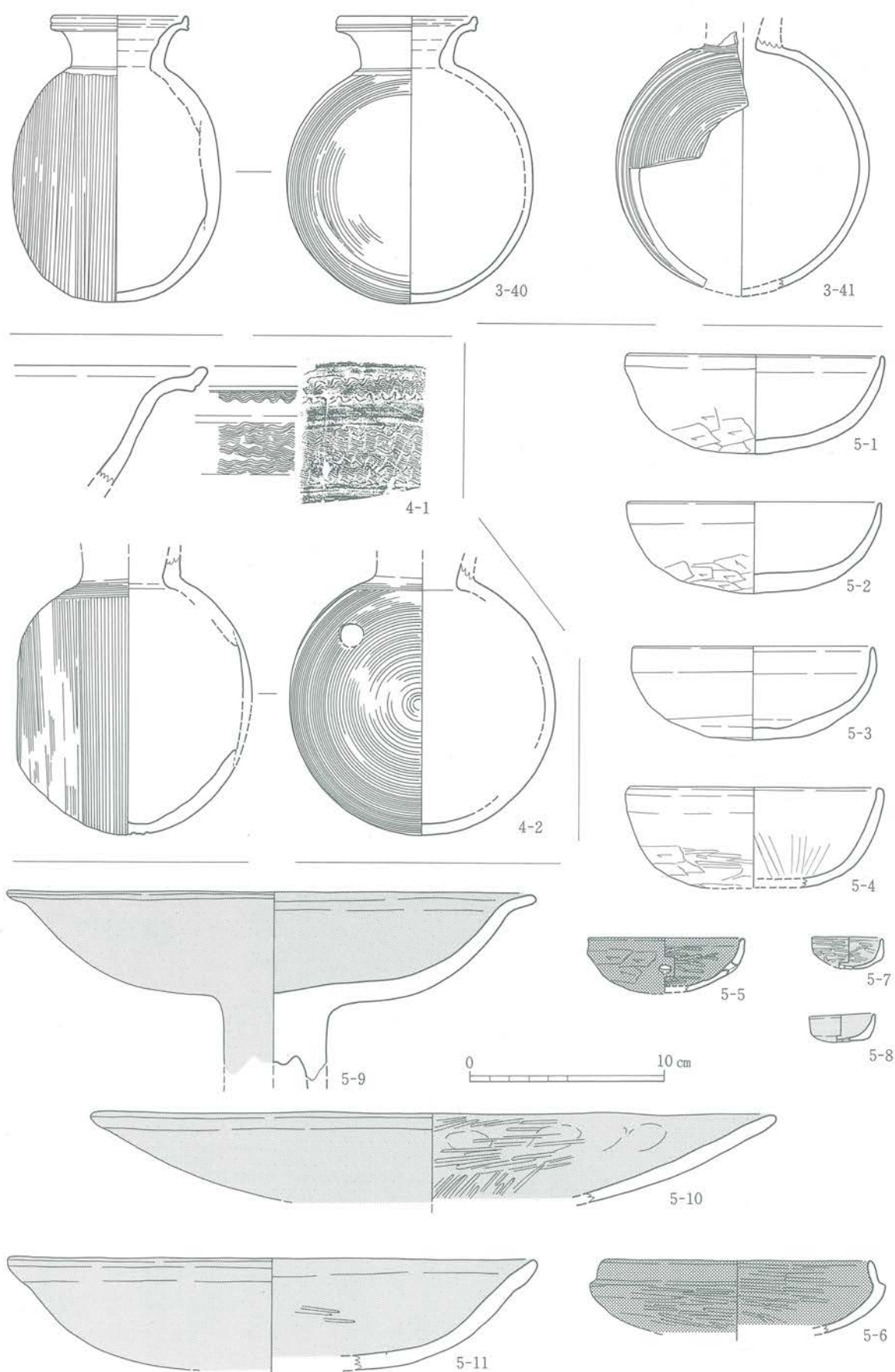
横穴墓の検出作業風景



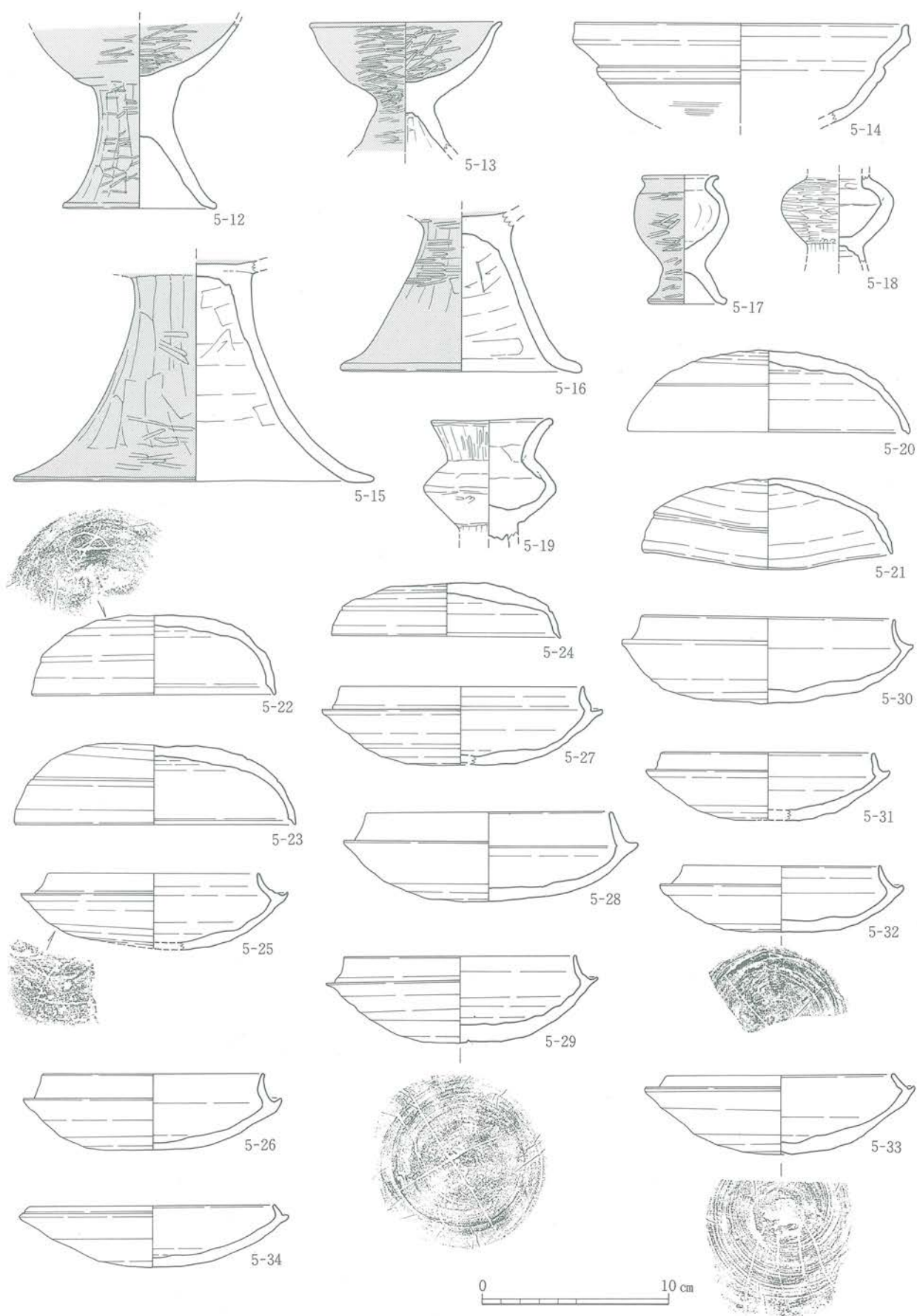
第33图 3号横穴墓出土土器实测图(1/3)



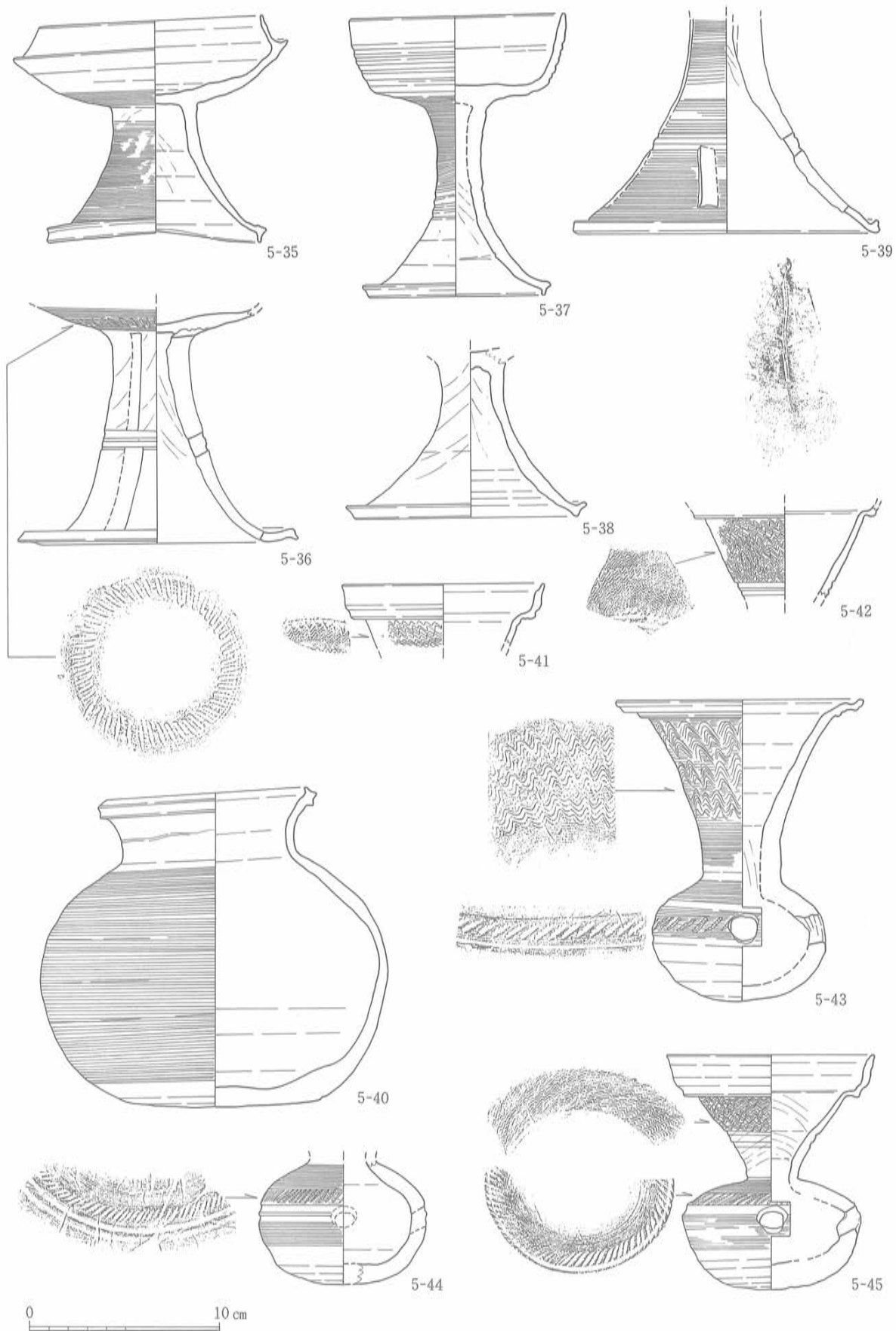
第34图 3号横穴墓出土土器实测图(1/3)



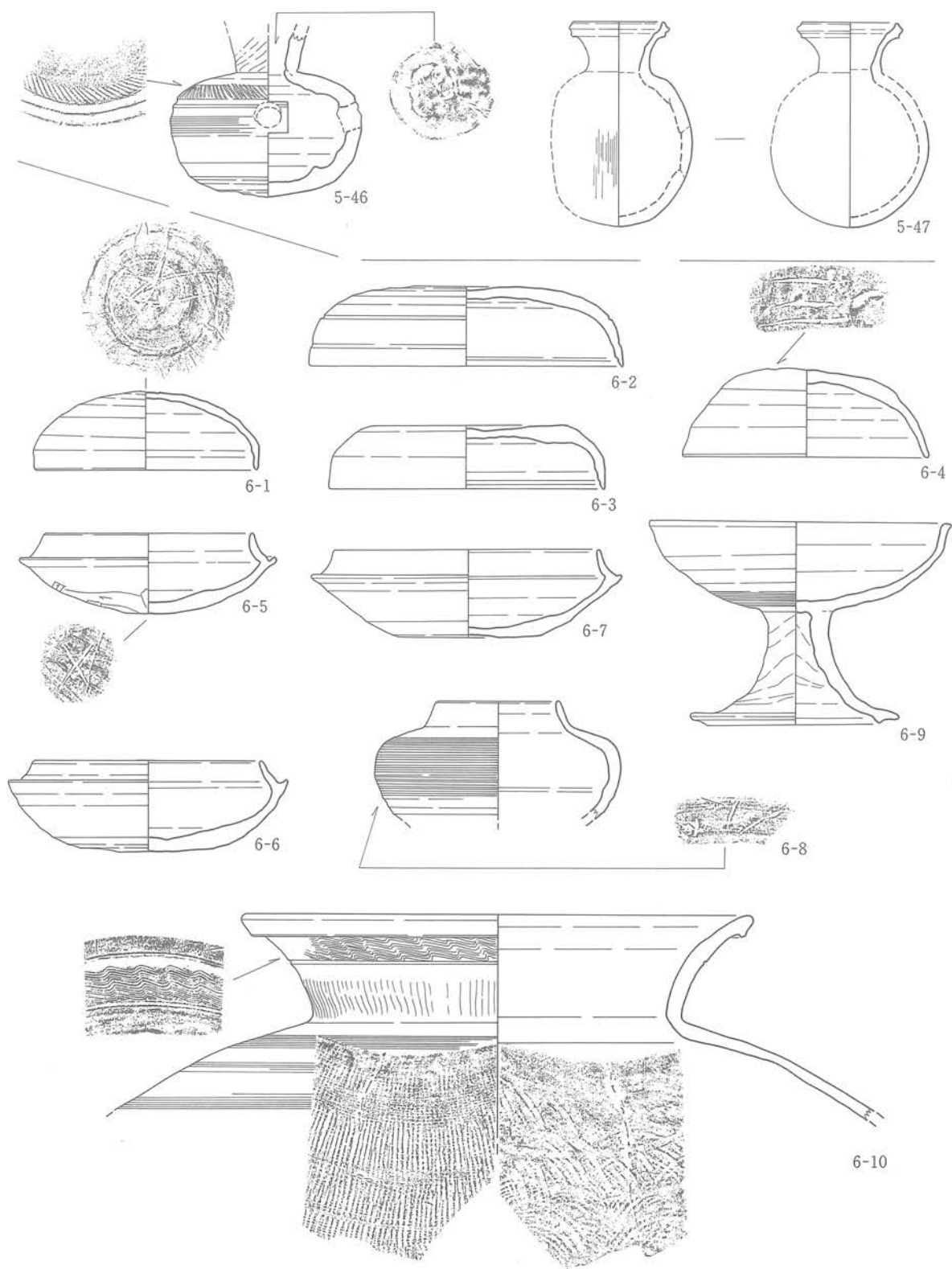
第35图 3号~5号横穴墓出土土器实测图(1/3)



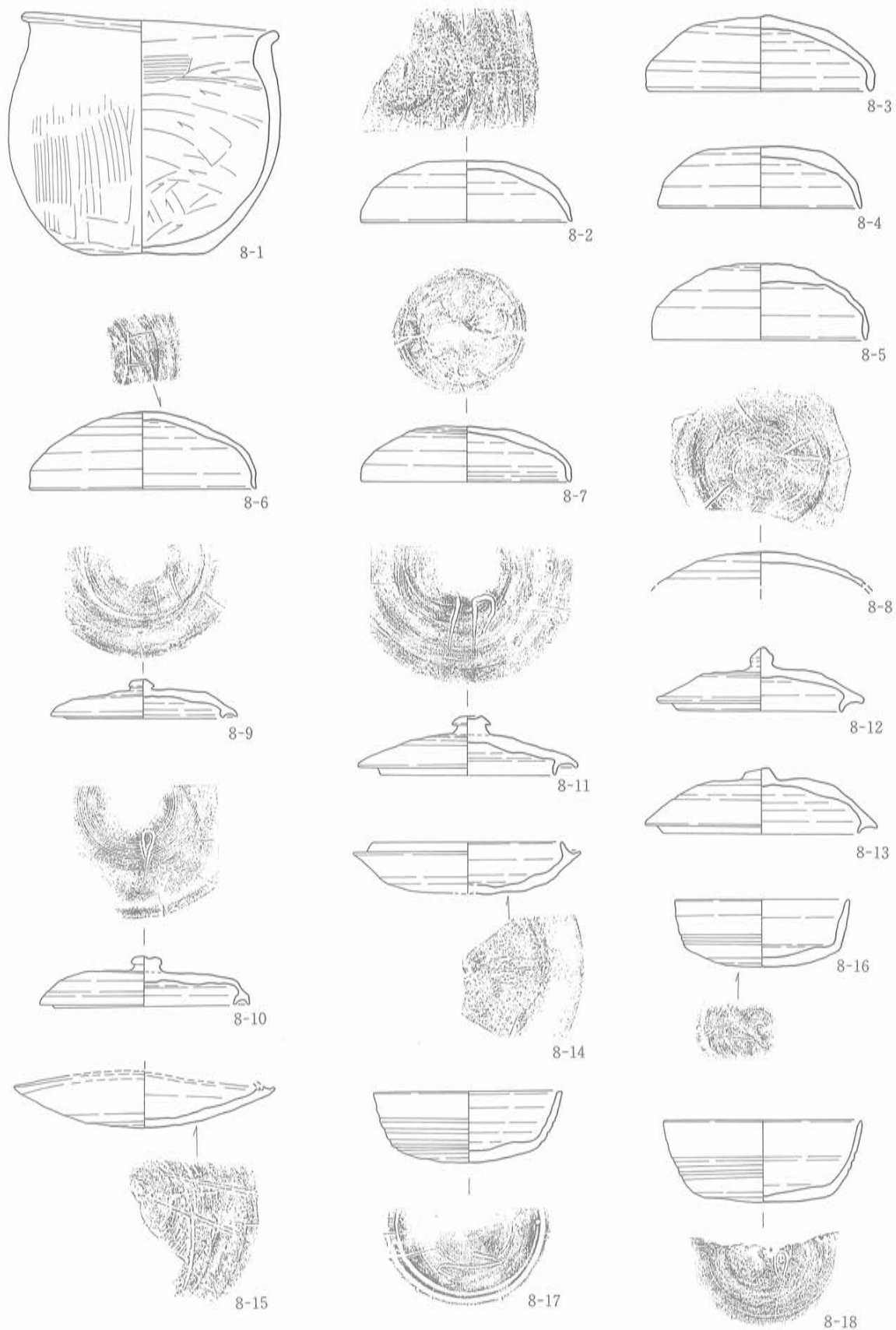
第36图 5号横穴墓出土土器实测图(1/3)



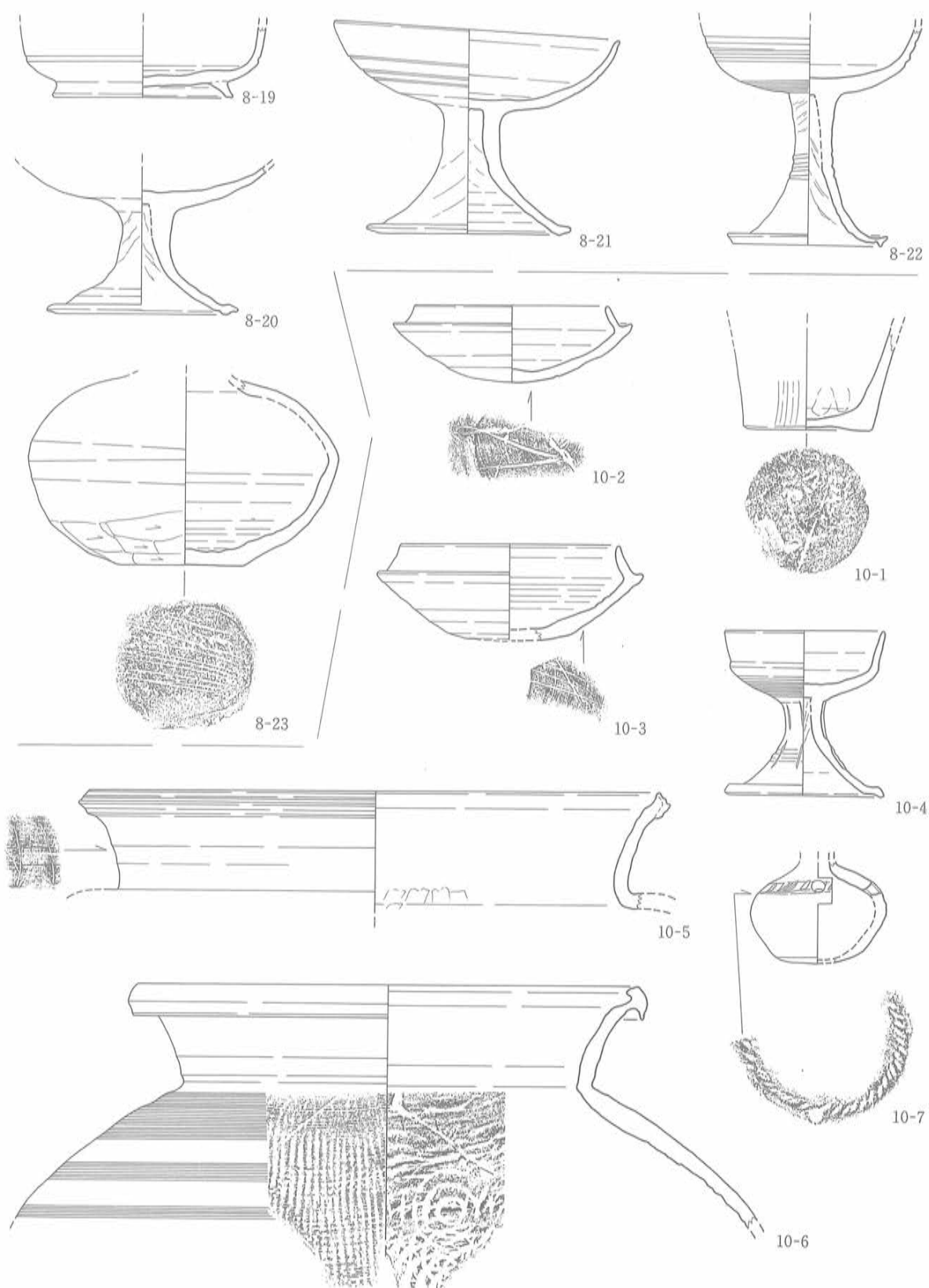
第37图 5号横穴墓出土土器实测图(1/3)



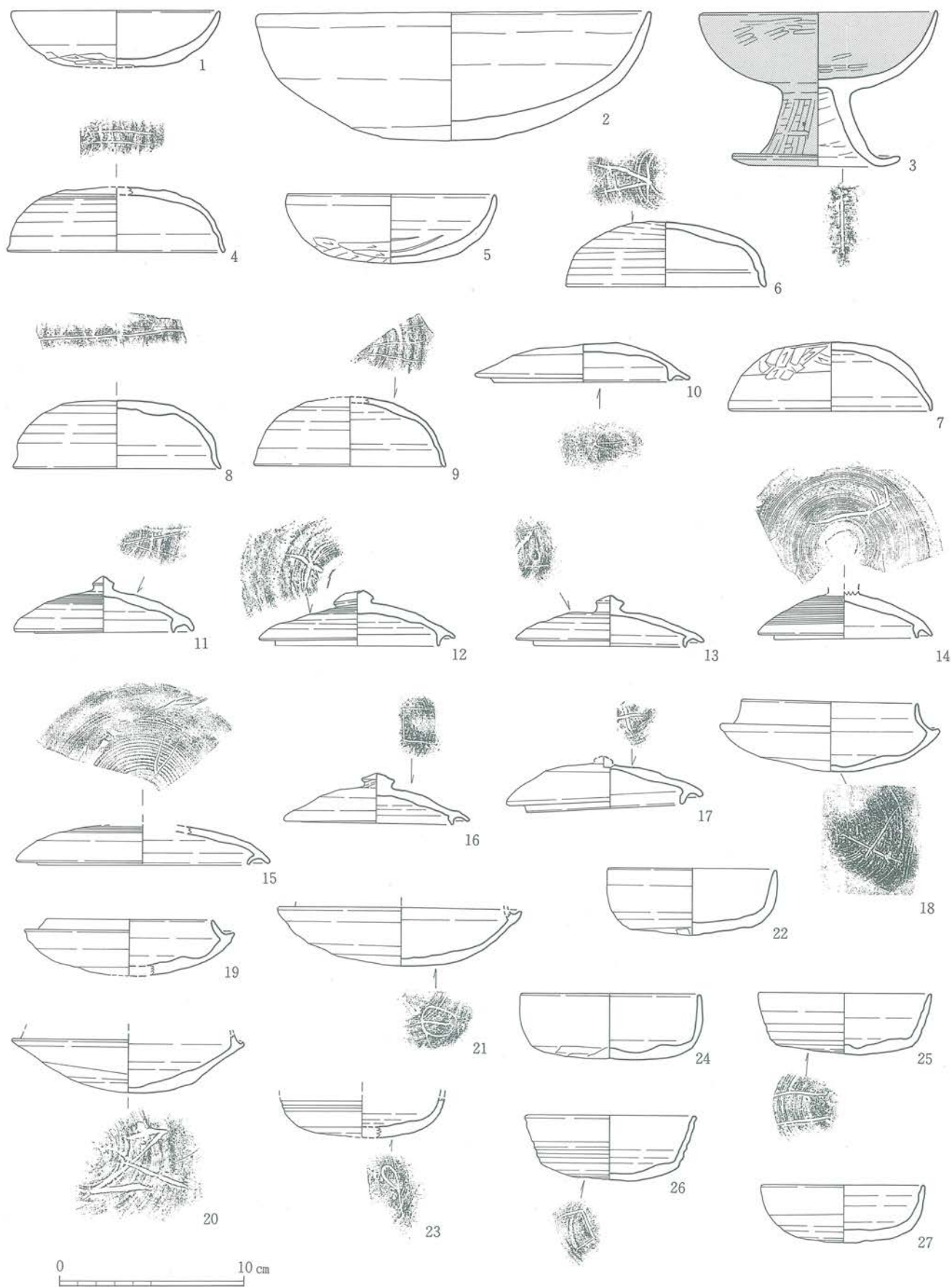
第38图 5号・6号横穴墓出土土器実測図(1/3)



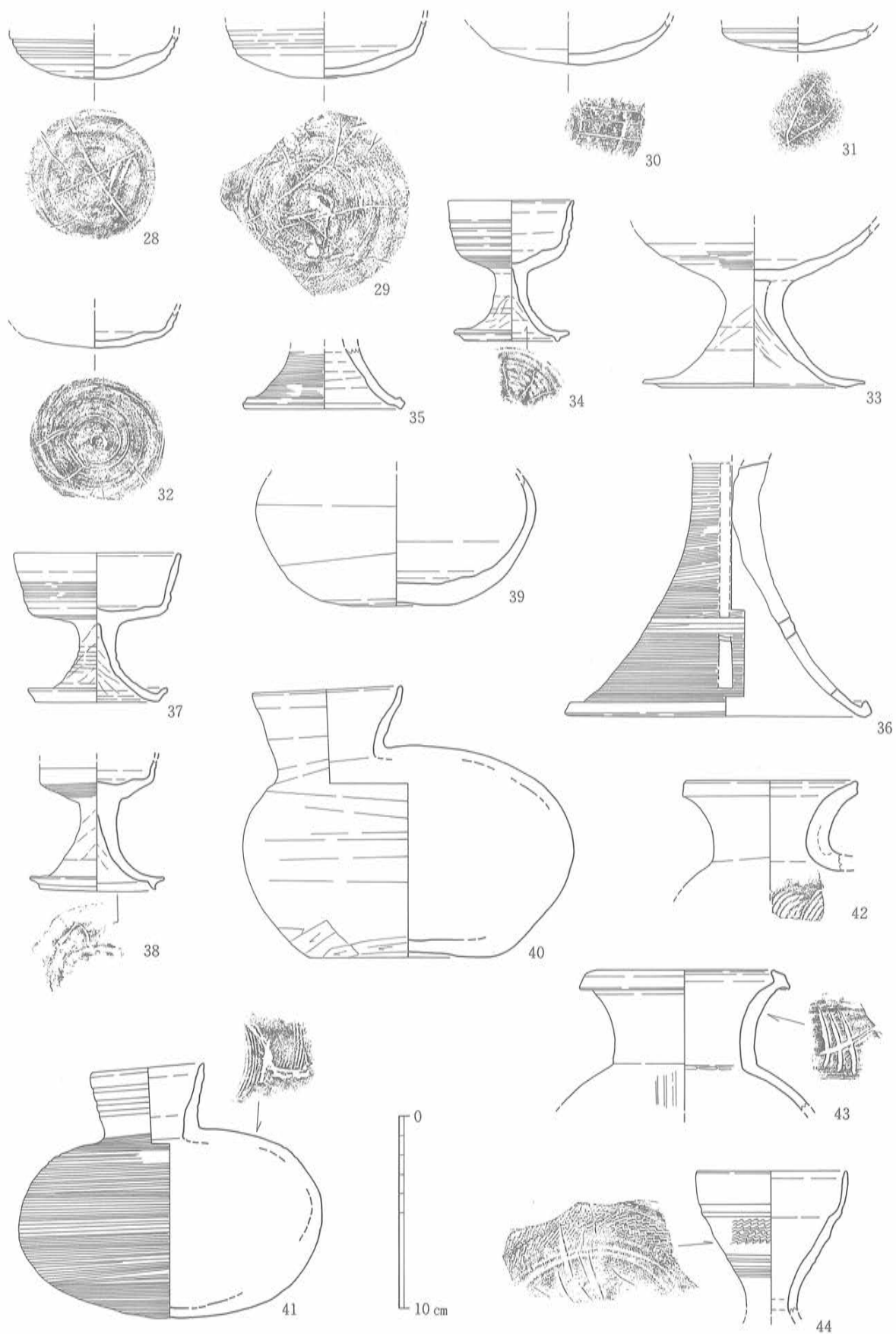
第39図 8号横穴墓出土土器実測図(1/3)



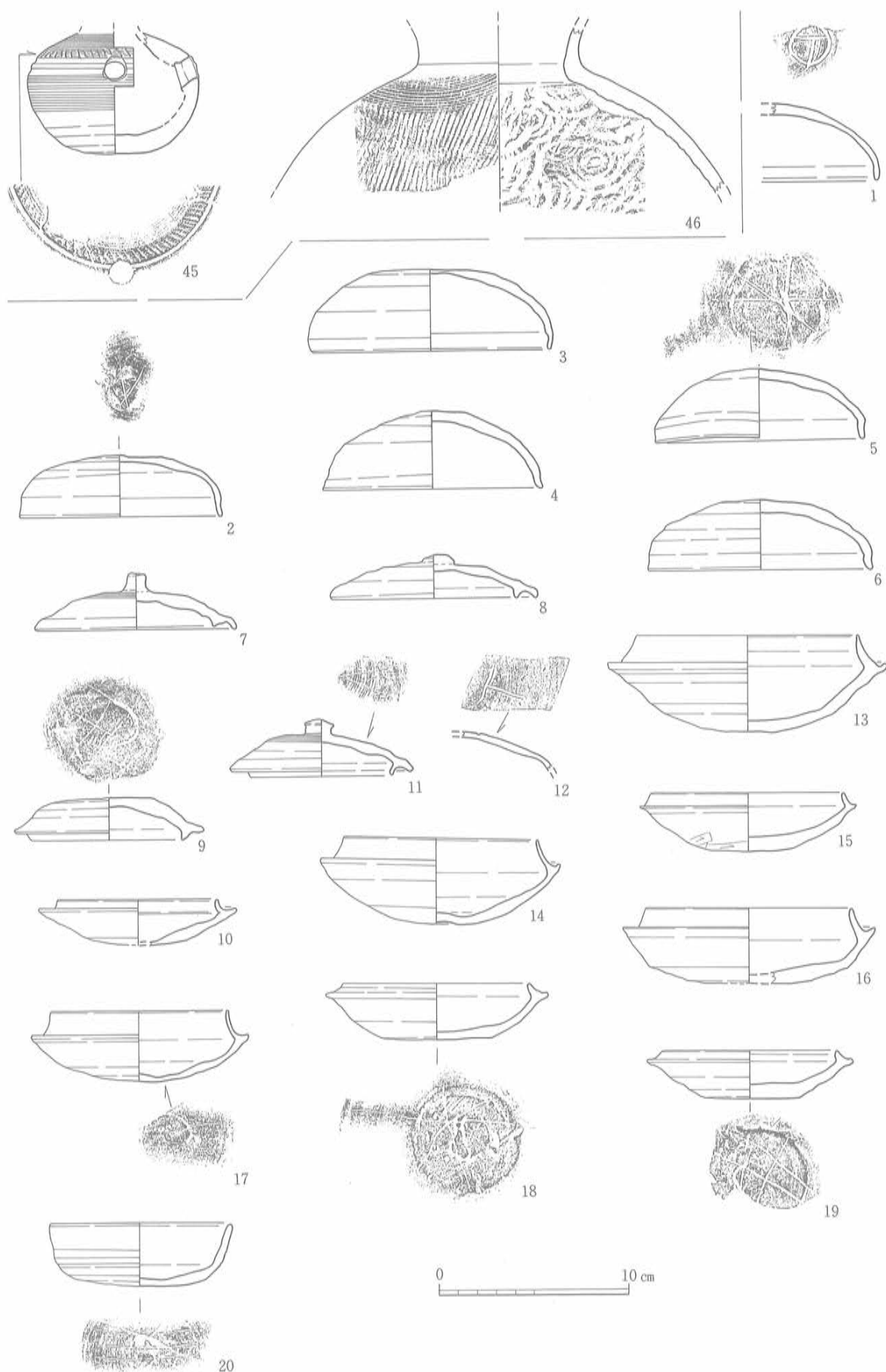
第40图 8号・10号横穴墓出土土器实测图(1/3)



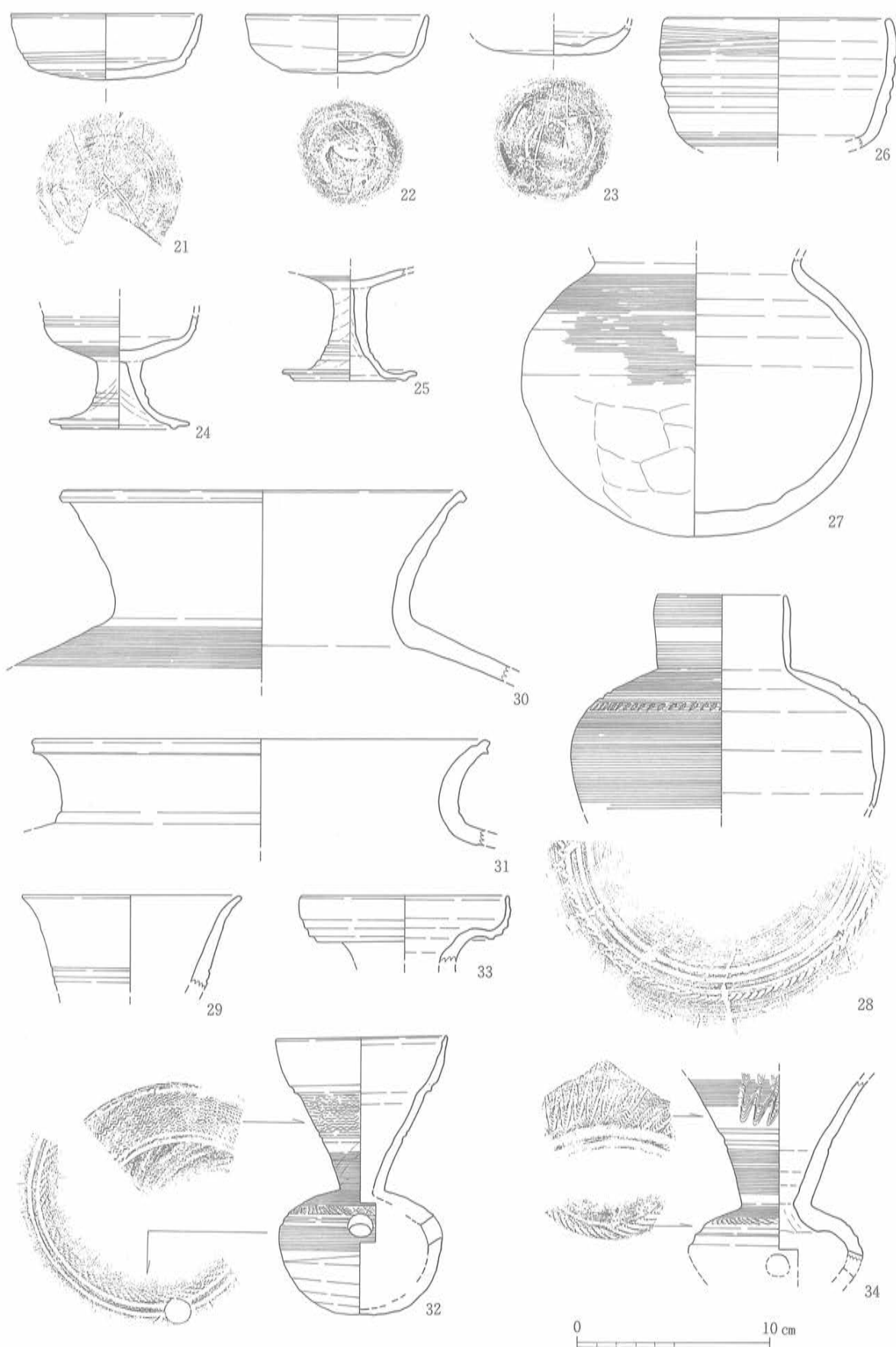
第41图 8号·10号·11号横穴墓出土土器实测图(1/3)



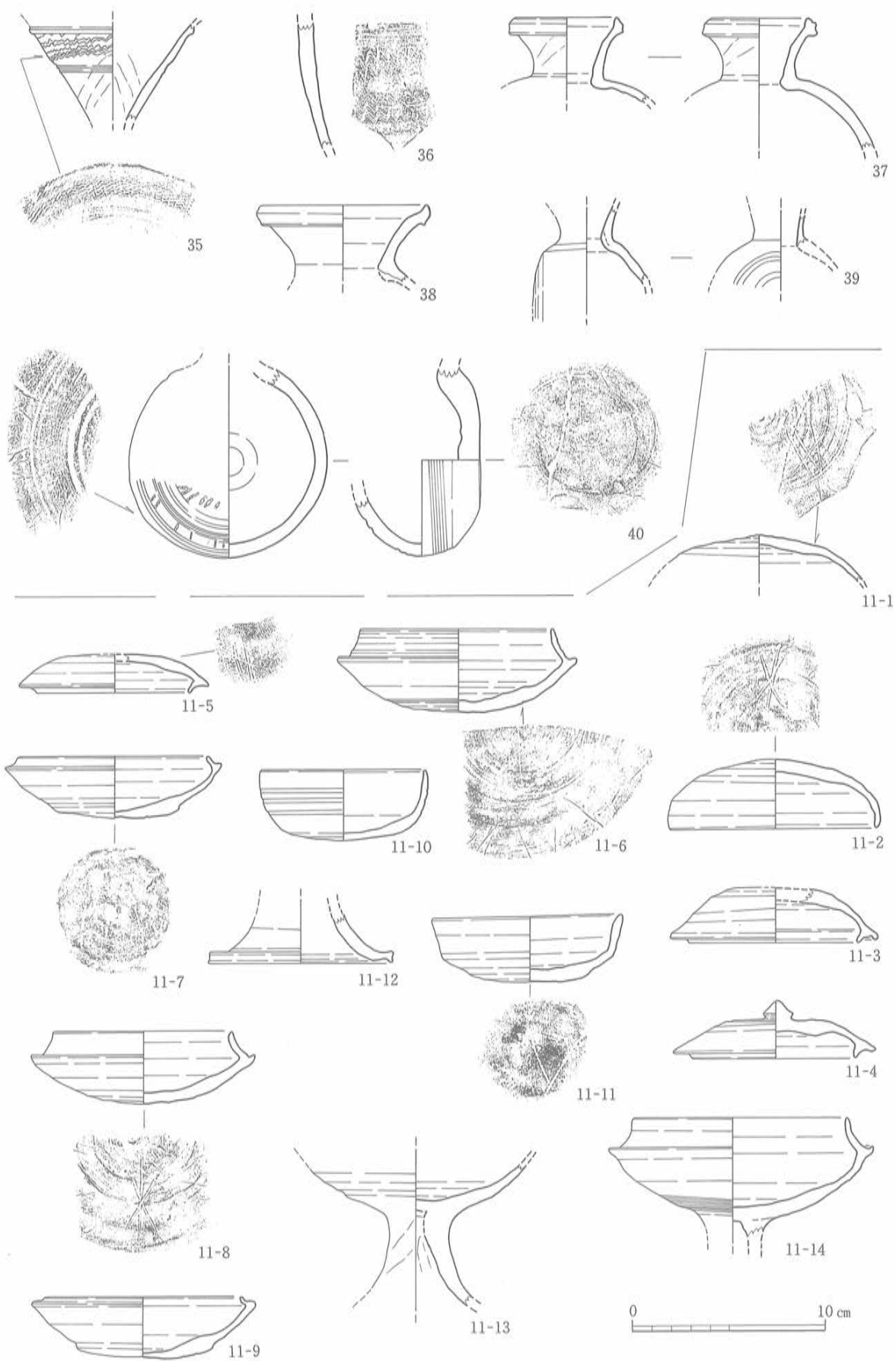
第42図 8号・10号・11号横穴墓出土土器実測図(1/3)



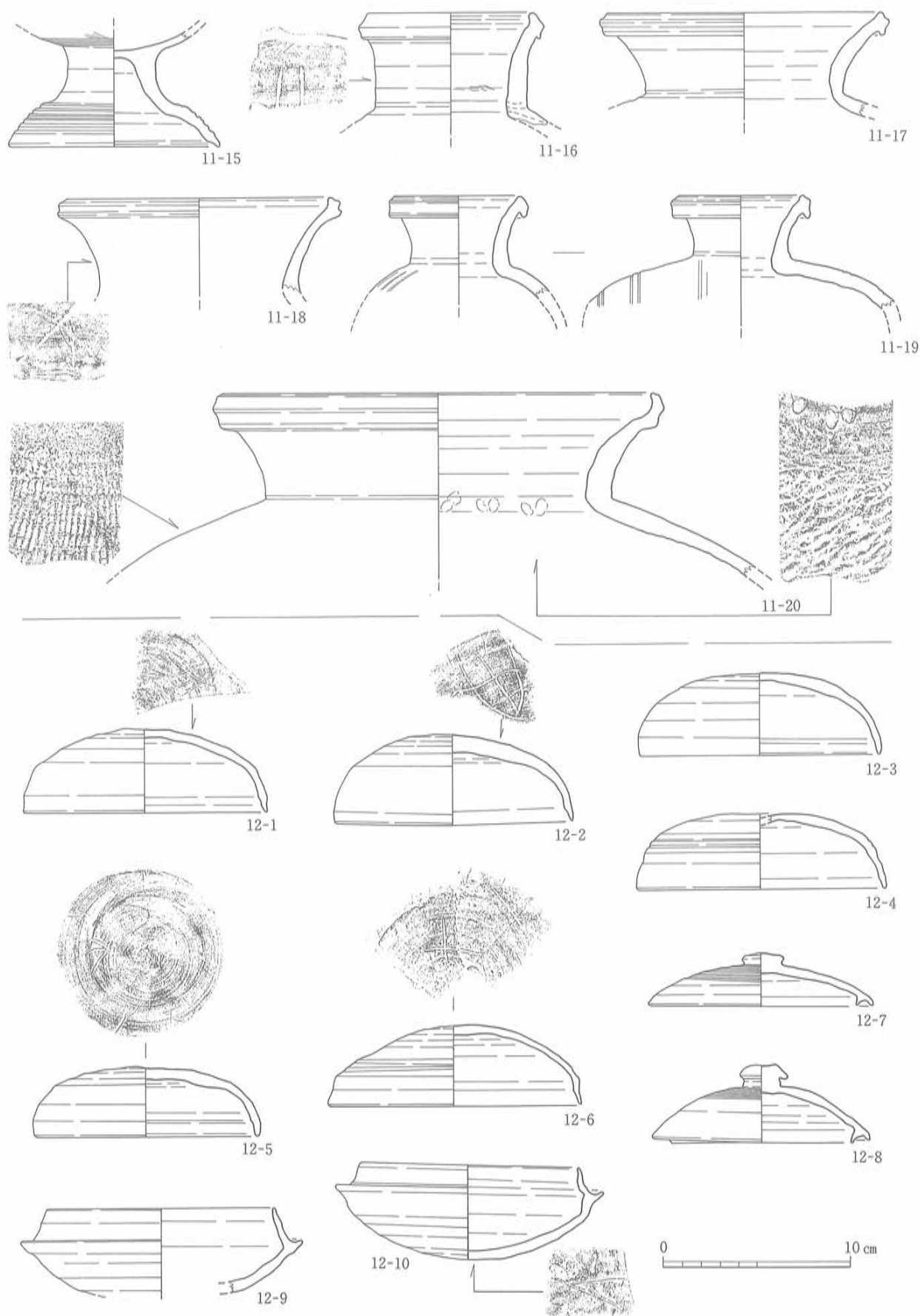
第43图 8号・10号・11号横穴墓出土土器实测图(1/3)



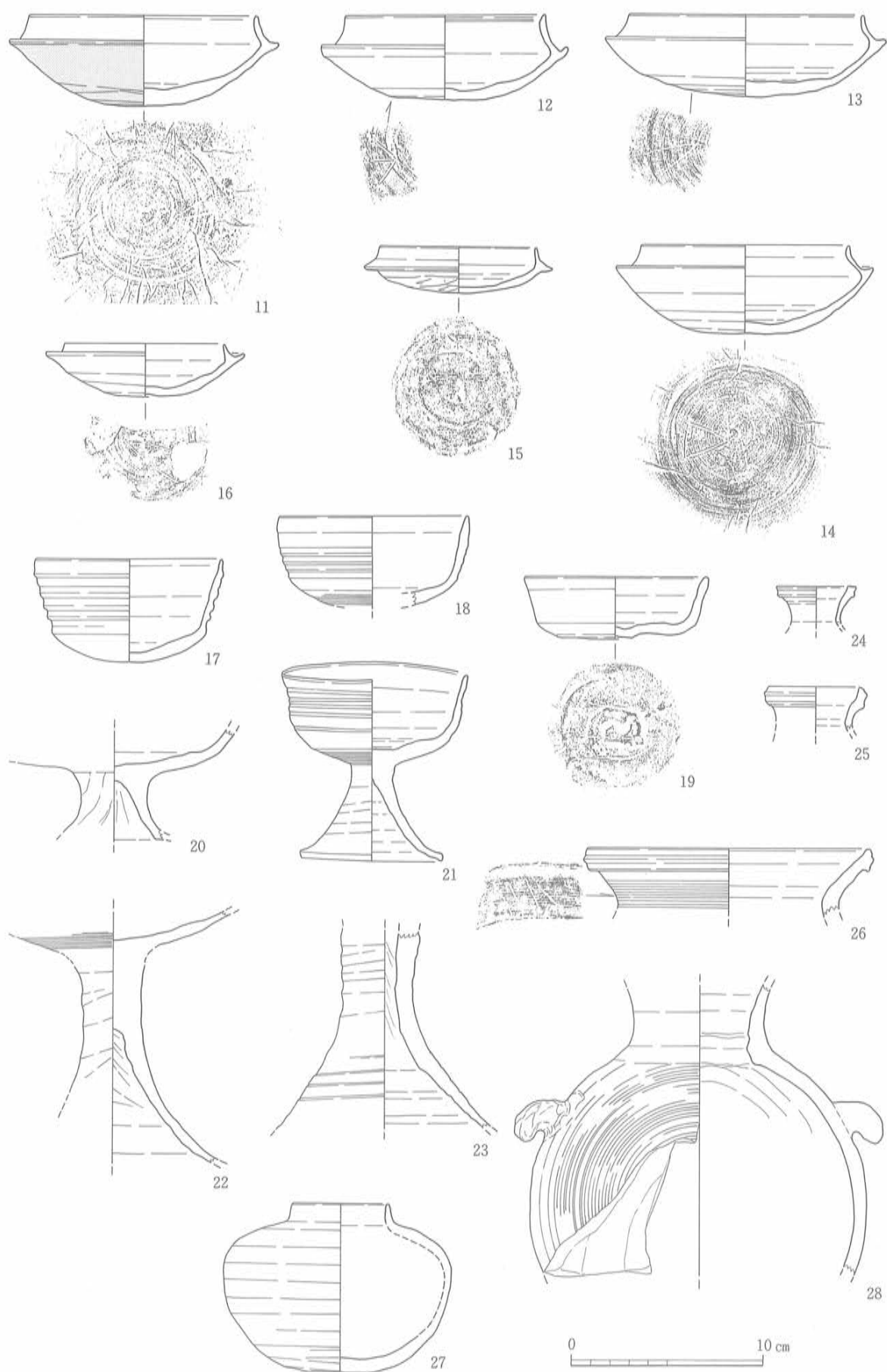
第44图 10号・11号横穴墓出土土器实测图(1/3)



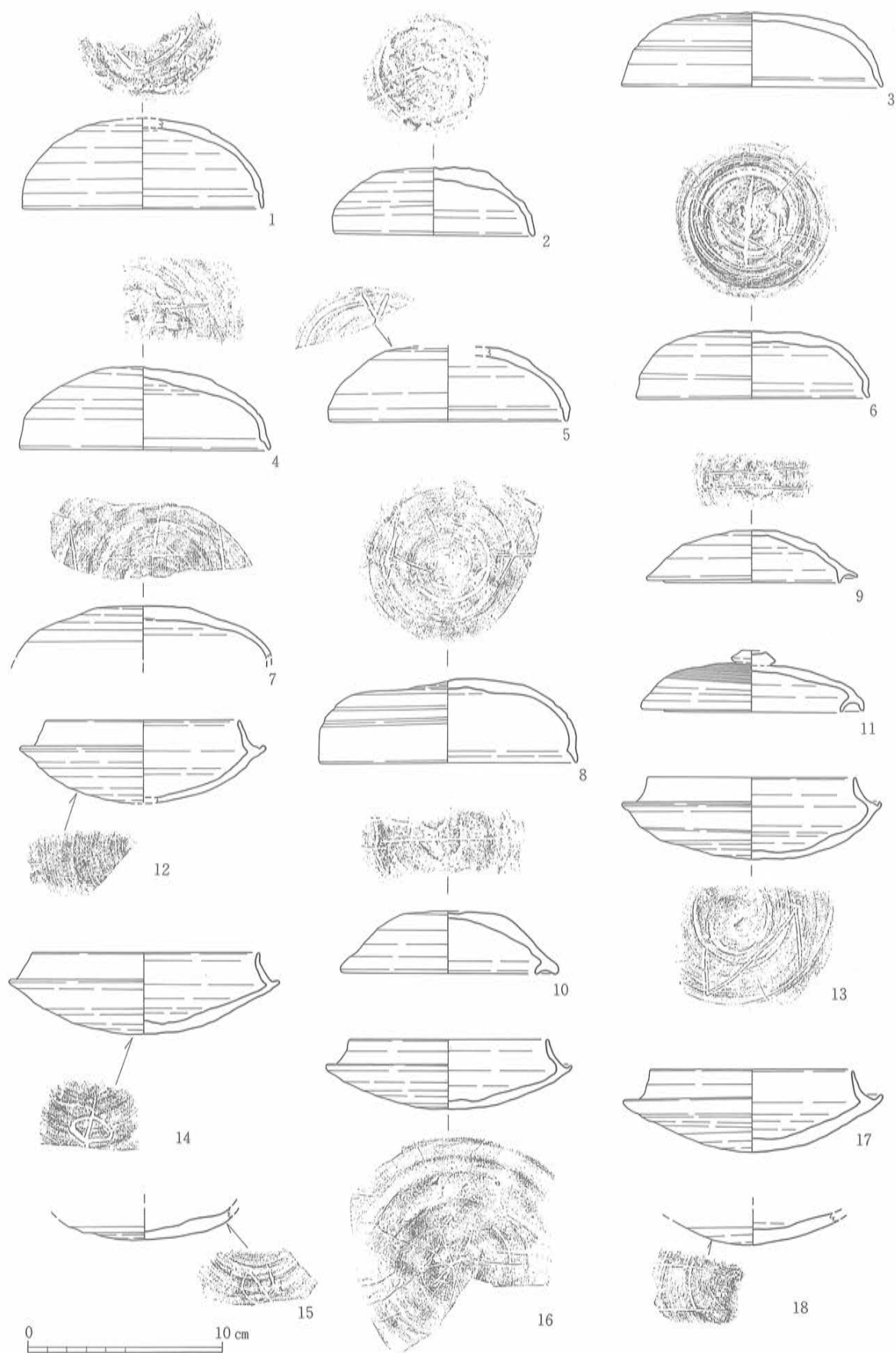
第45图 10号・11号横穴墓出土土器実測図(1/3)



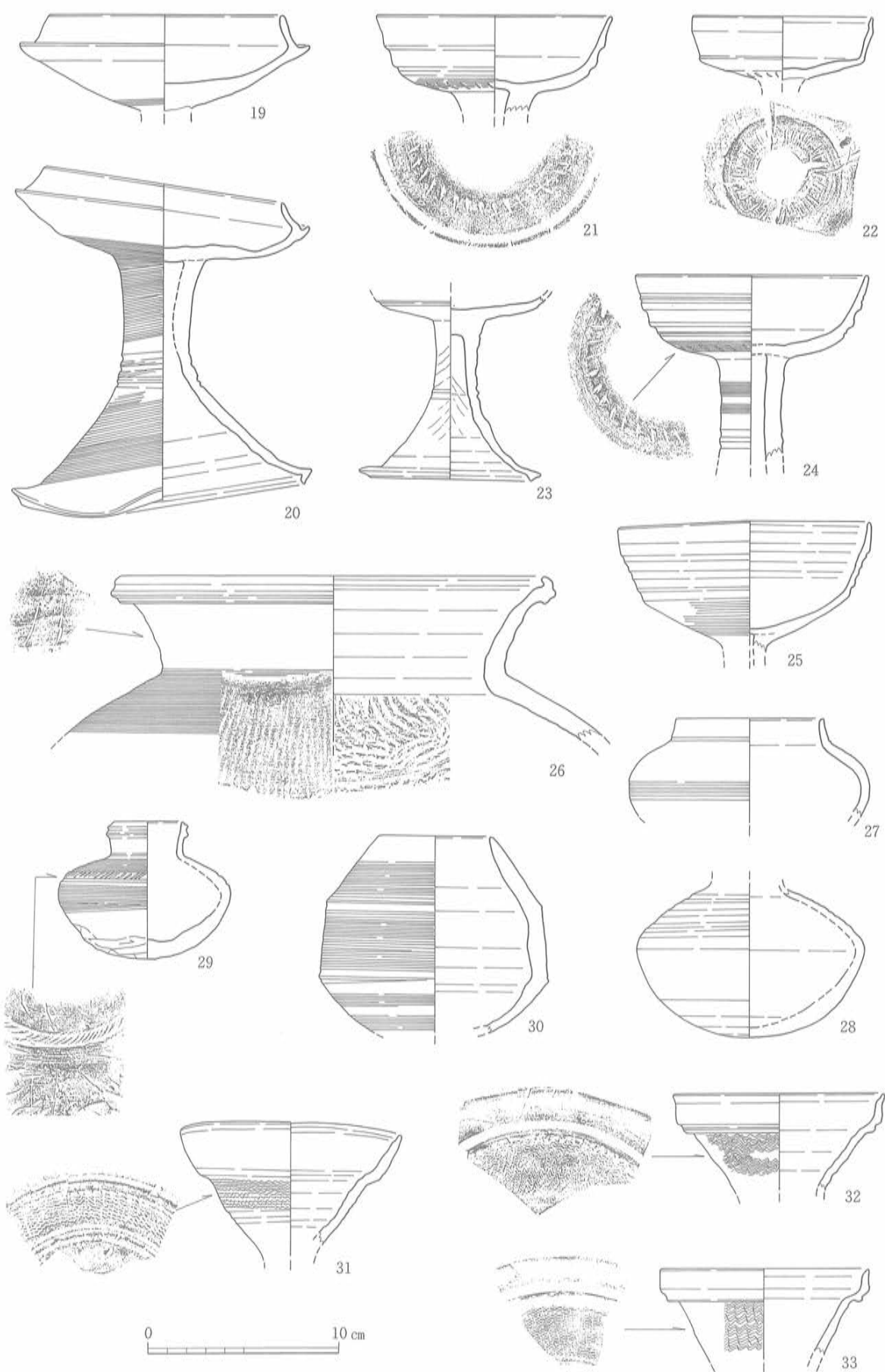
第46图 11号・12号横穴墓出土土器実測図(1/3)



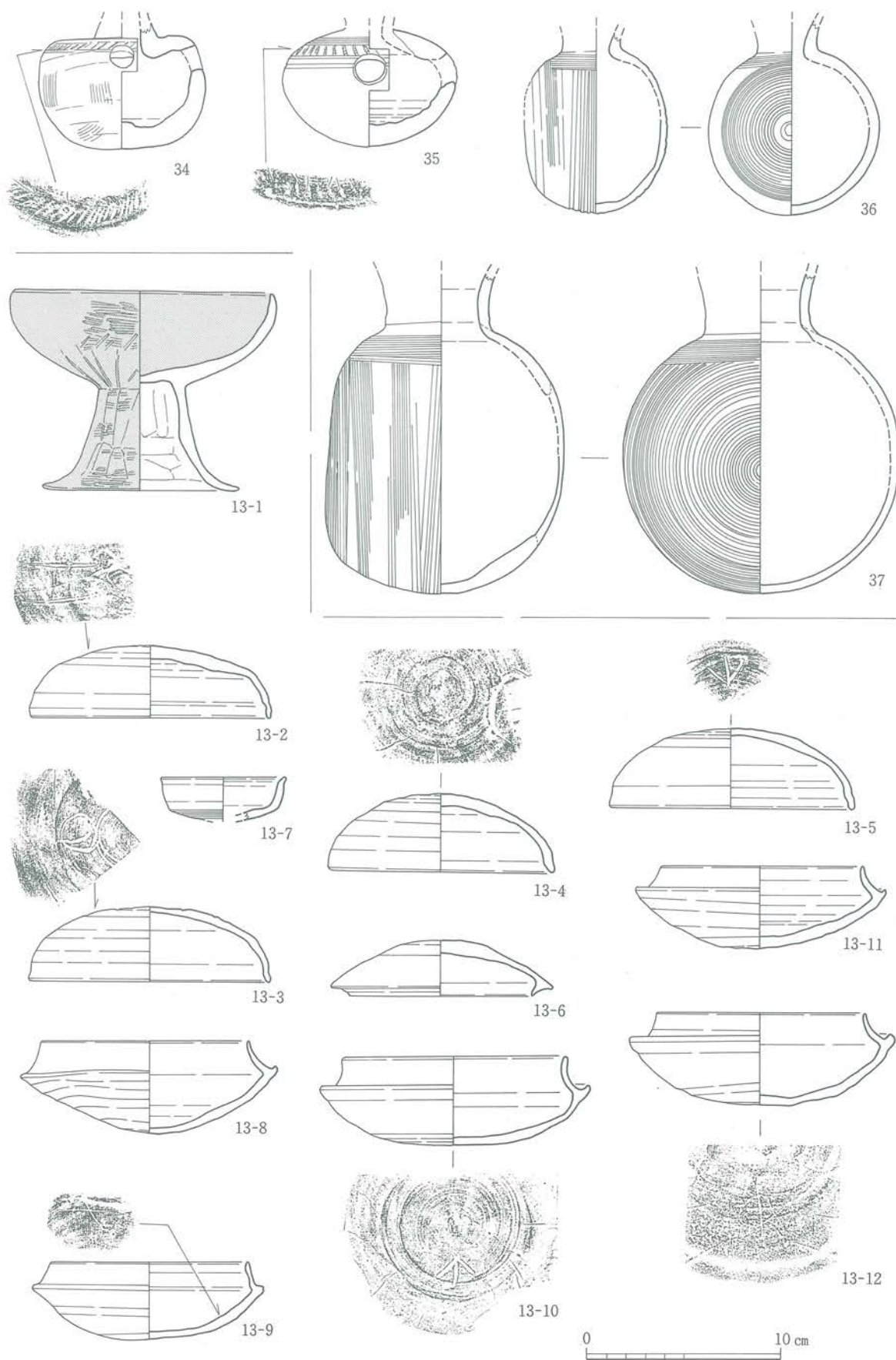
第47图 12号横穴墓出土土器实测图(1/3)



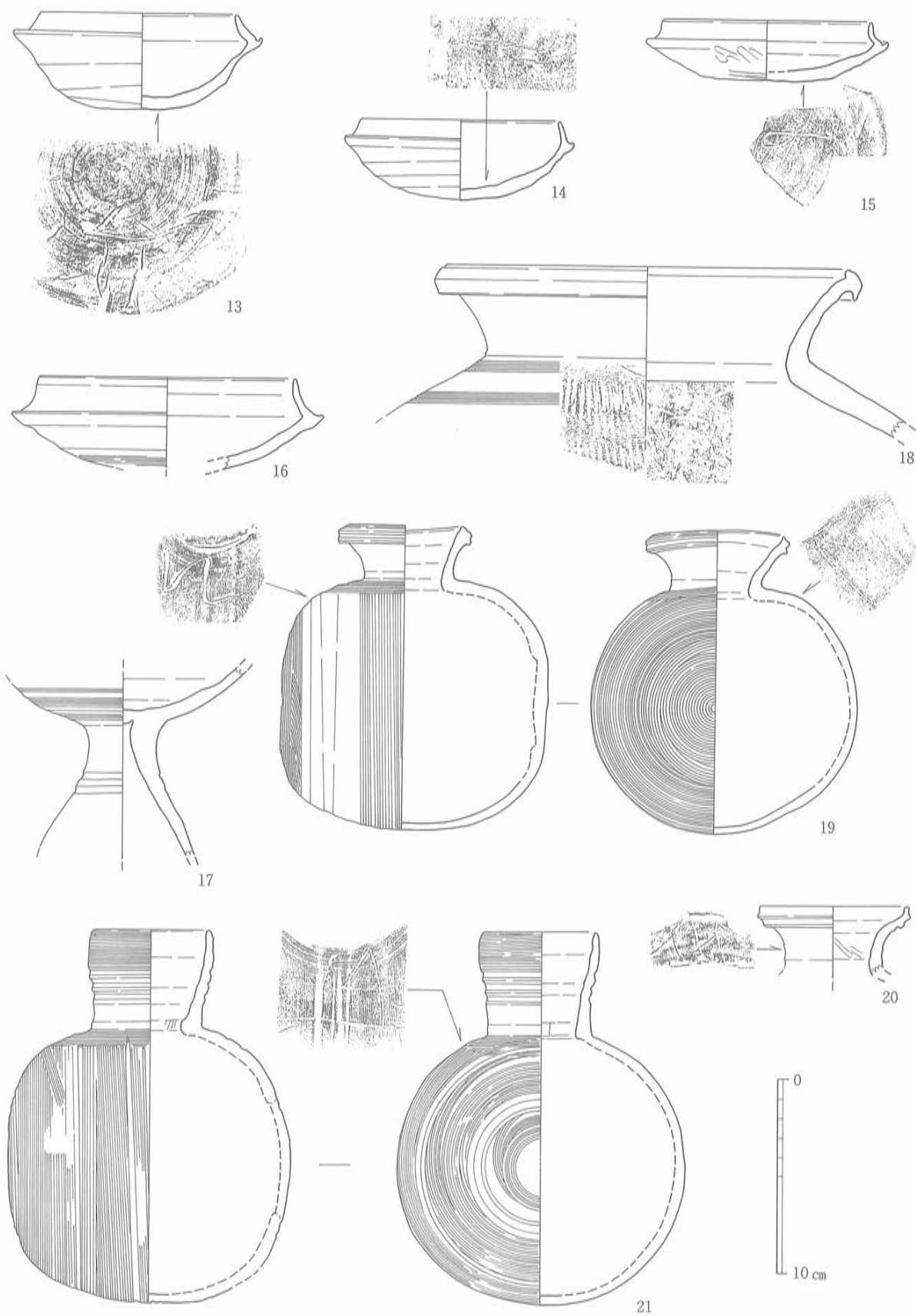
第48图 12号·13号横穴墓出土土器实测图(1/3)



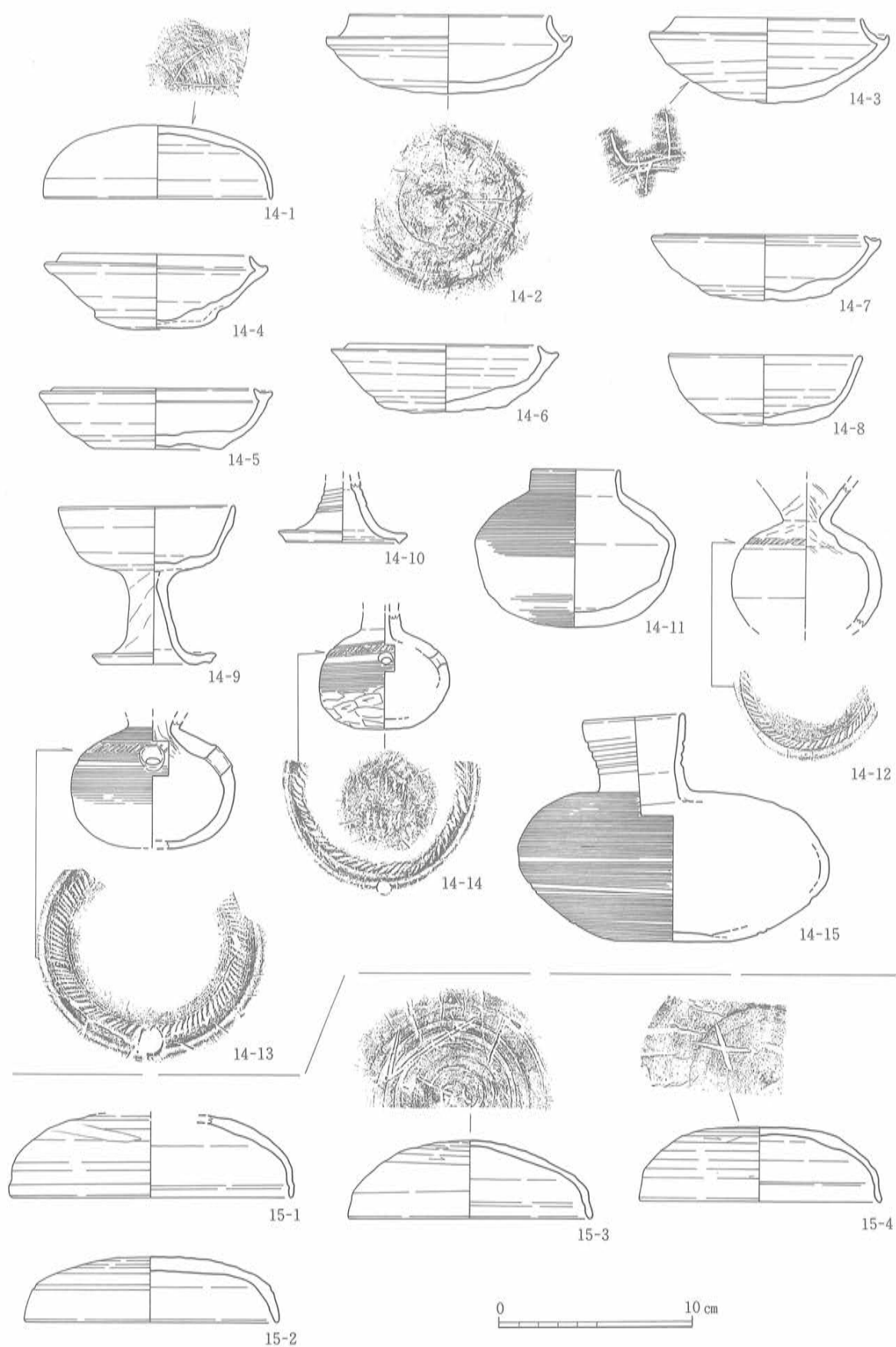
第49図 12号・13号横穴墓出土土器実測図(1/3)



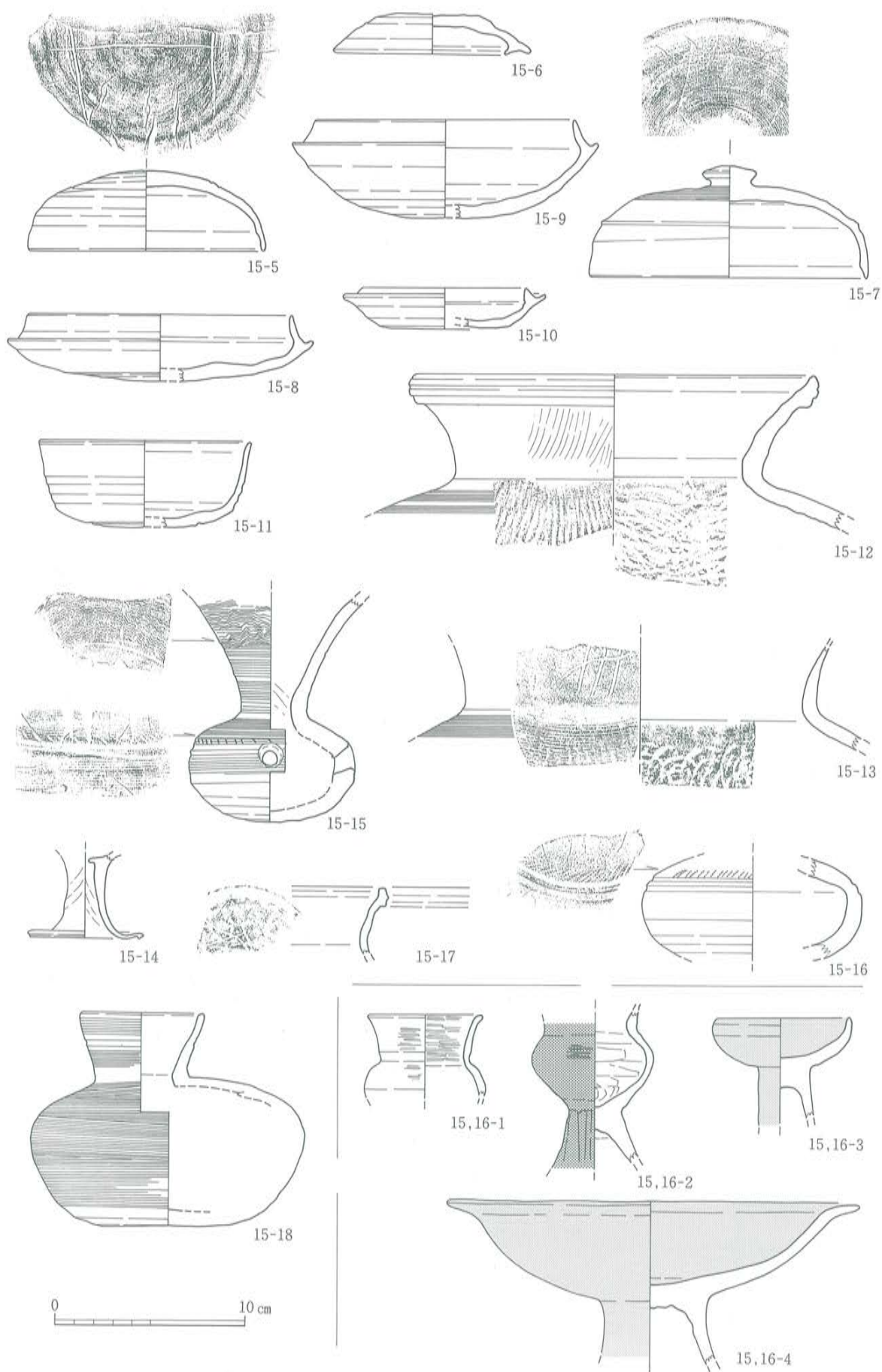
第50图 12号・13号横穴墓出土土器实测图(1/3)



第51図 13号横穴墓出土土器実測図(1/3)



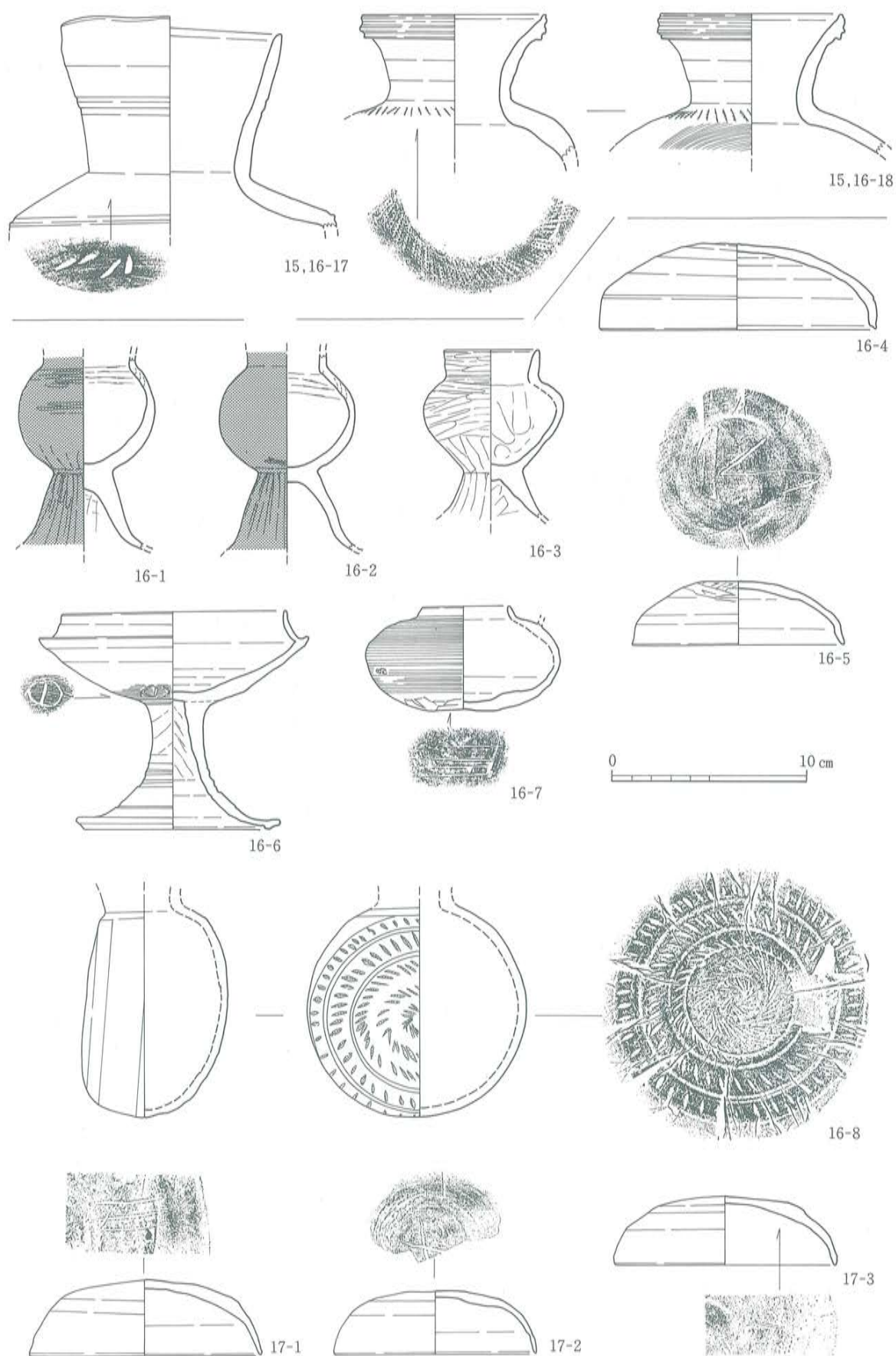
第52図 14号・15号横穴墓出土土器実測図(1/3)



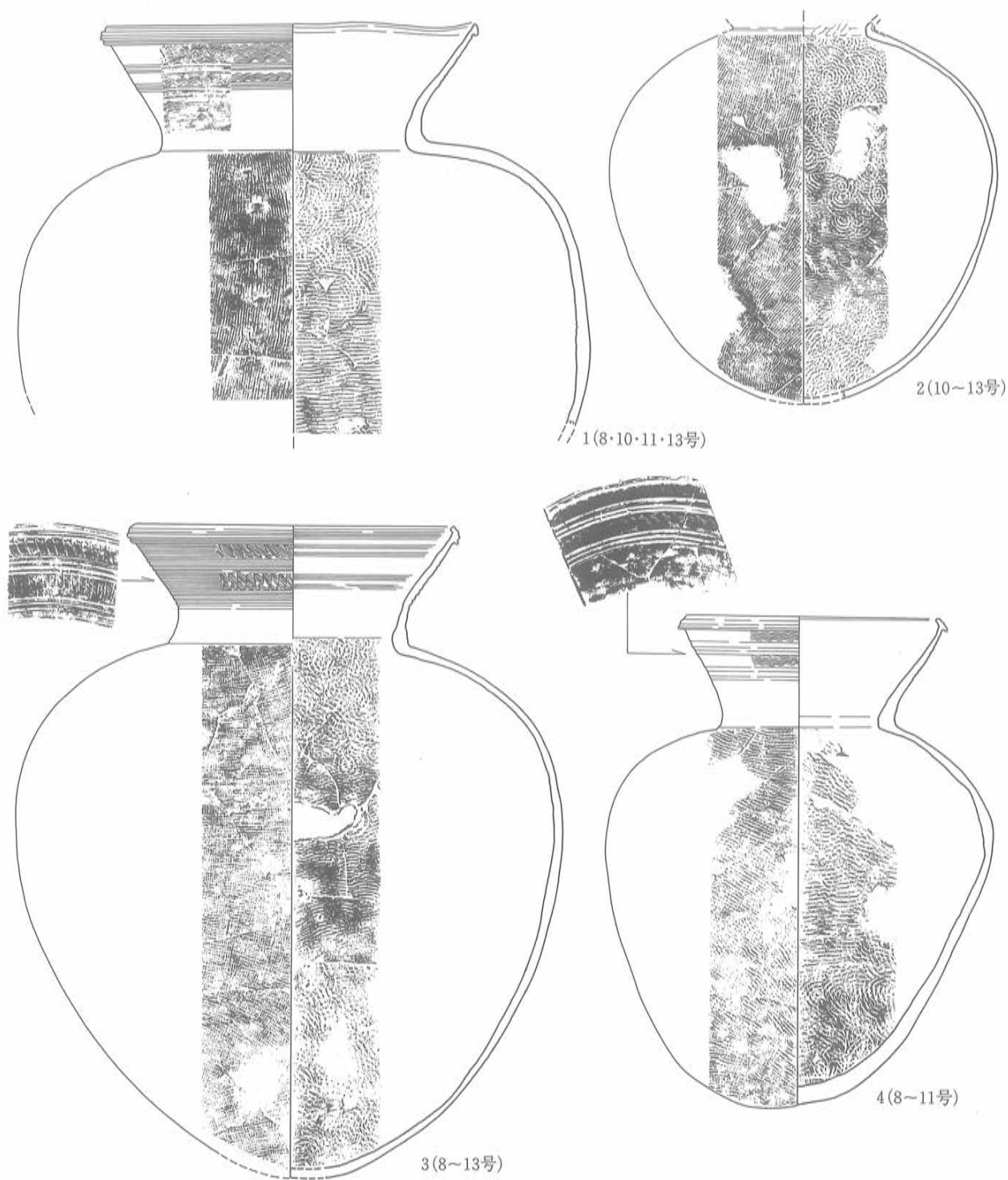
第53图 15号・16号横穴墓出土土器实测图(1/3)



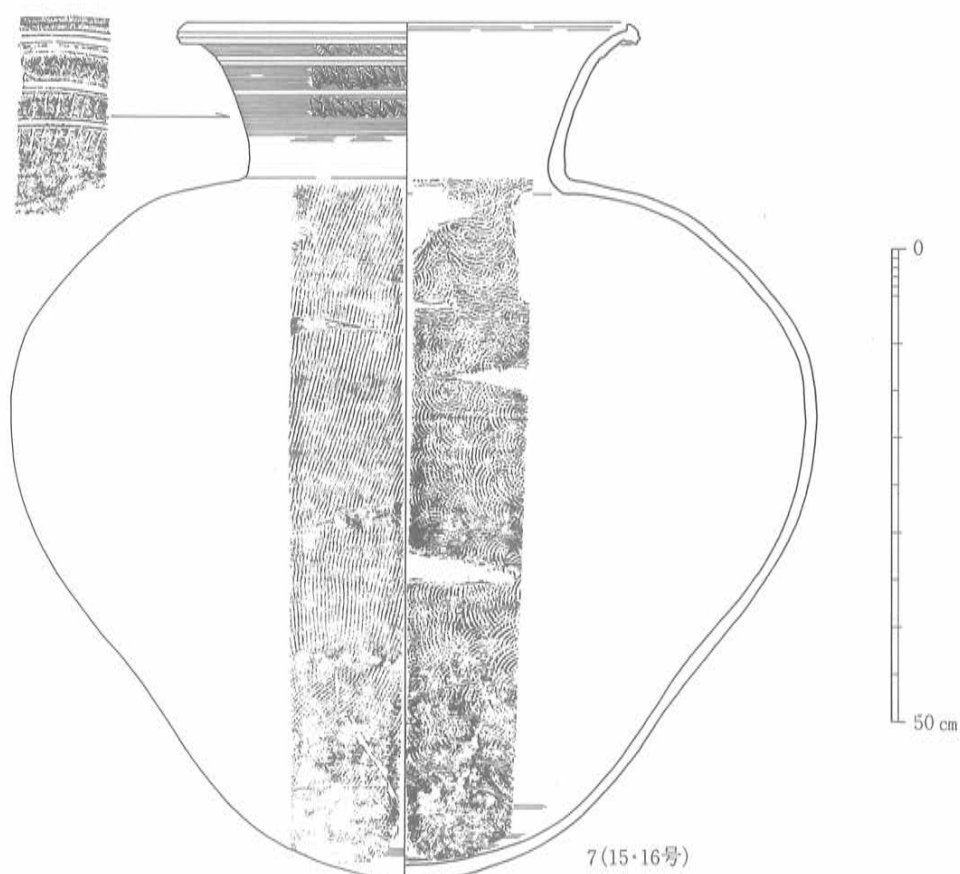
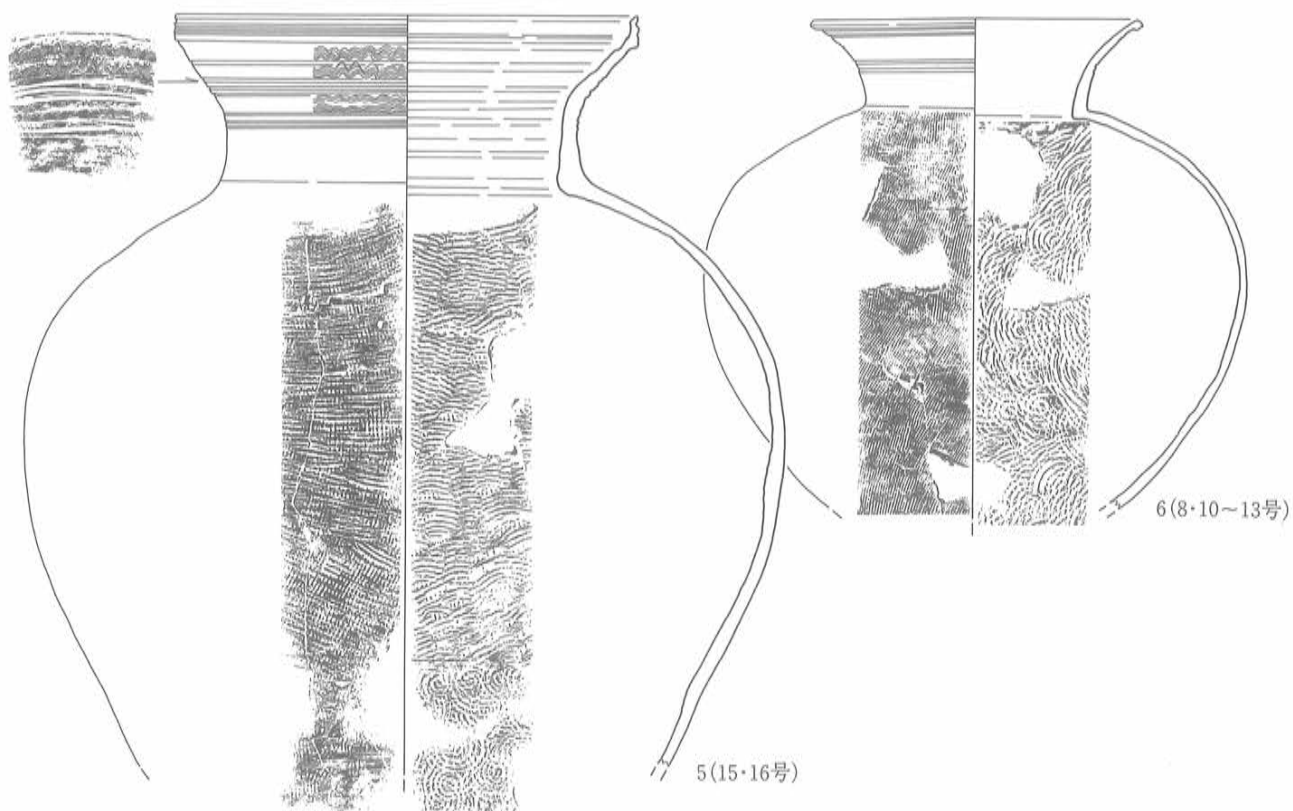
第54図 15号・16号横穴墓出土土器実測図(1/3)



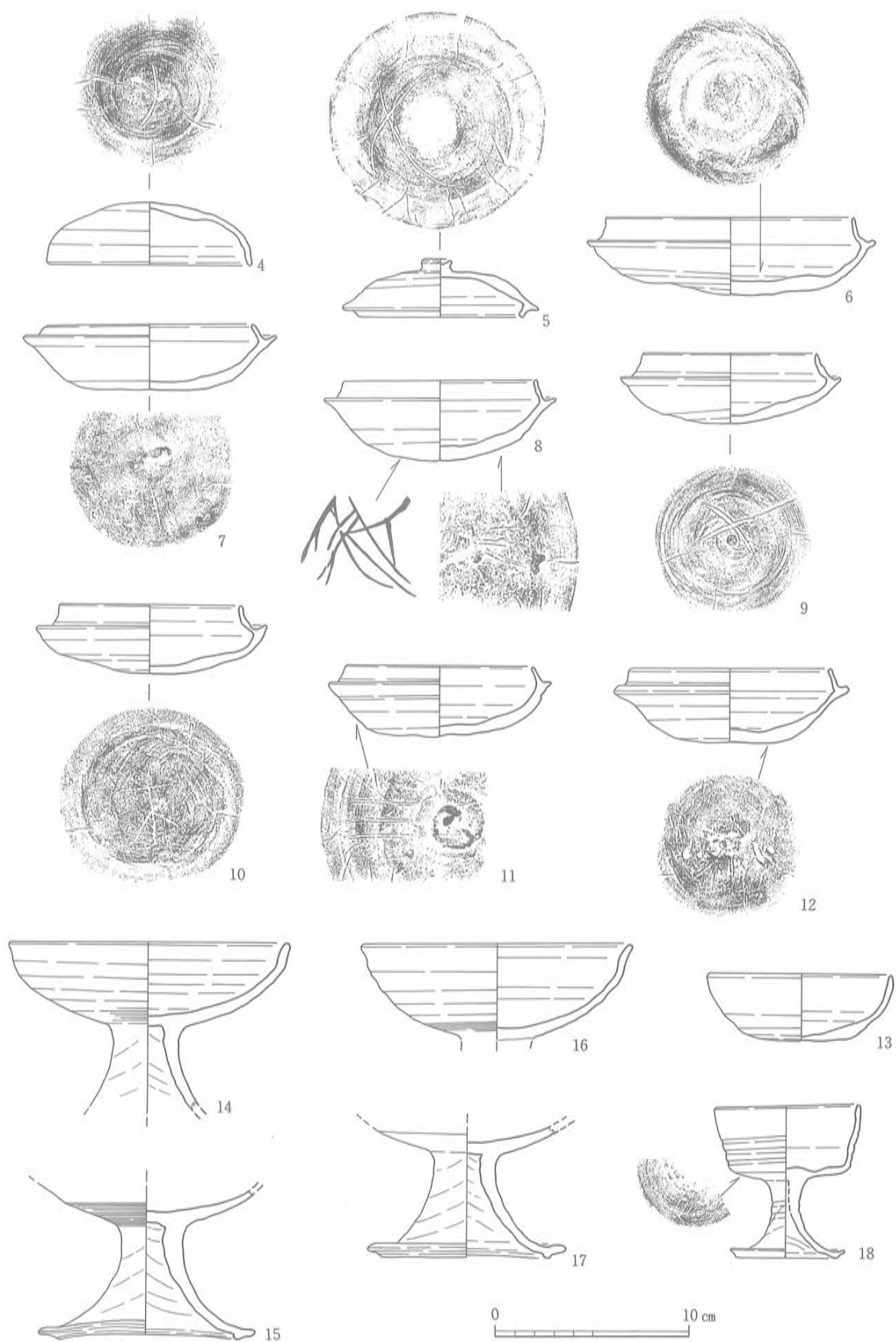
第55图 15号~17号横穴墓出土土器实测图(1/3)



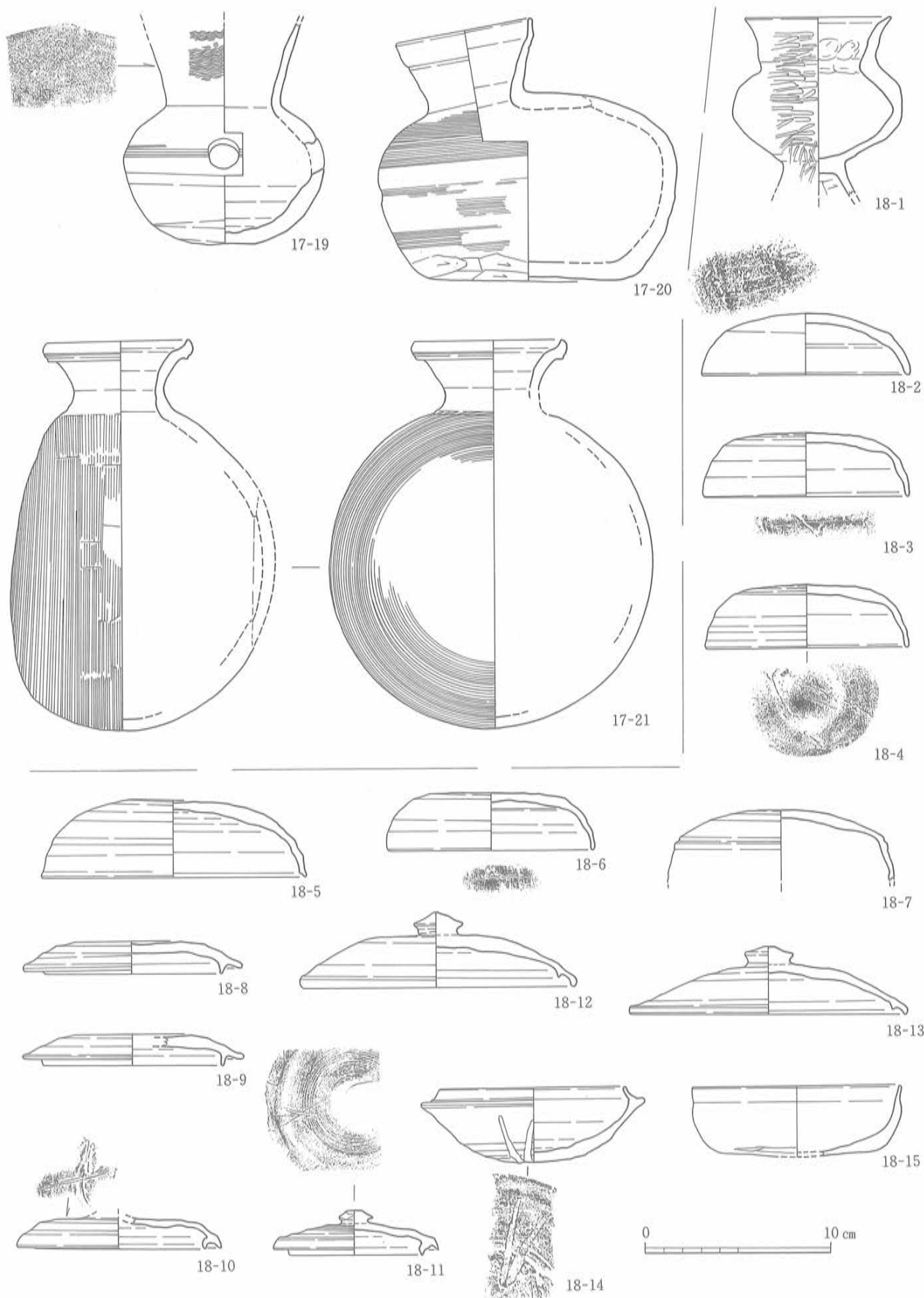
第56図 8号~13号横穴墓出土土器実測図(1/8)



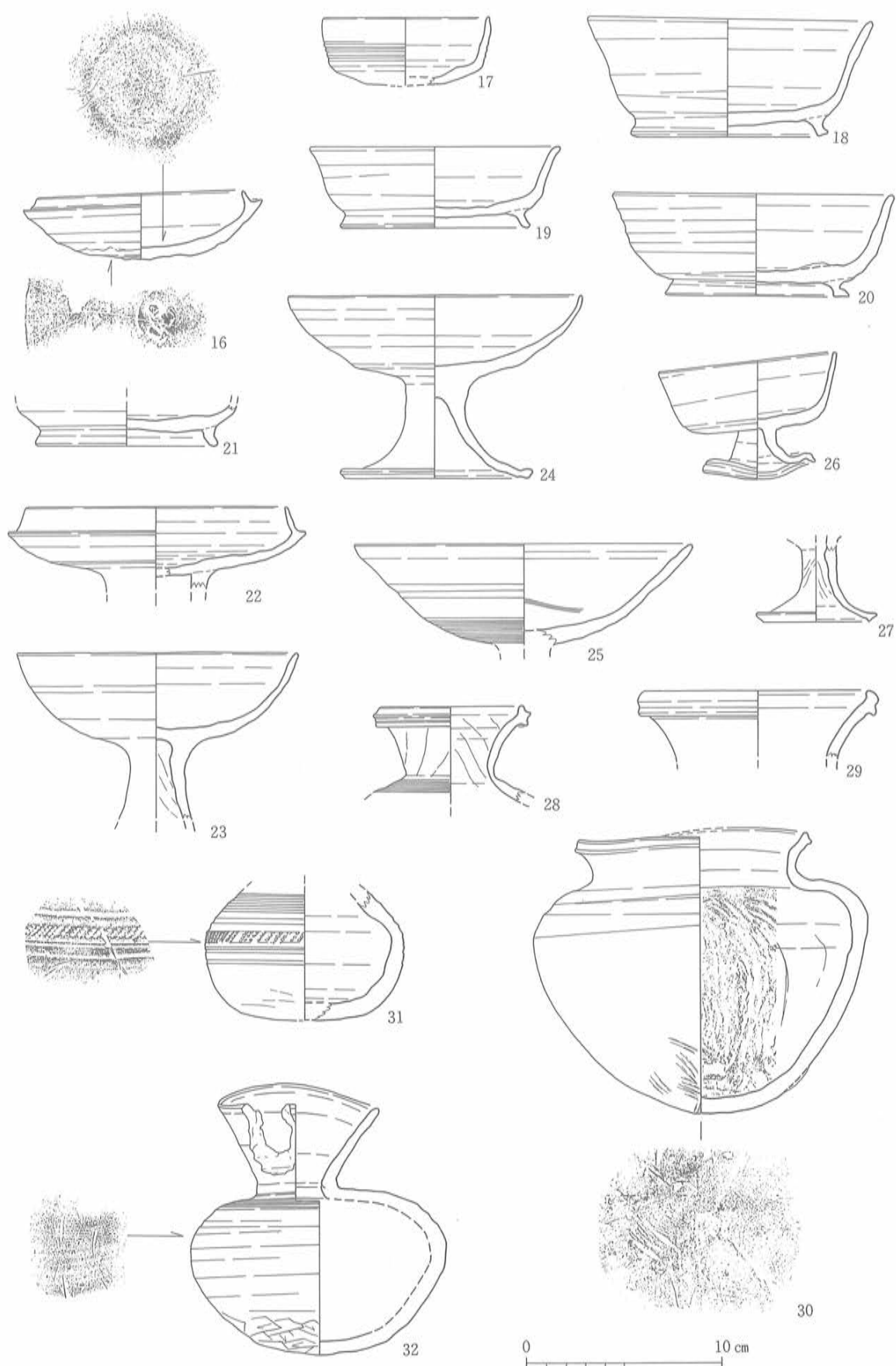
第57図 8号・10号~13号・15号・16号横穴墓出土土器実測図(1/8)



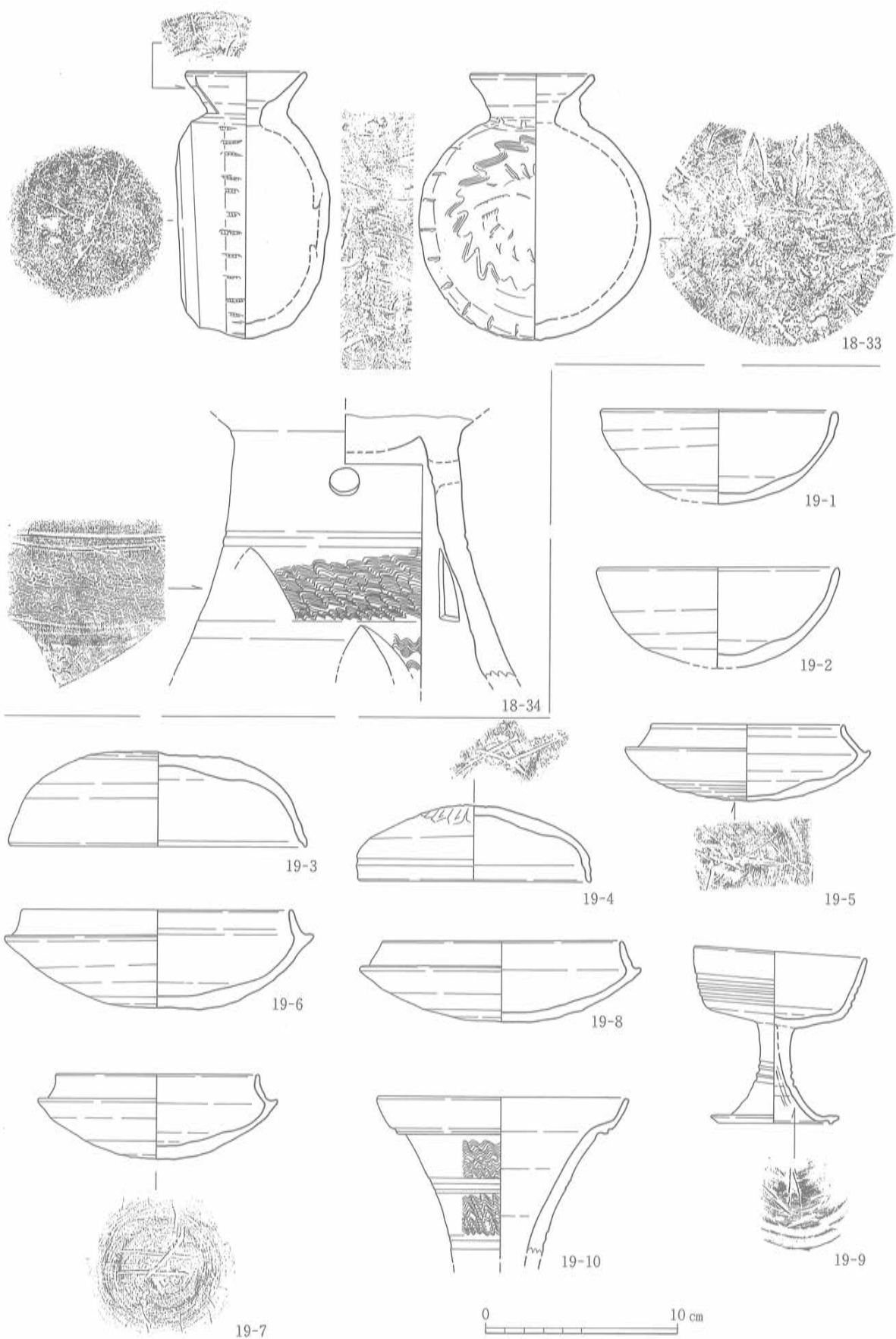
第58图 17号横穴墓出土土器实测图(1/3)



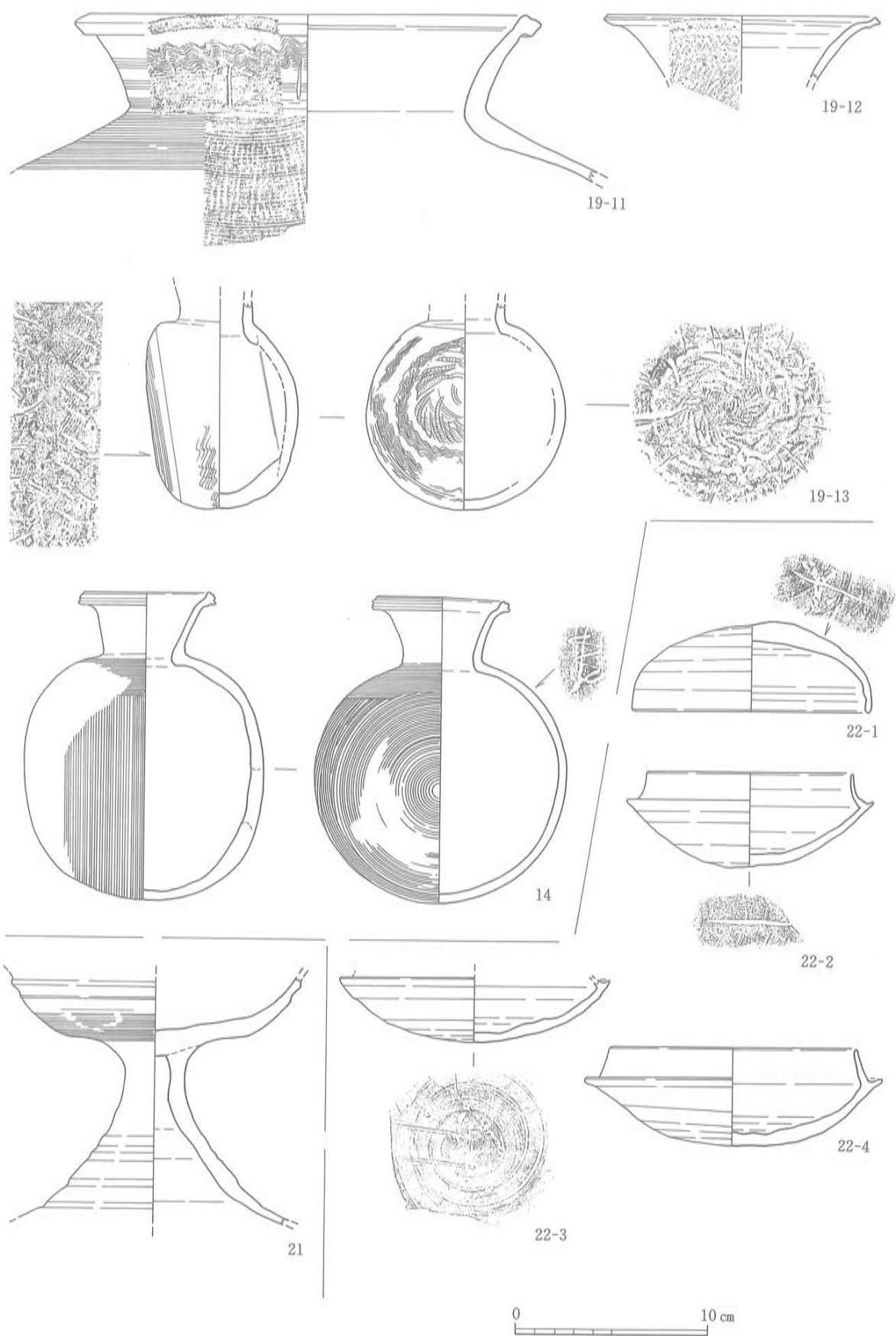
第59図 17号・18号横穴墓出土土器実測図(1/3)



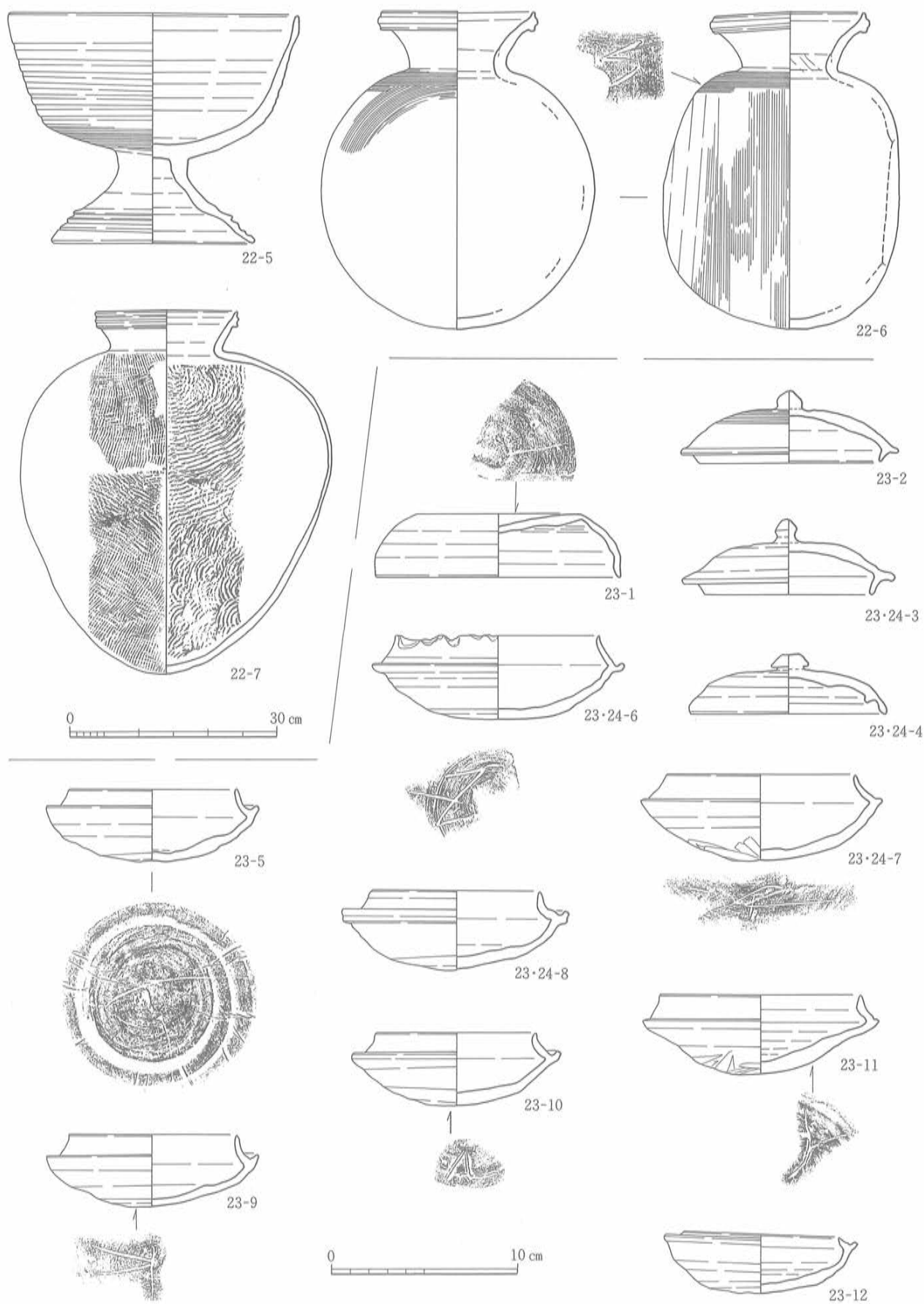
第60图 18号横穴墓出土土器实测图(1/3)



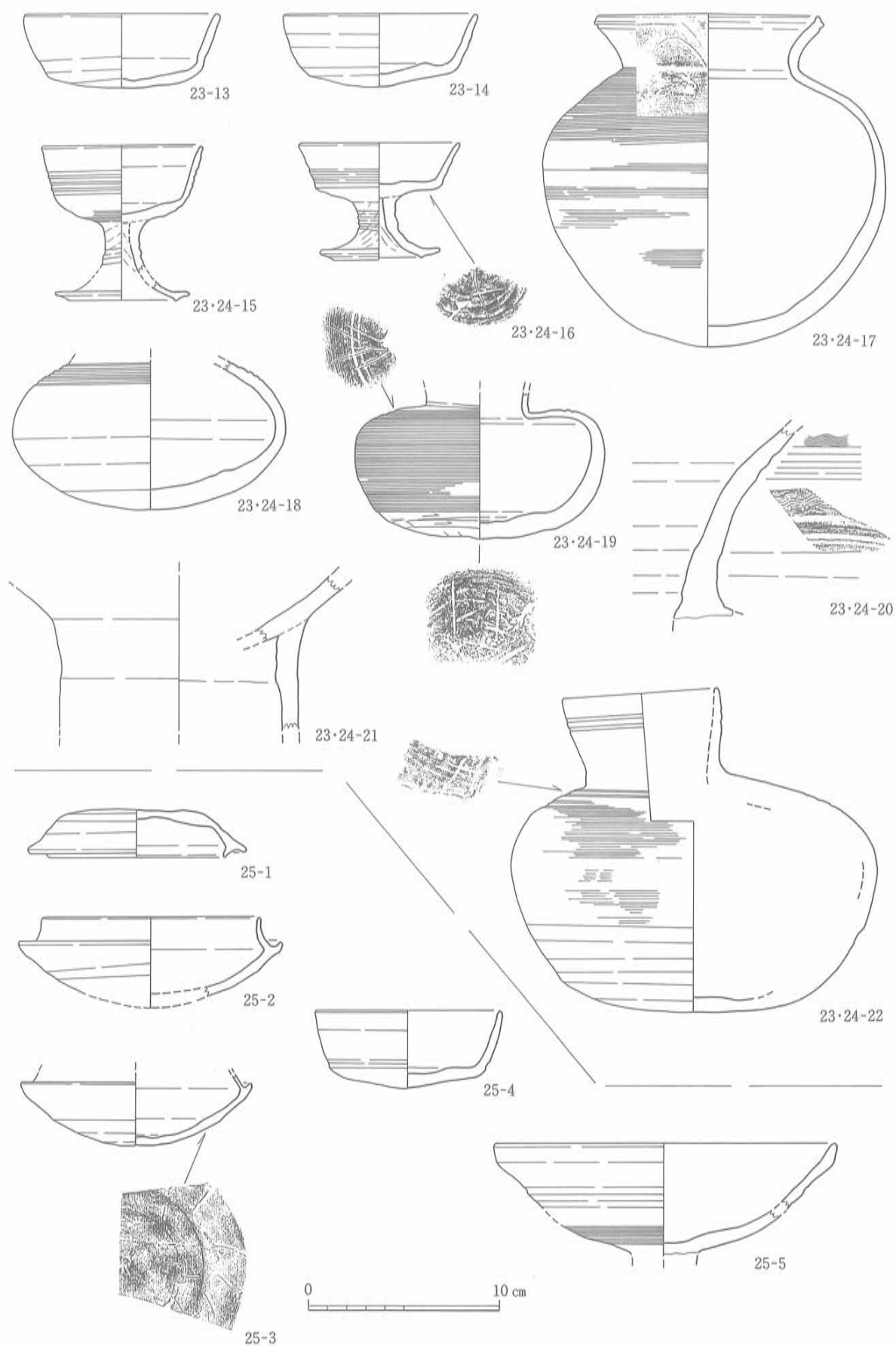
第61図 18号・19号横穴墓出土土器実測図(1/3)



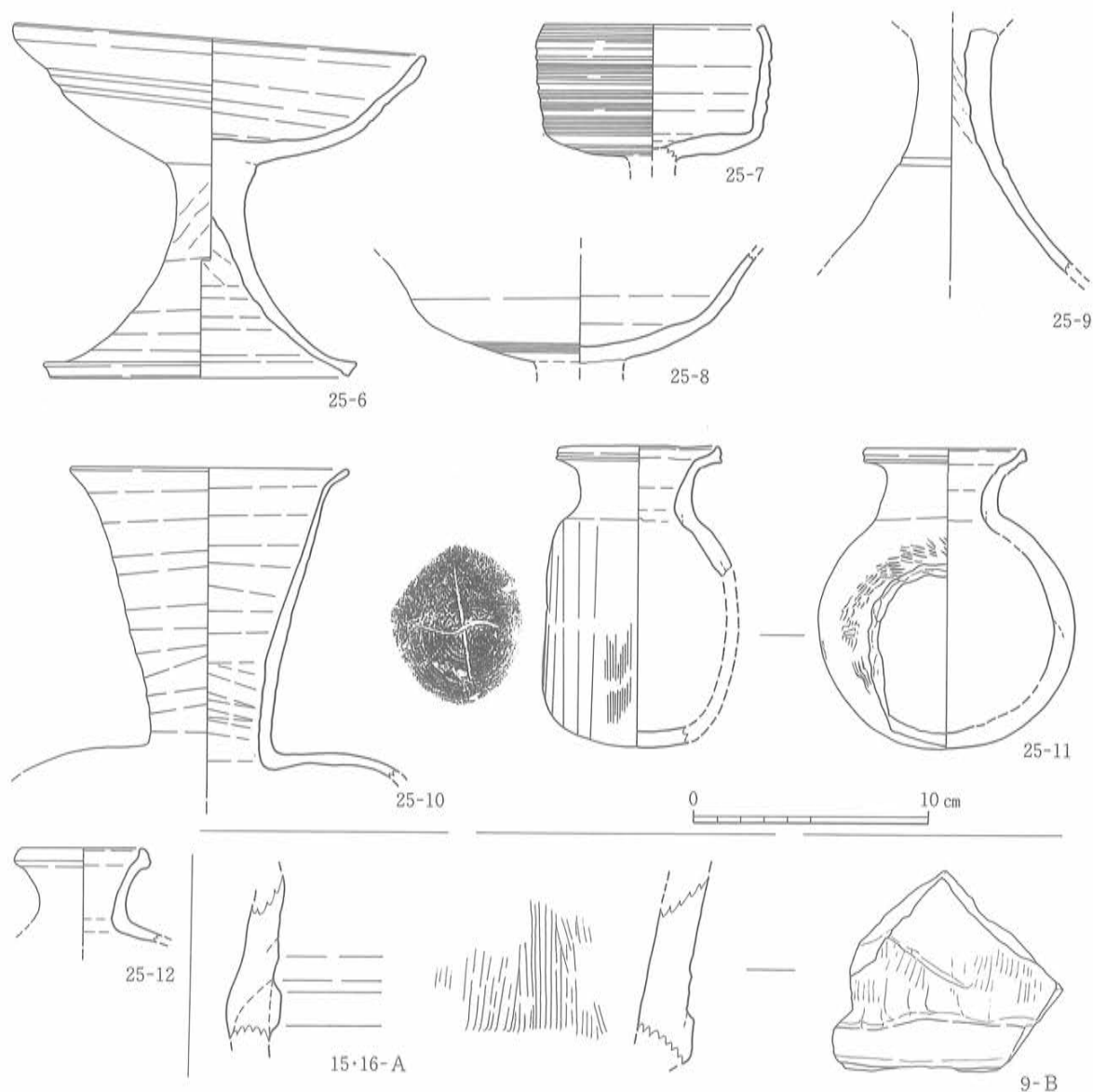
第62图 19号~22号横穴墓出土土器实测图(1/3)



第63图 22号~24号横穴墓出土土器实测图(1/3・1/8)



第64図 23号~25号横穴墓出土土器実測図(1/3)



第65図 25号横穴墓出土土器、9号・15号・16号横穴墓出土埴輪実測図(1/3)

(3) 出土遺物

(1) 土 器 (図版23~39、第33~65図)

総数500点

似非土師須
恵器

供給源の特
定

出土した土器は膨大な量に達しできる限り復原したが、紙面の都合状不掲載としたものも少なくない。掲載した土器は総数500点にのぼる。この中では、圧倒的に須恵器が多いが、出土した土師器は殆どが祭祀専用土器として焼成されたもので、漆塗りや丹塗りが多く、墓前祭に使用された土器である。中には1点のみ日常什器が出土している。

須恵器は多彩な器種があり、従来「赤焼土器」と呼称された所謂「似非土師須恵器」も多く出土している。さらに、ヘラ記号を刻んだ器種も多数あり、これらは八女古窯跡群の塚ノ谷窯跡の須恵器と共通性があり、形態の特徴と相まって、おのずと供給源が特定できる。また、大甕を中心に数基にまたがり破片が出土している。これも従来から指摘されている墓前祭の痕跡を示唆していると考ええる。

第1表 出土土器観察表

①口径 ②底径 ③器高(cm) A色調 B胎土 C焼成

挿図土器番号	器 種	出土遺構	法 量	形 態 と 手 法 の 特 徴	色調・胎土・焼成 の観察	備 考
第33図 3-1	土師器 坏	3号横穴 墓道	①12.6 ②17.4 ③	坏の精製品で底部を欠損。内外面が丁寧なヘラ磨きで仕上げるが外面が摩耗。	A黄褐色 B精良・赤褐色粒 C良好	
第33図 3-2	土師器 坏	3号横穴 墓道	①17.4 ② ③	1よりも口径の大きな坏の破片で精製土器。調整も1と同じ。	A黄～赤褐色 B赤褐色粒・雲母 C良好	
第33図 3-3	土師器 坏	3号横穴 墓道	①14.9 ② ③	口縁部が若干内湾し、器高の深い坏の破片で底部を欠損する。前者に比べて体部に丸みがある。	A赤褐色 B赤褐色粒・雲母・精良 C良好	
第33図 3-4	土師器 坏	3号横穴 墓道	①13.4 ② ③ 4.9	底部をヘラ削りするが器壁が厚く、体部にかけては屈折し、口縁部が直に延びる。調整は摩耗する。	A黄褐色 B赤褐色粒・雲母・角閃石 C良	
第33図 3-5	土師器 坏	3号横穴 墓道	①11.5 ② 4.4 ③	蓋受けのあるタイプの坏身で、口縁部が内傾するが蓋受け部は僅かに段がつく程度。調整は内外面を密にヘラ磨きする。	A橙褐色・灰黒色 B赤褐色粒・精製粘土 C良好	黒塗りか
第33図 3-6	土師器 坏	3号横穴 墓道	① 7.6 ② ③	蓋受けのある小型の坏身で、口縁部は反り気味に内傾する。体部は5に比して扁平な作りである。調整は外面がヘラ削りとヨコナデ、内面はナデ仕上げ。	A茶褐色 B赤褐色粒・精製粘土 C良好	
第33図 3-7	須恵器 坏蓋 身	3号横穴 墓道	①13.0 ② ③	口縁部が若干内傾し、口縁下はヨコナデで凹面をなす。天井部は欠損。	A赤褐色 B赤褐色粒・雲母 C軟質	似非土師須 恵器(赤焼 土器)
第33図 3-8	土師器 坏	3号横穴 墓道	①13.2 ② ③ 5.0	4と同タイプの坏身で、底部に段を作り段の直上には一部にヘラによる刻みがある。仕上げは回転ナデ。	A赤褐色 B赤褐色粒・雲母 C良	
第33図 3-9	須恵器 坏蓋	3号横穴 墓道	①14.3 ② ③	器高の低い坏蓋で天井部を欠く。調整は外面がヨコナデと回転ヘラ削り。内面はヨコナデで仕上げる。	A赤褐色 B赤褐色粒・砂粒・雲母 C軟質	似非土師須 恵器(赤焼 土器)
第33図 3-10	須恵器 坏蓋	3号横穴 墓道	①15.6 ② ③	口縁上部はヨコナデで凹凸がある。全体に器壁が薄く、天井部が欠損する。天井部が回転ヘラ削り、その他はヨコナデ仕上げ。	A赤褐色 B赤褐色粒・雲母・砂粒 C軟質	似非土師須 恵器(赤焼 土器)
第33図 3-11	須恵器 坏蓋	3号横穴 墓道	①10.8 ② ③	口唇部が若干開く器高の低い坏蓋で天井部を欠損。回転ナデで仕上げる。	A淡灰色 B砂粒少なく精良 C良	
第33図 3-12	須恵器 坏蓋	3号横穴 墓道	①12.2 ② ③	口唇部内面が有段をなし、体部と天井部の境に1条の沈線が巡り屈折する。天井部は欠損。調整は回転ヘラ削りとヨコナデ。	A灰色 B赤褐色粒・砂粒若干 C良	
第33図 3-13	須恵器 坏蓋	3号横穴 墓道	①12.0 ② ③	口縁部内面に1条の沈線が巡り、体部から天井部の屈折はなく丸く作る。調整は天井が回転ヘラ削り、他はヨコナデで仕上げる。	A灰白色 B砂粒若干含む C良好	
第33図 3-14	須恵器 坏蓋	3号横穴 墓道	①16.0 ② ③	10と同タイプの坏蓋で、天井部を欠く。外面は回転ナデで稜がつく。天井が回転ヘラ削り、他はヨコナデ仕上げ。	A赤褐色 B赤褐色粒・砂粒若干 C軟質	似非土師須 恵器(赤焼 土器)
第33図 3-15	須恵器 坏蓋	3号横穴 墓道	①15.4 ② ③	7と同タイプの坏蓋の小破片である。表面は回転ナデが摩耗。	A赤褐色 B砂粒・赤褐色粒 C軟質	似非土師須 恵器(赤焼 土器)
第33図 3-16	須恵器 坏蓋	3号横穴 墓道	①12.6 ② ③ 4.0	口縁部が内側に肥厚し、体部から天井にかけての張りが少ない。総じて器壁が薄く、天井部が静止ヘラ削りとナデ、他はヨコナデで仕上げる。	A暗茶灰色 B 1mm砂粒少量 Cやや軟質	天井部にヘ ラ記号
第33図 3-17	須恵器 坏蓋	3号横穴 墓道	①11.2 ② ③	身受けの返りのある器高の低い坏蓋片で天井部を欠損する。摘みのつくものであろう。調整は回転ナデで仕上げる。	A赤褐色 B赤褐色粒・砂粒 C軟質	似非土師須 恵器(赤焼 土器)
第33図 3-18	須恵器 坏身	3号横穴 墓道	①10.6 ② ③	内傾し反り気味の長い口縁部の坏身で、体部から底部にかけては丸みを有す。底部は回転ヘラ削りで他はヨコナデ仕上げ。	A灰黄色 B細砂粒少量 Cやや軟質	
第33図 3-19	須恵器 坏身	3号横穴 墓道	①11.2 ② ③	18と同じ作りの口縁部をなし、体部から底部の張りが少ないタイプである。調整は蓋受けの直下まで回転ヘラ削りし、他はヨコナデ。	A白灰色 B 3mmの砂粒含む C良好	
第33図 3-20	須恵器 坏身	3号横穴 墓道	①12.0 ② ③	口縁部が反り気味に直立するタイプで体部下が欠ける。	A灰色 B砂粒若干 C良	

出土土器観察表

①口径 ②底径 ③器高(cm) A色調 B胎土 C焼成

挿図土器番号	器 種	出土遺構	法 量	形 態 と 手 法 の 特 徴	色調・胎土・焼成 の観察	備 考
第33図 3-21	須恵器 坏 身	3号横穴 墓道	①10.6 ② ③	短く内傾する口縁部で、体部は直線的に作り底部が厚い。摘みのつく蓋の可能性もある。底部が回転ヘラ削り、他はヨコナデ仕上げ。	A灰色 B砂粒若干 C良好	
第33図 3-22	須恵器 高 坏	3号横穴 墓道	①20.0 ② ③	体部の張りが少なく、1条の凸帯が巡るタイプの坏部片で、口縁部が直に開く。調整は回転ナデで仕上げる。	A赤褐色 B赤褐色粒・精良 C軟質	似非土師須 恵器(赤焼 土器)
第33図 3-23	須恵器 高 坏	3号横穴 墓道	①18.2 ② ③	底部から口縁部にかけての張りがなく、中央部に1条の沈線が巡る。調整は底部外面がカキ目、他はヨコナデで仕上げる。	A橙褐色 B赤褐色粒・角閃石・雲母 C軟質	似非土師須 恵器(赤焼 土器)
第33図 3-24	須恵器 高 坏	3号横穴 墓道	①16.7 ② ③	口縁部を屈折させ直に延び、体部から底部は丸みを持ち中央に削り出し凸帯と沈線が巡る。外面底部はカキ目、他はヨコナデ仕上げ。	A橙褐色 B雲母・細砂粒・赤褐色粒 C軟質	似非土師須 恵器(赤焼 土器)
第33図 3-25	須恵器 高 坏	3号横穴 墓道	①21.4 ② ③	やや口径が大きく深い坏部片で、体部中央に細い2条の沈線が巡る。口唇部の一部に打ち欠いたような痕跡がある。器壁が薄く精製品である。	A赤褐色 B赤褐色粒・雲母・砂粒 C軟質	似非土師須 恵器(赤焼 土器)
第33図 3-26	須恵器 高 坏	3号横穴 墓道	① ②13.5 ③	スマートな脚部片で、裾端部を肥厚させる。中央にはカキ目がみられるが全体に摩耗する。他はヨコナデで、内面に絞り痕がみられる。	A橙褐色 B赤褐色粒・角閃石 C軟質	似非土師須 恵器(赤焼 土器)
第33図 3-27	須恵器 高 坏	3号横穴 墓道	①11.9 ② ③	底部から体部にかけては緩く屈折し、直の口縁部を持つ。脚部は細く、3ヶ所に長方形の透かしを作る。調整はヨコナデ。	A灰黄色 B 3mmの砂粒含む Cやや軟質	
第34図 3-28	須恵器 高 坏	3号横穴 墓道	① 9.9 ② ③	底部から口縁部にかけては緩く屈折し、屈折部に1条の沈線が巡る。坏部は浅くスマートな脚部がつくが下半が欠損する。外面底部はカキ目、他はヨコナデ仕上げ。	A黄灰色 B砂粒多く不良 Cやや軟質	
第34図 3-29	須恵器 高 坏	3号横穴 墓道	① ② ③	坏の屈折部に細い沈線が巡り、細みの脚部がつく。	A赤褐色 B赤褐色粒・雲母・砂粒 C軟質	似非土師須 恵器(赤焼 土器)
第34図 3-30	須恵器 高 坏	3号横穴 墓道	① ②10.0 ③	短い脚部の高坏で裾部が内湾し裾端部が肥厚する。調整は柱状部がヨコナデ、裾部はヨコナデにより凹線が巡る。	A橙褐色 B赤褐色粒・雲母 Cやや軟質	似非土師須 恵器(赤焼 土器)
第34図 3-31	須恵器 高 坏	3号横穴 玄室	① ② ③	やや大型の高坏の脚部片で、外面にカキ目を不定間隔に巡らす。内面はヨコナデ。	A赤褐色 B 1mm砂粒・赤褐色粒若干 C軟質	似非土師須 恵器(赤焼 土器)
第34図 3-32	須恵器 直口壺	3号横穴 墓道上層	① 5.2 ② ③ 5.0	内傾する口縁部に肩部の張る扁平な胴部がつくもので、平底をなす。調整は胴部がカキ目、底部は回転ヘラ削り、他はヨコナデ仕上げ。	A黒灰色 B 2mmの砂粒含む C良好	
第34図 3-33	須恵器 壺	3号横穴 墓道	①14.0 ② ③	口縁部を肥厚させ口唇部が内湾する短い頸部の壺で、底部を欠損する。肩部には幅広い沈線を挟んで木口の刺突文が2段に巡る。ほぼ全面に巡るカキ目は刺突文の前に巡らす。	A褐色 B砂粒殆ど含まず精製粘土 Cやや軟質	頸部にヘラ による線刻 が巡る
第34図 3-34	須恵器 甕	3号横穴 墓道	①24.4 ② ③	口縁部を三角状に肥厚させる甕の口縁部片で、以下は欠損している。調整は回転ナデ。	A黒灰色 B 3mmの砂粒やや多い C良好	
第34図 3-35	須恵器 甕	3号横穴 墓道	①30.0 ② ③	頸部から口縁部は緩く開くやや大型の口縁部片で、口唇部が下方に肥厚する。表面には広めの沈線が2条巡り、挟んでやや粗い波状文を5段描く。	A黒灰色 B砂粒若干 C良好	全面灰被る
第34図 3-36	須恵器 長頸壺	3号横穴 墓道	① ②10.4 ③	頸部上半を欠く壺で肩部が著しく張る。胴部は直で不安定な平底をなす。肩部には刺突文を綾杉状に配し、底部近くまでカキ目を密に巡らす。底部は回転ヘラ削り、内面はヨコナデ仕上げ。	A青灰色 B 0.5mm前後の砂粒少量 C良好	肩部にヘラ 記号刻む
第34図 3-37	須恵器 甕	3号横穴 墓道	① ② ③	口縁部を欠く甕で細い頸部の中央に2条の沈線、肩部の沈線上(1/3周)に木口刺突文を巡らし、径が7mm~8mmの孔を穿つ。胴部から底部は静止ヘラ削り、頸部内面には絞り痕が残る。	A橙色 B赤褐色粒目立つ C軟質	
第34図 3-38	須恵器 甕	3号横穴 墓道	①12.5 ② ③	僅かに内湾する口縁下に1条の削り出し凸帯を巡らし、直上に5本単位の波状文を配する。	A暗青灰色 B微砂粒少量 C良好	
第34図 3-39	須恵器 甕	3号横穴 墓道	①11.0 ② ③	内湾する口縁部下は1条の細みの削り出し凸帯が巡る。総じて器壁が薄く、調整は回転ナデ。	A灰色 B砂粒多い C良	
第35図 3-40	須恵器 提 瓶	3号横穴 墓道	① 7.2 ② ③14.7	口縁部を肥厚させ上方に摘み上げる。頸部は短く肩部の把手は退化している。頸部までがヨコナデ、体部は全面にカキ目を施すが一部摩耗。	A淡橙褐色 B砂粒若干 C軟質	

出土土器観察表

①口径 ②底径 ③器高(cm) A色調 B胎土 C焼成

挿図土器番号	器 種	出土遺構	法 量	形 態 と 手 法 の 特 徴	色調・胎土・焼成 の観察	備 考
第35図 3-41	須恵器 提 瓶	3号横穴 墓道	① ② ③	頸部上半と胴部の一部を欠く。胴部全面にカキ目が残る。	A 灰色 B C 良	
第35図 4-1	須恵器 器 台	4号横穴 墓道	① ② ③	口縁部が上方に延びる器台の破片で、口縁下には細波状文を密に配する。	A 灰色 B 精製粘土 C 良好	
第35図 4-2	須恵器 提 瓶	4号横穴 前庭部	胴部径 13.6	頸部上半を欠損し、肩部の把手は退化している。全面にカキ目を施し、肩部の一ヶ所に外側からの穿孔がみられる。墓前祭の痕跡であろう。	A 黄褐色 B 赤褐色粒・角閃石 C 軟質	
第35図 5-1	土師器 坏	5号横穴 墓道	①13.2 ② ③ 5.0	底部から口縁部にかけて扁平半球状を呈し、外面底部は静止ヘラ削り、他はナデ仕上げである。	A 赤褐色 B 雲母・赤褐色粒 C 良好	
第35図 5-2	土師器 坏	5号横穴 墓道床面	①13.0 ② ③ 4.8	1と同タイプの坏で、調整も同じである。	A 黄褐色 B 砂粒やや多い・雲母 C 良好	
第35図 5-3	土師器 坏	5号横穴 墓道床面	①12.3 ② ③ 4.8	1・2に比してやや小型で体部に丸みを有す。調整は底部が回転ヘラ削りで、須恵器の技法を有す。似非土師須恵器の可能性もある。	A 赤褐色 B 細砂粒若干 C 良好	
第35図 5-4	土師器 坏	5号横穴 墓道	①13.0 ② ③	1～3のタイプとは異なり口縁部を若干内湾させる。器高も高く作りが雑である。外面底部が手持ちヘラ削りとヘラ磨き、他はナデ仕上げ。	A 茶褐色 B 赤褐色粒多い・雲母 C 良好	
第35図 5-5	土師器 坏	5号横穴 墓道	① 8.0 ② ③ 2.8	小型の坏で外面がヘラ削り、内面がヘラ磨きで体部に焼成前に径4mmの孔を穿つ。全面漆塗で墓前祭に使われた器であろう。	A 橙褐色 B 精製粘土・赤褐色粒 C 良好	焼成前胴部 穿孔、内外 面漆塗
第35図 5-6	土師器 坏	5号横穴 墓道上層	①14.6 ② ③	蓋受けのある坏身で口縁部が短く内傾する。体部は扁平で全面にヘラ磨きと漆塗が見られるが、漆は殆ど剥離している。	A 黄褐色 B 精製粘土 C 良好	内外面漆塗 が剥離
第35図 5-7	土師器 ミニ チュア	5号横穴 墓道	① 3.7 ② ③ 1.6	祭祀土器で、底部に焼成前の径4mmの孔を穿っている。調整は内外面ともヘラ磨きで仕上げる。	A 黄褐色 B 精製粘土 C 良好	内外面丹塗 り、底部穿 孔
第35図 5-8	土師器 ミニ チュア	5号横穴 墓道	① 3.4 ② 3.0 ③ 1.4	7と同一タイプの祭祀土器で、底部に焼成前の3mmの孔を穿つ。器表面が摩耗しているがヘラ磨きであろう。	A 黄褐色 B 精製粘土 C 良好	内外面丹塗 り
第35図 5-9	土師器 高 坏	5号横穴 墓道上層	①27.0 ② ③	口縁部が僅かに外反する坏部の浅いもので、体部は丸みを有す。柱状部上半は充填され、墓前祭に使われた器である。	A 赤黄色 B 精製粘土・赤褐色粒 C 良好	内外面丹塗 りが剥離
第35図 5-10	土師器 高 坏	5号横穴 墓道攪乱	①36.0 ② ③	体部から口縁部にかけて直に作るタイプのもので、内外面ともヘラ磨きの上から丹を塗布する。祭祀に使われた器種。	A 赤黄色 B 精製粘土・赤褐色粒 C 良好	内外面丹塗 り
第35図 5-11	土師器 高 坏	5号横穴 墓道攪乱	①27.0 ② ③	坏部の形態が9と10との中間的なもので口縁部が若干外反し体部が僅かに張る。丹塗り土器で祭祀に使われた土器。	A 黄褐色 B 精製粘土・赤褐色粒 C 良好	内外面丹塗 り
第36図 5-12	土師器 高 坏	5号横穴 墓道	① ② 8.2 ③	祭祀に使われた器種で精製品。坏部上半が欠損し、内外面に丹塗り研磨仕上げで、脚部が縦方向のヘラ削りがみられる。脚部の開きが鈍く、裾端部が僅かに開く。	A 黄褐色 B 精製粘土・微砂粒若干 C 良好	内外面丹塗 り
第36図 5-13	土師器 高 坏	5号横穴 墓道	①10.3 ② ③	脚部下半を欠損する小型の高坏で、口縁部を僅かに外反させる。内外面が丹塗り研磨で、脚部は坏部の接合部から開く。祭祀土器	A 黄褐色 B 精製粘土・赤褐色粒 C 良好	内外面丹塗 り
第36図 5-14	須恵器 高 坏	5号横穴 墓道上層	①17.8 ② ③	体部の中央に1条の凸帯を巡らせ、この部分から一段外反させて上方に摘み上げたような口縁部を有す。同下半がカキ目、以下は欠損する。	A 橙色 B 精製粘土・赤褐色粒 C 軟質	似非土師須 恵器（赤焼 土器）
第36図 5-15	土師器 高 坏	5号横穴 墓道	① ②19.2 ③	やや大型の高坏の脚部で、外面が丹塗り研磨で調整する。坏部接合部から空中で、内外面にヘラ削りがみられる。精製品。	A 黄褐色 B 精製粘土・赤褐色粒 C 良好	外面丹塗り
第36図 5-16	土師器 高 坏	5号横穴 墓道上層	① ②12.8 ③	15と同タイプの小型品で、裾部がやや開く。調整も15と同じである。	A 黄褐色 B 砂粒若干・赤褐色粒 C 良好	外面丹塗り
第36図 5-17	土師器 脚台付 小型壺	5号横穴 墓道上層	① 4.1 ② 4.3 ③ 7.0	祭祀専用の器種で、脚台付壺のミニチュア土器である。内外面が丹塗り研磨で、この種の土器には漆塗もある。	A 橙褐色 B 精製粘土・雲母 C 良好	外面丹塗り

出土土器観察表

①口径 ②底径 ③器高(cm) A色調 B胎土 C焼成

挿図土器番号	器 種	出土遺構	法 量	形 態 と 手 法 の 特 徴	色調・胎土・焼成 の観察	備 考
第36図 5-18	土師器 脚台付 小型壺	5号横穴 墓道上層	① ② ③	17とは若干形状の異なる祭祀専用のミニチュア土器で、口縁部と脚部を欠損する。胴部がやや扁平である。外面は漆磨研と思われるが漆が殆ど剝離している。	A 橙褐色 B 精製粘土 C 良好	外面黒塗り か
第36図 5-19	土師器 脚台付 小型壺	5号横穴 墓道上層	① 6.5 ② ③	脚部を欠損した祭祀専用ミニチュア土器で、口縁部は朝顔状に外反し胴部は算盤玉状に稜がつく。丹塗り磨研の可能性はあるが不明瞭。	A 黄橙色 B 精製粘土 C 良好	外面丹塗り か
第36図 5-20	須恵器 坏 蓋	5号横穴 墓道上層	① 15.0 ② ③ 4.4	口縁から天井部にかけて緩い曲線を描き、肩部に低い段をなす。天井部を回転ヘラ削りで仕上げ、他はヨコナデで仕上げる。	A 青灰色 B 細砂粒若干 C 良好	
第36図 5-21	須恵器 坏 蓋	5号横穴 墓道	① 12.5 ② ③ 4.8	焼き歪みの激しい蓋で、肩部に段をなす。調整は天井部が回転ヘラ削り、他はヨコナデで仕上げる。	A 暗灰色 B 細砂粒多く含む C 良好	
第36図 5-22	須恵器 坏 蓋	5号横穴 墓道上層	① 13.0 ② ③ 4.3	口唇部が尖り気味で、肩部に1条の沈線が巡る。肩部から天井部にかけての張りが強い。調整は天井部が回転ヘラ削り、他はヨコナデで仕上げる。	A 黄灰色 B 砂粒やや多い C 軟質	天井部ヘラ 記号
第36図 5-23	須恵器 坏 蓋	5号横穴 墓道上層	① 15.0 ② ③ 4.2	口唇部が有段をなし、肩部に1条の沈線が巡る。やや扁平な作りで、右回りの回転ヘラ削りとヨコナデで仕上げる。	A 青灰色 B 細砂粒若干 C 良好	外面灰被り
第36図 5-24	須恵器 坏 蓋	5号横穴 墓道上層	① 12.3 ② ③ 2.9	扁平な作りの蓋で、ヘラによる1条の沈線が巡る。肩部の屈曲は鋭く、天井部は平らになる。天井部は右回りのヘラ削り、他はヨコナデ。	A 褐色 B 砂粒若干 C やや軟質	似非土師須 恵器(赤焼 土器)
第36図 5-25	須恵器 坏 身	5号横穴 墓道上層	① 11.2 ② ③	短い口縁部は反り気味に内傾し蓋受け部は深く明瞭に作る。体部から底部は扁平で「×」印のヘラ記号あり。	A 淡褐色 B 精製粘土 C 軟質	似非土師須 恵器(赤焼 土器)
第36図 5-26	須恵器 坏 身	5号横穴 墓道	① 13.6 ② ③ 4.0	反り気味に立つ口縁部で、やや扁平な体部を有す。調整は底部が回転ナデ、他はヨコナデで仕上げる。	A 灰色 B 1mm砂粒 C 良好	
第36図 5-27	須恵器 坏 身	5号横穴 墓道上層	① 13.2 ② ③ 4.2	短い立ち上がりの口縁部で基部が屈折する。底部は右回りのヘラ削りで、他はヨコナデ。	A 青灰色 B 細砂粒若干 C 良好	
第36図 5-28	須恵器 坏 身	5号横穴 墓道	① 13.1 ② ③ 4.8	直線的に内傾する口縁部で、底部はヘラ削りとヨコナデで仕上げる。	A 黄褐色 B 砂粒と赤褐色粒 C 軟質	似非土師須 恵器
第36図 5-29	須恵器 坏 身	5号横穴 墓道上層	① 12.4 ② ③ 4.6	短く反り気味に内傾する口縁部で、体部から底部にかけては張りが強い。底部には大きめの「×」印のヘラ記号。右回りのヘラ削りとヨコナデ。	A 暗灰色 B 砂粒若干 C 良好	外面底部に ヘラ記号
第36図 5-30	須恵器 坏 身	5号横穴 墓道	① 14.0 ② ③ 4.5	器壁の薄い坏身で大きく反り気味に立ち上がる口縁部で、蓋受け部は鈍く作る。	A 暗灰色 B 2mmの砂粒含む C 良好	
第36図 5-31	須恵器 坏 身	5号横穴 墓道上層	① 11.4 ② ③	小型の坏身で、口縁部が短く立ち上がる。体部から底部にかけては直線的に作る。	A 暗灰色 B 精製・砂粒若干 C 良	
第36図 5-32	須恵器 坏 身	5号横穴 墓道上層	① 10.6 ② ③ 3.5	内傾度が鋭い小型の坏身で蓋受け部が明瞭である。調整は底部外面が右回りのヘラ削り、他はナデ仕上げ。底部に「×」印のヘラ記号。	A 灰色 B 精製粘土 C 良好	外面底部ヘ ラ記号
第36図 5-33	須恵器 坏 身	5号横穴 墓道	① 12.2 ② ③ 4.2	内傾度の鋭い口縁部で、他の坏身より時期が新しいもの。底部にやや張りが強い、4条のヘラ記号。	A 黄土色 B 細砂粒若干 C 軟質	外面底部ヘ ラ記号
第36図 5-34	須恵器 坏 身	5号横穴 墓道	① 13.0 ② ③ 3.3	口縁部が内湾状に内傾し新しい時期の坏身である。左回りのヘラ削りとヨコナデ仕上げ。	A 黄灰色 B 砂粒若干含む C やや軟質	
第37図 5-35	須恵器 高 坏	5号横穴 墓道	① 11.6 ② 11.1 ③ 11.5	鈍く内傾し長い口縁部を有す高坏で、やや幅広い脚部を有する。脚は坏部の接合部から空中で裾端部は下方に屈折する。調整は坏底部と脚が細かいカキ目。他はヨコナデ仕上げ。	A 暗灰色 B 砂粒若干 C 良好	
第37図 5-36	須恵器 高 坏	5号横穴 墓道上層	① ② 14.6 ③	坏部を欠損するもので、底部はカキ目と刺突文を巡らす。脚部は中央に2条の沈線が巡り、3方向2段に長方形の透しを作る。裾部は鋭く開脚し端部を肥厚させる。	A 暗灰色 B 細砂粒若干 C 良好	
第37図 5-37	須恵器 高 坏	5号横穴 墓道上層	① 11.2 ② 9.2 ③ 14.7	スマートな無蓋高坏で、坏部には数条の沈線が巡る。脚部は細みで坏接合部まで空中で、裾端部は下方に肥厚する。調整は底部から脚中央部までカキ目、直下には3条の沈線が巡る。	A 灰色 B 細砂粒若干 C 良好	

出土土器観察表

①口径 ②底径 ③器高(cm) A色調 B胎土 C焼成

挿図土器番号	器 種	出土遺構	法 量	形 態 と 手 法 の 特 徴	色調・胎土・焼成 の観察	備 考
第37図5-38	須恵器 高 杯	5号横穴 墓道上層	① ②11.2 ③	坏部を欠損する。脚は短く裾端部は上方に肥厚する。 内外面に絞り痕が残る。	A 橙褐色 B 細砂粒・赤褐色粒 C 軟質	似非土師須 恵器 (赤焼 土器)
第37図5-39	須恵器 高 杯	5号横穴 墓道	① ②16.0 ③	脚部の破片で、下半3方向に長方形の透かしを穿つ。 裾端部は上方に肥厚し、調整は全面にカキ目が巡る。 内面1条のヘラ記号。	A 青灰色 B 精良 C 良好	内面にヘラ 記号
第37図5-40	須恵器 壺	5号横穴 墓道底面	①10.5 ② ③16.8	外反度の鈍い口縁部で、口唇部を外方向に肥厚させる。胴 部は扁平球状を呈し平底をなす。頸部には1条の沈線が巡 り、肩部から胴部は粗いカキ目、底部は回転ヘラ削り仕上げ。	A 青灰色～黒色 B 細砂粒若干 C 良好	
第37図5-41	須恵器 甗	5号横穴 墓道	①10.6 ② ③	二重の口縁をなし、口唇部は尖り気味で45と同タイプ。口縁 部はヨコナデ、頸部上半は波状文を配する。	A 暗灰色 B 精製粘土 C 良好	
第37図5-42	須恵器 甗	5号横穴 墓道上層	① ② ③	41と同タイプの甗で頸部下半に2条の沈線が巡り、上 半は波状文を密に配する。全体に器壁が薄い。	A 暗灰色 B 精製 C 良好	
第37図5-43	須恵器 甗	5号横穴 墓道	①12.9 ② ③15.8	頸部から朝顔状に外反する口縁部で、端部が僅かに波打つ。頸部 はやや細みで、扁平で小さな体部。胴部中央に径1.5cmの 不揃いの孔を穿つ。頸部は波状文とカキ目、胴部はカキ目と刺突文。	A 暗灰色 B 細砂粒やや多い C 良好	
第37図5-44	須恵器 甗	5号横穴 墓道上層	① ② ③	頸部上半を欠く。扁平の体部の中央に2条の凹線、肩部 にはカキ目の上から木口の刺突文、下半はカキ目と回 転ヘラ削りで仕上げる。破片内には孔は見られない。	A 灰色 B 精製 C 良好	
第37図5-45	須恵器 甗	5号横穴 墓道底面	①10.8 ② ③12.3	複合口縁部をなし、頸部は細まるもので扁平の体部を 有す。同中央部には不揃いの孔を穿ち、頸部の沈線 上半に波状文、肩部にカキ目と刺突文を配する。	A 青灰色 B 精製粘土 C 良好	
第38図5-46	須恵器 甗	5号横穴 墓道上層	① ② ③	頸部上半を欠く甗で基部は細みである。現存しないが扁平 の体部の中央には孔を穿っていたと思われ、肩部には木口 の刺突文を配する。内面底部は製作過程の当具痕がある。	A 暗灰色 B 細砂粒若干 C 良好	
第38図5-47	須恵器 提 瓶	5・19号 墓道と20 号前庭部	① 5.0 ② ③	細く短い頸部に肥厚する口縁部がつく。胴部には全面 カキ目が付けられていたのが摩耗している。把手は見 られない。	A 黒灰色～黒色 B 1～2mmの砂粒 C 良好	
第38図6-1	須恵器 坏 蓋	6号横穴 墓道	①10.8 ② ③ 3.8	口縁部と体部の境は緩く屈折し、天井部にかけて丸み を有す。全体に器壁が薄い。調整は回転ヘラ削りとヨ コナデ。	A 灰色 B 精製粘土 C 良好	天井部にヘ ラ記号
第38図6-2	須恵器 坏 蓋	6号横穴 墓道	①15.4 ② ③ 3.9	口縁部の内外面に浅い沈線、肩部も1条の沈線が巡る。 天井部は平らに作る。調整は天井部が右回りのヘラ削 り、他はヨコナデ仕上げ。	A 暗灰色 B 砂粒含まず精良 C 良好	
第38図6-3	須恵器 坏 蓋	6号横穴 墓道	①13.5 ② ③ 3.1	他に比して扁平な作りで口縁内部に段をなす。天井は 若干凹面をなし、回転ヘラ削りとヨコナデで仕上げる。	A 黒灰色 B 砂粒やや多い C 良好	
第38図6-4	須恵器 坏 蓋	6号横穴 墓道	①12.0 ② ③ 4.3	器高が高く、口縁から天井にかけては緩い曲線を描く。 天井の一部は未調整で、他はヨコナデ仕上げ。ヘラ記号 は「三」の形。	A 灰黄色 B 精製粘土 C やや軟質	天井部にヘ ラ記号
第38図6-5	須恵器 坏 身	6号横穴 墓道	①10.0 ② ③ 4.0	反り気味に内傾する口縁部で、蓋受け部は明瞭に作る。 体部は扁平で、調整は底部が手持ちヘラ削り、他は回転 ナデ仕上げ。ヘラ記号は「×」印。	A 暗灰色 B 2mm前後の砂粒 C 良好	外面底部に ヘラ記号
第38図6-6	須恵器 坏 身	6号横穴 墓道	①11.2 ② ③ 4.5	口縁部は直に内傾し、体部は丸みを有す。調整は底部 が右回りの回転ヘラ削り、他はヨコナデ。	A 暗灰色 B 細砂粒若干 C 良好	外面灰被り
第38図6-7	須恵器 坏 身	6号横穴 墓道	①12.9 ② ③ 4.3	径の大きな坏身で扁平な作りである。口縁部は反りな がら立ち上がり蓋受けも水平に作る。体部の張りは少 なく、底部は平坦で回転ヘラ削りとヨコナデ仕上げ。	A 黄褐色 B 細砂粒多く、角閃石 C やや軟質	
第38図6-8	須恵器 直口壺	6号横穴 墓道	① 6.0 ② ③	肩部から口縁部の境の稜が不明瞭で、体部は扁平な作 り。底部を欠損する。調整は体部がカキ目、底部は回 転ヘラ削りで仕上げるヘラ記号は「ハ」印。	A 暗灰色 B 細砂粒若干 C 良好	外面胴部ヘ ラ記号
第38図6-9	須恵器 高 杯	6号横穴 墓道	①14.8 ②10.1 ③10.1	口縁部が若干外反し、体部は丸みがある。坏部に比して脚部 は短く、接合部まで空中で裾端部を下方に肥厚させる。調整 は底部がカキ目、他はヨコナデ仕上げで、脚部は絞り痕が残る。	A 黄褐色 B 砂粒若干、赤褐色粒多量含 C 軟質	似非土師須 恵器 (赤焼 土器)
第38図6-10	須恵器 甗	6号横穴 墓道	①25.0 ② ③	口唇部を下方に肥厚させるもので、肩部以下を欠損す る。口縁下にはやや粗い波状文、頸部は縦方向の小口ナ デ、肩部は平行叩キと部分的なカキ目、内面は当具痕。	A 紫褐色 B 精製粘土 C 良好	

出土土器観察表

①口径 ②底径 ③器高(cm) A色調 B胎土 C焼成

挿図土器番号	器 種	出土遺構	法 量	形 態 と 手 法 の 特 徴	色調・胎土・焼成 の観察	備 考
第39図 8-1	土師器 甕	8・10・11 号横穴 前庭部	①12.7 ② ③11.8	供献土器としては珍しい器種で、日常什器である。口縁部を厚く作り短く外反させる。体部は僅かに張り、不安定な平底をなす。調整はヘラ削りと荒いハケで仕上げる。	A 橙褐色 B 細砂粒・赤褐色粒を含む C 良好	
第39図 8-2	須恵器 坏 蓋	8 号横穴 墓道	①10.7 ② ③ 3.1	径の小さな坏蓋で、口縁から天井にかけて緩い曲線を描き稜や沈線はない。調整は前面ヨコナデで天井のヘラ記号は繊細である。	A 灰色 B 0.5mm細粒多い C 良好	天井部ヘラ 記号
第39図 8-3	須恵器 坏 蓋	8 号横穴 前庭部	①11.5 ② ③ 3.8	天井部から体部にかけては直線的で、口縁部を下方に屈曲させるタイプである。調整はすべてヨコナデ仕上げ。	A 灰黄色 B 細砂粒多い C やや軟質	
第39図 8-4	須恵器 坏 蓋	8 号横穴 墓道	①10.3 ② ③ 3.0	2 と同タイプの坏蓋で径の小さなもの。	A 白黄灰色 B 砂粒多い C 軟質	
第39図 8-5	須恵器 坏 蓋	8 号横穴 墓道	①10.8 ② ③ 3.9	3 と同じ作りのもので天井部の器壁が厚い。調整は天井部が回転ヘラ削り、他はヨコナデ仕上げ。	A 灰黒色 B 0.5mmの砂粒多い C 良好	
第39図 8-6	須恵器 坏 蓋	8 号横穴 墓道	①11.5 ② ③ 3.9	口縁部から体部にかけては緩く内湾し、天井部は尖り気味に作る。全体に器壁が薄く、天井部のヘラ記号は「コ」印。	A 黒灰色 B 細砂粒多い C 良好	天井部ヘラ 記号
第39図 8-7	須恵器 坏 蓋	8 号横穴 墓道	①10.6 ② ③ 2.8	器高が低く扁平な作りのもので、回転ヘラ削りとナデで仕上げる天井には不明瞭なヘラ記号。	A 淡黄褐色 B 粗砂粒若干 C やや軟質	天井部ヘラ 記号
第39図 8-8	須恵器 坏 蓋	8 号横穴 墓道	① ② ③	器壁の薄い天井部片で、鳥の足跡状のヘラ記号。同じヘラ記号は12-5、13-5・10があり、同一の窯で焼成したのであろう。	A 灰色 B 砂粒若干含む C 良好	天井部ヘラ 記号
第39図 8-9	須恵器 坏 蓋	8 号横穴 墓道	① 7.9 ② ③ 1.9	擬宝珠の摘みのつく身受けの返りのある小型のもので、回転ヘラ削りとヨコナデで仕上げる。	A 灰色 B 精良 C 良好	天井部ヘラ 記号
第39図 8-10	須恵器 坏 蓋	8 号横穴 墓道	① 8.9 ② ③ 2.6	扁平な摘みのつくタイプで身受けの返りのあるもの。摘みの中央には凹面がある。摘みの横のヘラ記号は8-18、8・10・11-23、13-15に同じものがある。	A 灰黄色 B 精製粘土 C やや軟質	天井部ヘラ 記号
第39図 8-11	須恵器 坏 蓋	8 号横穴 墓道	① 8.8 ② ③ 3.0	10 と同じような摘みのつくタイプであるが、天井から口縁部にかけては直線状に作る。身受けの返りは下方に延びる。天井部のヘラ記号は9 と10の折衷である。	A 灰茶黄色 B 粗砂粒若干 C 良	天井部ヘラ 記号
第39図 8-12	須恵器 坏 蓋	8 号横穴 墓道	① 8.5 ② ③ 3.4	宝珠の摘みのつくタイプで、身受けの返りのあるもの。天井から体部の境は稜がつく。調整は右回りのヘラ削りとヨコナデで仕上げる。	A 灰色～黒色 B 砂粒を多く含む C 良好	
第39図 8-13	須恵器 坏 蓋	8 号横穴 前庭部	① 9.8 ② ③ 3.4	器高の高いもので扁平な断面台形の摘みがつくタイプ。身受けの返りも小さい。	A 白黄褐色 B 雲母・赤褐色粒 C 軟質	取上NO.3
第39図 8-14	須恵器 坏 身	8 号横穴 墓道	① 9.6 ② ③ 2.6	短く内傾する口縁部のもので、扁平な作りの坏身。天井には6-4 と同じヘラ記号。	A 暗灰色 B 0.5～2mmの砂粒多い C 良好	
第39図 8-15	須恵器 坏 身	8 号横穴 墓道	① ② ③	口縁部を欠き、焼き歪みのあるもので、右回りの回転ヘラ削りとヨコナデで仕上げる。ヘラ記号は8・10・11-20 と同じ。	A 青灰色 B 0.5mmの砂粒多い C 良好	
第39図 8-16	須恵器 坏 身	8 号横穴 墓道	① 8.8 ② ③ 3.4	器高の高い坏身で底部と体部の境は屈折し口縁が上方に延びる。体部下半には2条の沈線が巡る。ヘラ記号は8・10・11-11 と同じである。	A 灰色 B 細砂粒若干 C 良好	
第39図 8-17	須恵器 坏 身	8 号横穴 墓道	① 9.5 ② ③ 3.6	16 より丸みのあるもので屈折も鈍い。体部下半には4条の沈線が巡る。ヘラ記号は「Z」印。	A 橙褐色 B 精製粘土使用 C 軟質	似非土師須 恵器 (赤焼 土器)
第39図 8-18	須恵器 坏 身	8 号横穴 墓道	①10.0 ② 7.1 ③ 4.2	16・17 と同タイプであるが、より器高の高いもので体部に3条の沈線が巡る。底部は不安定な平底である。8-10 と同じヘラ記号。	A 黒灰色 B 細砂粒若干 C 良好	外面ヘラ記 号、外面灰 被り
第40図 8-19	須恵器 高台付 碗	8 号横穴 墓道	① ② 9.0 ③	出土した土器で新しい追葬時のもの。高台はやや低く口縁部を欠く。下半には1条の沈線が巡る。調整はナデが主体。	A 灰色 B 0.5mm砂粒やや多く含む C 良好	
第40図 8-20	須恵器 高 坏	8 号横穴 墓道	① ② 9.6 ③	坏部上半を欠くもので、脚柱状部は細く裾端部が若干肥厚する。調整はヨコナデが主体で柱状部には絞り痕が残る。	A 赤褐色 B 砂粒・赤褐色粒・雲母 C 軟質	似非土師須 恵器 (赤焼 土器)

出土土器観察表

①口径 ②底径 ③器高(cm) A色調 B胎土 C焼成

挿図土器番号	器 種	出土遺構	法 量	形 態 と 手 法 の 特 徴	色調・胎土・焼成 の観察	備 考
第40図 8-21	須恵器 高 坏	8号横穴 墓道	①14.3 ②10.2 ③10.8	20と同じタイプのもので坏部中央に3条の細い沈線が 巡り屈折しない。脚は短く裾が緩く開き端部が肥厚す る。調整はヨコナデで柱状部に絞り痕。	A 橙褐色 B 赤褐色粒・雲母・砂粒 C 軟質	似非土師須 恵器 (赤焼 土器)
第40図 8-22	須恵器 高 坏	8号横穴 墓道	① ② 8.0 ③	スマートな高坏で、体部に丸みがあり3条の沈線が巡 る。底部にはカキ目が巡る。柱状部は細く3条の沈線 があり、裾端部は上下に肥厚する。	A 暗灰色 B 微砂粒若干 C 良好	
第40図 8-23	須恵器 長頸壺	8号横穴 墓道	① ② 6.3 ③	細頸壺の可能性がある。頸部上半を欠く。体部は扁平で、 総じて薄手作りである。底部には数条のヘラ記号。調整 はヨコナデと手持ちヘラ削りで仕上げる。	A 黒灰色 B 砂粒多く不良 C 良好	全体に灰被 り、底部外 面ヘラ記号
第40図10-1	弥 生 甕	10号横穴 前庭部	① ② 6.4 ③	弥生土器で、細めの底部に張りのない下半である。古手 の甕であろう。底部に広葉樹の葉脈痕がある。	A 黄褐色 B 赤褐色粒若干で良好 C 良好	底部外面に 木葉痕、混 入土器
第40図10-2	須恵器 坏 身	10号横穴	① ② ③	短めの反り気味に内傾する口縁部で、底部はやや尖り 気味。調整は回転ヘラ削りとヨコナデ。底部のヘラ記 号は「Z」印。	A 灰色 B 精製粘土使用 C 良好	外面底部に ヘラ記号
第40図10-3	須恵器 高 坏	10号横穴 玄室	①11.0 ② ③ 4.9	内傾するやや長めの口縁部で口唇部が上方に延びる。 蓋受け部は短く、体部は直で底部が若干平底。ヘラ記 号はやや複雑。調整は回転ヘラ削りとヨコナデ。	A 灰黄色 B 砂粒含まず精製土器 C やや軟質	外面底部に ヘラ記号
第40図10-4	須恵器	10号横穴 前庭部	① 8.0 ② 8.0 ③10.3	整った形の高坏で、坏中央が屈折し段をなす。細みの脚部で 緩く開き裾部でさらに開脚する。坏底部はカキ目、柱状部には 貫通しない透かし4ヶ所と浅い2条の沈線が巡る。	A 青灰色 B 細砂粒若干 C 良好	
第40図10-5	須恵器 甕	10号横穴 玄室	①28.4 ② ③	緩く外反する口縁部に粘土紐を貼付し口唇部を肥厚さ せる。肩部以下を欠くが大きく張るようだ。頸部のヘ ラ記号は「ハ」印。	A 茶褐色 B やや大きめの砂粒含む C 良	頸部にヘラ 記号
第40図10-6	須恵器 甕	10号横穴 玄室	①26.0 ② ③	緩い外反度の口縁に上下に肥厚する口唇部。肩部がな で肩で、調整は擬格子の上から等間隔のカキ目、内面 は同心円と青海波の当具痕。	A 灰色 B 細砂粒多い C 良好	
第40図10-7	須恵器 甕	10号横穴 前庭部	① ② ③	焼成の悪い甕で頸部上半を欠く。肩部にはヘラによる 刺突文を配し、径6mmの孔を穿つ。調整は摩耗し不明。	A 黄褐色 B 細砂粒・赤褐色粒・角閃石 C 軟質	似非土師須 恵器 (赤焼 土器)
第41図 1	土師器 坏	8・10・ 11号横穴 前庭部	①12.5 ② ③ 3.1	器高の低い坏で口縁部から底部にかけて緩く内湾する。底 部は不安定な平底で、調整は底部が手持ちヘラ削り、他は ヨコナデで仕上げる。	A 黄褐色 B 精製粘土 C 良好	
第41図 2	土師器 坏	8・10・ 11号横穴 前庭部	①21.5 ② ③ 6.9	大型の坏で形状が1と同じような曲線を描く。調整は 底部ヘラ削り、他はヨコナデで仕上げる。	A 赤橙褐色 B 細砂粒・赤褐色粒多い C 良好	
第41図 3	土師器 高 坏	8・10・ 11号横穴 前庭部	①12.9 ② 9.2 ③ 8.4	祭祀に使われた土器で、坏に脚を接合した形である。脚部 は短く裾部で大きく開脚する。調整は坏部が横ヘラ磨き、脚 部が縦ヘラ磨きと内面が横ヘラ削りで仕上げる。	A 橙褐色 B 細砂粒・赤褐色粒 C 良好	内外面丹塗 り、精製土 器
第41図 4	須恵器 坏 蓋	8・10・ 11号横穴 前庭部	①11.8 ② ③ 3.5	総じて器壁の薄い蓋で口縁部は僅かに開き天井部に段 をなす。調整は回転ヘラ削りとナデで仕上げる。	A 灰色 B 細砂粒若干 C 良好	外面天井部 ヘラ記号
第41図 5	土師器 坏	8・10・ 11号横穴 前庭部	①11.2 ② ③ 3.8	1と同じタイプの坏で、調整も同様である。	A 灰黄褐色 B 細砂粒多い C やや軟質	
第41図 6	須恵器 坏 蓋	8・10・ 11号横穴 前庭部	①10.7 ② ③ 3.5	口縁内面に段をなすもので体部の屈折は緩やかである。 天井部回転削り、他はヨコナデで仕上げる。	A 灰緑色 B 細砂粒若干 C 良好	
第41図 7	須恵器 坏 蓋	8・10・ 11号横穴 前庭部	①11.1 ② ③ 3.8	技法上は土師器であるが、焼成は須恵器で天井部が手 持ちヘラ削り、他はヨコナデ仕上げ。口縁部が僅かに 内湾する。	A 暗茶灰色 B 白色粒子多い C 良	擬土師須恵 器
第41図 8	須恵器 坏 蓋	8・10・ 11号横穴 前庭部	①11.2 ② ③ 3.7	口縁部が若干開き体部の屈折がないタイプで、やや器 高が高い。回転ヘラ削りとヨコナデ仕上げで、ヘラ記 号は「一」印。	A 紫灰色 B 精製粘土使用 C 良好	外面天井部 ヘラ記号
第41図 9	須恵器 坏 蓋	8・10・ 11号横穴 前庭部	①10.4 ② ③ 3.6	器高が高く半球形に近い形状。ヘラ記号は「三」印。	A 黄灰色 B 精製粘土使用 C 良好	外面天井部 ヘラ記号
第41図 10	須恵器 坏 蓋	8・10・ 11号横穴 前庭部	① 9.5 ② ③ 2.2	身受けの返りのあるタイプであるが摘みはない。調整 は天井が右回りの回転ヘラ削り、他はヨコナデ仕上げ。 内面のヘラ記号は「X」印。	A 暗灰色 B 細砂粒少量 C 良好	内面天井部 ヘラ記号

出土土器観察表

①口径 ②底径 ③器高(cm) A色調 B胎土 C焼成

挿図土器番号	器 種	出土遺構	法 量	形 態 と 手 法 の 特 徴	色調・胎土・焼成 の観察	備 考
第41図 11	須恵器 蓋	8・10・ 11号横穴 前庭部	① 7.9 ② ③ 3.0	宝珠の摘みのつくタイプで深く抉れた身受けの返りのあるもの。調整は天井部がカキ目、他はヨコナデで仕上げ、ヘラ記号は8・10・11-31と同じで形状もセットの可能性はある。	A黄灰色 B細砂粒少ない C良好	外面天井部 ヘラ記号
第41図 12	須恵器 蓋	8・10・ 11号横穴 前庭部	① 8.8 ② ③ 3.0	平坦で中央が凹面をなす摘みの蓋で身受けの返りのあるタイプ。摘みの回りはカキ目、他はヨコナデ。天井のヘラ記号は「×」印	A灰色 B細砂粒若干 C良好	外面天井部 ヘラ記号
第41図 13	須恵器 蓋	8・10・ 11号横穴 前庭部	① 8.2 ② ③ 2.7	扁平な宝珠摘みで身受けのあるタイプ。調整は回転ヘラ削りとヨコナデ。ヘラ記号は8-6と同じ。	A茶灰色 B精製粘土使用 C良好	外面天井部 ヘラ記号
第41図 14	須恵器 蓋	11号横穴 前庭部・ 8号墓道	① 7.8 ② ③	摘み部が欠損しているが身受けの返りのあるタイプ。調整はほぼ全面にカキ目、内面がヨコナデ仕上げ。	A茶灰色 B精製粘土使用 C良好	外面天井部 ヘラ記号
第41図 15	須恵器 蓋	8・10・ 11号横穴 前庭部	① 11.4 ② ③	天井部を欠損し身受けの返りのある蓋で総じて器壁が薄い。天井部はカキ目、他はヨコナデ。ヘラ記号は6-1・8-16・8・10・11-17と同じ。	A赤味黒色 B精製粘土使用 C軟質	外面天井部 ヘラ記号、 赤焼土器
第41図 16	須恵器 蓋	8・10・ 11号横穴 前庭部	① 8.1 ② ③ 2.7	擬宝珠の摘みが付き身受けの返りのあるタイプで、天井が回転ヘラ削り、他はヨコナデ。ヘラ記号は8・10・11-32と同一でセットの可能性。	Aレンガ色 B砂粒殆ど含まず C軟質	外面天井部 ヘラ記号、 赤焼土器
第41図 17	須恵器 蓋	8・10・ 11号横穴 前庭部	① 8.6 ② ③ 2.5	宝珠の摘みの欠損した身受けの返りのある坏蓋で、タイプとしては13と同じである。ヘラ記号は「×」印で12と同じ。	A黄灰色 B 1mm砂粒若干 C良	外面天井部 ヘラ記号
第41図 18	須恵器 身	8・10・ 11号横穴 前庭部	① 9.6 ② ③ 3.9	全体に器壁の薄い作りで、内傾する長い口縁部は上方で立ち上がる。蓋受け部はやや長く、体部は扁平である。調整は回転ヘラ削りとヨコナデ。	A灰色 B砂粒若干 C良好	外面底部 ヘラ記号
第41図 19	須恵器 身	8・10・ 11号横穴 前庭部	① 9.1 ② ③ 3.0	内傾度のある短い口縁部で器高が低い。	A黒灰色 B細砂粒少量 C良好	
第41図 20	須恵器 身	8・10・ 11号横穴 前庭部	① ② ③	口唇部を欠損し、底部が張り出すタイプで、蓋受け端部は上方に曲がる。調整は回転ヘラ削りとヨコナデ。ヘラ記号は12・13-13と似通っている。	A赤灰色 B砂粒若干 Cやや軟質	外面底部 ヘラ記号
第41図 21	須恵器 身	8・10・ 11号横穴 前庭部	① ② ③	口縁部を欠くもので、蓋受け部が抉れた形である。体部は張りがあり、ヘラ記号は12・13-14・15、13-3などと同じである。	A黄灰色 B砂粒殆ど含まず C良	外面底部 ヘラ記号
第41図 22	須恵器 身	8・10・ 11号横穴 前庭部	① 9.0 ② ③ 3.6	蓋受けのないタイプのもので全体に器壁が厚い。調整は底部が手持ちヘラ削り、他はヨコナデ。	A黄灰色 B白黄色砂粒若干 C良	
第41図 23	須恵器 身	8・10・ 11号横穴 前庭部	① ② ③	体部下半に2条の沈線が巡るもので上半を欠く。ヘラ記号は8-10・18が同じである。調整は回転ヘラ削りとヨコナデ。	A灰色 B砂粒若干 C良好	外面底部 ヘラ記号
第41図 24	須恵器 身	8・10・ 11号横穴 前庭部	① 9.8 ② ③ 3.6	底部から体部にかけては上方に屈折し、口縁部は内湾気味になる。作りは土師器で焼成が須恵器。	A灰茶色 B粗砂粒若干 C良好	
第41図 25	須恵器 身	8・10・ 11号横穴 前庭部	① 9.4 ② ③ 3.3	体部が鋭く屈折し口縁部は直に開く。ヘラ記号は8-9に似る。屈折部が回転ヘラ削り、他はヨコナデ仕上げ。	A灰色 B細砂粒若干 C良好	外面底部 ヘラ記号
第41図 26	須恵器 身	8・10・ 11号横穴 前庭部	① 9.3 ② ③ 3.6	25と同じ作りで、底部が若干丸みを有す。調整も同じで、底部のヘラ記号は8-6・8・10・11-13と同一である。	A橙褐色 B微砂粒若干 C軟質	外面底部 ヘラ記号、赤 焼土器
第41図 27	須恵器 身	8・10・11 号前庭部 8号墓道	① 8.8 ② ③ 3.2	胴部の屈折は緩やかで稜を持たない。調整は回転ヘラ削りとヨコナデ仕上げ。	A灰色 B細砂粒少量含む C良好	
第42図 28	須恵器 身	8・10・ 11号横穴 前庭部	① ② ③	体部下半に3条の沈線が巡るタイプで底部が膨らむ。調整は回転ヘラ削りとヨコナデ。ヘラ記号は「×」印。	A黄茶色 B砂粒殆ど含まず C良	底部外面 ヘラ記号
第42図 29	須恵器 身	8・10・ 11号横穴 前庭部	① ② ③	体部下半に3条の沈線が巡るタイプで底部が膨らむ。調整は回転ヘラ削りとヨコナデ。	A灰色 B精製粘土使用 C良好	底部外面 ヘラ記号
第42図 30	須恵器 身	8・10・ 11号横穴 前庭部	① ② ③	底部片でタイプとしては28・29と同じ。ヘラ記号は「三」印。	A黄灰色 B細砂粒若干 C良	底部外面 ヘラ記号

出土土器観察表

①口径 ②底径 ③器高(cm) A色調 B胎土 C焼成

挿図土器番号	器 種	出土遺構	法 量	形 態 と 手 法 の 特 徴	色 調 ・ 胎 土 ・ 焼 成 の 観 察	備 考
第42図 31	須恵器 坏 身	8・10・ 11号横穴 前庭部	① ② ③	沈線が巡るタイプのもので不安定な底部。ヘラ記号は8・10・11-11・15と同じ。	A 白黄褐色 B 砂粒殆ど含まず C 良	底部外面ヘラ記号
第42図 32	須恵器 坏 身	8・10・ 11号横穴 前庭部	① ② ③	底部片で器壁は総じて薄手作り。ヘラ記号は「コ」印で8・10・11-13・26と同じ。	A 茶灰色 B 砂粒殆ど含まず C 良好	底部外面ヘラ記号
第42図 33	須恵器 高 坏	8・10・ 11号横穴 前庭部	① ②11.6 ③	坏部の口縁を欠くもので短い脚がつくタイプ。裾部は大きく開脚し端部が尖る。坏底部はカキ目、他はヨコナデ仕上げ。	A 橙褐色 B 赤褐色粒・細砂粒 C 軟質	似非土師須恵器(赤焼土器)
第42図 34	須恵器 高 坏	8・10・ 11号横穴 前庭部	① 6.5 ② 6.0 ③ 7.3	小型の高坏で深めの坏部をなす。体部には4条の沈線が巡り、細めの脚部がつく。裾端部は下方に肥厚する。調整は底部付近にカキ目、他はヨコナデ。	A 暗灰色 B 細砂粒若干 C 良好	脚部内面ヘラ記号
第42図 35	須恵器 高 坏	8・10・ 11号横穴 前庭部	① ② 8.2 ③	裾端部を上下に肥厚する脚部片で、調整はカキ目とヨコナデで仕上げる。	A 暗黄茶褐色 B 白色砂粒若干 C 良	
第42図 36	須恵器 高 坏	8・10・ 11号横穴 前庭部	① ②16.0 ③	柱状部が細いやや大型の脚部片で、裾部は緩く開脚し端部が上方に肥厚する。下半の2条の沈線を挟んで上段2ヶ所、下段に4ヶ所の長方形の透かし。調整は全面にカキ目。	A 灰白色 B 細砂粒若干 C 良	
第42図 37	須恵器 高 坏	8・10・ 11号横穴 前庭部	① 8.6 ② 7.3 ③ 7.8	底部から口縁部にかけて鋭く屈曲するもので、細みの柱状部に大きく開く脚部を有す。裾部は上方に跳ね上がる。体部には数条の沈線が巡り、底部はカキ目。	A 橙褐色 B 細砂粒若干 C 軟質	似非土師須恵器(赤焼土器)
第42図 38	須恵器 高 坏	8・10・ 11号横穴 前庭部	① ② 7.0 ③	34と同タイプの高坏で裾端部は大きく肥厚する。調整も同じで内面のヘラ記号は「く」印。	A 茶褐色 B 精製粘土使用 C 良	脚部内面ヘラ記号
第42図 39	須恵器 平 瓶	8・10・ 11号横穴 前庭部	① ② ③	肩部上半を欠くもので、不安定な底部を有す。回転ヘラ削りとヨコナデ仕上げ。	A 赤灰褐色 B 精製粘土使用 C 良好	
第42図 40	須恵器 平 瓶	8・10・ 11号横穴 前庭部	① 7.7 ② ③14.1	口縁部が若干内湾するもので、肩部が大きく膨らむ。胴部も大きく張り、上げ底をなす。調整はヨコナデと手持ちヘラ削りで仕上げる。	A 灰色 B 細砂粒若干 C 良好	
第42図 41	須恵器 平 瓶	8・10・ 11・18号 前庭部	① 5.8 ② ③13.2	細頸部に分類されるかも。口縁部が直立し頸部には3条の沈線が巡る。体部は扁平で肩部に2条の沈線が巡り、全面にカキ目が巡る。	A 黄褐色 B 細砂粒若干 C 軟質	似非土師須恵器(赤焼土器)
第42図 42	須恵器 提 瓶	8・10・ 11号横穴 前庭部	① 9.0 ② ③	口縁部片で内面に青海波の当具痕がある。	A 黄灰色 B 砂粒若干 C 良好	
第42図 43	須恵器 提 瓶	8・10・ 11号横穴 前庭部	①11.0 ② ③	口縁部が緩く外反し、口唇部を両方に肥厚させる。頸部には克明なヘラ記号。口縁～頸部の内外面に煤が付着。	A 茶灰色 B 細砂粒若干 C 良好	頸部ヘラ記号
第42図 44	須恵器 甗	8・10・ 11号横穴 前庭部	① 8.0 ② ③	頸部が細く内湾気味の口縁部。口縁下から頸部には数条の沈線が巡る。口縁下には8条の波状文を配する。	A 灰色 B 砂粒殆ど含まず C 良好	
第43図 45	須恵器 甗	8・10・ 11号横穴 前庭部	① ② ③	頸部上半を欠くもので、肩部にはカキ目と木口の刺突文、沈線を挟んでカキ目、下半は回転ヘラ削りで仕上げる。肩部の孔は径が7mm。	A 灰黄褐色 B 白色砂粒若干 C 良	
第43図 46	須恵器 横 瓶	8・10・ 11号横穴 前庭部	① ② ③	肩部片で、調整はカキ目と平行叩き、内面には青海波の当具痕。	A 黒灰色 B 細砂粒を少量含む C 良好	
第43図 1	須恵器 坏 蓋	10・11号 横穴前庭部	① ② ③	肩部に稜を持たないもので器高が高い。回転ヘラ削りとヨコナデで天井のヘラ記号は12・13-14、15と同じ。	A 赤灰色 B 精製粘土使用 C 良好	外面天井部ヘラ記号
第43図 2	須恵器 坏 蓋	10・11号 横穴前庭部	①10.6 ② ③ 3.2	口縁部が若干開き肩部に丸みを有すもので、調整は左回りの回転ヘラ削りとヨコナデ。	A 焦げ茶色 B 砂粒若干 C 良	外面天井部ヘラ記号
第43図 3	須恵器 坏 蓋	10・11号 横穴前庭部	①12.6 ② ③ 4.3	口縁部内面に段をなすもので、形状は1と同じである。調整は右回りの回転ヘラ削りとヨコナデ。	A 黄灰色 B 細砂粒若干 C 良好	
第43図 4	須恵器 坏 蓋	10・11号 横穴前庭部	①11.5 ② ③ 4.1	口縁部が若干開き天井部が尖り気味のもので体部の稜はない。回転ヘラ削りは右回りで、他はヨコナデ仕上げ。	A 暗灰色 B 1mm前後の砂粒含む C 良好	

出土土器観察表

①口径 ②底径 ③器高(cm) A色調 B胎土 C焼成

挿図土器番号	器 種	出土遺構	法 量	形 態 と 手 法 の 特 徴	色調・胎土・焼成 の観察	備 考
第43図 5	須恵器 坏 蓋	10・11号 横穴前庭部	①11.0 ② ③ 3.9	口縁と体部の境が屈折し、天井部までが丸みがある。 天井部のヘラ記号は「×」印。	A黄灰色 B砂粒少量 C良	
第43図 6	須恵器 坏 蓋	10・11号 横穴前庭部	①11.6 ② ③ 3.7	口縁部が若干開き緩く屈折して平坦な天井部をなす。 調整は右回りのヘラ削りとヨコナデ。	A灰色 B 2mm砂粒若干 C良	
第43図 7	須恵器 坏 蓋	10・11号 横穴前庭部	① ② ③	低い身受けの返りがあり棒状の摘みのつくもので天井 部に若干丸みを有す。摘み周囲はカキ目、他はヨコナ デ。	A暗灰色 B砂粒・雲母 C良好	
第43図 8	須恵器 坏 蓋	10・11号 横穴前庭部	① 8.6 ② ③ 2.3	低い摘みが焼成時に潰れた身受けの返りのあるもの。	A白灰色 B砂粒若干 Cやや軟質	
第43図 9	須恵器 坏 蓋	10・11号 横穴前庭部	① 8.0 ② ③ 2.3	摘みのつかない蓋で、坏身の可能性もある。調整はヨ コナデで仕上げである。	A白黄褐色 B赤褐色粒、精製粘土使用 C軟質	天井部ヘラ 記号
第43図 10	須恵器 坏 身	10・11号 横穴前庭部	① 8.4 ② ③ 2.4	短い立ち上がりで身受けの幅の広い坏身で、蓋の可能 性もある。体部は扁平で張りが無い。	A灰色 B砂粒若干 C良好	
第43図 11	須恵器 坏 蓋	10・11号 横穴前庭部	① 7.6 ② ③ 3.0	擬宝珠の摘みのあるもので身受けの返りがやや長い。 摘み周囲はカキ目、他はヨコナデで「く」字状のヘラ 記号。	A黄灰色 B精製粘土使用 Cやや軟質	天井部ヘラ 記号
第43図 12	須恵器 坏 蓋	10・11号 横穴前庭部	① ② ③	天井部の小片で「T」字状のヘラ記号。調整は回転ヘ ラ削りとヨコナデ。	A灰色 B砂粒若干 C良好	天井部ヘラ 記号
第43図 13	須恵器 坏 身	10・11号 横穴前庭部	①11.6 ② ③ 5.1	長めの内傾する口縁部で蓋受けは上向き。体部から底 部は丸みがある。回転ヘラ削りとヨコナデ。	A茶灰色 B 1mm砂粒・雲母 Cやや軟質	
第43図 14	須恵器 坏 身	10・11号 横穴前庭部	①10.1 ② ③ 4.5	若干反り気味で長い口縁部をもち、短い蓋受けを作る。 体部は張りがあり、器高が高い。回転ヘラ削りとナデ。	A黄灰色 B精製粘土使用 C良	
第43図 15	須恵器 坏 身	10・11号 横穴前庭部	①10.1 ② ③ 3.1	短く内傾する口縁部で体部も扁平な作り。調整は底部 が手持ちヘラ削り、他はヨコナデ。	A暗灰色 B 1mm砂粒と雲母やや多い C良好	
第43図 16	須恵器 坏 身	10・11号 横穴前庭部	①10.6 ② ③ 4.0	口縁部は緩く立ち上がり、蓋受けは上方に延びる。体 部は屈折して稜をなす。	A青灰色 B砂粒やや多い C良好	
第43図 17	須恵器 坏 身	10・11号 横穴前庭部	① 9.2 ② ③ 3.7	器壁の薄い作りで、口縁部が反り気味に立ち上がる。 ヘラ記号は「く」印。	A赤灰色 B砂粒若干 Cやや軟質	底部外面ヘ ラ記号
第43図 18	須恵器 坏 身	10・11号 横穴前庭部	① 9.6 ② ③ 3.0	口縁部の立ち上がりの少ない扁平の体部を有すもので 底部は平底気味。底部にはやや複雑なヘラ記号。	A黄灰色 B砂粒少量 C良	底部外面ヘ ラ記号
第43図 19	須恵器 坏 身	10・11号 横穴前庭部	① 9.2 ② ③ 2.5	短い立ち上がりの口縁部で体部の張りが少なく、底部 は平底。	A白黄褐色 B赤褐色粒、精製粘土 C軟質	底部外面ヘ ラ記号
第43図 20	須恵器 坏 身	10・11号 横穴前庭部	① 9.5 ② ③ 3.4	蓋受けのないタイプで屈折部に丸みがある。3条のヘ ラ印。	A暗灰色 B 1mm砂粒若干 C良好	底部外面ヘ ラ記号
第44図 21	須恵器 坏 身	10・11号 横穴前庭部	① 9.8 ② ③ 3.4	口唇部を僅かに外反させ、体部に2条の沈線が巡る。 調整は右回りの回転ヘラ削りとヨコナデ。ヘラ記号は 「×」印。	A暗灰色 B 0.5～2mmの砂粒少量 C良好	底部外面ヘ ラ記号
第44図 22	須恵器 坏 身	10・11号 横穴前庭部	① 9.6 ② ③ 2.9	底部の作りが厚く屈折して口縁部が上方に延びる。調 整はすべて回転ナデ。底部のヘラ記号は不明瞭。	A灰色 B砂粒若干 C良好	底部外面ヘ ラ記号
第44図 23	須恵器 坏 身	10・11号 横穴前庭部	① ② ③	底部の小片で、ヘラ記号は「#」印。	A黄褐色 B赤褐色粒・雲母・砂粒若干 C軟質	底部ヘラ記 号、似非土 師須恵器
第44図 24	須恵器 高 坏	10・11号 横穴前庭部	① ② 7.2 ③	口縁部が内湾し坏部の深いもので、体部に幅広の4条 の沈線が巡る。調整は底部がカキ目、他はヨコナデ。	A青灰色 B精製粘土 C良好	外面一部煤 付着

出土土器観察表

①口径 ②底径 ③器高(cm) A色調 B胎土 C焼成

挿図土器番号	器 種	出土遺構	法 量	形 態 と 手 法 の 特 徴	色調・胎土・焼成 の観察	備 考
第44図 25	須恵器 高 坏	10・11号 横穴前庭部	① ② 7.0 ③	小型でスマートな脚部を有すもので、裾部は大きく開き下方と外側に延びる。底部にはカキ目、脚下半には3条の沈線が巡る。	A 灰色 B 精製粘土使用 C 良好	
第44図 26	須恵器 高 坏	10・11号 横穴前庭部	① 11.4 ② ③	口縁部を欠き体部に沈線の巡るもの。脚部は短く裾部が大きく開き端部が下方に肥厚。調整は底部にカキ目、他はヨコナデ。	A 黒灰色 B 精製粘土使用 C 良好	
第44図 27	須恵器 壺	10・11・ 14号墓道 と前庭部	① ② ③	頸部上半部を欠く。体部は球状を呈し、肩部から上半部にカキ目下半部はヘラ削り仕上げ。	A 灰色 B 砂粒少量 C 良好	
第44図 28	須恵器 直口壺	10・11号 横穴前庭部	① 6.7 ② ③	口縁部を若干内湾させ、直立する頸部をなす。肩部は大きく張り胴部下半は欠損する。頸部の一部を除いてカキ目、肩部には2条の沈線、木口の刺突文を配する。	A 茶灰色 B 精製粘土 C 良好	
第44図 29	須恵器 長頸壺	10・11号 横穴前庭部	① 11.2 ② ③	緩く外反する口縁部片で2条の沈線が巡る。ヨコナデ仕上げ。	A 茶灰色 B 砂粒若干 C 良好	
第44図 30	須恵器 甕	10・11号 横穴前庭部	① 20.1 ② ③	朝顔状に外反する口縁部で口唇部を外側に肥厚させる。肩部は張り、以下は欠損。肩部がカキ目、他はヨコナデで内面に青海波の当具痕あり。	A 黒灰色 B 1～3mm砂粒少量 C 良好	
第44図 31	須恵器 甕	10・11号 横穴前庭部	① 23.6 ② ③	反り気味に外反する口縁部で口唇部が若干肥厚する。	A 灰色 B 2mm前後の砂粒やや多い C 良好	
第44図 32	須恵器 甕	10・11号 横穴前庭部	① 8.9 ② ③ 14.0	複合口縁状の口縁部で口唇部は尖る。頸部は細まり2条の沈線を境に波状文とカキ目を巡らす。カキ目は肩部と胴部にも巡り、肩部には木口刺突文。肩部には整美な孔を穿つ。	A 黄灰色 B 砂粒若干 C やや軟質	
第44図 33	須恵器 甕	10・11号 横穴前庭部	① 11.0 ② ③	直上する口縁部で3条の凹線が巡る。	A 灰赤色 B C やや軟質	
第44図 34	須恵器 甕	10・11号 横穴前庭部	① ② ③	口縁と胴部下半を欠く。頸部中央に幅広沈線を巡らし、上下にカキ目、その上から荒い波状文を配する。肩部はカキ目と木口刺突文を密に配する。	A 灰色 B 精製粘土 C 良好	
第45図 35	須恵器 甕	10・11号 横穴前庭部	① ② ③	頸部片で急激に細まる凸帯と沈線間には波状文を密に配する。	A 黄灰色 B 砂粒・雲母 C 軟質	赤焼土器
第45図 36	須恵器 器 台	10・11号 横穴前庭部	① ② ③	脚部片で一方は透かし部。5～7条の沈線が巡り、その間にやや荒い波状文を配する。	A 灰色 B 砂粒若干含む C 良好	
第45図 37	須恵器 提 瓶	10・11号 横穴前庭部	① 6.0 ② ③	小型の口縁部片で、口唇部を肥厚させる。把手部はない。	A 黄褐色 B 精製粘土 C 軟質	似非土師須恵器(赤焼土器)
第45図 38	須恵器 提 瓶	10・11号 横穴前庭部	① 8.6 ② ③	頸部が短く口唇部を上方に摘み上げるタイプの口縁部片。	A 灰色 B 砂粒少量 C 良	
第45図 39	須恵器 提 瓶	10・11号 横穴前庭部	① ② ③	小型の部類で現状では把手は見当たらない。片方が回転ヘラ削りでもう一方が薄く沈線が残る。	A 灰色 B 精製粘土 C 良好	
第45図 40	須恵器 提 瓶	10・11号 横穴前庭部	① ② ③	胴部片で、一方が回転ヘラ削りの上から「×」印。もう一方が沈線間に木口刺突文。側面にはカキ目。	A 黄灰色 B 砂粒やや含む C やや軟質	側面ヘラ記号
第45図11-1	須恵器 坏 蓋	11号横穴 正面前庭部	① ② ③	天井部が尖り気味の破片で、総じて器壁が薄い。調整は左回りのヘラ削りとヨコナデ。ヘラ記号はやや複雑で8-15と同じ。	A 黄茶褐色 B 精製粘土使用 C やや軟質	天井部ヘラ記号
第45図11-2	須恵器 坏 蓋	11号横穴 正面前庭部	① 5.4 ② ③ 3.6	口縁部が垂直に延び、体部から天井部は丸く作る。口縁内面は段をなす。天井部のヘラ記号は11-8と同じ。	A 灰黒色 B 1mm砂粒若干 C 良好	天井部ヘラ記号
第45図11-3	須恵器 坏 蓋	11号横穴 正面前庭部	① 8.6 ② ③ 2.8	天井部が一部欠損するが、身受けの返りのある摘みがつくタイプであろう。器高がやや高い。回転ヘラ削りとヨコナデ。	A 灰色 B 砂粒極少量 C 良好	
第45図11-4	須恵器 坏 蓋	11号横穴 正面前庭部	① 8.4 ② ③ 3.0	宝珠の摘みがつき身受けの返りのあるタイプで、調整は右回りの回転ヘラ削りとヨコナデ仕上げ。	A 灰黒色 B 砂粒多い C 良好	

出土土器観察表

①口径 ②底径 ③器高(cm) A色調 B胎土 C焼成

挿図土器番号	器 種	出土遺構	法 量	形 態 と 手 法 の 特 徴	色調・胎土・焼成 の観察	備 考
第45図11-5	須恵器 坏 蓋	11号横穴 正面前庭部	① 8.0 ② ③ 2.0	浅い身受けの返りのあるもので摘みはない。左回りの 回転ヘラ削りとヨコナデ仕上げで、内面のヘラ記号は 「キ」印。	A 灰褐色 B 砂粒多く含む C 良	内面天井部 ヘラ記号
第45図11-6	須恵器 坏 身	11号横穴 正面前庭部	①10.0 ② ③ 4.3	整美な坏身でやや長めに立ち上がる口縁部。体部は丸 みをなす。	A 茶灰色 B 細砂粒若干 C 良	底部外面ヘ ラ記号
第45図11-7	須恵器 坏 身	11号横穴 正面前庭部	① 9.9 ② ③ 3.2	短く立ち上がる口縁部で体部は張りがあり、底部は未 調整で器壁が厚い。底部には薄くヘラ記号が残るが不 明瞭。	A 白黄褐色 B 砂粒・赤褐色粒 C やや軟質	底部外面ヘ ラ記号
第45図11-8	須恵器 坏 身	11号横穴 正面前庭部	① 9.3 ② ③ 3.8	内傾し反り気味に立ち上がる口縁部で体部はやや扁平 な作り。右回りの回転ヘラ削りとヨコナデ。11-2と 同じヘラ記号でセットであろう。	A 灰黒色 B 砂粒若干 C 良好	底部に蓋 2 と同じヘラ 記号
第45図11-9	須恵器 坏 身	11号横穴 正面前庭部	①10.2 ② ③ 3.1	蓋受け部が水平で短く立ち上がる口縁部。体部は直で 底部が厚く平坦で未調整。	A 淡橙褐色 B 微砂粒若干・赤褐色粒 C 軟質	似非土師須 恵器 (赤焼 土器)
第45図11-10	須恵器 坏 身	11号横穴 正面前庭部	① 4.7 ② ③ 3.7	底部から口縁部にかけて緩く湾曲し、体部に 3 条の沈 線が巡る。右回りの回転ヘラ削りとヨコナデ仕上げ。	A 黒灰色 B 0.5mm 砂粒若干 C 良好	
第45図11-11	須恵器 坏 身	11号横穴 正面前庭部	① 9.9 ② ③ 3.5	底部に段をなし、体部が屈折し若干外反する口縁部。 調整はすべてヨコナデ。ヘラ記号が不明瞭。	A 茶褐色 B 砂粒を多く含む C やや軟質	外面底部ヘ ラ記号
第45図11-12	須恵器 高 坏	11号横穴 正面前庭部	① ② 9.6 ③	開脚度の鈍い脚部片で端部を下方に肥厚させる。	A 黒灰色 B 砂粒を少量含む C 良好	
第45図11-13	須恵器 高 坏	11号横穴 正面前庭部	① ② ③	体部上半と脚裾部を欠損する焼成土師質、技法須恵器 の破片で、柱状部を一部充填する。調整はヨコナデ。	A 橙褐色 B 赤褐色粒・砂粒若干 C 軟質	似非土師須 恵器 (赤焼 土器)
第45図11-14	須恵器 高 坏	11号横穴 正面前庭部	①11.1 ② ③	蓋受けのあるもので、内傾し中央で立ち上がる口縁部 を有す。蓋受け部は上方に曲がり、体部が深い。脚の 径は細い。底部がカキ目、他はヨコナデで仕上げる。	A 緑灰色 B 砂粒若干 C 良好	取上NO.1
第46図11-15	須恵器 高 坏	11号横穴 正面前庭部	① ②11.2 ③	22-5・3-30と同じタイプの高坏で坏部の深いもの であるが欠損している。脚部には段をなし、端部が尖 る。調整は底部がカキ目、裾部は複数の沈線が巡る。	A 灰色 B 砂粒やや多く含む C 良好	
第46図11-16	須恵器 細頸壺 か提瓶	11号横穴 正面前庭部	① 8.9 ② ③	頸部が直口し僅かに外反する口縁部で口唇部を上方に 摘み上げ肥厚させる。肩部以下を欠損する。肩部のヘ ラ記号は縦「ニ」印。	A 灰色 B 砂粒若干 C 良好	頸部にヘラ 記号
第46図11-17	須恵器 甕	11号横穴 正面前庭部	①14.8 ② ③	小型品で朝顔状に外反する口縁部に、口唇部を複雑に 肥厚させ肩部以下を欠く。	A 白黄茶色 B 細砂粒若干 C やや軟質	
第46図11-18	須恵器 甕	11号横穴 正面前庭部	①14.0 ② ③	17ほどの外反度はなく、口唇部を摘み上げるもので肩 部以下を欠く。頸部のヘラ記号は「×」印。	A 白黄茶色 B 細砂粒若干 C やや軟質	頸部にヘラ 記号
第46図11-19	須恵器 横 瓶	11号横穴 正面前庭部	① 7.4 ② ③	細頸で口唇部を上下に肥厚させるもので、縦方向に 2 条一対の沈線が巡る。体部はナデ仕上げ。	A 灰黄色 B 砂粒を若干含む C やや軟質	
第46図11-20	須恵器 甕	11号横穴 正面前庭部	①23.0 ② ③	短い頸部に内湾する口縁部をなすもので、肩部は張る が以下を欠損する。擬格子の叩キと青海波の当具痕。 頸部内面に小さな指頭痕がある。	A 灰黒色 B 砂粒やや多く含む C 良好	
第46図12-1	須恵器 坏 蓋	12号横穴 前庭部	①13.0 ② ③ 4.5	口縁部がやや外に開くタイプで、内側に段をなす。体部 は屈折し天井部が若干尖る。天井のヘラ記号は複雑。	A 灰色 B 砂粒若干含む C 良好	外面天井部 にヘラ記号
第46図12-2	須恵器 坏 蓋	12号横穴 前庭部	①12.8 ② ③ 5.0	口縁の内側に段をなし口唇部が尖る。体部は丸みがあり、 天井のヘラ記号は10・11-9に似る。左回りのヘ ラ削りとヨコナデ。	A 橙褐色 B 1.5mmの砂粒含む C 軟質	外面天井部 にヘラ記号 赤焼土器
第46図12-3	須恵器 坏 蓋	12号横穴 前庭部	①12.7 ② ③ 4.4	口縁内面に若干の段をなし、体部は丸く屈折しない。 調整は左回りのヘラ削りとヨコナデ。	A 灰色 B 精製粘土使用 C 良好	
第46図12-4	須恵器 坏 蓋	12号横穴 前庭部	①12.1 ② ③ 3.8	若干開き気味の口縁部で体部に 2 条の沈線が巡る。左 回りのヘラ削りとヨコナデ。	A 灰色 B 細砂粒若干 C 良好	

出土土器観察表

①口径 ②底径 ③器高(cm) A色調 B胎土 C焼成

挿図土器番号	器 種	出土遺構	法 量	形 態 と 手 法 の 特 徴	色調・胎土・焼成 の観察	備 考
第46図12-5	須恵器 坏 蓋	12号横穴 前庭部	①12.1 ② ③ 3.8	やや扁平な蓋で口縁内面に段を有す。体部は丸く作り、左回りの回転ヘラ削りとヨコナデ。ヘラ記号は8-8、12-12、13-10、15・16-5などと同じである。	A灰色 B砂粒若干含む C良好	外面天井部にヘラ記号
第46図12-6	須恵器 坏 蓋	12号横穴 前庭部	①13.5 ② ③ 4.4	若干焼き歪みのあるもので、口縁部が僅かに開き尖る。口縁上半が屈折し丸みのある体部をなす。総じて器壁は薄く、左回りの回転ヘラ削りとヨコナデ仕上げ。ヘラ記号は「X」印。	A灰黄色 B大粒砂粒を含む Cやや軟質	外面天井部にヘラ記号
第46図12-7	須恵器 坏 蓋	12号横穴 前庭部	①10.4 ② ③ 2.9	扁平な摘みのつく身受けの返りのあるタイプで、体部も扁平に作る。天井部はカキ目、他はヨコナデ。	A灰色 B精製粘土使用 C良好	
第46図12-8	須恵器 坏 蓋	12号横穴 前庭部	① 9.6 ② ③ 4.2	やや歪んだ台形状の摘みを有すもので、天井部は高く身受けの返りのあるタイプ。天井部がカキ目、他はヨコナデ。	A灰黄色 B精製粘土使用 Cやや軟質	
第46図12-9	須恵器 坏 身	12号横穴 前庭部	①12.2 ② ③	蓋受けのあるもので、内傾し長く立ち上がる口縁部。体部は張りがあるが底部を欠く。左回りのヘラ削りとヨコナデ仕上げ。	A灰色 B粗砂粒若干 C良好	
第46図12-10	須恵器 坏 身	12号横穴 前庭部	①11.6 ② ③ 5.1	蓋受けを明瞭に作り、口縁部が若干内湾するもので体部は丸く、総じて器壁が薄い。左回りの回転ヘラ削りとヨコナデ仕上げ。ヘラ記号は松葉状。	A暗灰色 B砂粒若干 C良好	外面底部ヘラ記号、取上NO.2
第47図 11	須恵器 坏 身	12号横穴 前庭部	①11.8 ② ③ 4.7	焼成が土師質で、外面に丹を塗布する珍しいもので、技法は須恵器である。右回りのヘラ削りとヨコナデ。底部のヘラ記号は長めの鳥足跡状で、12-13、15・16-5と同じである。	A橙褐色 B赤褐色粒・雲母 C軟質	外面丹塗り取上NO.2赤焼土器
第47図 12	須恵器 坏 身	12号横穴 前庭部	①10.5 ② ③ 4.5	長く上方に立ち上がる口縁部で、蓋受けも明瞭に作る。左回りの回転ヘラ削りとヨコナデ。底部には鳥足跡状のヘラ記号。	A灰黄褐色 Bやや大粒砂粒含む Cやや軟質	外面底部ヘラ記号、取上NO.4
第47図 13	須恵器 坏 身	12号横穴 前庭部	①12.0 ② ③ 4.3	口縁が内傾し端部が上方に立ち上がるもので、体部を扁平に作り蓋受け部は水平。右回りの回転ヘラ削りとヨコナデ。ヘラ記号は長めの鳥足跡状。	A橙褐色 B 2mm砂粒使用 C軟質	底部ヘラ記号、赤焼土器取上NO.2
第47図 14	須恵器 坏 身	12号横穴 前庭部	①10.7 ② ③ 4.6	口縁部の内傾度が高く端部が上方に立ち上がるもので、蓋受け部も上方に延びる。体部は丸みがあり、底部のヘラ記号は「く」字状。	A灰色 B精製粘土使用 C良	外面底部ヘラ記号、取上NO.3
第47図 15	須恵器 坏 身	12号横穴 前庭部	① 8.0 ② ③ 2.5	小型の製品で、口縁部は短く上方に立ち上がり、蓋受け部はやや垂れ気味。体部は扁平で、不定方向のヘラ削りとヨコナデ。底部には不明瞭な記号。	A緑灰色 B 2mm砂粒含む C良好	外面底部ヘラ記号
第47図 16	須恵器 坏 身	12号横穴 前庭部	① 8.6 ② ③ 2.7	立ち上がりの短い口縁部をなし、蓋受け部は上方に延びる。	A暗灰色 B粗砂粒若干 C良好	外面底部ヘラ記号、取上NO.3
第47図 17	須恵器 坏 身	12号横穴 前庭部	① 9.8 ② ③ 5.4	体部から口縁部が直に開き、丸い底部を有す。体部には数条の沈線が巡る。	A灰黄色 B精製粘土使用 C良	
第47図 18	須恵器 高 坏	12号横穴 前庭部	① 9.8 ② ③	数条の沈線が巡る丸みのある坏部で脚を欠く。12と同じような脚がつくのであろう。底部はカキ目、他はヨコナデ仕上げ。	A灰色 B細砂粒若干含む C良好	
第47図 19	須恵器 坏 身	12号横穴 前庭部	① 9.6 ② ③ 3.3	やや扁平な蓋受けのないもので、体部が屈折し口縁部が上方に開く。ヘラ記号は「三」印。	A暗黄茶褐色 B大粒砂粒含む Cやや軟質	外面底部ヘラ記号
第47図 20	須恵器 高 坏	12号横穴 前庭部	① ② ③	焼成が土師質。坏部上半と脚下半を欠く。風化が激しい。	A明橙色 B精製粘土使用 C軟質	似非土師須恵器(赤焼土器)
第47図 21	須恵器 高 坏	12号横穴 前庭部	① 9.7 ② 7.4 ③ 9.8	若干焼き歪みのあるもので、坏部は深く体部に数条の沈線が巡り底部にカキ目。脚はスマートで開脚度は鈍く端部が肥厚。	A灰色 Bやや大粒砂粒を含む C良好	全面灰被り
第47図 22	須恵器 高 坏	12号横穴 前庭部	① ② ③	スマートな脚部を有し柱状部が充填されるタイプ。坏部の大半を欠くが底部にカキ目が巡る。	A明橙色 B赤褐色粒・良好 C軟質	似非土師須恵器(赤焼土器)
第47図 23	須恵器 高 坏	12号横穴 前庭部	① ② ③	土師質の脚部片で、下半に3条の沈線が巡りヨコナデ仕上げ。内面絞り痕。柱状部は空中作り。	A明橙色 B赤褐色粒・良好 C軟質	似非土師須恵器(赤焼土器)
第47図 24	須恵器 細頸壺	12号横穴 前庭部	① 4.0 ② ③	提瓶の小型品かも。口唇部を肥厚させ器壁が薄い。	A黒灰色 B精製粘土使用 C良好	

出土土器観察表

①口径 ②底径 ③器高(cm) A色調 B胎土 C焼成

挿図土器番号	器 種	出土遺構	法 量	形 態 と 手 法 の 特 徴	色調・胎土・焼成 の観察	備 考
第47図 25	須恵器 細頸壺	12号横穴 前庭部	① 4.8 ② ③	口縁部を幅広に肥厚させるもので、提瓶に分類される かも。	A 明橙色 B 赤褐色粒・良好 C 軟質	似非土師須 恵器(赤焼 土器)
第47図 26	須恵器 甕	12号横穴 前庭部	① 14.8 ② ③	小型の口縁部片で、口唇部を上下に肥厚。頸部はカキ 目、頸部のヘラ記号は縦「三」印。	A 黄灰色 B 精製粘土使用 C 良好	頸部にヘラ 記号
第47図 27	須恵器 直口壺	12号横穴 前庭部	① 5.0 ② ③ 9.9	短く内傾する口縁部で肩部から胴部は張る。ヨコナデ と左回りの回転ヘラ削り。	A 灰色 B やや大粒の砂粒含む C 良好	
第47図 28	須恵器 提 瓶	12号横穴 前庭部	① ② ③	口縁部と胴部下半を欠くもので肩部には把手を貼付す る。胴部は回転ヘラ削りの後カキ目。	A 灰色 B 砂粒若干 C 良好	
第48図 1	須恵器 坏 蓋	12・13号 横穴前庭部	① 12.4 ② ③ 4.6	口縁内面に沈線が巡り、体部は丸く器高の高いもの。 天井には不明瞭なヘラ記号。	A 暗灰色 B 精製粘土 C 良好	天井部ヘラ 記号
第48図 2	須恵器 坏 蓋	12・13号 横穴前庭部	① 10.4 ② ③ 3.5	天井と体部の境が屈折し、天井部は未調整。ヘラ記号 ははっきりしない。	A 灰黒色 B 1mm砂粒若干 C 良好	天井部ヘラ 記号
第48図 3	須恵器 坏 蓋	12・13号 横穴前庭部	① 13.4 ② ③ 3.8	やや扁平な作りで、口縁内面が段をなす。開き気味の 口縁部の上半は1条の沈線が巡る。右回りのヘラ削り とヨコナデ仕上げ。	A 黄灰色 B 砂粒若干 C 良好	
第48図 4	須恵器 坏 蓋	12・13号 横穴前庭部	① 14.9 ② ③ 4.3	口縁内面が段をなし、口唇部が尖る。天井から体部に かけては丸く作り、天井のヘラ記号は「二」印。	A 灰色 B 1~2mm砂粒少量 C 良好	天井部ヘラ 記号
第48図 5	須恵器 坏 蓋	12・13号 横穴前庭部	① 12.3 ② ③	下方に延びる口縁部で内側に沈線が巡る。体部は撫で 肩で、ヘラ記号は「×」か鳥足跡状。	A 黄茶灰色 B 砂粒若干 C 良好	天井部ヘラ 記号
第48図 6	須恵器 坏 蓋	12・13号 横穴前庭部	① 12.0 ② ③ 3.5	口縁部が屈折し端部が若干開く。全体に扁平な作りで 器壁が薄く天井全面にヘラ記号。右回りのヘラ削りと ヨコナデ。	A 暗灰色 B 粗砂粒若干 C 良好	天井部ヘラ 記号
第48図 7	須恵器 坏 蓋	12・13号 横穴前庭部	① ② ③	膨らみ気味の蓋の天井部片で、ヘラ記号はほぼ全面。	A 黄灰色 B 砂粒少量 C 良好	天井部ヘラ 記号
第48図 8	須恵器 坏 蓋	12・13号 横穴前庭部	① 13.3 ② ③ 4.3	口縁内面が段をなし、口唇部が尖る。体部には2条の 沈線が巡り左回りのヘラ削りとヨコナデ。天井のヘラ 記号は「×」印が2箇所。	A 黄茶灰色 B 砂粒若干 C 良好	天井部ヘラ 記号
第48図 9	須恵器 坏 蓋	12・13号 横穴前庭部	① 9.0 ② ③ 2.7	摘みのつかない身受けの返りのあるタイプで薄手作り。右 回りのヘラ削りとヨコナデ仕上げ。天井のヘラ記号は「二」 印。	A 黄灰色 B 1mm砂粒若干 C 良好	天井部ヘラ 記号
第48図 10	須恵器 坏 蓋	12・13号 横穴前庭部	① 9.2 ② ③ 3.2	身受けの返りの浅い作りのもので、体部と天井部の境 が屈折し天井は平坦に作る。ヘラ記号は天井全面に 「一」印。	A 黄灰色 B 砂粒若干 C やや軟質	天井部ヘラ 記号
第48図 11	須恵器 坏 蓋	12・13号 横穴前庭部	① 9.0 ② ③ 3.2	中央の窪んだ算盤玉状の摘みのつく丸みのある蓋で、 身受けの返りを深く作る。摘み周囲はカキ目、他はヨ コナデ。	A 灰黄色 B 粗砂粒若干 C 良好	
第48図 12	須恵器 坏 身	12・13号 横穴前庭部	① 10.0 ② ③ 4.3	基部が屈折し立ち上がる口縁部で、蓋受けも上方に延 びる。体部は丸みがあり、総じて薄手作り。ヘラ記号 は細く不明瞭。左回りのヘラ削り。	A 灰白色 B 細砂粒若干 C 良好	
第48図 13	須恵器 坏 身	12・13号 横穴前庭部	① 10.7 ② ③ 4.3	口縁の途中が屈折し上方に立ち上がる。蓋受けは細く上 方に延びる。体部はやや扁平で、左回りのヘラ削り。ヘラ記 号は「乙」状で8-17、8・10・11-20、15-3などと似る。	A 茶灰色 B 粗砂粒若干 C 良好	底部外面ヘ ラ記号
第48図 14	須恵器 坏 身	12・13号 横穴前庭部	① 11.7 ② ③ 4.2	内傾する口縁部に端部が上方に立ち上がる。蓋受けは 水平に近く、体部は扁平な作り。ヘラ記号は12・13- 15、13-3、15・16-8、17-18などと同じ。	A 灰黒色 B 細砂粒若干 C 良好	外面底部ヘ ラ記号
第48図 15	須恵器 坏 身	12・13号 横穴前庭部	① ② ③	底部片で14と同じヘラ記号で、同一窯の製作か。	A 淡赤灰色 B 砂粒若干 C 良好	外面底部ヘ ラ記号
第48図 16	須恵器 坏 身	12・13号 前庭部・ 9号墓道	① 10.2 ② ③ 3.6	総じて器壁の薄いもので内傾する口縁部の途中から上 方に立ち上がる。蓋受けは上方に曲がり明瞭。右回り のヘラ削りとヨコナデ仕上げ。複雑なヘラ記号。	A 青灰色 B 細砂粒少量 C 良好	外面底部ヘ ラ記号

出土土器観察表

①口径 ②底径 ③器高(cm) A色調 B胎土 C焼成

挿図土器番号	器 種	出土遺構	法 量	形 態 と 手 法 の 特 徴	色調・胎土・焼成 の観察	備 考
第48図 17	須恵器 坏 身	12・13号 横穴前庭部	①10.4 ② ③ 4.3	口縁中央が若干屈折して長く上方に立ち上がる。蓋受けは長く、体部が扁平でやや尖り気味。	A暗灰色 B細砂粒やや多い C良好	
第48図 18	須恵器 坏 身	12・13号 横穴前庭部	① ② ③	底部の小片で、右回りのヘラ削り仕上げ。	A黄灰色 B砂粒少ない C良好	外面底部に ヘラ記号
第49図 19	須恵器 高 坏	12・13号 横穴前庭部	①11.9 ② ③	蓋受けのあるもので、内傾する口縁部はやや長めで体部から底部にかけては尖り気味で器壁が厚い。脚部は接合面で剥離。底部にはカキ目。	A灰黄褐色 B砂粒若干 C良好	
第49図 20	須恵器 高 坏	12号横穴 前庭部・ 13号墓道	①12.4 ②15.6 ③18.5	焼き歪みの激しい蓋受けのあるもので、柱状部は空中、裾端部は下方に肥厚。底部にカキ目。脚中央に4条の沈線を挟んでカキ目が巡る。	A灰色 B細砂粒若干 C良好	
第49図 21	須恵器 高 坏	12・13号 横穴前庭部	①12.5 ② ③	無蓋の高坏で、口縁を若干外反させ、体部に2条の凸帯を巡らしたもので、脚部を欠損する。底部にはカキ目の上から木口刺突文を配する。	A黄灰色 B1mm砂粒若干 Cやや軟質	
第49図 22	須恵器 高 坏	12号横穴 前庭部・ 15号玄室	① 9.3 ② ③	底部から体部にかけて鋭く屈折させ、口縁部を僅かに内湾するもの。脚部を欠き底部に刺突文を配する。他はヨコナデ。	A黒灰色 B0.5mm砂粒若干 C良好	
第49図 23	須恵器 高 坏	12・13号 横穴前庭部	① ② 9.4 ③	体部上半を欠く。底部には沈線を巡らし、スマートな脚中央には2条の沈線。裾部の開きは鈍く、端部を下方に肥厚させる。内外面に絞り痕。	A灰黄白色 B細砂粒若干 Cやや軟質	
第49図 24	須恵器 高 坏	12号横穴 前庭部・ 13号墓道	①11.9 ② ③	体部に強いヨコナデによる2条の凸帯を作り出す。底部にはカキ目の後に木口刺突文を配する。脚部はスマートでカキ目2ヶ所、中央に2条の沈線が巡る。	A灰黄褐色 B砂粒少し含む C良好	
第49図 25	須恵器 高 坏	12・13号 横穴前庭部	①13.1 ② ③	口縁部が僅かに内湾し、強いヨコナデで凹凸を作り飾る。底部付近は緩く屈折し、カキ目を施す。坏部の作りは深い。脚は細みのものがつく。	A黄褐色 B赤褐色粒 C軟質	似非土師須 恵器(赤焼 土器)
第49図 26	須恵器 甕	12・13号 横穴前庭部	①22.0 ② ③	口縁部が緩く外反し、口唇部を摘み上げるように肥厚させる。肩部はやや張り、以下は欠損する。調整は頸部上半がヨコナデ、肩部は叩きの上からカキ目、内面は青海波の当具痕。	A黄灰色 B細砂粒少量含む C良好	頸部にヘラ 記号
第49図 27	須恵器 直口壺	12・13号 横穴前庭部	① 7.6 ② ③	胴下半を欠く。短く内傾する口縁部で胴中央にはカキ目状の装飾を施す。	A灰黄色 B細砂粒若干 C良好	
第49図 28	須恵器 細頸壺	12・13号 前庭部・ 15号玄室	① ② ③	頸部上半を欠く。肩部には回転による細かな沈線が巡る。胴中央から屈折する。焼成は土師質。	A橙褐色 B精製粘土使用 C軟質	似非土師須 恵器(赤焼 土器)
第49図 29	須恵器 細頸壺	12・13号 横穴前庭部	① 4.2 ② ③ 7.2	小型の製品で口縁部に「M」字状の凸帯を巡らせ、肩部にカキ目、直下に細い沈線間に木口刺突文、胴部にカキ目を巡らせ、底部は不定方向のヘラ削り。	A灰黄色 B細砂粒若干 C良好	胴下半部に ヘラ記号、 取上NO.6
第49図 30	須恵器 無頸壺	12号前庭 部・13号 横穴墓道	① 5.8 ② ③	珍しい器種で、肩部から口縁部は内傾し口唇部は尖る。胴部両端には稜を付け、底部を欠く。口縁部以外はカキ目が巡る。	A灰黄色 B粗砂粒若干 C良好	
第49図 31	須恵器 甕	12・13号 横穴前庭部	①11.0 ② ③	焼き膨れの多いやや歪な口縁部片で、二重口縁部状に作り口唇部が尖る。口縁下には波状文と浅い沈線が巡る。頸部はかなり細みのもの。	A黄灰色 B砂粒若干 C良好	
第49図 32	須恵器 甕	12・13号 横穴前庭部	①11.0 ② ③	口縁端部を若干外反させ屈折部分に凸帯と沈線が巡る。直下には2単位の波状文を配する。他はヨコナデ仕上げ。	A茶灰色 B1mm前後砂粒若干 C良好	
第49図 33	須恵器 甕	12・13号 横穴前庭部	①10.8 ② ③	口縁部を上方に屈折させ、屈折下に1条の凸帯を巡らす。頸部には波状文を密に配する。	A灰色 B精製粘土使用 C良好	
第50図 34	須恵器 甕	12・13号 横穴前庭部	① ② ③	強く張る肩部に木口刺突文を配する。直下には整った孔を穿つ。体部は球状で器壁が厚い。土師質で部分的に不定方向のハケが残る。	A白黄褐色 B細砂粒若干 Cやや軟質	
第50図 35	須恵器 甕	12・13号 横穴前庭部	① ② ③	整った体部で扁平球状を呈する肩部にはカキ目、木口刺突文、沈線を巡らし、やや大きめの孔を穿つ。器壁を厚く作る。	A淡橙褐色 B赤褐色粒・細砂粒若干 C軟質	似非土師須 恵器(赤焼 土器)
第50図 36	須恵器 提 瓶	12・13号 横穴前庭部	① ② ③	頸部上半を欠くもので、肩部にカキ目、片方面が回転ヘラ削り、もう一方と側面が沈線とカキ目を巡らす。	A黒灰色 B細砂粒やや多い C良好	外面灰被り

調査出土土器観

①口径 ②底径 ③器高(cm) A色調 B胎土 C焼成

挿図土器番号	器 種	出土遺構	法 量	形 態 と 手 法 の 特 徴	色調・胎土・焼成 の観察	備 考
第50図 37	須恵器 提 瓶	12・13号 横穴前庭部	① ② ③	整った提瓶で器壁を薄く作り、伏せた部分も薄い円盤 貼りつけ。口縁部を欠き、肩部に横方向のカキ目、体 部全面にもカキ目を施し、側面は等間隔に巡らす。	A 黄茶灰色 B 粗・細砂粒若干 C やや軟質	取上NO.5
第50図13-1	土師器 高 杯	13号横穴 前庭部	①13.6 ②10.0 ③10.1	祭祀に使われたもので、内外面に丹を塗布する。僅かに内湾す る口縁部で、体部は丸く脚は短い。裾部の開脚度は鈍い。調整は 外面がヘラ磨きと底部に放射状の装飾がある。脚部内面は削り。	A 黄褐色 B 精製粘土使用 C 良好	内外面丹塗 り
第50図13-2	須恵器 杯 蓋	13号横穴 墓道	①12.2 ② ③ 3.7	扁平な作りのもので、口縁部内面に沈線が巡る。右回 りのヘラ削りとヨコナデ仕上げ。天井のヘラ記号は 「二」印。	A 灰色 B 2mm砂粒若干 C 良好	天井部ヘラ 記号
第50図13-3	須恵器 杯 蓋	13号横穴 墓道	①12.2 ② ③ 3.8	口縁部が若干開くもので天井部までが丸みを有す。総 じて器壁を薄く作る。天井部には12・13-14・15と同 じヘラ記号で同じ窯で焼成したのであろう。	A 淡灰色 B 精製粘土使用 C 良	天井部ヘラ 記号
第50図13-4	須恵器 杯 蓋	13号横穴 墓道	①11.7 ② ③ 4.1	口縁内面に稜があり僅かに開く。体部は丸く、右回 りのヘラ削りとヨコナデ仕上げ。天井には半月状のヘラ 記号。	A 黒灰色 B 砂粒僅かに含む C 良好	天井部ヘラ 記号
第50図13-5	須恵器 杯 蓋	13号横穴 墓道	①12.3 ② ③ 4.1	口縁部が若干開く整美な杯蓋で底部までが緩い曲線を 描く。同じ出土場所の13-10とヘラ記号が同一でセッ トであらう。	A 黄褐色 B 砂粒若干 C やや軟質	天井部ヘラ 記号、10と同 じヘラ記号
第50図13-6	須恵器 杯 身	13号横穴 墓道	① 9.3 ② ③ 2.8	杯身の可能性もある。口縁部が短く身受け部にしては 浅い。13号横穴の最終追葬時期であらう。天井部は左 回りのヘラ削りとヨコナデ。	A 淡灰色 B 砂粒殆ど含まず C 良	
第50図13-7	須恵器 高 杯	13号横穴 墓道	① 6.2 ② ③	小型の高杯坏部で口縁部を若干外反し、底部にはカキ 目が巡る。	A 暗灰色 B 砂粒殆ど含まず C 良好	
第50図13-8	須恵器 杯 身	13・19号 横穴墓道	①10.6 ② ③ 4.8	総じて器壁の薄いもので、長い口縁部は途中で上方に 立ち上がり底部が尖り気味。	A 黄灰色 B 精製粘土使用 C やや軟質	
第50図13-9	須恵器 杯 身	13号横穴 墓道	①10.0 ② ③ 4.0	短く立ち上がる口縁部で蓋受け部は若干垂れ気味。体 部は丸みがあり、右回りのヘラ削り。底部内面のヘラ 記号は細み。	A 黒灰色 B 1mm前後の砂粒若干 C 良好	内面底部に ヘラ記号
第50図13-10	須恵器 杯 身	13号横穴 墓道	①11.2 ② ③ 4.6	整美な杯身。反り気味に立ち上がる口縁部で、蓋受け 部は上方に延びる。体部に丸みがあり、器壁が薄い。 13-5とセット。	A 暗黄灰色 B 砂粒殆ど含まず C 良	外面底部5 と同じヘラ 記号
第50図13-11	須恵器 杯 身	13号横穴 墓道	①10.5 ② ③ 4.2	反り気味に立ち上がる口縁部で蓋受けが短い。体部は やや丸みがあり回転ヘラ削りとヨコナデ仕上げ。	A 黄灰褐色 B 砂粒若干 C 良	外面灰被り
第50図13-12	須恵器 杯 身	13号横穴 墓道	①10.9 ② ③ 4.7	反り気味に端部が立ち上がる口縁部で、蓋受け部は厚 く明瞭に作る。体部は張り、右回りのヘラ削りとヨコナ デ仕上げ。ヘラ記号が13-3と同じでセットの可能性。	A 黒灰色 B 長石・石英・雲母 C 良	外面底部ヘ ラ記号
第51図 13	須恵器 杯 身	13号横穴 墓道	① 9.9 ② ③ 4.9	口縁部はやや短めに内傾し蓋受け部は短く上方に曲げられ る。蓋受けの下は若干窪み底部が大きく膨らむ。左回りのヘラ削りと ヨコナデ。ヘラ記号は「Z」印。12・13-13、15-3などがある。	A 赤灰色 B 精製粘土使用 C 良	外面底部ヘ ラ記号
第51図 14	須恵器 杯 身	13号横穴 墓道	①10.0 ② ③ 4.1	短く立ち上がる口縁部で、蓋受けは水平に作る。体部 は丸みがあり、右回りのヘラ削り。内面のヘラ記号は 「二」印。	A 灰色 B 砂粒・雲母多い C 良好	内面ヘラ記 号
第51図 15	須恵器 杯 身	13号横穴 墓道	①10.5 ② ③ 3.1	短く反り気味に立ち上がり、蓋受け部は上方に曲がる。体部は 直で屈折して平らな底部をなす。調整は不定方向のヘラ削り で、8・10・11-23、8-18と同じ。13号では最終追葬の土器。	A 淡茶褐色 B 砂粒若干 C 良	外面底部ヘ ラ記号
第51図 16	須恵器 高 杯	13号横穴 墓道・15 号玄室	①13.0 ② ③	長く反り気味に立ち上がる口縁部で蓋受けのあるタイ プ。体部は浅く、脚部は欠損。底部にカキ目。	A 灰色 B 細砂粒若干 C 良好	
第51図 17	須恵器 高 杯	13号横穴 墓道	① ② ③	体部上半と脚下半を欠く。底部にはカキ目。柱状部に 2条の沈線が巡り内湾気味に開く。	A 黄橙褐色 B 砂粒・赤褐色粒・雲母 C 軟質	似非土師須 恵器（赤焼 土器）
第51図 18	須恵器 甕	13号横穴 墓道	①20.3 ② ③	口縁部が緩く外反し、口唇部が上下に肥厚する。肩部 は張り、以下は欠損。調整は平行叩きの後等間隔にカ キ目、内面は青海波の当具痕を部分的に撫で消す。	A 灰黄褐色 B 砂粒やや多い C 良好	頸部に工具 痕
第51図 19	須恵器 細頸壺	12・13号 前庭部	① 5.8 ② ③15.6	横瓶にしては幅が短い。頸部は短く口縁部は肥厚し飾 る。体部は張り、肩部は横方向のカキ目、両面と側面 もカキ目仕上げ、肩部2ヶ所に異なるヘラ記号。	A 黄灰色 B 2mm砂粒少量含む C 良	肩部2ヶ所 にヘラ記号

調査出土土器観

①口径 ②底径 ③器高(cm) A色調 B胎土 C焼成

挿図土器番号	器 種	出土遺構	法 量	形 態 と 手 法 の 特 徴	色調・胎土・焼成 の観察	備 考
第51図 20	須恵器 細頸壺	13号横穴 前庭部	① 7.7 ② ③ 19.2	頸部は細みで口唇部を摘み上げたもので口縁下に1条の沈線が巡る。頸部のヘラ記号は「H」状印。	A 灰色 B 細砂粒若干 C 良好	頸部にヘラ 記号
第51図 21	須恵器 細頸壺	13号横穴 墓道	① 6.1 ② ③ 19.2	細頸壺としたが提瓶の部類で考えられる。口縁部は僅かに内湾し頸部は細みで、カキ目と沈線2条が巡る。体部にも沈線とカキ目が全面に巡る。肩部のヘラ記号は「△」印。	A 黄灰色 B 砂粒少量含む C 良好	肩部にヘラ 記号
第52図14-1	須恵器 坏 蓋	14号横穴 墓道上層 ～中層	① 11.6 ② ③ 3.8	やや扁平な作りで、体部には稜がつかない。器壁は薄い作りで、天井部のヘラ記号は「く」印。14-2と同じでセットの可能性はある。	A 灰紫色 B 0.5mm砂粒若干 C 良好	天井部にヘ ラ記号
第52図14-2	須恵器 坏 身	14号横穴 前庭部	① 10.3 ② ③ 4.1	内傾し反り気味に立ち上がる口縁部で、蓋受け部は上方に延び、体部がやや丸みを有す。14-1とセット。	A 暗灰色 B 長石・雲母少量含む C 良好	外面底部に ヘラ記号
第52図14-3	須恵器 坏 身	14号横穴 墓道	① 9.6 ② ③ 4.4	2よりも内傾度の強い口縁部で、蓋受け部も明瞭な作り。底部が膨らみ器高が高い。外面のヘラ記号は8-6、8・10・11-32に似る。	A 暗灰色 B 精製粘土使用 C 良好	外面底部に ヘラ記号
第52図14-4	須恵器 坏 身	14号横穴 前庭部	① 9.7 ② ③ 3.9	内傾する短い口縁部で、体部の張りはなく底部が未調整に近く厚い。焼成は土師質。	A 黄褐色 B 赤褐色粒・精良 C 軟質	似非土師須 恵器 (赤焼 土器)
第52図14-5	須恵器 坏 身	14号横穴 前庭部	① 10.3 ② ③ 3.2	短く立ち上がる口縁部で、体部は丸く平底に近い。形態的には最終追葬時のもので、蓋と身が入れ替わる時期のもので蓋の可能性もある。外面広範囲に煤付着。	A 橙色 B 赤褐色粒・精良 C 軟質	似非土師須 恵器 (赤焼 土器)
第52図14-6	須恵器 坏 身	14号横穴 墓道上層 ～中層	① 9.8 ② ③ 3.5	短い立ち上がりの口縁部で平底を呈する。5と同じ時期のもので最終追葬時の土器。	A 黄褐色 B 赤褐色粒・精良 C 軟質	似非土師須 恵器 (赤焼 土器)
第52図14-7	須恵器 坏 身	14号横穴 前庭部	① 10.2 ② ③ 3.4	坏蓋の可能性。口縁部の立ち上がりは殆どなく底部がやや厚い。	A 黄褐色 B 精良・赤褐色粒 C 軟質	似非土師須 恵器 (赤焼 土器)
第52図14-8	須恵器 坏身か 蓋	14号横穴 前庭祭壇 部	① 10.0 ② ③ 4.7	口縁部が上方に開くもので、右回りのヘラ削りとヨコナデ仕上げ調整。	A 赤茶色 B 赤褐色粒・精良 C やや軟質	
第52図14-9	須恵器 高 坏	14号横穴 墓道上層 ～中層	① 9.0 ② 5.8 ③ 8.2	体部は屈折しややスマートな脚部を有す。接合部まで空中で、裾部は大きく開き端部が上方に肥厚する。	A 褐色 B 精良・化粧土塗布 C 軟質	似非土師須 恵器 (赤焼 土器)
第52図14-10	須恵器 高 坏	14号横穴 前庭部	① ② 6.7 ③	短い脚部で坏部を欠く。柱状部に2条の沈線が巡り、端部が下方に肥厚する。	A 黄褐色 B 赤褐色粒・微砂粒若干 C 軟質	似非土師須 恵器 (赤焼 土器)
第52図14-11	須恵器 直口壺	14号横穴 玄室・前 室	① 4.6 ② ③ 8.2	直立する細みの口縁部で、調整は口縁から胴部までカキ目。	A 黒灰色 B 砂粒少量含む C 良好	外面胴下半 に粘土付着
第52図14-12	須恵器 甕	14号横穴 玄室	① ② ③	細い頸部から大きく開くもので、口縁部と底部を欠く。甕にしては作りが雑で、破片内には孔はみられない。肩部に木口刺突文があり、他はヨコナデで仕上げる。	A 灰色 B 砂粒少量 C 良好	外面灰被り
第52図14-13	須恵器 甕	14号横穴 玄室	① ② ③	頸部上半を欠くもので、肩部にカキ目と木口刺突文、幅広の沈線を挟んでカキ目、下半はヨコナデ仕上げ。肩部には2.2cmの孔を穿つ。	A 暗灰色 B 砂粒少量 C 良好	
第52図14-14	須恵器 甕	14号横穴 墓道	① ② ③	頸部が細く上半を欠く。肩部はヨコナデとカキ目、沈線を挟んで木口刺突文、胴部はカキ目と底部までが不定方向のヘラ削りで不明瞭な圧痕がある。孔の径は8mmである。	A 橙色 B 精良・赤褐色粒 C 軟質	似非土師須 恵器 (赤焼 土器)
第52図14-15	須恵器 平 瓶	14号横穴 前室	① 5.2 ② ③ 11.8	細い頸部で僅かに開く口縁部。口縁下には4条の沈線が巡る。肩部から胴部は大きく張り最大径が胴部中央にある。底部は小さな平底。体部全体にカキ目。	A 暗紫灰色 B 細砂粒若干 C 良好	肩部から底 部に粘土付 着
第52図15-1	須恵器 坏 蓋	15号横穴 前庭部	① 14.4 ② ③	口縁部に段を有すもので体部は丸みがある。天井部は左回りのヘラ削り、他はヨコナデ。	A 黄灰色 B 精製粘土使用 C 良好	天井部にヘ ラ記号の痕 跡
第52図15-2	須恵器 坏 蓋	15号横穴 玄室	① 12.9 ② ③ 3.3	扁平な作りの蓋で、屈折部に1条の沈線が巡る。右回りのヘラ削りとヨコナデ仕上げ。	A 灰色 B 砂粒若干 C 良好	
第52図15-3	須恵器 坏 蓋	15号横穴 玄室	① 12.4 ② ③ 4.0	口縁部が若干開き僅かに屈折し丸みのある天井部をなす。総じて器壁が薄く、左回りのヘラ削りとヨコナデ。ヘラ記号は「Z」印。	A 赤紫灰色 B 細砂粒若干 C 良好	天井部にヘ ラ記号

調査出土土器観

①口径 ②底径 ③器高(cm) A色調 B胎土 C焼成

挿図土器番号	器 種	出土遺構	法 量	形 態 と 手 法 の 特 徴	色調・胎土・焼成 の観察	備 考
第52図15-4	須恵器 坏 蓋	15号横穴 玄室	①12.2 ② ③ 3.8	整美な作りの蓋で口縁部が若干開き、内側が僅かに段をなす。器壁が薄く、左回りのヘラ削りとヨコナデ。ヘラ記号は「×」印。	A 灰色 B 砂粒少ない C 良好	天井部にヘラ記号
第53図15-5	須恵器 坏 蓋	15号横穴 玄室	①12.3 ② ③ 4.2	口縁から天井までが丸く作られ器高が高い。口縁内面に稜があり僅かに内湾する形になる。左回りのヘラ削りとヨコナデ。ヘラ記号は天井全面に刻まれる。	A 暗灰色 B 1mm砂粒若干 C 良好	天井部にヘラ記号
第53図15-6	須恵器 坏 蓋	15号横穴 玄室	① 7.8 ② ③ 2.1	小型の浅い身受けのあるもので、全面がヨコナデで仕上げる。	A 暗灰色 B 砂粒若干 C 良好	
第53図15-7	須恵器 坏 蓋	15号横穴 玄室	①12.4 ② ③ 5.8	身受けのない扁平な摘みのつくタイプで口唇部が尖る。肩部には段が巡り、天井部にはカキ目が巡る。他はヨコナデ仕上げ。天井のヘラ記号は「く」印。	A 灰茶色 B 粗砂粒含む C 良	天井部にヘラ記号
第53図15-8	須恵器 坏 身	15号横穴 玄室	①13.7 ② ③ 3.5	扁平な坏身で器高が低い。口縁は上方に立ち上がる。右回りのヘラ削りとヨコナデ。	A 灰色 B 砂粒若干 C 良好	
第53図15-9	須恵器 坏 身	15号横穴 玄室	①13.6 ② ③ 5.1	器高の高い坏身で、口縁部の立ち上がりはやや短い。体部は丸みがあり、右回りのヘラ削りとヨコナデ仕上げ。	A 灰色 B 1mm砂粒若干 C 良好	
第53図15-10	須恵器 坏 身	15号横穴 玄室	① 8.5 ② ③ 2.1	坏蓋の可能性ある。短い口縁部で底部は平らに作る。蓋であれば摘みがつくことも考えられる。	A 灰色 B 砂粒若干 C 良好	
第53図15-11	須恵器 坏 身	15号横穴 玄室	①10.9 ② ③ 4.6	深めの坏身で口縁部が若干反する。体部にはヨコナデによる凹凸が数条巡る。	A 緑灰色 B 細砂粒若干 C 良好	
第53図15-12	須恵器 甕	15・16号 横穴前庭部	①21.3 ② ③	口縁部を外側に肥厚させ、端部を摘み上げた状態に作る。肩部は張り、平行叩キの上から等間隔にカキ目。内面は青海波の当具痕あり。	A 黄灰色 B 細砂粒少量含む C やや軟質	
第53図15-13	須恵器 甕	15号横穴 玄室	① ② ③	口縁部と肩部下半を欠く。肩部はカキ目、内面は青海波の当具痕があり、頸部のヘラ記号は8・10・11-43に似ており同一の窯の焼成が考えられる。	A 青灰色 B 粗砂粒若干 C 良好	頸部にヘラ記号
第53図15-14	須恵器 高 坏	15号横穴 玄室	① ② 6.6 ③	小型の脚部片で坏部を欠く。接合部までが空中で裾部の開きは強く端部が下方に肥厚する。	A 白灰色 B 細砂粒若干 C 良	内外面灰被り
第53図15-15	須恵器 甕	15号横穴 前庭部	① ② ③	口縁部を欠くもので頸部にやや荒い波状文とカキ目、肩部はカキ目と刺突文、直下には1条の沈線が巡り、胴部もカキ目が巡る。底部は回転ヘラ削り、胴部には2.3cmの孔を穿つ。	A 淡茶褐色 B 粗砂粒・細砂粒若干 C 良	
第53図15-16	須恵器 甕	15号横穴 前庭部	① ② ③	胴部破片で肩部に刺突文、直下に2条の沈線、底部は左回りのヘラ削り、他はヨコナデ仕上げ。孔は不明。	A 小豆色 B 細砂粒若干 C 良好	
第53図15-17	須恵器 細頸壺 か提瓶	15号横穴 玄室	① ② ③	口縁部の小片で端部を摘み上げ肥厚させる。	A 淡黄灰色 B 精良 C 良	頸部内面にヘラ記号
第53図15-18	須恵器 平 瓶	15号横穴 前庭部	① 6.5 ② 7.0 ③ 11.3	口縁部が内湾気味に上方に延び、胴部上半に最大径がある。平底をなし、頸部に1条の沈線が巡り、他はカキ目と回転ヘラ削りで仕上げる。	A 青灰色 B 細砂粒若干・精良 C 良好	
第53図15-16-1	土師器 脚台付 小型壺	15・16号 横穴墓道	① 5.8 ② ③	祭祀専用の土器で頸部をやや長めに作り口縁部を僅かに外反させる。体部は球状で下半を欠損。全面を横ヘラ磨きで仕上げ、薄手作り。	A 黄褐色 B 赤褐色粒・微砂粒・精良 C 良好	黒塗りの可能性あり
第53図15-16-2	土師器 脚台付 小型壺	15・16号 横穴前庭部	① ② ③	祭祀専用土器。口縁部を欠くが胴部をやや扁平に作る。脚部は長めで裾部を欠く。体部外面が横ヘラ磨き、脚部は縦ヘラ削り後ヘラ磨き、内面はナデ仕上げ。	A 灰黄褐色 B 赤褐色粒・微砂粒多い C 良好	外面黒塗り
第53図15-16-3	土師器 小型高 坏	15・16号 横穴前庭部	① 6.9 ② ③	祭祀専用土器。内湾気味の坏部に長めの脚部を有すが裾部は欠損する。接合部付近の柱状部は充填。	A 茶褐色 B 精製粘土使用 C 良好	内外面丹塗り
第53図15-16-4	土師器 高 坏	15・16号 横穴前庭部	①21.6 ② ③	祭祀に使われたもので坏部の浅いもの。口縁部は緩く外側に開き脚の上部の径が大きい。調整は丹塗り磨研。	A 白黄橙色 B 赤褐色粒多く精良 C やや軟質	内外面丹塗り
第54図 5	須恵器 坏 蓋	15・16号 横穴前庭部	①13.1 ② ③ 4.2	口縁部から天井にかけて緩やかな曲線を描き、肩部近くまで回転ヘラ削り。他はヨコナデ。天井のヘラ記号は鳥足跡印。	A 灰色 B 2mm砂粒・雲母 C 良好	外面天井部にヘラ記号

調査出土土器観

①口径 ②底径 ③器高(cm) A色調 B胎土 C焼成

挿図土器番号	器 種	出土遺構	法 量	形 態 と 手 法 の 特 徴	色調・胎土・焼成 の観察	備 考
第54図 6	須恵器 坏 蓋	15・16号 横穴前庭部	①11.0 ② ③ 3.6	体部から口縁部にかけて屈折し直になる。天井部には不明瞭なヘラ記号。回転ヘラ削りとヨコナデ。	A 灰黄褐色 B 細砂粒若干 C 良好	外面天井部 ヘラ記号
第54図 7	須恵器 坏 蓋	15・16号 横穴前庭部	①14.7 ② ③ 3.7	口縁部を僅かに外反させ体部は緩く湾曲し平らな天井部を有す。全体が扁平で、左回りのヘラ削りとヨコナデ。	A 灰色 B 砂粒若干 C 良好	
第54図 8	須恵器 坏 蓋	15・16号 横穴墓道	①12.1 ② ③ 3.7	口縁内面に段をなす。体部が屈折してやや平坦な天井部を有す。調整は天井が不定方向のヘラ削りとヨコナデ。ヘラ記号は17-18、16-6等と同じ。	A 灰色 B 砂粒若干 C 良好	天井部ヘラ 記号、身の 可能性あり
第54図 9	須恵器 坏 蓋	15・16号 横穴前庭部	① ② ③	6と同タイプのもので天井部が尖り気味。ヘラ記号は「ハ」印。	A 灰色 B 精良・微砂粒若干 C 良好	外面天井部 ヘラ記号
第54図 10	須恵器 坏 蓋	15・16号 横穴墓道	① 8.6 ② ③ 2.8	扁平な摘みのつくタイプで、蓋受け部は深く挟れる。ヘラ記号は「ニ」印。	A 灰色 B 精製粘土使用 C 良好	外面天井部 ヘラ記号
第54図 11	須恵器 坏 身	15・16号 横穴前庭部	①12.8 ② ③ 4.0	径の大きな扁平な作りの坏身で、口縁部は反り気味に短く立ち上がる。総じて器壁が薄い。	A 灰色 B 1mm砂粒若干 C 良好	
第54図 12	須恵器 坏 身	15・16号 横穴墓道	① 9.0 ② 6.8 ③ 3.3	平底から鋭く屈折して湾曲気味の体部を有す。体部には4条の幅広の沈線が巡る。回転ヘラ削りとヨコナデ。	A 黒灰色 B 精良 C 良好	
第54図 13	須恵器 高 坏	15・16号 横穴墓道	①12.4 ② ③	脚部の長さに比べ坏部が小さめで浅い。体部には1条の凸帯が巡る。底部から脚部にかけてカキ目。下半にも凸帯。坏部接合面から長い透かし。	A 暗灰色 B 細砂粒若干 C 良好	
第54図 14	須恵器 甕	15・16号 横穴前庭部	①12.8 ② ③	朝顔状に外反する口縁部に端部を上方に摘み上げる。口縁下には波状文を配する。総じて器壁を薄く作る。	A 灰色～黒色 B 1mm砂粒若干 C 良好	内面灰被り
第54図 15	須恵器 甕	15・16号 横穴墓道	① ② ③	細みの頸部を有し上半を欠く。肩部にはカキ目、木口刺突文、沈線、カキ目の順に調整。下半は左回りのヘラ削り。整美な孔が穿たれている。	A 黄灰褐色 B 精良 C 良好	外面底部に ヘラ記号
第54図 16	須恵器 提 瓶	15・16号 横穴前庭部	① 7.4 ② ③ 17.5	細頸で緩く外反する口縁部で端部を上下に肥厚させる。全面にカキ目、片面には二重に刺突文を配する。整った提瓶で把手はなく細頸壺か。	A 灰色 B 1～3mm砂粒若干 C 良好	
第55図 15-16	須恵器 長頸壺	15・16号 横穴前庭部	①11.3 ② ③	長頸壺のなかでもやや短めの頸部で、中央に2条の沈線が巡る。肩部は撫で肩で1条の凸帯を境にほぼ直角に屈曲する。肩部には一部刺突文がみられる。	A 灰色 B 細砂粒若干 C 良好	肩部に工具 痕
第55図 15-16	須恵器 提 瓶	15・16号 横穴墓道	① 9.4 ② ③	緩く外反する口縁部で端部は複雑に肥厚させ飾る。肩部には木口刺突文を配し、側面はカキ目調整。	A 小豆色 B 砂粒やや多い C 良好	
第55図16-1	土師器 脚台付 小型壺	16号横穴 前庭部	① ② ③	2の祭祀専用土器と同じ作りであるが、脚部の開脚が若干違う。頸部上半を欠くが胴部は球状で、脚部はスカート状に開く。調整は丁寧なヘラ磨きで仕上げ、内面は粘土紐の接合部が残る。	A 橙褐色 B 赤褐色粒・精製粘土使用 C 良好	外面黒塗り 祭祀土器
第55図16-2	土師器 脚台付 小型壺	16号横穴 墓道	① ② ③	頸部基部は直上し、胴部が球形を呈する。脚部はやや内湾気味に開き裾部が欠損。調整も1と同じ。	A 灰黄褐色 B 赤褐色粒・精製粘土使用 C 良好	外面黒塗り 祭祀土器、 取上NO.2
第55図16-3	土師器 脚台付 小型壺	16号横穴 前庭部	① 5.0 ② ③	1・2とは形状が若干異なる祭祀専用の土器で、頸部から口縁部が短く僅かに外反する。胴部上半が張り、底部付近はすばまる。脚部はやや大きく開く。調整は前者より荒いヘラ磨き。	A 灰黄褐色 B 赤褐色粒・精製粘土使用 C 良好	外面黒塗り か祭祀土器
第55図16-4	須恵器 坏 蓋	16号横穴 墓道	①14.2 ② ③ 4.5	やや扁平な作りで口唇部が尖り、屈折部に1条の沈線が巡る。回転ヘラ削りとヨコナデで仕上げる。	A 灰色 B 細砂粒若干 C 良好	取上NO.4
第55図16-5	須恵器 坏 蓋	16号横穴 墓道	① 9.7 ② ③ 3.4	小型の蓋で、口縁が僅かに開き若干屈折して丸みのある天井部をなす。調整は不定方向のヘラ削りとヨコナデ。ヘラ記号は「Z」印。15-3と同じである。	A 淡黄褐色 B 赤褐色粒・角閃石・砂粒 C 軟質	似非土師須 恵器、取上 NO.5
第55図16-6	須恵器 高 坏	16号横穴 墓道	①11.6 ②10.5 ③11.2	整美な有蓋高坏で、反り気味に立ち上がる口縁部にやや深めの坏部がつく。脚部のバランスも良く、大きく開脚して裾端部が下方に肥厚する。底部はカキ目。脚には3条の沈線が巡る。	A 青灰色 B 砂粒若干・精良 C 良好	13-3と同 じヘラ記号、 取上NO.3
第55図16-7	須恵器 直口壺	16号横穴 墓道	① 4.5 ② ③ 5.5	短く内傾する口縁部で、扁平な胴部にはカキ目を巡らす。底部は不定方向のヘラ削りで、4条のヘラ記号。	A 灰色～黒色 B 微砂粒若干・精良 C 良好	底部外面に ヘラ記号、 取上NO.1

調査出土土器観

①口径 ②底径 ③器高(cm) A色調 B胎土 C焼成

挿図土器番号	器 種	出土遺構	法 量	形 態 と 手 法 の 特 徴	色調・胎土・焼成 の観察	備 考
第55図16-8	須恵器 提 瓶	16号横穴 前庭部	① ② ③	頸部上半を欠く。一方の面が回転ヘラ削り、もう一方は2条の沈線を巡らし、5段の木口刺突文を渦巻き状に配する。	A 灰色 B 細砂粒多く含む C 良好	
第55図17-1	須恵器 坏 蓋	17号横穴 前庭部	①11.9 ② ③ 4.0	僅かに開く口縁部を有し、底部は未調整である。天井部のヘラ記号は「三」印。	A 灰色 B 精製粘土使用 C 良好	外面天井部 ヘラ記号
第55図17-2	須恵器 坏 蓋	17号横穴 前庭部	①10.4 ② ③ 3.3	開き気味の口縁部で内部に段をなす。体部は緩い弧を描く。回転ヘラ削りとヨコナデ仕上げで、天井のヘラ記号は「×」印。総じて器壁が薄い。	A 灰色 B 1mmの細砂粒若干 C 良好	外面天井部 ヘラ記号
第55図17-3	須恵器 坏 蓋	17号横穴 前庭部	①11.4 ② ③ 3.6	やや扁平な作りで天井部に段をなす。右回りのヘラ削りと横ナデ仕上げ。内面のヘラ記号は不明瞭。	A 灰色 B 微砂粒若干 C 良好	内面天井部 ヘラ記号
第56図 1	須恵器 大 甕	8・10・11・ 13号横穴 墓	①47.9 ② ③	胴部下半を欠く。口縁部は直に開き、端部は外側に肥厚させ飾るもので肩部が大きく張る。口縁部は波状文、頸部はヨコナデ、肩部から胴部は擬格子叩き、内面は青海波と平行の当具痕。	A 灰色～黒灰色 B 細砂粒少量含む C 良好	破片が4基 の横穴墓か ら出土
第56図 2	須恵器 大 甕	10～13号 横穴墓	① ② ③	頸部上半を欠くもので体部は球状を呈する。調整は格子目叩きと同心円・青海波の当具痕。1と同様破片が数基の横穴から出土し墓前祭でばらまいたと考えられる。	A 灰茶褐色 B 細砂粒少量含む C 良	破片が4基 の横穴墓か ら出土
第56図 3	須恵器 大 甕	8～13号 横穴墓	①44.0 ② ③86.7	8～13号横穴から出土している。口縁部は直に開き、口唇部は外側に肥厚。体部は倒卵形を呈する。調整は口縁から頸部が波状文と沈線が巡り、体部は格子目叩きと青海波の当具痕。	A 灰褐色～茶褐色 B 小砂粒・粗砂粒含む C 良好	破片が6基 の横穴墓か ら出土
第56図 4	須恵器 大 甕	8～11・ 13号横穴 墓	①33.9 ② ③64.2	焼き歪みのあるもので、8～11号から出土している。口縁部は内湾気味で端部を肥厚させる。肩部が張り底部はすばまる。調整は口縁から頸部が波状文と沈線、平行叩きと青海波の当具痕。	A 灰色 B 1～3mm砂粒若干 C 良好	破片が5基 の横穴墓か ら出土
第57図 5	須恵器 大 甕	15・16号 横穴墓	①48.7 ② ③	頸部が直立し、緩く外反する口縁部で、口唇部を上方に肥厚させる。肩部はナデ肩で胴下半を欠く。頸部までを波状文と沈線が巡り胴部は格子目叩きと青海波の当具痕。	A 橙茶褐色 B 粗砂粒若干・小砂粒多い C やや軟質	破片が2基 の横穴墓か ら出土
第57図 6	須恵器 大 甕	8・10～13 ・15・19号 横穴墓	①34.4 ② ③	複数の横穴から出土。頸部から朝顔状に外反し、口唇部を単純に肥厚させる。体部は球状で底部を欠く。調整は口縁と頸部が沈線が巡り、体部が擬格子目叩きと青海波の当具痕。	A 淡緑灰色～黒灰色 B 砂粒若干 C 良好	破片が7基 の横穴墓か ら出土
第57図 7	須恵器 大 甕	15・16号 横穴墓前 庭部	①48.7 ② ③92.0	頸部から反り気味に外反する口縁部で、口唇部は上下に肥厚。体部とは図上復原。口縁から頸部は沈線と波状文、胴部は平行叩きで底部が格子目叩き、内面は青海波の当具痕。	A 明灰色 B 精良 C 良好	破片が2基 の横穴墓か ら出土
第58図 4	須恵器 坏 蓋	17号横穴 墓前庭部	①10.5 ② ③ 3.2	やや扁平な作りで、内面に浅い沈線が巡り体部が緩いカーブを描くもので、右回りのヘラ削りとヨコナデ仕上げ。ヘラ記号は「×」印。	A 灰色 B 精良 C 良好	外面天井部 ヘラ記号
第58図 5	須恵器 坏 蓋	17号横穴 墓前庭部	① 8.4 ② ③ 3.0	上部が窪んだ摘みがつき身受けの返りのあるタイプで、左回りのヘラ削りとヨコナデ仕上げ。ヘラ記号は大きめの「×」印。	A 灰色 B 砂粒殆ど含まず精良 C 良好	外面天井部 ヘラ記号
第58図 6	須恵器 坏 身	17号横穴 墓前庭部	①12.6 ② ③ 4.0	径の大きなもので、口縁基部は内傾し屈折して上方に立ち上がるタイプ。蓋受けも明瞭。体部はやや浅く、内面に当具痕がみられる。	A 灰色 B 1mm砂粒若干 C 良好	
第58図 7	須恵器 坏 身	17号横穴 墓前庭部	①10.4 ② ③ 3.5	短く内傾する口縁部で、蓋受けが上方に延びる。体部はやや深く回転ヘラ削りの上から撫でている。ヘラ記号は「三」印で不明瞭である。	A 灰褐色 B 細砂粒若干 C 良好	外面天井部 ヘラ記号
第58図 8	須恵器 坏 身	17号横穴 墓前庭部	① 9.8 ② ③ 4.1	短く立ち上がる口縁部で、蓋受けがはっきりしている。体部は丸みがあり深い。底部が未調整で他はヨコナデ。ヘラ記号は「三」印。底部に葉状の焼成痕あり。	A 黄灰色 B 精製粘土使用 C 良	外面底部ヘ ラ記号
第58図 9	須恵器 坏 身	17号横穴 墓前庭部	① 9.0 ② ③ 3.7	内傾して立ち上がる口縁部で蓋受け部は細く短い。体部は丸みがあり、左回りのヘラ削りとヨコナデ。ヘラ記号は「×」印。	A 灰色 B 精製粘土使用 C 良好	外面底部ヘ ラ記号、4 とセットか
第58図 10	須恵器 坏 身	17号横穴 墓前庭部	① 9.1 ② ③ 3.6	基部が内傾し屈折して立ち上がる口縁部で蓋受け部が深い。底部は扁平で若干尖り気味。最終調整は全面ナデ。ヘラ記号は同じものがない。	A 灰色 B 1～2mm砂粒若干 C 良好	外面底部ヘ ラ記号
第58図 11	須恵器 坏 身	17号横穴 墓前庭部	① 9.5 ② ③ 3.7	短く内傾し立ち上がる口縁部で蓋受け部は水平。体部は丸みがあり、最終調整はナデ。ヘラ記号は「三」印。	A 灰色 B 1～2mm砂粒若干 C 良好	底部ヘラ記 号は17-1 と同一
第58図 12	須恵器 坏 身	17号横穴 墓前庭部	①10.3 ② ③ 3.8	短く立ち上がる口縁部で、底部にやや丸みがある。調整はナデでヘラ記号は不明瞭。	A 灰色 B 1mm砂粒若干 C 良好	外面底部ヘ ラ記号

調査出土土器観

①口径 ②底径 ③器高(cm) A色調 B胎土 C焼成

挿図土器番号	器 種	出土遺構	法 量	形 態 と 手 法 の 特 徴	色調・胎土・焼成 の観察	備 考
第58図 13	須恵器 坏 身	17号横穴 墓前庭部	① 9.5 ② ③ 3.5	坏蓋の可能性はあるが5とセットであろう。左回りの ヘラ削りとヨコナデ。	A黄褐色 B精良・砂粒殆ど含まず C軟質	似非土師須 恵器 (赤焼 土器)
第58図 14	須恵器 高 坏	17号横穴 墓前庭部	①14.4 ② ③	体部が丸く、口縁部が僅かに外反する。脚部は均整の 取れたもので裾部を欠く。底部にはカキ目、他はヨコ ナデ。焼成土師質。	A橙褐色 B精良・赤褐色粒多く含む C軟質	似非土師須 恵器 (赤焼 土器)
第58図 15	須恵器 高 坏	17号横穴 墓前庭部	①11.1 ② ③	14と同タイプのもので坏部を欠く。底部にカキ目。脚 は緩く開き端部を肥厚。焼成土師質。	A橙褐色 B精良・赤褐色粒多く含む C軟質	似非土師須 恵器 (赤焼 土器)
第58図 16	須恵器 高 坏	17号横穴 墓前庭部	①13.7 ② ③	坏部がやや深く丸みを有す。口縁部が若干外反し、脚 部を欠く。調整は底部にカキ目、他はヨコナデ。	A黄褐色 B赤褐色粒・砂粒若干 C軟質	似非土師須 恵器 (赤焼 土器)
第58図 17	須恵器 高 坏	17号横穴 墓前庭部	①10.2 ② ③	14・15と同じタイプ。	A橙褐色 B赤褐色粒多く含む C軟質	似非土師須 恵器 (赤焼 土器)
第58図 18	須恵器 高 坏	17号横穴 墓前庭部	① 7.2 ② 5.9 ③ 8.9	底部から直に屈折し、体部から口縁部が長く上方に延 びる。体部に3条の沈線が巡る。脚柱状部は細く端部を 肥厚。ヘラ記号は8・10・11-21、13-12などと同じ。	A灰色 B精良 C良好	坏底部外面 ヘラ記号
第59図17-19	須恵器 甕	17号横穴 墓前庭部	① ② ③	口縁部を欠く。頸部の径が大ききもので、横穴群では 出土例がない。頸部は波状文、胴部上半はカキ目、底 部は右回りのヘラ削り仕上げ。整美な孔を穿つ。	A灰色 B 1~3mm砂粒若干 C良好	
第59図17-20	須恵器 平 瓶	17号横穴 墓前庭部	① 7.5 ②12.6 ③14.1	口縁部が僅かに屈折し直下に1条の沈線が巡る。体部 はカキ目と不定方向のヘラ削り。	A灰色 B 2mm細砂粒若干 C良好	
第59図17-21	須恵器 提 瓶	6号墓道 17号墓前 庭部	① 7.7 ② ③21.0	口縁部が緩く外反し口唇部を摘み上げる。体部全面に カキ目が巡る。	A灰黄褐色 B細砂粒・赤褐色粒多い Cやや軟質	
第59図18-1	土師器 脚台付 小型壺	18号横穴 墓前庭部	① 8.0 ② ③	祭祀専用土器で同タイプではやや大きめのもの。口縁 部が緩く外反し、胴部をやや扁平に作る。脚は大半を 欠く。ヘラ磨きとナデで仕上げる。	A黄褐色 B精製粘土使用 C良好	外面黒塗り か
第59図18-2	須恵器 坏 蓋	18号横穴 墓前庭部	①11.2 ② ③ 3.3	扁平な作りで肩部に稜がつく。調整はすべてヨコナデ。 ヘラ記号は「三」印。	A灰黄色 B砂粒若干 C良	外面天井部 ヘラ記号
第59図18-3	須恵器 坏 蓋	18号横穴 墓前庭部	①11.1 ② ③ 3.4	体部が屈折するタイプで、内面天井部に細く不明瞭な ヘラ記号。	A淡小豆色 B細砂粒少量含む C良	内面天井部 にヘラ記号
第59図18-4	須恵器 坏 蓋	18号横穴 墓前庭部	①11.0 ② ③ 3.4	3と同じ作りで、左回りのヘラ削りとヨコナデ仕上げ。 内側には3と同じヘラ記号で、同一の窯での焼成であ ろう。	A暗灰色 B細砂粒若干 C良好	内面天井部 にヘラ記号
第59図18-5	須恵器 坏 蓋	18号横穴 墓前庭部	①14.4 ② ③ 4.2	口縁部が開き気味で口唇部が尖る。口縁直上に小さな 段をなし、天井部までが緩くカーブする。	A淡橙灰色 B細砂粒若干 C良	取上NO.C
第59図18-6	須恵器 坏 蓋	18号横穴 墓前庭部	①11.2 ② ③ 3.1	3・4と同じ作りで、左回りのヘラ削りとヨコナデ仕 上げ。内側には両者と同じヘラ記号で、同一の窯での 焼成であろう。	A灰黒色 B細砂粒若干 C良好	内面天井部 にヘラ記号
第59図18-7	須恵器 坏 蓋	18号横穴 墓前庭部	① ② ③	口縁部を欠くが、体部の屈折部には沈線が巡る。天井 は丸みがある。	A灰黄色 B細砂粒少量 C良	
第59図18-8	須恵器 坏 蓋	8号墓道 18号横穴 墓前庭部	① 9.5 ② ③ 1.8	身受けの返りのある器高の低いもので、天井部は平ら に作る。左回りのヘラ削りとヨコナデ。	A灰黄色 B細砂粒多く含む C良	
第59図18-9	須恵器 坏 蓋	18号横穴 墓前庭部	① 9.6 ② ③	8と同じタイプの坏蓋。	A黄灰色 B細砂粒若干 C良	
第59図18-10	須恵器 坏 蓋	18号横穴 墓前庭部	① 9.2 ② ③	天井部が欠損しているが摘みのつくタイプで、身受け 部が凹面をなす。器壁は薄手作りで、ヘラ記号は「×」 印。	A灰色 B精良 C良好	外面天井部 にヘラ記号
第59図18-11	須恵器 坏 蓋	18号横穴 墓前庭部	① 7.2 ② ③ 2.4	やや扁平な摘みのつく身受けの返りのあるタイプ。摘 み周辺はカキ目。ヘラ記号は11-2・8があり、時期 に差があるが同系列の工人の焼成であろう。	A灰色~暗茶褐色 B細砂粒若干 C良好	外面天井部 にヘラ記号

①口径 ②底径 ③器高(cm) A色調 B胎土 C焼成

調査出土土器観

挿図土器番号	器種	出土遺構	法量	形態と手法の特徴	色調・胎土・焼成の観察	備考
第59図18-12	須恵器 18号横穴 坏 蓋	前庭部	①14.8 ②4.7 ③4.7	宝珠形の握みのつくタイフで身受け部は凹面をなし、端部が嘴状を呈する。	A灰色・黄褐色 B細砂粒・微砂粒多い C良	取上NO.B
第59図18-13	須恵器 18号横穴 坏 蓋	前庭部	①15.0 ②3.7 ③3.7	やや扁平な握みのつくもので、天井部から口縁部の12より緩く弧を描く。身受け部は12と同じだが受け部が浅い。左回りの回転へう削りとヨコナデ仕上げ。	A灰色 B砂粒若干 C良好	
第59図18-14	須恵器 18号横穴 坏 身	前庭部	①10.1 ②4.0 ③4.0	短く立ち上がりの低い口縁部で、蓋受け分が厚く、体部は深く丸みがある。右回りのへう削りとヨコナデ。へう記号は幅広い松葉状の印。	A黄灰色 B砂粒多く含む C良	外面底部にへう記号、取上NO.1
第59図18-15	須恵器 18号横穴 坏 身	前庭部	①11.2 ②11.2 ③11.2	口縁部下に緩い稜を付け、口縁部を僅かに外反させる。底部は平底で、不定方向のへう削りとヨコナデ。	A暗灰色 B1mm砂粒若干 C良好	
第60図 16	須恵器 18号横穴 坏 身	前庭部	①10.4 ②10.4 ③3.4	短く立ち上がる口縁部で、蓋受けは明瞭に作り出す。底部はヨコナデで面に不明瞭なへう記号。	A黄灰色 B細砂粒多い C良	底部内外面へう記号、取上NO.D
第60図 17	須恵器 18号横穴 坏 身	前庭部	①8.5 ②8.5 ③8.5	小型の蓋受けのないもので、体部に数条の沈線が巡る。調整は回転へう削りとヨコナデ。	A暗灰色 B細砂粒少量 C良好	
第60図 18	須恵器 18号横穴 高台付 坏 蓋	前庭部	①14.4 ②10.0 ③6.0	追葬時最終段階のもので21までが一括資料である。体部から口縁部にかけて僅かに外反させる。高台は低く、端部を外方に跳ねる。ヨコナデと回転へう削りで仕上げる。	A緑灰色 B細砂粒多い C良好	取上NO.B
第60図 19	須恵器 18号横穴 高台付 坏 蓋	前庭部	①12.7 ②9.6 ③4.1	やや小型で器高の低いもので、口縁部を若干外反させる。高台は低く、僅かに外方に跳ねる。調整は18と同じ。	A暗灰色・茶灰色 B砂粒若干 C良好	外面灰被り
第60図 20	須恵器 18号横穴 高台付 坏 蓋	前庭部	①14.3 ②9.3 ③5.2	体部に丸みのあるもので、口縁は僅かに外反。高台はやや内側に貼付し外方に跳ねる。	A淡灰褐色 B砂粒若干 C良	取上NO.A
第60図 21	須恵器 18号横穴 高台付 坏 蓋	前庭部	①9.2 ②9.2 ③9.2	19と同じタイフの高台を有す。	A黄灰色 B細砂粒少量 Cや軟質	
第60図 22	須恵器 18号横穴 高台付 坏 蓋	前庭部	①13.2 ②13.2 ③13.2	蓋受けのあるタイフの坏部片でやや長く立ち上がる口縁部に扁平な体部を有す。柱状部の径は坏部に比して大きい。	A灰色 B砂粒若干 C良好	
第60図 23	須恵器 18号横穴 高台付 坏 蓋	前庭部	①14.3 ②14.3 ③14.3	土師質の焼成でやや深い坏部。柱状部は細く下半を欠損する。	A橙褐色 B雲母・砂粒若干 C軟質	似非土師須恵器(赤焼土器)
第60図 24	須恵器 18号横穴 高台付 坏 蓋	前庭部	①15.0 ②9.8 ③9.3	23と同じ土師質の焼成で、坏部はやや扁平な作り。脚部は短く、柱状部上半は充填し大きく開く裾部を有し、端部は肥厚する。ヨコナデで仕上げる。	A黄褐色 B細砂粒・赤褐色粒 C軟質	似非土師須恵器(赤焼土器)
第60図 25	須恵器 18号横穴 高台付 坏 蓋	前庭部	①17.2 ②17.2 ③17.2	底部から体部にかけて緩く湾曲し、口縁部は直に開く。調整はヨコナデで底部にかき目が巡る。	A橙褐色 B赤褐色粒・精良 C軟質	似非土師須恵器(赤焼土器)
第60図 26	須恵器 18号横穴 高台付 坏 蓋	前庭部	①9.1 ②6.0 ③6.2	脚部に焼き歪みのあるもので、脚に対して坏部が大きくい。脚部は低く、端部は下方に跳ねる。	A灰色 B砂粒若干 C良好	焼き歪み
第60図 27	須恵器 18号横穴 高台付 坏 蓋	前庭部	①6.1 ②6.1 ③6.1	小型の脚部片で端部を外方に跳ねる。	A暗灰色 B精良 C良好	
第60図 28	須恵器 18号横穴 高台付 坏 蓋	前庭部	①8.0 ②8.0 ③8.0	口唇部を上方に肥厚し締る。頸部にはかき目。薄く作る。肩部にはかき目。	A暗灰色・小豆色 B精製粘土使用 C良好	
第60図 29	須恵器 18号横穴 高台付 坏 蓋	前庭部	①12.2 ②12.2 ③12.2	口唇部を上下に肥厚させた口縁部片でやや大型のもの。	A黄褐色 B精良 C軟質	
第60図 30	須恵器 18号横穴 高台付 坏 蓋	前庭部	①11.8 ②11.8 ③14.0	若干焼き歪みのある小型の蓋で、口縁部が反り気味に外反し口唇部を若干肥厚。肩部が張り、胴下半は球状。調整は肩部が右回りの回転へう削り、胴部は平行叩きを撫で消す。内面は当具痕。	A暗灰色 B砂粒多い C良好	
第60図 31	須恵器 18号横穴 高台付 坏 蓋	前庭部	①②③	肩部上半を欠くもの。肩部にかき目、沈線を挟んで木口刺突文を配する。穿孔は破片のため不明。	A黄灰色 B砂粒若干 C良	

調査出土土器観

①口径 ②底径 ③器高(cm) A色調 B胎土 C焼成

挿図土器番号	器 種	出土遺構	法 量	形 態 と 手 法 の 特 徴	色調・胎土・焼成 の観察	備 考
第60図 32	須恵器 平 瓶	18号横穴 羨道部	① 6.5 ② ③ 13.1	やや焼き歪みのあるもので、口縁部の一部を内側から打ち欠いている。肩部はカキ目。胴部はヨコナデ、底部は不定方向のヘラ削りで仕上げる。	A 黒灰色 B 細砂粒若干 C 良好	内から口縁 打ち欠き、肩 部ヘラ記号
第61図18-33	須恵器 提 瓶	18号横穴 前庭部	① 6.4 ② ③ 13.8	短く外反する口縁部に粘土紐を継ぎ足した厚手の頸部がつく。片面がナデの上から「×」ヘラ記号。側面が木口刺突文、一方の面が荒い波状文と木口刺突文を配する。	A 暗灰色～黒色 B 砂粒を多く含む C 良好	胴部ヘラ記 号
第61図18-34	須恵器 器 台	15号玄室 ・18号横 穴前庭部	① ② ③	数少ない器台の資料。台の上半部で、円形の透かし2ヶ所、2条の沈線を挟んで波状文を密に配する。破片内には三角形の透かし2段が三方向に穿たれる。破片が2ヶ所で出土、故意の破砕か。	A 黄灰色 B 砂粒やや含む C 良	破砕して墓 前祭の痕跡
第61図19-1	土師器 坏	19号横穴 前庭部	① 12.3 ② ③ 4.9	調整は須恵器技法で胎土・焼成は土師質。器高が高く、7のタイプの蓋の可能性もある。体部には屈折部や稜は見られない。一部ヘラ削りが見られるが大半はヨコナデ仕上げ。	A 黄褐色 B 精製粘土使用 C 良好	似非須恵土 師器
第61図19-2	土師器 坏	19号横穴 前庭部	① 12.6 ② ③ 5.3	調整は須恵器技法で胎土・焼成は土師質。器高が高く、7のタイプの蓋の可能性もある。体部には屈折部や稜は見られない。一部ヘラ削りが見られるが大半はヨコナデ仕上げ。	A 橙色 B 赤褐色粒・精良 C 良好	似非須恵土 師器
第61図19-3	須恵器 坏 蓋	19号横穴 墓道	① 15.5 ② ③ 4.9	径の大きなもので6とセット。口唇部内側に段をなす。体部には稜がなく緩く湾曲する。回転ヘラ削りとヨコナデ。	A 黄灰色～緑灰色 B 精良 C 良	
第61図19-4	須恵器 坏 蓋	19号横穴 前庭部	① 12.1 ② ③ 4.0	口縁部が開かず上部に1条の沈線が巡る。強く屈折し天井部は尖り気味。天井は不定方向のヘラ削り、他はヨコナデ。	A 灰色 B 精良・砂粒殆ど含まず C 良好	外面天井部 ヘラ記号
第61図19-5	須恵器 坏 身	19号横穴 前庭部	① 10.0 ② ③ 4.0	強く内傾する口縁部で蓋受けは短い。体部は扁平で上半に「A」印のヘラ記号。	A 黄灰色 B 精良 C 軟質	底部ヘラ記 号(赤焼土 器)
第61図19-6	須恵器 坏 身	19号横穴 墓道	① 14.1 ② ③ 5.2	やや短く立ち上がる口縁部。左回りの回転ヘラ削りとヨコナデ仕上げ。3の蓋とセット。	A 灰色 B 砂粒若干 C 良好	
第61図19-7	須恵器 坏 身	19号横穴 前庭部	① 10.6 ② ③ 4.4	23-9と同じ作りのもの。口縁部は内傾し上半で直に立ち上がるタイプで底部はやや膨らむ。ヘラ記号は「キ」印で4とセットの可能性はある。	A 灰色 B 細砂粒多く含む C 良好	外面底部ヘ ラ記号
第61図19-8	須恵器 坏 身	19号横穴 前庭部	① 12.4 ② ③ 4.2	若干内傾し立ち上がる口縁部で体部は扁平な作り。	A 暗灰色 B 2mm前後の砂粒やや含む C 良好	
第61図19-9	須恵器 高 坏	19号横穴 前庭部	① 9.0 ② 6.6 ③ 8.8	坏部の屈折が鋭く、上方に開く口縁部。体部には数条の沈線が巡る。脚柱状部は細く裾部は下方に肥厚する。中央には3条の沈線が巡る。内面ヘラ記号は松葉状。	A 灰色 B 精良 C 良好	脚部内面ヘ ラ記号
第61図19-10	須恵器 甕	19号横穴 前庭部・ 墓道	① 12.9 ② ③	屈曲して立ち上がる口縁部で、口縁下には1条の凸帯が巡る。頸部の沈線間には波状文を配する。	A 灰色 B 細砂粒・粗砂粒若干 C 良好	
第62図19-11	須恵器 甕	19号横穴 墓道	① 24.0 ② ③	口唇部を外側に肥厚させるタイプで頸部からは直線的に作る。肩部は張り以下を欠損。頸部は波状文とカキ目。肩部はカキ目。内面はヨコナデに青海波の当具痕。	A 灰色 B 細砂粒若干 C 良好	外面頸部ヘ ラ記号
第62図19-12	須恵器 甕	19号横穴 前庭部	① 14.4 ② ③	朝顔状に外反する口縁部片で、やや鋭い波状文を密に配する。薄手作り。	A 灰色 B 細砂粒若干 C 良	
第62図19-13	須恵器 提 瓶	19号横穴 前庭部	① ② ③	口縁部を欠損するもので、一方の肩部が張る。把手はなく、片面がカキ目、もう一方が荒い波状文と木口刺突文を渦巻き状に配する。側面にも荒い波状文。	A 灰色 B 精製粘土使用 C 良	
第62図 14	須恵器 提 瓶	19・20・ 22 前庭部	① 6.6 ② ③ 15.8	厚みのあるもので、口唇部を複雑に肥厚させ飾る。頸部は細く整美な作りである。把手はなく、細頸壺になるかも知れない。肩部と体部全体にカキ目が巡る。	A 暗黄茶褐色～緑灰色 B 細砂粒若干 C 良	肩部にヘラ 記号
第62図 21	須恵器 高 坏	21号横穴 玄室	① ② ③	焼成は土師質で口縁部を欠く。中央に1条の凸帯、底部にカキ目が巡る。脚柱状部は細く、スカート状に開脚する。裾部にも数条の沈線が巡る。	A 黄褐色 B 赤褐色粒・砂粒 C 軟質	似非土師須 恵器(赤焼 土器)
第62図22-1	須恵器 坏 蓋	22号横穴 前庭部	① 12.0 ② ③ 4.7	口縁内側に段をなすもので天井部までが丸みがあり器高が高い。左回りの回転ヘラ削りとヨコナデ仕上げ。ヘラ記号は「一」印。	A 灰色 B 大粒砂粒含む C 良好	外面自然釉
第62図22-2	須恵器 坏 身	22号横穴 前庭部	① 10.6 ② ③ 4.9	総じて器壁の薄い作りで、底部が尖り気味で器高が高い。口縁部も反り気味に立ち上がる。ヘラ記号は1の蓋と同じで、両者はセットであろう。	A 灰黄色 B 砂粒若干 C 良	外面底部ヘ ラ記号、外 面灰被り

①口径 ②底径 ③器高(cm) A色調 B胎土 C焼成

調査出土土器観

挿図土器番号	器種	出土遺構	法量	形態と手法の特徴	色調・胎土・焼成の観察	備考
第62図22-3	須恵器 坏身	22号横穴 前庭部	① ② ③	口縁部を欠く。体部はやや扁平な作り。底部のへう記号は「二」印。	A灰黄色 Bやや大粒砂粒含む C良	外面底部へう記号
第62図22-4	須恵器 坏身	22号横穴 墓道上層	①12.7 ② ③5.1	やや長く上方に立ち上がる口縁部で、蓋受けは長く作る。体部はやや扁平な作り。	A茶灰色 B大粒砂粒を含む C良	
第63図22-5	須恵器 高坏	22号横穴 前庭部	①15.7 ②10.9 ③12.4	坏部の大きなタイツの形で、口縁部が若干内湾し底部が膨らむ。体部には数条の沈線が巡る。脚部は短く中央から屈折して僅かに内湾気味。裾部にも数条の沈線が巡る。底部にかき目。	A橙褐色 B赤褐色粒・雲母・精良土器 C軟質	似非土師須恵器(赤焼土器)
第63図22-6	須恵器 提瓶	22号横穴 前庭部	①8.0 ② ③17.1	口唇部を積み上げるように肥厚させる。把手はなく幅がやや広いもので、肩部に横かき目。全体に縦かき目で調整。肩部には「S」字状のへう記号。	A灰黄色 B砂粒若干含む Cやや軟質	肩部にへう記号
第63図22-7	須恵器 大甕	22号横穴 前庭部	①20.0 ② ③52.5	頸部から口縁部は短く作り、口唇部を尖らす。肩部は張り底部に行くにしたがって細まる。調整は平行叩きと青海波の当具痕。	A灰色～灰茶褐色 Bやや大粒砂粒多い C良	
第63図23-1	須恵器 坏蓋	23号横穴 玄室	①13.3 ② ③3.4	体部から口縁部にかけては丸く、天井部が鋭く屈折して四面をなす。焼き歪みがある。6とセツトの可能性。	A灰黄色 B精製粘土使用 C良	外面天井部へう記号
第63図23-2	須恵器 坏蓋	23号横穴 玄室	①9.5 ② ③3.6	擬宝珠の積みのあるもので、天井から口縁部にかけて丸く作る。身受け部は内傾し、積み周囲にはかき目が巡る。他はヨコナテ仕上げ。	A灰色 B細砂粒多く含む C良好	
第63図23-3	須恵器 坏蓋	23・24号 横穴墓道	①9.0 ② ③4.1	宝珠の積みをつくもので体部は丸く身受け部は長く内傾する。右方向の回転へう削りとヨコナテ仕上げで完形品。	A小豆色 B1mm砂粒含む C良	
第63図23-4	須恵器 坏蓋	23・24号 横穴墓道	①8.4 ② ③3.3	扁平な鉤状の積みがつくタイツで身受けは四面をなすもの。全体に丸く作る。	A暗灰色 B1mm砂粒を若干含む C良好	
第63図23-5	須恵器 坏身	23号横穴 墓道	①9.0 ② ③3.9	反り気味に立ち上がる口縁部で、蓋受けは明瞭に作る。体部は膨らみ器高が高い。調整は右回りの回転へう削りとヨコナテ。へう記号は「一」字状のもの。	A灰色 B2mm前後の砂粒含む C良好	外面底部へう記号
第63図23-6	須恵器 坏身	23・24号 横穴墓道	①11.0 ② ③4.5	長く内傾し口唇部が僅かに開くもので、蓋受けは明瞭に作る。体部は丸く1の身であらう。右回りのへう削りとヨコナテ仕上げで口縁部を一部打ち欠いている。へう記号は「Z」印。	A灰色 B精製粘土使用 C良好	底部へう記号、口縁部打欠き
第63図23-7	須恵器 坏身	23・24号 横穴墓道	①10.0 ② ③4.6	体部に比して著しく内傾する口縁部で、蓋受けは短く不明瞭。体部は張りがあり、手持ちへう削りとヨコナテ仕上げ。へう記号は5に似る。	A灰黄色 B砂粒少量含む C良好	外面へう記号、取上
第63図23-8	須恵器 坏身	23・24号 横穴墓道	①9.0 ② ③4.2	特殊な形の坏身の坏身で、口縁基部は内傾し途中から屈折して上方に立ち上がる。蓋受けは幅広く上方に積み上げたように作る。体部はやや扁平で、左回りのへう削り。	A黒灰色 B2mm前後の砂粒少量含む C良好	
第63図23-9	須恵器 坏身	23・24号 横穴墓道	①9.0 ② ③3.9	口縁部と蓋受け部は5と酷似するもので総じて器壁が薄い。底部には段をなし5・11と同じ作り。左回りの回転へう削り。	A小豆色 B精良 C良好	外面にへう記号
第63図23-10	須恵器 坏身	23号横穴 墓道	①8.6 ② ③3.9	径の小さなもので口縁部を内傾させ口唇部が外反する。蓋受けは明瞭で左回りのへう削り。3～12までが同一場所から検出されており初葬から追葬までの一括土器。	A小豆色 B2mm前後の砂粒を含む C良好	外面へう記号
第63図23-11	須恵器 坏身	23号横穴 墓道	①10.7 ② ③4.3	口縁部は8に似るが蓋受け部が短く不明瞭。体部は特微的な作りで丸く膨らむ。底部は不定方向のへう削りで、他はヨコナテ。	A灰黄色 B砂粒若干 C良	外面へう記号、取上
第63図23-12	須恵器 坏身	23号横穴 墓道	①8.3 ② ③3.2	坏身では最も新しいもので短く立ち上がる口縁部。蓋受けは明瞭で体部が膨らむ。最終調整はヨコナテ。	A灰色～灰黄色 B細砂粒若干 C良	
第63図23-13	須恵器 坏身	23号横穴 墓道	①10.2 ② ③3.7	底と胴部の境は鋭く屈折し口縁部は上方に若干開く。底部は不安定な作り。調整は回転へう削りとヨコナテ。	A黒灰色 B砂粒や多い C良好	取上NO.1
第63図23-14	須恵器 坏身	23号横穴 墓道	①10.1 ② ③3.8	13と同じ作りのもので、底部が若干丸みを有す。調整も同じ。	A黒灰色 B砂粒少量含む C良好	取上NO.5
第64図23-15	須恵器 高坏	23・24号 横穴墓道	①8.4 ②7.0 ③8.2	やや深い坏部で底部から体部の屈折は緩やかで口縁は直に延びる中央には数条の沈線が巡り、底部にはかき目が巡る。脚部にも沈線が巡る。端部は16と同じ作りである。	A茶灰色 B精良 C良	

調査出土土器観

①口径 ②底径 ③器高(cm) A色調 B胎土 C焼成

挿図土器番号	器 種	出土遺構	法 量	形 態 と 手 法 の 特 徴	色調・胎土・焼成 の観察	備 考
第64図 23-16	須恵器 高 坏	23・24号 横穴墓道 底面	① 8.4 ② 6.3 ③ 6.2	坏底部から体部の屈折は鋭く、口縁部が上方に開く。脚部は短く中央に沈線が巡る。端部は横方向に延びる。	A 青灰色 B 1mm砂粒少量含む C 良好	坏部外面へ ラ記号
第64図 23-17	須恵器 甕	23・24号 横穴墓道	① 12.0 ② ③ 17.4	尖り気味の口縁部で球形の体部にはカキ目が巡る。胴下半はカキ目を撫で消す。底部の器壁は厚い。	A 灰色 B 粗砂粒含む C 良好	肩部にヘラ 記号
第64図 23-18	須恵器 長頸壺	23・24号 横穴墓道・ 祭壇部	① ② ③	扁平球状の体部で、肩部上半が欠損。肩部には密に沈線が巡り、胴下半は回転ヘラ削りで器壁が厚い。	A 茶色～灰色 B 粗砂粒若干 C 良好	
第64図 23-19	須恵器 長頸壺	23・24号 横穴祭壇 部	① ② ③	玉葱状の体部に器壁の薄い頸部がつく。底部が不定方向のヘラ削り、体部はカキ目。	A 灰色 B 粗砂粒若干 C 良好	肩部と底部 外面ヘラ記 号
第64図 23-20	須恵器 大 甕	23・24号 横穴墓道	① ② ③	大型甕の頸部片で下部は肩部の接合面から剝離している。内面はヨコナデ、外面は沈線と波状文が巡る。	A 灰色 B 砂粒を若干含む C 良好	
第64図 23-21	須恵器 器 台	23・24号 横穴墓道	① ② ③	器台の体部と脚台の接合部で、外面が回転ナデ、体部内面に薄く青海波の当て具痕が残る。現状では透かしは見られない。	A 灰色 B 細砂粒若干 C 良好	
第64図 23-22	須恵器 平 瓶	23・24号 横穴墓道	① 8.0 ② ③ 16.9	直上する口縁下に2条の沈線、肩部にも沈線が巡る。底部が回転ヘラ削り、胴部はカキ目を施すが風化している。	A 白黄茶色 B 粗砂粒含む C 良好	肩部にヘラ 記号
第64図25-1	須恵器 坏 蓋	25号横穴 前庭部	① 9.2 ② ③ 2.5	身受けの返りのある蓋で、身と蓋が逆転する時期のもので、身の可能性もある。天井部は平坦で回転ヘラ削り、他はヨコナデ仕上げ。	A 黒灰色 B 砂粒少量 C 良好	
第64図25-2	須恵器 坏 身	25号横穴 前庭部	① 11.4 ② ③	やや長く反り気味の口縁部で、深い坏身。底部は回転ヘラ削り、他はヨコナデ。	A 明灰色 B 細砂粒多く含む C 良好	
第64図25-3	須恵器 坏 身	25号横穴 玄室	① ② ③	口径に対してやや深めの坏。外面底部回転ヘラ削り、他はヨコナデ。	A 灰色 B 精製粘土使用 C 良好	底部外面へ ラ記号
第64図25-4	須恵器 坏 身	25号横穴 前庭部	① 9.8 ② ③ 4.1	底部から口縁部にかけて鋭く屈曲し、境部に器高の高い坏身。おそらく1のタイプの蓋がセットであろう。	A 灰色～黒灰色 B 2mm砂粒少量含む C 良好	
第64図25-5	須恵器 高 坏	25号横穴 前庭部	① 18.0 ② ③	6と同一タイプの高坏の坏部で口縁部が上方に屈曲する。表裏とも回転ナデで、外面底部にカキ目が巡る。	A 黄褐色 B 赤褐色粒・角閃石・砂粒 C 軟質	似非土師須 恵器（赤焼 土器）
第65図25-6	須恵器 高 坏	25号横穴 前庭部上 層	① 17.6 ② 13.3 ③ 14.5	口縁から体部の湾曲が少ない坏部で、スマートな脚部がつく。裾端部は肥厚させる。大半が回転ナデで仕上げる。	A 橙褐色 B 赤褐色粒・角閃石 C 軟質	似非土師須 恵器（赤焼 土器）
第65図25-7	須恵器 高 坏	25号横穴 前庭部上 層	① 9.3 ② ③	口縁が内湾する坏部の破片で、底部から体部は直角に曲がり深く作る。脚部は遺存しないが、痕跡から細いタイプである。表面には沈線とカキ目が交互に巡る。	A 灰色 B 砂粒若干 C 良好	
第65図25-8	須恵器 高 坏	25号横穴 前庭部上 層	① ② ③	坏部片で、外面は回転ナデ、底部にはカキ目が巡る。	A 橙色 B 赤褐色粒・砂粒・角閃石 C 軟質	似非土師須 恵器（赤焼 土器）
第65図25-9	須恵器 高 坏	25号横穴 前庭部上 層	① ② ③	脚部片で中央に1条の沈線が巡る。器表面が風化し摩耗する。内面には絞り痕。	A 橙色 B 砂粒若干 C 軟質	似非土師須 恵器（赤焼 土器）
第65図25-10	須恵器 長頸壺	25号横穴 前庭部上 層	① 11.8 ② ③	口縁部が僅かに外反させ頸部が細まるもので肩部が丸みをなした大きく張る。	A 灰色～小豆色 B 砂粒若干 C 良好	
第65図25-11	須恵器 提 瓶	25号横穴 前庭部上 層	① 7.0 ② ③ 12.8	12と同じ口縁部で、製作時に伏せた胴部が剝離している。一方の側面にはカキ目と部分的な波状文が粗く付けられる。作りの雑な提瓶。	A 灰白色 B 粗砂粒含む C 良好	側面ヘラ記 号
第65図25-12	須恵器 提 瓶	25号横穴 前庭部上 層	① 5.1 ② ③	口唇部を単純に肥厚させるタイプで提瓶としては小型品である。現存範囲は回転ナデで仕上げる。	A 淡黄褐色 B 粗砂粒若干 C 軟質	似非土師須 恵器（赤焼 土器）
第65図 15-A 16	埴 輪 円 筒	15・16号 横穴墓道	① ② ③	低い台形凸帯部分の小片で、内外面にやや荒い縦ハケで仕上げるこの埴輪は横穴墓に伴うものではなく、北側に隣接する茶臼塚(6世紀中頃)に伴うもので、混入であろう。	A 黄褐色 B 粗砂粒やや多い C やや軟質	茶臼塚古墳 のものか
第65図 9-B	埴 輪 円 筒	9号横穴	① ② ③	低い台形凸帯部分の小片で、内外面にやや荒い縦ハケで仕上げるこの埴輪は横穴墓に伴うものではなく、北側に隣接する茶臼塚(6世紀中頃)に伴うもので、混入であろう。	A 黄褐色 B 赤褐色粒・細砂粒若干 C 良好	茶臼塚古墳 のものか

(2) 鉄 器 (図版40～45-1、第66～73図)

鉄器は、武器・工具・馬具・農具などの種類があるが、鉄器処理は済んではいたものの、出土して10年の歳月が経過し銹の浸食が進んだため実測不可能な鉄器も存在した。掲載した鉄器は総数で210点を数える。出土場所も様々で、玄室内・羨道部・前庭部・墓道などで玄室内の鉄器は遺存状況がやや良好であるが、前庭部や墓道から出土した鉄器は銹が進んでいたため残りが良くない。鉄器の出土場所にばらつきが見られ、追葬時の掻き出しや盗掘による散逸なども想定される。

鉄器の種類 以下、①武器・②工具・③馬具・④農具の順で簡略に説明する。

①武 器

透入円頭広根式 鉄 鏃 (1～98) 1は1号横穴墓玄室から出土した円頭広根形の鉄鏃である。2～10は3号横穴墓の玄室から出土したもので、円頭広根系、圭頭広根系、無関片刃、珍しいものでは透入円頭広根系、篋被が刺状のものや「く」字状のものなどがある。

多種多様の 鏃 5号横穴墓からは11～25が出土した。片丸造と両丸造三角形式、鏃身が台形細造があり、台形のものは片関が含まれる。他に片刃箭式、片刃逆刺鏃、圭頭広根系、菱形圭頭系、方頭広根系があり種類が多い。篋被は大半が刺篋被である。11～22が墓道、23・24が玄室、25が閉塞石内から出土。

雁股式鉄鏃 26～29は6号横穴墓の閉塞石内から出土した鉄鏃で、26は方頭か圭頭広根形、27は有柄椿葉式である。すべて閉塞石内から出土した。30は8号の正面前庭部から出土した菱形雁股式の鉄鏃で二分しているが同一のものである。31は3基の共有する前庭部の出土で片切刃三角形式。32～36・39～41は10号正面前庭部からの出土で、32・33は片切刃三角形、34・35は両丸造ノミ箭式、36は片逆刺片刃造である。40は方頭細根式、37・38は閉塞石内出土の無関片丸造鏃。

11号横穴墓からは44～58がある。玄室出土は44～47・49・50・55・57で、前庭部出土は48・51～54・56～58である。形式には片丸造五角形、片丸造三角形、無関両丸造、両・片丸造ノミ箭式、両丸造三角形、方頭広根形、圭頭広根形、片刃箭形式など種類が多いのが特徴である。

腸袂柳葉式 鏃 12号横穴墓では59～77があるが、玄室出土は59・64・65・74、他は前庭部出土である。鏃の種類は片丸造三角形、片丸造ノミ箭式、片切刃三角形、片丸造柳葉式、圭頭広根式、両刃造腸袂柳葉式、方頭細根式などがあり、11号横穴墓同様多彩な形式が存在する。

13号横穴墓は78～80が出土している。すべて玄室内からの出土で、78は両丸造柳葉形、80は圭頭広根式である。

14号横穴からは81～86が出土している。すべて前庭部から墓道の出土で、圭頭広根式、方頭広根式、83は腸袂のある両丸造五角形式、広根両丸造柳葉式、85は円頭細根式であるが刃部が鋭利でない。多種の鏃の組み合わせである。

87・88は16号横穴の羨道部出土の鉄鏃で、87は菱形広根式、88は刺篋被片である。89～94は18号横穴墓の出土で、89・93が羨道部、90・91が前庭部、92・94は玄室から出土している。94は竹の矢柄が残っている。

20号横穴からは95～98がある。95は圭頭広根式で、すべて玄室からの出土である。

大 刀(195～197) 195は5号横穴墓の玄室床面から出土した大刀の鐔で倒卵形を呈する。刀身は盗掘され遺存しない。大きさは6.6cm×5.5cm、孔は2.3cm×2.0cm、厚さは4.0mmを測る。196は短刀の鐔と考えられる。これも倒卵形の形状で15号横穴墓の前庭部から出土した。長さが5.2cm、幅が4.0cm、内孔が2.3cm×1.7cm、厚さは4.0mmを測る。197は大刀の鐔部で先端を「L」字状に折り曲げている。長さは2.1cm、厚さは2.0mmを測る。8号横穴の前庭部からの出土である。198・199は大刀の鍔金具片で、前者は楕円形、後者は隅丸方形に近い形状をなす。198は5号横穴墓玄室出土、199は13号横穴墓玄室から出土した。横穴墓全体での大刀の資料は少なく、盗掘されたと推察される。

短刀の鐔

数少ない大
刀

弓の副葬

弓金具(200～204) 200～202は5号横穴墓の前庭部から墓道にかけて出土したもので、直交する木質が残っている。長さは3.0cm前後である。203・204は20号横穴の玄室から出土した。同じように木質が遺存する。

②工 具

刀 子(99～119) 99は1号横穴墓の玄室内から出土したもので、柄を除きほぼ完存している。刃部は若干研ぎ減りしている。両関で背方向が段をなし、片方が山形となる。柄部には若干の木質が残るが、柄口金具はない。長さは17.2cm、中央の刃幅1.2cm、背厚は4mmである。

100・101は2号横穴の玄室出土の刀子でほぼ完存している。100は刃部中央付近が若干研ぎ減りしている。両関で上下とも「L」字状で、この部分に幅2.0cm、厚さ2mm前後の鉄板を折り曲げ1.6cm重ねた柄口金具を装着する。全長が15.6cmである。101は小型の刀子で研ぎ減りが激しく、先端付近が曲がっている。関は上下とも山形で柄に若干木質が残る。

3号横穴玄室からは102～104が出土している。盗掘が激しく完存するものはなく、103は両関である。104は柄口金具で厚さ2mmの鉄板を曲げており内部に柄の木質が僅かに残る。

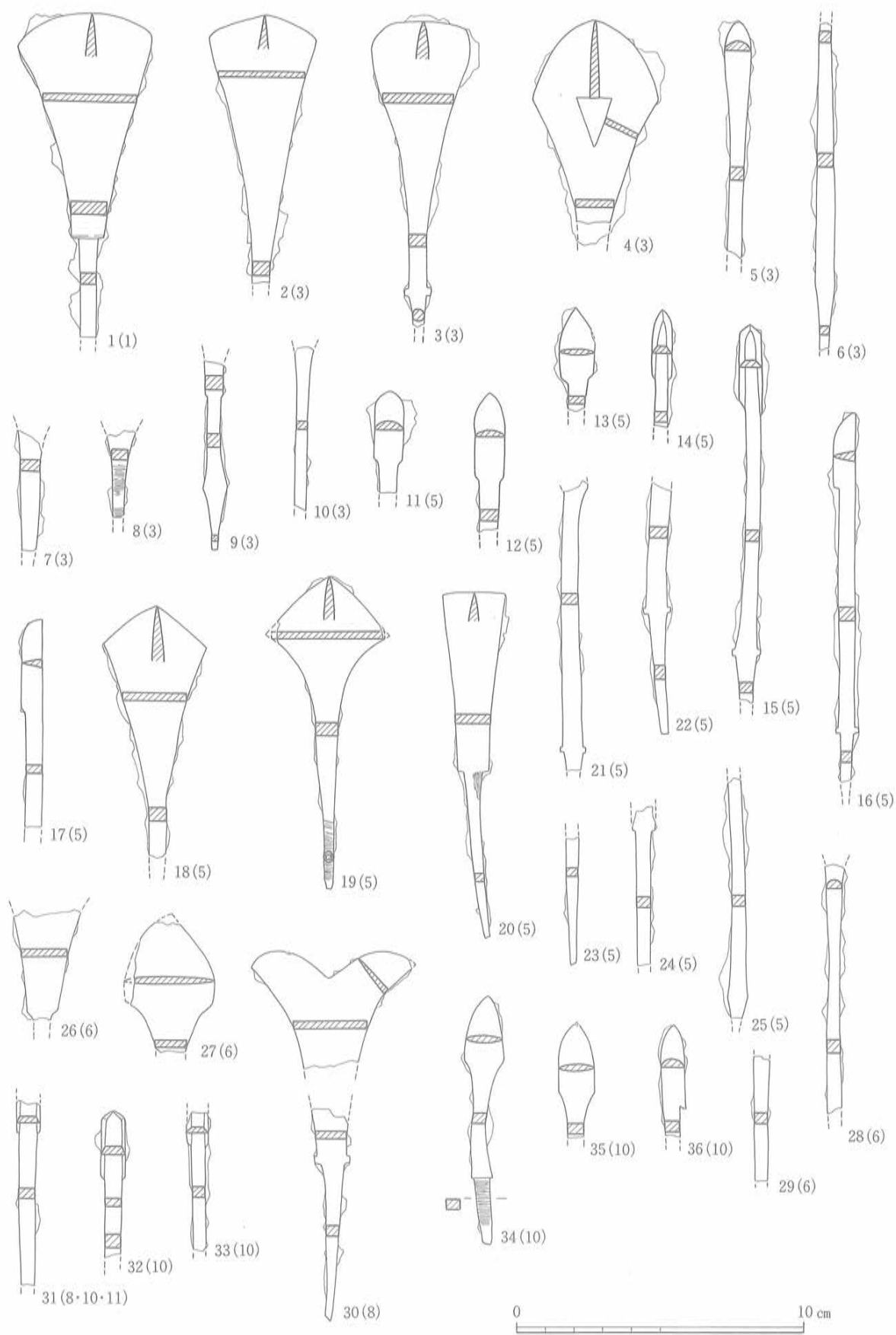
10号からは4点の刀子が正面前庭部から出土している。105は鹿角装。106はかなり研ぎ減りしており、柄と刃部がほぼ同じ長さである。柄口金具は厚さ2mmの鉄板を整美に折り曲げている。内部には木質の柄が詰まっている。107も使用頻度が高く柄の方が長く残る。108は両関の小片である。

11号横穴墓からは3点出土している。109は閉塞石部から出土。110は柄口金具が残る小片で前庭部出土。111は背関で刃部が完存している刀子で玄室からの出土である。112は12号の前庭部から出土した両関刀子である。

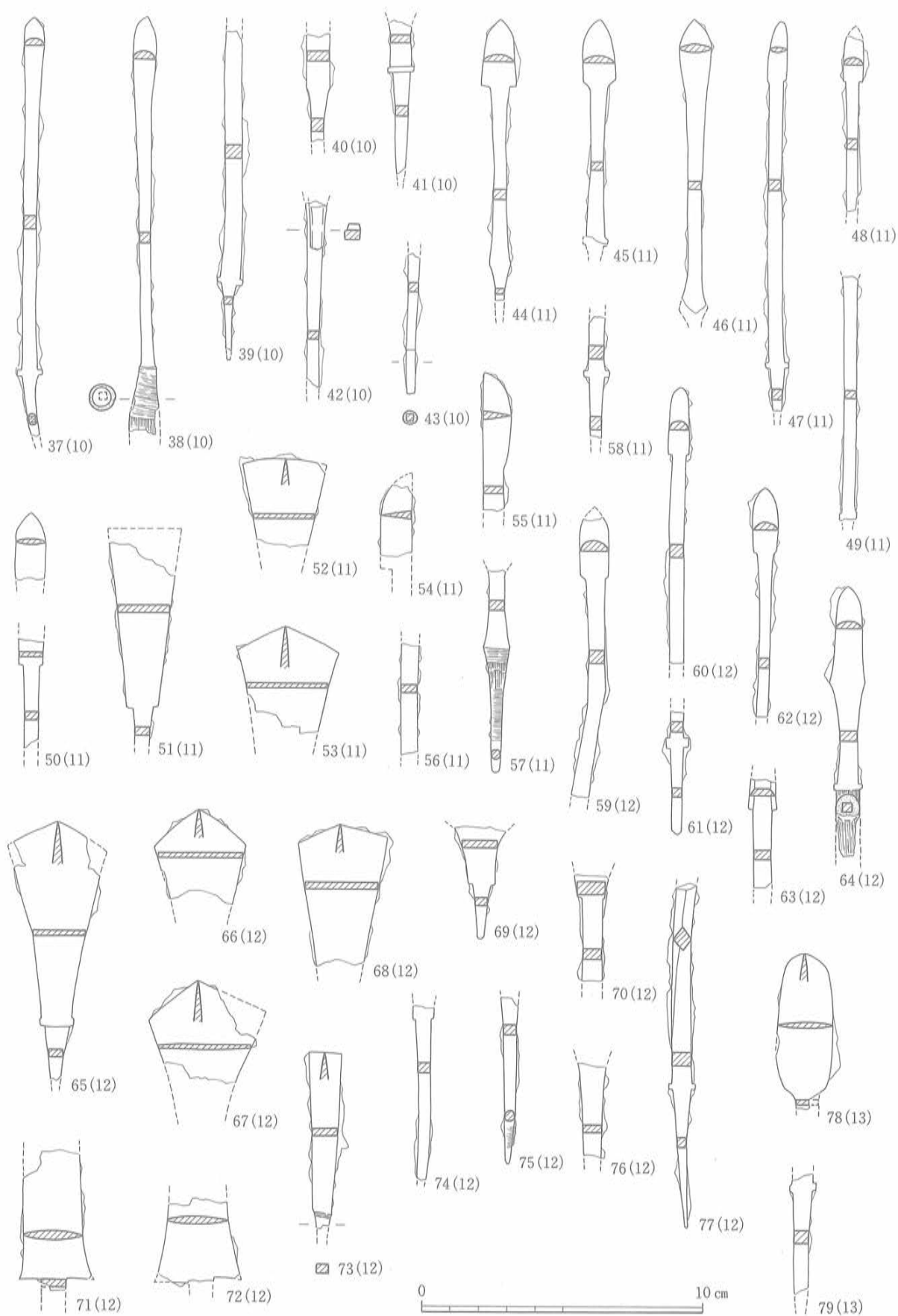
13号からは113の刀身と114の柄口金具が玄室から出土している。刀子は完形品で、研ぎ減りは少なく両関、柄に若干木質が残る。全長14.2cm。柄口金具は2mmの鉄板を環状に作り、刀身側を若干折り曲げる。

その他、115は14号前庭部、116は16号羨道部、117は18号墓道からの出土である。118・119は20号横穴墓の玄室からの出土で、119は関部から折れているが、柄口金具は幅が1.4cmの銅板を折り曲げる。

銅板柄口金
具



第66図 小倉谷横穴墓出土鉄器実測図その1 (1/2)



第67図 小倉谷横穴墓出土鉄器実測図その2 (1/2)

珍しい鉈

鉈 (207・208) 207は13号玄室から出土した鉈の破片で刃部先端を欠く。茎部は長方形で、刃部は断面三角形を呈し全体に反りがある。208は16号羨道部から出土した珍しい鉈である。刃部は「U」字形の片刃で、全長11.7cm、柄の中央部は径7.0mmの円形、基部は5.0mmの方形を呈する。細い溝を彫る工具であろう。

③馬具

蕨手銜

引手・銜共
連法

銜・引手 (120~128) 120・121は5号横穴墓出土で、前者は銜の連結部である。断面は6mmを測る。墓道から出土。後者は小型の「く」字状引手で羨道部から出土。122は6号横穴の閉塞石内から出土の「く」の字引手の小型品。123は8号前庭部から出土した蕨手銜の環状部である。124は10号・11号前庭部出土の「く」字状引手で半欠である。125は小型の蕨手銜で両端に引手環状部と環状鏡板の破片が残っている。引手・銜共連法の形態で前庭部から出土した。126は右撚形銜で金具径が5mm、両者とも11号前庭部出土。

舌形鉤金具

矩形立聞造
環状鏡板

127~131・139は16号横穴墓の羨道部から前庭部にかけて出土したもので、一方の銜の先端が破損しているが、139が欠損した部分に相当する。銜の断面は円形で径が1.0cm、先端の環は大きめで中には鉄地金胴張りで断面形が蒲鉾形の鋳飾舌形鉤金具を連結した小型矩形立聞造環状鏡板と引手金具を共連する引手・銜共連法のものである。引手の断面は蒲鉾形、環状鏡板は方形を呈する。128は環状部が蒲鉾形と同じであるが、金具部分が方形を呈し、別の銜と考えられる。129は127のもう一方の鋳飾舌形鉤金具で、裏面に面繫の革帯が若干残っている。130・131は127に伴う「く」字状引手である。

瓢形環状鏡
板

回字形立聞
造環状鏡板

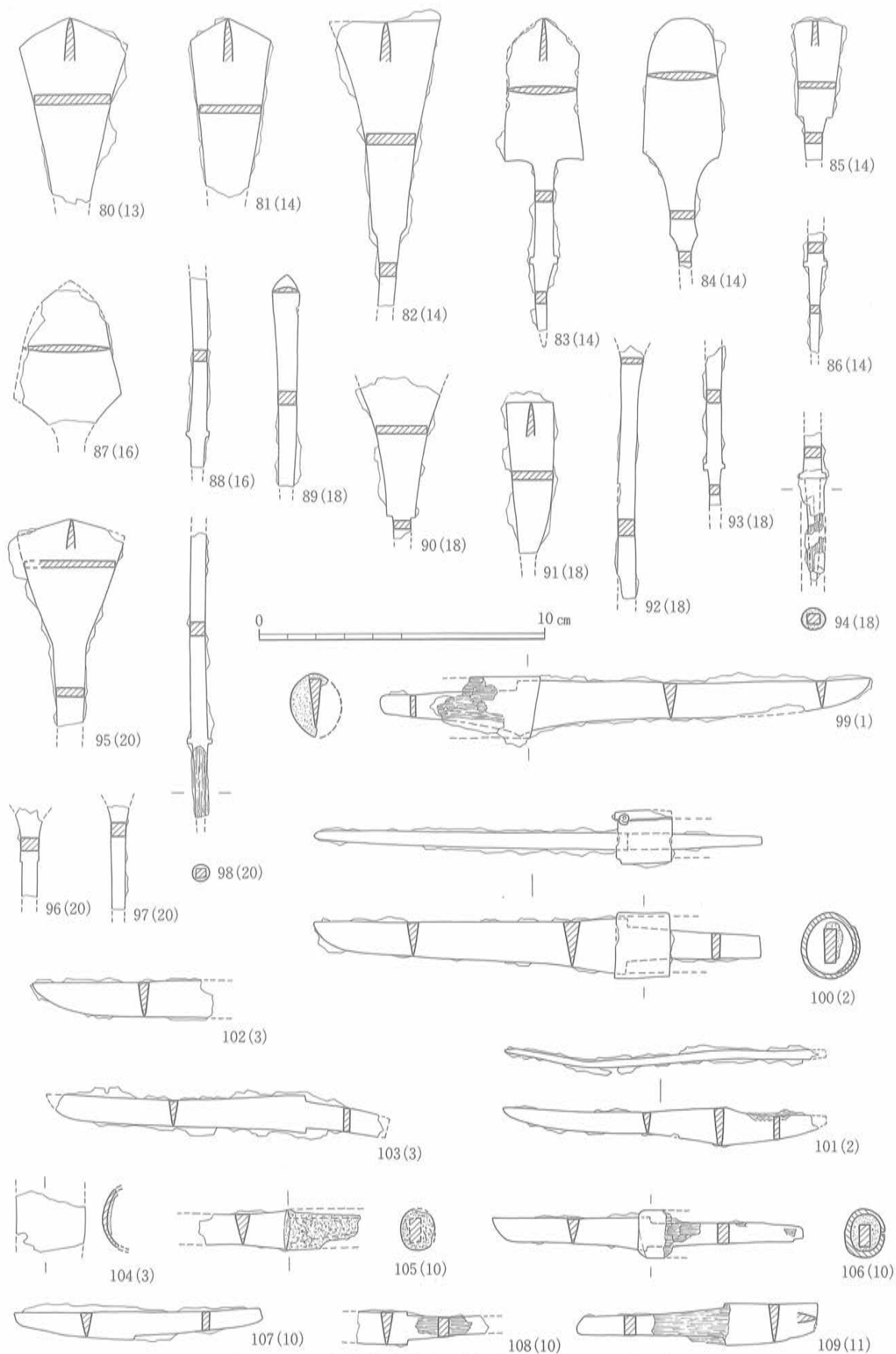
鏡板 (132~139) 139は127と一連のものである。132は5号横穴墓の墓道から出土した環状鏡板の一部で断面蒲鉾形。133は瓢形環状鏡板で6号閉塞内から出土した。134は小型の矩形立聞造環状鏡板で金具部は扁円形である。135は回字形立聞造環状鏡板で立聞部分を大きく造る。11号前庭部から出土。136も11号前庭部出土の回字形立聞造環状鏡板であるが135とは立聞部が若干異なる。137・138は14号玄室から出土した回字形立聞造環状鏡板で細みの「く」字状引手と銜が連結するタイプで、両者は立聞部の孔の形状が若干異なるが両者とも一連のものであろう。

鉸具と吊金
具のセット

兵庫鎖 (140~142) 140は金具断面が円形で径が7mmの三連のもので、鉸具+兵庫鎖+「U」字形金具のセットで、両端にその痕跡が残っている。兵庫鎖の1個の長さが7.1cmであることから、鎖の全長は21.3cmとなる。6号横穴の閉塞内から出土した。141は断面が方形の兵庫鎖で二連遺存している。7号閉塞内から出土。142は連結部分の小片で12号・13号の前庭部からの出土で断面が方形である。

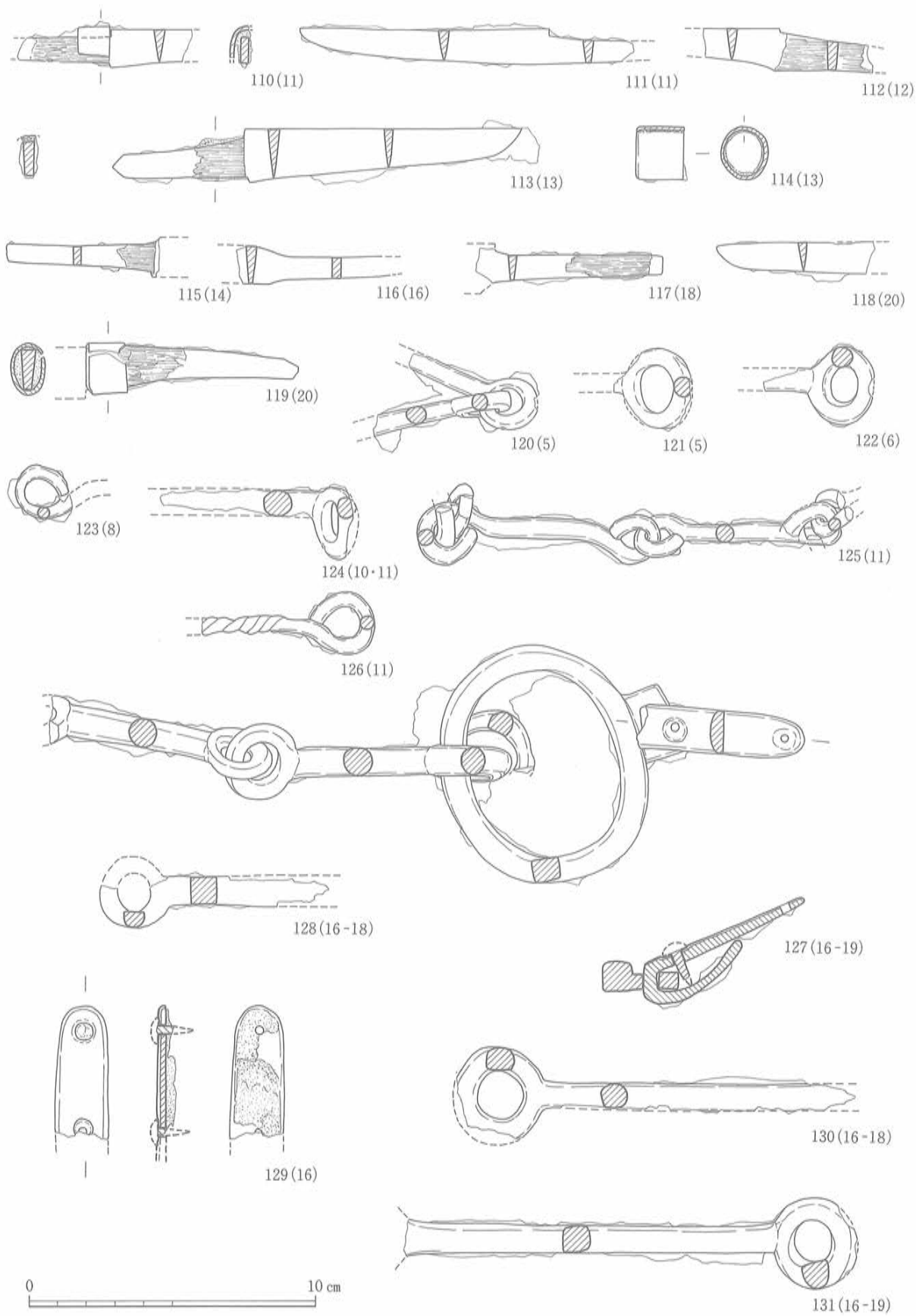
壺鐙吊手金
具

「U」字形金具 (143~152) 壺鐙の吊手金具で、143は5号横穴墓の玄室出土の吊手部である。144~146は11号の玄室から出土した吊手部分で、断面が蒲鉾形を呈する。145は吊手部と鋳留部の境が凹面をなし断面若干湾曲する。鋳穴は中心より若干ずれている。146は鋳が残り断面が菱形である。147~150は12号の前庭部から出土したやや大型の金具で、147は吊手断面が胴張り方形である。148は大型のもので鋳頭が1.0cmほどある。149は三角錐壺鐙の吊留金具部分で、3.0cm間隔で鋳留めしているが、中心に沿って一直線に並んでいない。断面は若干内側に湾曲する。幅は2.6cm、厚さは3.0mmである。151・152は16号の羨道部からの出土で、後者は小型品である。

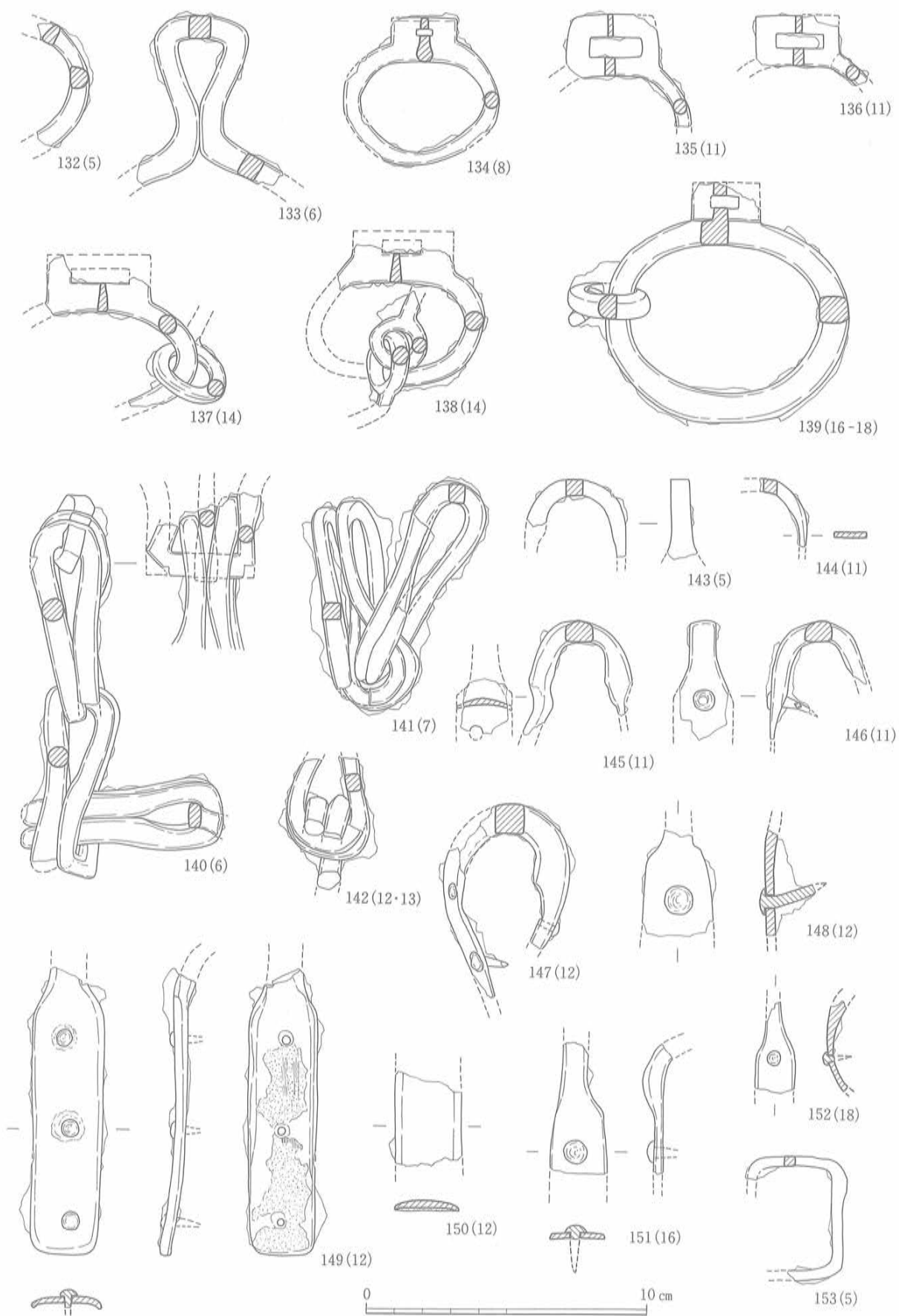


第68図 小倉谷横穴墓出土鉄器実測図その3 (1/2)

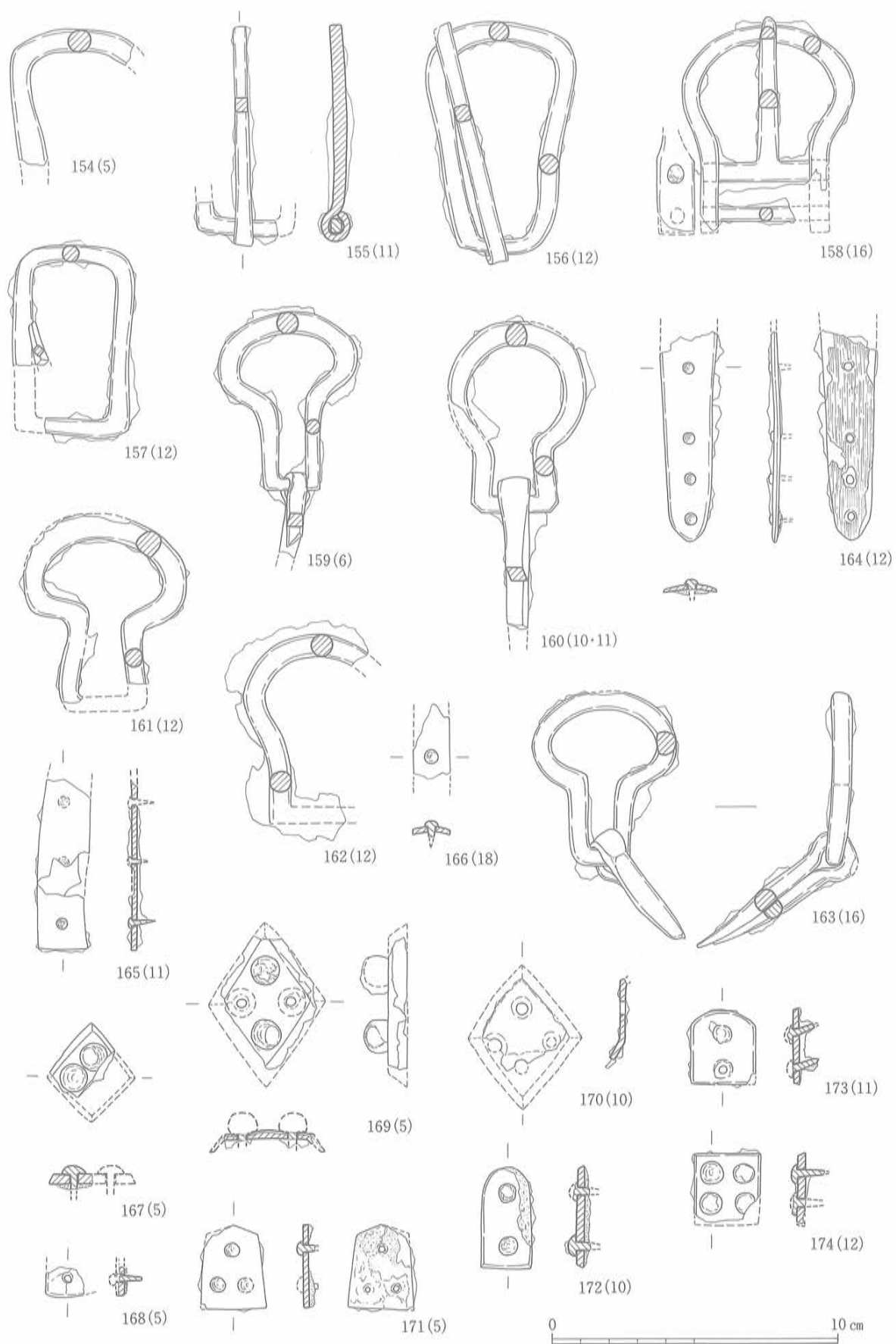
- 尾錠金具 絞 具(153~158) 153・154は5号出土の金具部であるが、前者は断面が方形であり貴金具の可能性がある。閉塞石下から出土。後者は金具の径が7mmで、156のタイプと同じであろう。墓道から出土した。155は長方形の形状で断面円形の金具に方形の刺金を巻きつけたもの。11号前庭部出土。156は12号の玄室から出土した馬蹄形に近い形態の金具に断面方形の刺金を巻きつける。金具径が6mm、刺金の長さは8.5cmである。157は長方形で刺金が紛失している。12号前庭部出土。158は尾錠金具で、馬蹄形の金具に「T」字状の刺金を金具に挿入するもので、挿入部の金具は幅広に造る。革帯巻付金具も挿入し、刺金部との間隔は1.4cmを測るが、革帯は遺存していない。金具径は6mm、刺金の断面は蒲鋒形で長さが5.0cmである。
- 鍵穴形金具 鞍金具(159~163) 形態的には鍵穴形の金具で、159は革帯と結束する部分がやや大きく頑強に造られ、金具径が7mm、足金具近くは径が5mmを測る。足金具は断面台形状の鉄棒を折り曲げ、一方のみを鞍に刺す。座金具は遺存しないが、193の不明鉄器とした円盤状の鉄器が座金具の可能性が考えられる。6号閉塞内から出土。160は整美な鞍で革帯の結束部の内側を平坦に造る。足金具は扁平な鉄を折り曲げて造るが、鍛造で接合面が不明瞭で先端部を欠く。10号・11号の前庭部から出土した。161は革帯結束部がやや扁平で大きく造る。足金具と接続部が欠損する。12号玄室から出土した。162は足金具部分がはっきりしない。12号前庭部出土。163は159と同じ形態の金具で、足金具は頑丈で断面蒲鋒形である。足金具の長さ(6.0cm)から鞍の居木まで入っていたと考えられる。
- 壺錠金具 錠・鞍金具(164~166) 164は木心鉄張壺錠の金具の先端部で、4カ所に径4mmの鋌を打ち込んでいるが、3本が1.5cm間隔で1本が2.5cmの間隔がある。金具は厚さ2.0mmで断面が僅かに内湾している。裏面には錠の木質が残る。12号前庭部から出土。
- 165・166は鞍金具であろう。165は一方が完結しており若干弧を描く。現存では3本の鋌が打たれている。幅は1.7cm、厚さ2.0mmである。11号前庭部出土。166は幅1.3cm、厚さ2.0mmの断面が内湾するもので18号前庭部出土。
- 菱形革帯金具 革帯飾金具(167~182) 167・169・170は鉄地金胴張革帯金具で菱形である。167は板状で径9.0mmの鋌を4本打ち込み厚さは3.0mmで5号墓道から出土。169は裏面が袋状になるタイプで、径が1.0cmの鋌を4本打ち込む。鉄地は2.0mm、金銅は1.5mmを測り、5号玄室から出土。170は破損し鋌はない。厚さ2.0mmで10号前庭部出土である。
- 駒形飾金具 168・171~174・179・180~182は鉄地金胴張革飾金具で、171は駒形を呈し金銅は剝離している。鋌は3ヶ所で裏には革の痕跡が残る。厚さ2.0mmで5号玄室から出土。172は爪形飾金具で2.0cm間隔で2本の鋌を打っている。厚さ3.0mmで裏面には革が付着しており、10号玄室内から出土。173は短い爪形で、金銅は剝離している。長さ1.2cmの鋌を打ち、11号玄室出土である。174は一辺2.4cmの方形で、4本の鋌が打たれている。厚さ3.0mmで、12号前庭部から出土した。175は飾金具の留具の円頭で、軸が方形、先端部を「L」字状に折り曲げる。11号前庭部出土。176は178の剣菱形の飾金具の鋌と考えられ、12号前庭部出土で、178は12号玄室から出土した。179は幅広の爪形で、8.0mmの鋌を3本打ち込み、厚さは3.5mm、金銅は完全に剝離している。13号玄室からの出土である。
- 剣菱形飾金具 180は細みの爪形飾金具で一方の側面が若干弧を描く。長さは3.2cm、幅が1.3cmで裏面に革紐の痕跡が残る。181は2.1cm×2.3cmの鉄地金胴張の革飾金具で優品である。縁



第69図 小倉谷横穴墓出土鉄器実測図その4 (1/2)



第70図 小倉谷横穴墓出土鉄器実測図その5 (1/2)



第71図 小倉谷横穴墓出土鉄器実測図その6 (1/2)

を面取りし、裏面に革紐が残る。15号玄室から出土。182は爪形金銅製飾金具で逸品である。三角形に小さな鋳留めがなされ、長さは2.7cm、幅2.2cm、厚さ2.0mm弱で15号前庭部出土。

爪形金銅製
飾金具

183・184はイモ貝製の飾金具で13号玄室から出土した。イモ貝の螺塔部を輪切りにし、塔部を穿孔して台座付留金具を挿入したもので、同様のものに八女郡広川町の鬼塚2号墳から2個と山門郡瀬高町女山の後期古墳から3個の出土例がある。

貝製飾金具

辻金具(185) 19号前庭部から出土した鉄地金銅張の辻金具で、4個の脚の内1個が欠損している。鉢部の径は4.0cm、高さは1.7cm、厚さ2.0mm、脚の長さは1.4cm、幅は1.6cmで頭部を欠損した鋳が付き先端に革帯が一部付着する。

鉄地金銅張
辻金具

雲珠(186) 16号横穴墓の前庭部から出土した鉄地金銅張雲珠である。鉢部に8個の脚がつくもので、鉢部に痕跡が僅かに残り、現存するのは2ヶ所のみである。鉢部は径が9.1cm、高さは4.3cm、厚さは4.0mm、脚は長さ2.0cm、幅は1.5cmを測る。鋳は宝珠形で径が9.0mmである。187は14号の墓道から出土した小型の欠損品で脚は1ヶ所のみ遺存する。脚には頭部が丸みのある鋳がつき、脚の長さは1.70cmである。

鉄地金銅張
雲珠

不明鉄器(193・194) 193は径3.8cm、厚さ2.0mmの円形の鉄器で中央に楕円形の孔を穿つ。何かの座金具の可能性はある。10号の閉塞内から出土した。194は楕円形に近い形の鉄板で、中央が1.5mm、縁が厚くなり4.0mmを測る。12号玄室内から出土した。

座金具

④農具

鎌(205・206) 205は17号玄室から出土した鎌の完形品で折り曲げが右側に来る。柄を装着する刃部側は段をなし、先端が緩く曲がる。全長が16.6cm、基部幅は2.9cm、刃部幅は1.8cmを測る。206は3号墓道出土の刃部片で、幅が3.0cm、背厚3.0mmを測り、図示した左端は完結している部分がみられ、大刀にしては背厚が薄すぎる。

少ない鎌の
副葬

鉄鋤先(209・210) 209は6号の閉塞石傍から出土した鋤先の完形品である。長さは13.3cm、最大幅が13.4cm、刃部幅は3.5cmを測り、袋部の深さは1.0cm、差し込み幅は10.4cmである。210は14号玄室から出土した欠損品で209より幅が狭い。刃部が使用により摩耗する。

完形の鉄鋤
先

(3)装身具(図版45～49、第74・75図)

装身具の種類は、耳環と勾玉・管玉・切子玉・算盤玉・丸玉・小玉・白玉などの玉類と貝釧がある。以下、個別を概略説明する。

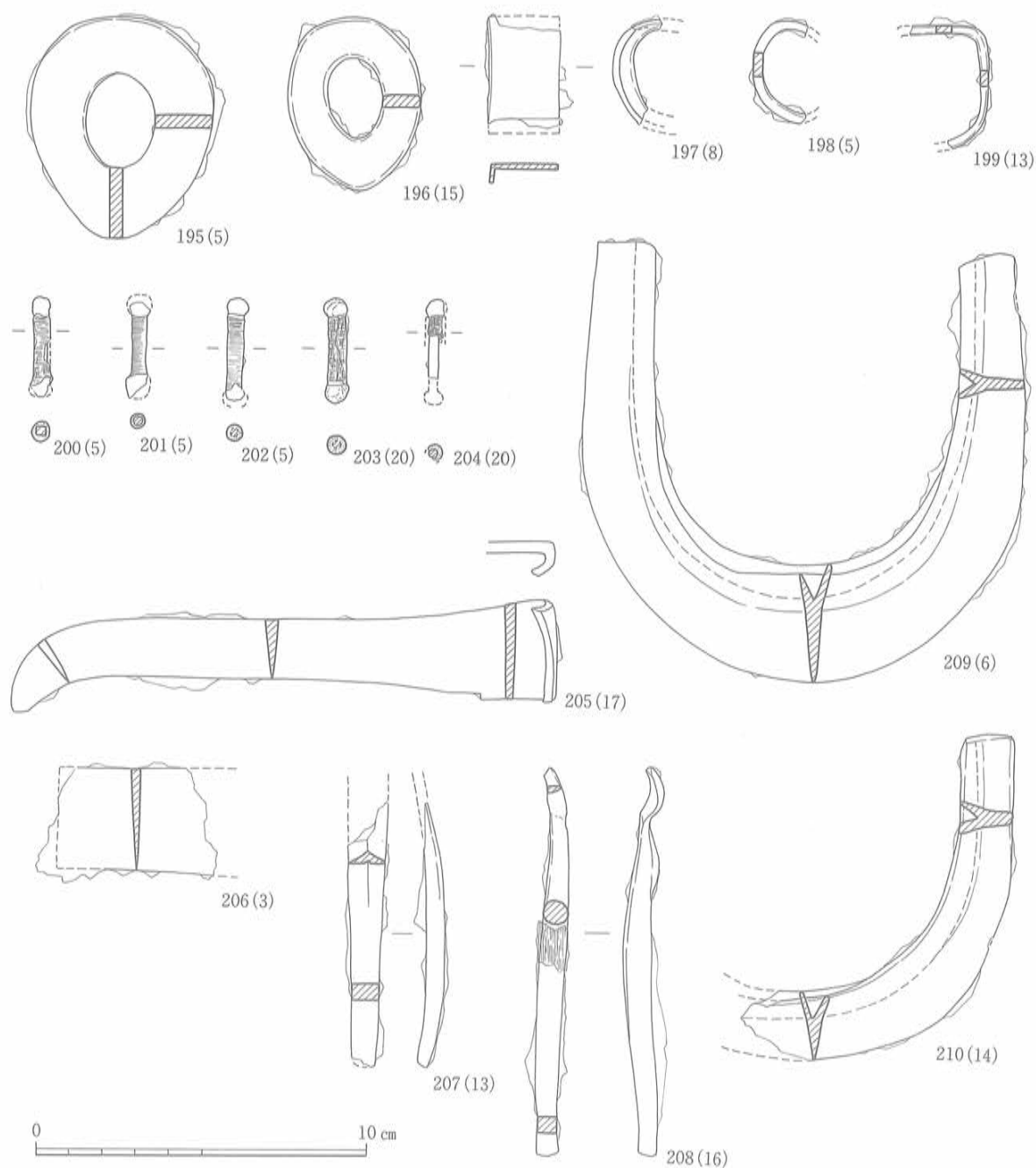
①耳環

総数66個の耳環が出土している。1号玄室からは3個出土しており、1-1・2は大きさ、形状から対になる金銅製耳環である。外径が2.65×3.0cmと2.75×3.0cm、重さは18.1gと19.6gである。1-3は鉄製の耳環であるが、鉄地金銅張りか銀張りであろう。

鉄地金銅張

3号横穴墓からは7個が出土している。この内3-1は純金製で優品である。重さは8.1g、外径は2.3×2.4cmを測る。他はすべて金銅製で重さが4.3g～19.3gである。3-3・4は形

純金製耳環



第73図 小倉谷横穴墓出土鉄器実測図その8 (1/2)

状、作りからセットになる。3-7・8も対になる可能性がある。

6号横穴墓の玄室からはセットになる2個が出土している。金箔は殆ど剝離している。断面が楕円形を呈し、重さは7.0gと9.0gを量る。7号玄室からは1個が出土した。全体に風化が激しく細くなる。重さは3.1gである。

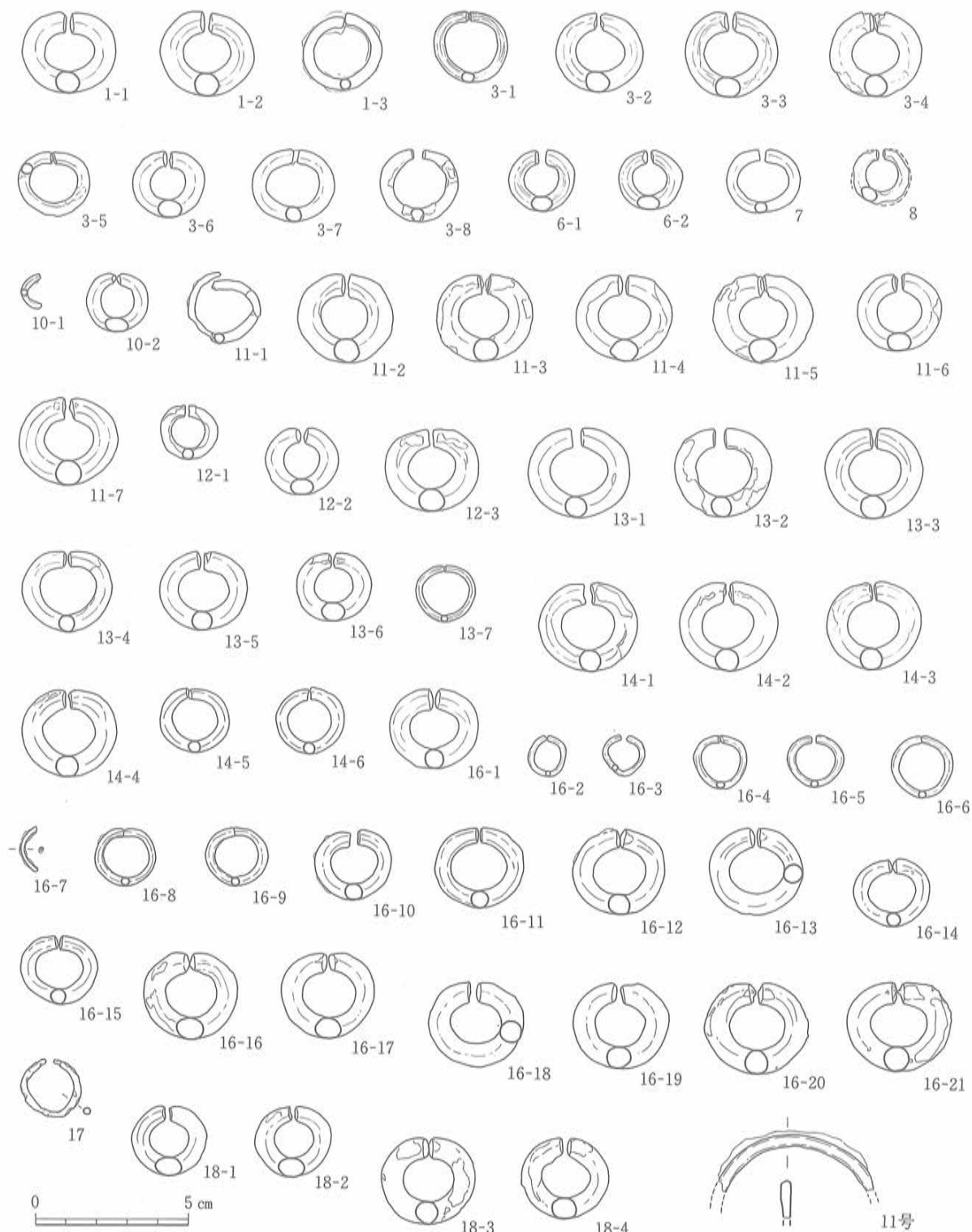
8は10号・11号と共有する前庭部からの出土で腐食が激しく金箔は遺存しない。重さ5.0gを量る。10号からは小型の銀製と金銅製が各1点ずつある。銀製は1/2欠損しており、断面径が0.2mmである。金銅製は断面が楕円形を呈し、6号出土のものと形態が似る。

11号玄室内からは金銅製が7個出土している。11-1は細みのもので断面径が0.3mm、

小型銀製耳環

重さ0.7gで質が悪い。11-2・3と11-4・5はセットの耳環でいずれも腐食が激しい。11-6・7は良質である。重さは15.3g～23.6gを量る。

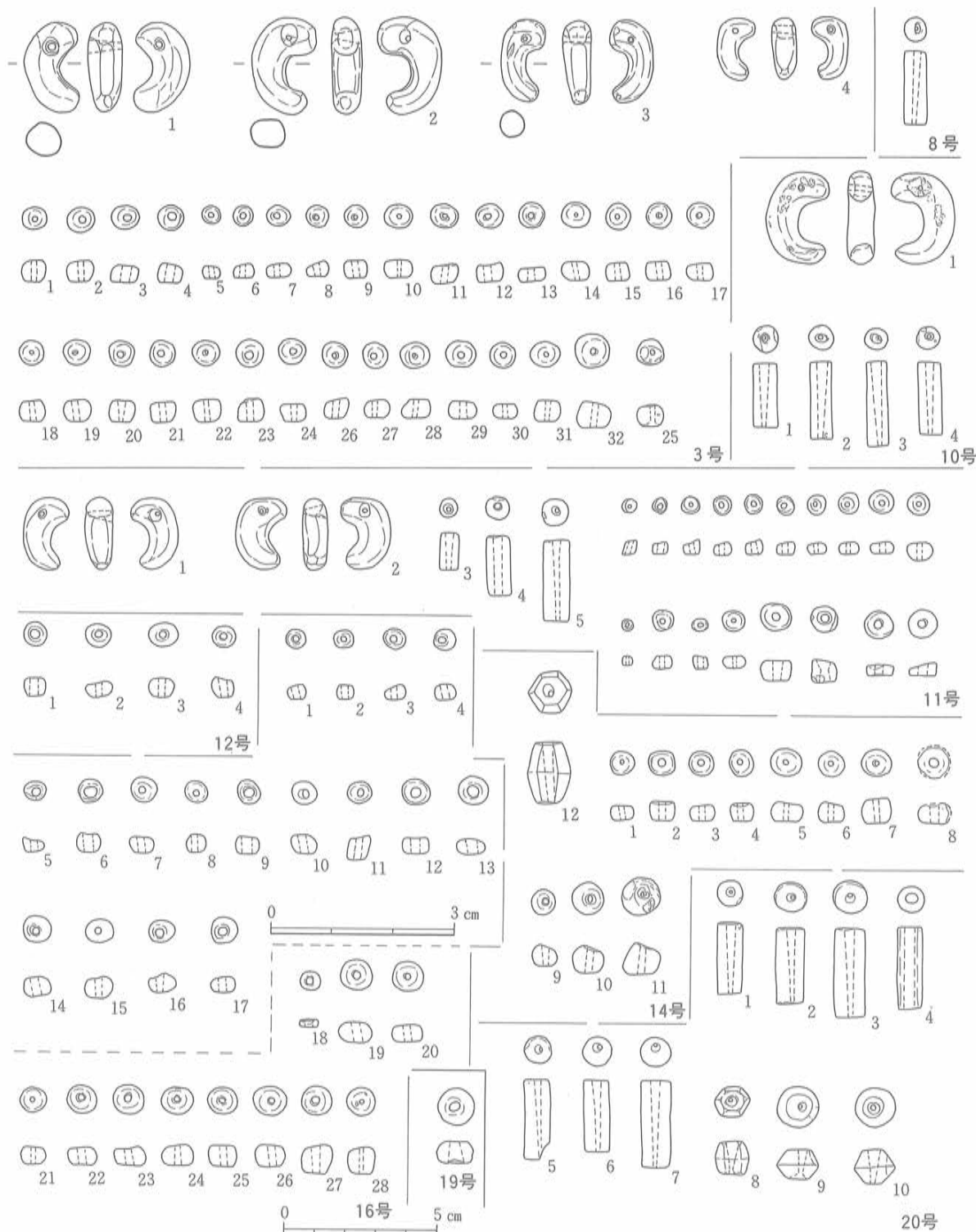
12号玄室からは大中小の3種類が出土している。12-1は重さ2.6gで腐食が激しく金箔が殆ど剥離している。12-2は残りは良いが金箔は剥離している。断面径が楕円形で重さ9.1gで6号出土のものに酷似している。12-3も金箔が剥離し、外径が 2.65×3.05 cm



第74図 小倉谷横穴墓出土装身具実測図その1 (1/2)

で19.3g。

13号からは金銅製6個と銀製1個が玄室から出土している。13-1・2は形態・法量からセットと推測される。1は外径 2.9×3.0 cmで21.2gで、2は 2.8×3.2 cm、重さ17.7gである。13-3は金箔が殆ど剥離している。外径 3.0×3.15 cm、重さ22.8gを量る。13-4は断面径の細いもので金箔は剥離し8.7gである。13-5は金箔が残り、外径 2.5×2.85 cm、



第75図 小倉谷横穴墓出土装身具実測図その2 (1/2)

重さ12.1gである。13-6は重さ13.1gを量る。13-7は形の整った銀製の耳環で、断面が方形を呈し一辺0.2cm、外径が1.8×1.9cm、重さは1.5gである。

銀製の逸品

14号玄室内から6個3セットが出土している。14-1は外径2.9×3.2cmで21.2g、14-2は2.9×3.1cm、21.0gである。14-3・4は20.1g・20.2gで金箔が残る。14-5・6は金箔が良く残る小型品である。両者の外径は2.1×2.3cm、断面径は0.4cm、重さは4.5gと4.6gを量る。

小型金銅製の優品

16号横穴墓からは最も数多く出土し、総数21個の内、形態・法量から8セットが数えられる。その中で銀製が8個3セット、金銅製が5セットである。16-2・3は外径の小さなもので、耳環に房状の飾りを付けていた可能性がある。16-4・5も対になる耳環である。16-6は整美な耳環で外径が2.0cm、断面径が0.2cm、重さ2.2gを量る。16-8・9もセットで外径が2.0cm弱で、2.3gと2.2gである。16-1・10～21までは金銅製で、18・20・21は金箔の遺存状態が良い。重さは5.8g～23.6gである。

数多くのセット耳環

17号玄室からは1個の細みの金銅製耳環があり、形態的には11-1と同じである。断面径が0.2cm、重さ0.8gを量る。18号の1・2は断面が楕円形で、形状では6号出土と同じ。セットになるものである。外径は同じで、重さは15.9gと14.4gを量る。18-3は金箔が多く残り重さが21.2g、18-4は17.6gで遺存状態が悪い。

②貝 釧

11号横穴墓の玄室から出土したイモ貝製の貝釧の破片が1点ある。イモ貝を横切りにしたもので、厚さが0.3cm、幅は一方が腐食しているが1.2cmを測る。破片を復原すると内径で5.0cmになる。内径から推定すると子供か女人のプレスレットであろう。

唯一のイモ貝製貝釧

③玉 類

玉の種類は、硬玉製3-1、瑪瑙製3-2・3、10-1・水晶製3-4、11-1・2の勾玉、碧玉製8、10-1～4、11-3・5、20-1～7、瑪瑙製11-4の管玉、水晶製14-12、20-8・9・10の切子玉・算盤玉、鉛ガラス製19の丸玉の他、ガラス・瑪瑙・滑石などの小玉・丸玉・白玉が多数あり、小玉・丸玉・白玉については計測表を参照されたい。

玉の種類
珍しい鉛ガラス
単位 (mm)

第2表 小倉谷横穴墓出土玉類計測表

番号	径	厚さ	孔径	分類	材質	色調	出土場所	備考
3-1	7.5	9.0	2.0	丸玉	ガラス	瑠璃色	玄室	半透明
3-2	9.0	7.0	2.0	丸玉	ガラス	瑠璃色	玄室	半透明
3-3	7.5～8.5	4.5～6.5	2.0～2.5	丸玉	ガラス	瑠璃色	玄室	半透明
3-4	8.0	5.0～6.5	2.5	丸玉	ガラス	瑠璃色	玄室	不透明
3-5	5.5	4.0	1.5	小玉	ガラス	瑠璃色	玄室	半透明
3-6	6.5	4.5	2.0	小玉	ガラス	濃水色	玄室	半透明
3-7	8.0	4.5	2.0	小玉	ガラス	瑠璃色	玄室	半透明
3-8	7.0	3.0～5.0	2.0	小玉	ガラス	瑠璃色	玄室	半透明
3-9	7.5	6.0	2.0	丸玉	ガラス	瑠璃色	玄室	半透明
3-10	9.0	6.0	1.5	丸玉	ガラス	瑠璃色	玄室	半透明
3-11	8.5	6.0	2.0	丸玉	ガラス	瑠璃色	玄室	半透明
3-12	8.5	5.5～6.5	2.0	丸玉	ガラス	瑠璃色	玄室	半透明
3-13	8.5	4.5	2.0	丸玉	ガラス	瑠璃色	玄室	半透明

単位 (mm)

番号	径	厚さ	孔径	分類	材質	色調	出土場所	備考
3-14	9.0	6.0	1.5	丸玉	ガラス	瑠璃色	玄室	半透明
3-15	8.0	6.0	1.5~2.0	丸玉	ガラス	瑠璃色	玄室	半透明
3-16	8.0	6.0	2.0	丸玉	ガラス	瑠璃色	玄室	半透明
3-17	8.5	5.5	2.0	丸玉	ガラス	瑠璃色	玄室	半透明
3-18	8.0	7.0	2.0	丸玉	ガラス	瑠璃色	玄室	半透明
3-19	9.0	7.0	2.0	丸玉	ガラス	瑠璃色	玄室	不透明
3-20	8.0	7.0	1.5~2.0	丸玉	ガラス	瑠璃色	玄室	半透明
3-21	8.0	6.5	2.0	丸玉	ガラス	瑠璃色	玄室	半透明
3-22	8.5	7.0	1.5	丸玉	ガラス	瑠璃色	玄室	半透明
3-23	9.0	7.0	2.0	丸玉	ガラス	瑠璃色	玄室	不透明、風化
3-24	8.0	5.5	2.0	丸玉	ガラス	瑠璃色	玄室	不透明、風化
3-25	8.5	6.5	2.0	丸玉	瑪瑙	あめ色	玄室	不透明
3-26	8.0	5.0~6.5	2.0	丸玉	ガラス	瑠璃色	玄室	半透明
3-27	8.0	6.0	2.0	丸玉	ガラス	瑠璃色	玄室	半透明
3-28	9.0	6.0	1.5	丸玉	ガラス	瑠璃色	玄室	半透明
3-29	9.0	5.5	2.0	小玉	ガラス	瑠璃色	玄室	半透明
3-30	8.0	4.5	1.5	小玉	ガラス	瑠璃色	玄室	半透明
3-31	8.0	6.5	1.5	丸玉	ガラス	瑠璃色	玄室	半透明
3-32	11.0	7.0~8.5	2.0	丸玉	ガラス	水色	玄室	不透明
11-6	5.0	4.0	2.0	小玉	ガラス	紫色	玄室	半透明
11-7	5.0	4.0	2.0	小玉	ガラス	紫色	玄室	半透明
11-8	5.5	3.0~4.5	1.5	小玉	ガラス	瑠璃色	玄室	半透明
11-9	5.5	3.0~4.0	1.5	小玉	ガラス	瑠璃色	玄室	半透明
11-10	5.8	3.5~4.5	2.0	小玉	ガラス	瑠璃色	玄室	半透明
11-11	5.0	3.0~4.0	1.5	小玉	ガラス	淡紫色	玄室	半透明
11-12	6.0	3.8	1.0	小玉	ガラス	青色	玄室	半透明
11-13	6.5	4.0	1.0	小玉	ガラス	瑠璃色	玄室	半透明
11-14	7.5	4.0	2.0	小玉	ガラス	濃水色	玄室	半透明
11-15	8.0	6.0	1.5	丸玉	ガラス	瑠璃色	玄室	半透明
11-16	3.5	3.0	1.0	小玉	ガラス	黄緑色	玄室	不透明
11-17	6.5	4.0	1.8	小玉	ガラス	濃水色	玄室	不透明
11-18	5.0	4.0	1.0×2.0	小玉	ガラス	濃水色	玄室	半透明
11-19	7.0	3.0~4.0	1.0	小玉	ガラス	瑠璃色	玄室	半透明
11-20	10.0	6.5	2.2~3.0	小玉	ガラス	瑠璃色	玄室	半透明
11-21	7.0	7.0	1.2~2.5	丸玉	瑪瑙	あめ色	玄室	両方向から穿孔
11-22	9.0	3.5	2.5	白玉	滑石	白色	玄室	
11-23	9.0	2.0~4.0	3.0	白玉	滑石	白色	玄室	
12-1	3.5	3.0	1.5	小玉	ガラス	瑠璃色	玄室	半透明
12-2	4.0	2.5	1.0	小玉	ガラス	水色	玄室	透明
12-3	4.5	3.0	1.0	小玉	ガラス	水色	玄室	不透明
12-4	2.5	3.0	1.0	小玉	ガラス	暗水色	玄室	半透明
14-1	8.0	4.5	1.5~2.0	小玉	ガラス	瑠璃色	玄室	半透明
14-2	8.0	6.0	2.2	丸玉	ガラス	瑠璃色	玄室	不透明

単位 (mm)

番号	径	厚さ	孔径	分類	材質	色調	出土場所	備考
14-3	8.0	5.0	2.0	小玉	ガラス	瑠璃色	玄室	不透明
14-4	7.5	6.0	2.0	丸玉	ガラス	瑠璃色	玄室	不透明
14-5	10.0	6.0	1.5	丸玉	ガラス	瑠璃色	玄室	不透明
14-6	8.5	5.0~6.5	1.8	丸玉	ガラス	瑠璃色	玄室	不透明
14-7	9.5	8.0	1.5	丸玉	ガラス	瑠璃色	玄室	半透明
14-8	10.0	6.5	3.0	丸玉	ガラス	瑠璃色	玄室	不透明、風化
14-9	8.0	5.0~7.0	1.2~2.2	丸玉	ガラス	緑色	玄室	透明
14-10	10.0	7.0~8.5	2.5	丸玉	瑪瑙	あめ色	玄室	
14-11	12.0	8.0~9.5	1.5~2.0	丸玉	瑪瑙	あめ色	玄室	
14-12	14.0	19.5	2.0~4.5	切子玉	水晶		玄室	六角形
16-1	3.0	2.5	1.0	小玉	ガラス	瑠璃色	玄室	半透明
16-2	3.0	2.5	1.0	小玉	ガラス	瑠璃色	玄室	半透明
16-3	3.0	2.5	1.0	小玉	ガラス	瑠璃色	玄室	半透明
16-4	3.5	2.5	1.0	小玉	ガラス	瑠璃色	玄室	半透明
16-5	3.5	2.0	1.0	小玉	ガラス	瑠璃色	玄室	半透明
16-6	4.0	3.0	1.5	小玉	ガラス	水色	玄室	半透明
16-7	4.0	2.5	1.0	小玉	ガラス	水色	玄室	半透明
16-8	3.5	3.0	1.0	小玉	ガラス	水色	玄室	半透明
16-9	4.0	2.5	2.0	小玉	ガラス	水色	玄室	半透明
16-10	4.0	3.0	1.0	小玉	ガラス	水色	玄室	半透明
16-11	4.0	4.0	1.0	小玉	ガラス	水色	玄室	半透明
16-12	4.5	2.5	1.5	小玉	ガラス	水色	玄室	半透明
16-13	4.5	2.5	2.0	小玉	ガラス	水色	玄室	透明
16-14	4.5	3.2	1.5	小玉	ガラス	水色	玄室	透明
16-15	4.5	3.5	1.0	小玉	ガラス	水色	玄室	透明
16-16	4.2	2.0~3.0	1.0	小玉	ガラス	黄緑色	玄室	不透明
16-17	4.0	2.5	1.0	小玉	ガラス	黄緑色	玄室	不透明
16-18	6.0	2.0	2.0	白玉	滑石	白色	玄室	
16-19	10.5	6.5	2.5	丸玉	ガラス	瑠璃色	玄室	半透明
16-20	10.0	5.5	2.0	丸玉	ガラス	瑠璃色	玄室	半透明、青味強い
16-21	8.0	5.5	2.0	丸玉	ガラス	瑠璃色	玄室	半透明
16-22	9.2	5.8	2.0	丸玉	ガラス	瑠璃色	玄室	半透明
16-23	9.5	6.0	2.3	丸玉	ガラス	瑠璃色	玄室	不透明、風化
16-24	10.0	6.5	1.5~2.0	丸玉	ガラス	瑠璃色	玄室	不透明、風化
16-25	9.0	7.0	2.0	丸玉	ガラス	瑠璃色	玄室	不透明、風化
16-26	10.0	7.0	2.0	丸玉	ガラス	瑠璃色	玄室	半透明
16-27	10.0	9.0	2.5~3.0	丸玉	ガラス	瑠璃色	玄室	半透明
16-28	9.0	8.5	1.0	丸玉	ガラス	瑠璃色	玄室	半透明
19	11.5	7.0	3.5	丸玉	ガラス	青緑色	玄室	鉛ガラス製、風化
20-8	11.0	10.5	1.0~2.5	切子玉	水晶		玄室	六角形
20-9	13.0	9.5	1.0~3.0	算盤玉	水晶		玄室	
20-10	13.0	11.0	1.5~4.0	算盤玉	水晶		玄室	

IV 福岡県八女郡小倉谷横穴墓群出土の古墳人骨

九州大学大学院比較社会文化研究科

大森円・中橋孝博

はじめに

福岡県八女郡立花町に所在する小倉谷横穴墓群の発掘調査が1989年度に福岡県教育委員会により実施され、7基の横穴墓から人骨が検出された。人骨の保存状態は概して不良で原埋葬位置を保っているものはほとんどなく、関節した部位も見いだせなかった。失われた情報は少なくないが、当地域古墳人の特徴や埋葬習俗を知る上で貴重な資料になると思われる。以下に人類学的な分析結果を報告する。

方法・資料

人骨の計測は主に Martin-Saller (1957) に従い、性判定には筆者の方法 (中橋、1989) を、年齢推定には主に栃原の方法 (1957) を援用した。

横穴墓が営まれた時代は、副葬品などに関する考古学的所見から、6世紀中頃～7世紀中頃の間で、人骨資料の多くは6世紀後半のものと考えられている。出土人骨を以下の表3に一覧する。

表3 小倉谷横穴墓群出土人骨一覧

横穴名	最少個体数	性 別	年 齢	備考
1号横穴墓	7 体	男 性	成人	
		女 性	老年	
		女 性	熟年	
		不 明	成年後半～熟年	
		不 明	若年	
		不 明	若年	
		不 明	不明	左脛骨
2号横穴墓	6 体	男 性	熟年	
		女 性	熟年後半～老年	
		女 性	成年前半	
		不 明	成人	左右脛骨のみ
		不 明	小児 (8～9才)	
		不 明	小児 (10才前後)	
7号横穴墓	1 体	不 明	成人	
11号横穴墓	2 体	男 性	成人	

		女 性	成年	
13号横穴墓	1 体	男 性	成人	
17号横穴墓	1 体	女 性	成人	
18号横穴墓	8 体	男 性	熟年	
		男 性	成年後半	
		男 性	成人	
		女 性	熟年	
		女 性	成年	
		不 明	成人	左大腿骨
		不 明	成人	左大腿骨
		不 明	成人	左大腿骨

なお、人骨は九州大学大学院比較社会文化研究科考古人類資料室に保管されている。

結果

1. 観察所見（埋葬個体数・埋葬順位）

【1号横穴墓】

人骨は奥壁付近から出土しており、特に左奥隅に四肢骨が集中している。残存骨はいずれも関節状態を保っておらず、原埋葬位置から大きく乱されている。残存する人骨、その性別、年齢、および推定される被葬者の最少個体数は次に述べるとおりである。

頭蓋骨：ほぼ完存する頭蓋骨1個があり、前頭結節が発達し乳様突起、外後頭隆起の発達が弱いこと等から女性骨と判定される。また、この頭蓋骨の上顎歯槽部は全て閉鎖吸収しており、冠状・ラムダ両縫合の内板が閉鎖、外板も癒合が進行していることから老年と推定される。

この個体の他に、外後頭隆起の様相から女性と推定される後頭骨片、これと同一個体と思われる右頭頂骨片、下顎骨片がある。下顎骨には左中切歯、左右側切歯、左右犬歯、左第2小臼歯、左第1・2大臼歯が釘植しており、咬耗度から成年後半と推定される。それ以外に、上顎歯牙と下顎骨、下顎歯牙がまとまって出土しており、上顎は左右第2小臼歯と左第2大臼歯が、下顎は右犬歯～第2大臼歯と左第1大臼歯が遺存している。咬耗度は栃原2°aで成年後半～熟年と推定される。

上肢骨：右肩甲骨、右上腕骨、右橈骨が同定できた。上腕骨は三角筋粗面の発達は微弱で骨幹も細いことから女性骨と考えられる。

下肢骨：寛骨、大腿骨、脛骨、腓骨、距骨が同定できた。寛骨は右側の破片で2個体分が遺存している。大腿骨は骨体部が左右各4本ずつあり、そのうち左右各1本は粗線が発達しており頑丈で男性骨と推定される。残る左右各3本は粗線の発達が認められず華奢であるが、中でも左右1対と左1本は骨体が非常に細いことから若年のものと思われる。残りの左1本、右2本が女性骨であると考えられる。脛骨は右5本、左7本あり、いずれも骨体の破片である。骨体の太いものと細いものが存在することから男女両性が含まれていると思われるが、細片かつ骨質が脆弱であるため同定は困難であった。腓骨は右骨体片で、距骨は右の破片

である。

以上、1号横穴墓の被葬者の最少個体数は、頭蓋骨から3体、大腿骨から5体、脛骨から7体と推定された。その内訳は大腿骨から男性1体、女性2体、若年2体の、以上5体については確認でき、その内女性の年齢は頭蓋骨から、老年・熟年後半と考えられるが、成年後半～熟年とされた頭蓋が男性に該当するかどうかは不明である。よって、当横穴に遺存している人骨から推定される被葬者の最少個体数は、成人男性、老年女性、熟年女性、成年後半～熟年性別不明、若年2体、年齢性別不明の計7体である。

これらの個体の埋葬順位については、前述したように関節状態が乱されており、原埋葬位置を保つ部位が認められないこと、四肢骨の多くが集骨されていることから、明らかにすることは困難である。

【2号横穴墓】

埋葬個体数は少なくとも6体（男性1、女性2、不明1、小児2）を数える。その内4体は頭位を奥壁方向にとり、体部骨の関節は乱されているものの大きな移動は見られず、原埋葬位置に近い状態で保存されており、頭骨と体部骨との個体同定が可能であった。これらの個体は、玄室入り口から見て左側壁より右へ2-1号人骨、2-2号人骨、2-3号人骨、2-4号人骨として以下記載していく。それ以外の2体については、2-5号人骨は玄室右側壁寄りのところから出土した小児骨で、頭蓋骨、下顎骨、歯牙が遺存している。残存歯牙は下顎小白歯と大臼歯が計7本あり全て永久歯で、咬耗度から10才前後のものと推定される。2-6号人骨は成人の左右脛骨で奥壁中央部から出土しており、頭位は玄室入口方向であったと推測できる。

さて、奥壁に頭位をとる4体であるが、2-1号人骨は、玄室左側壁に沿って埋葬されており、頭蓋骨、左右上腕骨、右尺骨、左右大腿骨が遺存している。頭蓋骨は破片のためその特徴を明らかにすることはできないが、下顎犬歯、第1・2大臼歯が残存しており、咬耗度から判断して年齢は成年前半と推定される。上肢骨は破損がひどい。大腿骨の粗線の発達は弱く華奢であることから女性骨と思われる。

2-2号人骨は、2-1号人骨に隣接して埋葬されており、頭蓋骨、左右大腿骨が残存している。頭蓋骨は前頭骨、頭頂骨片で骨質は薄く脆い。残存歯牙は全て遊離歯でその歯式は以下の通りである。

M ²	M ¹	P ²	P ¹	C	I ²		C
		m ²					
M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁	m ₁ m ₂
					I ₂	C	P ₁

歯根は破損のため不明であるが、乳臼歯と永久歯の併存状況から判断して、8～9才と推定される。大腿骨は骨体部が残存している。

2-3号人骨は、2-2号人骨の隣に埋葬されている。残存する部位は、頭蓋骨、左右上腕骨、右尺骨、右橈骨、左右大腿骨、左右脛骨である。頭蓋骨は左右側頭骨、頭頂骨、後頭骨、右眼窩付近、上顎骨が遺存している。乳様突起が発達していることから男性骨と判定される。上顎歯牙は第3大臼歯まで全て釘植しており、その咬耗度は栞原2°a～2°bである。頭蓋縫合の内・外板の一部が癒合していることから熟年と推定される。

上肢骨は上腕骨の三角筋粗面が発達しており、前腕骨も頑丈である。下肢骨は大腿骨の粗線が発達し骨体も太い。脛骨は破片のためその特徴を明らかにしえない。以上のことから当人骨は熟年男性と判断される。

2-4号人骨は右側壁に沿って埋葬されており、頭蓋骨、左上腕骨、左右大腿骨、左右脛骨が残存している。頭蓋骨は前頭骨、左頭頂骨、左右側頭骨、後頭骨片、右頬骨、下顎骨が遺存する。眉弓付近の発達は弱く、前頭結節がよく発達していることから女性と判定される。頭蓋縫合は冠状縫合の内板が閉鎖、外板も一部閉鎖が認められ、矢状・ラムダ縫合についても部分的に内外板の癒合が見られる。残存歯牙の歯式は以下の通りである。(×は歯槽閉鎖)。

×	×	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁		I ₁	I ₂	C	P ₁	P ₂	×	×
---	---	----------------	----------------	---	----------------	----------------	--	----------------	----------------	---	----------------	----------------	---	---

歯牙の咬耗度は栃原2°bで、大臼歯の歯槽が閉鎖していること、前述の頭蓋縫合の閉鎖状態とを併せ考えると、熟年後半～老年と推定される。四肢骨は、上腕骨の骨体片が遺存しており、大腿骨、脛骨は筋付着部がやや発達しているものの骨幹は細く女性骨と考えられる。

以上、2号横穴墓に遺存している人骨から推定される被葬者の最少個体数は、熟年男性、熟年後半～老年女性、成年前半女性、性別不明成人、小児2(8～9才・10才前後)の6体である。これらの個体の埋葬順位については、各個体とも関節状態を保っていないこと、個体間の骨の重層関係が見られないこと、保存状態が類似していることなどから判断が困難である。ただ、2-3号人骨の下肢骨が左側壁より、2-4号人骨の下肢骨が右側壁より動かされており、中央部にスペースを確保しようとした意図が読みとれることから、玄室側壁沿いから中央へと順次埋葬された可能性が想定できる。しかしながら、その中央スペースに遺存する2-6号人骨は左右脛骨のみであり、骨の保存状態は他の個体と比べて不良であるためこの個体を最終埋葬と断定することにも少し疑問が残る。

【7号横穴墓】

人骨は、歯牙片、右大腿骨骨体1本が遺存している。いずれも成人骨であるが、性別は不明である。

【11号横穴墓】

遺存人骨は2体(男性1、女性1)を数える。男性人骨は玄室中央部に散乱しているが、女性人骨の各骨は関節状態を保っておらず多少の乱れが認められるものの、頭蓋骨が大きく移動するほかはほぼ原埋葬位置付近に遺存している。男性人骨を11-1号人骨、女性人骨を11-2号人骨として以下記載していく。

11-1号人骨は玄室中央付近に散乱しており、右上腕骨、左寛骨、左右大腿骨、左右脛骨、右腓骨が残存する。筋付着部の発達状態が良好で、また骨幹の太さから判断して男性骨と判定される。この個体の脛骨には赤色顔料の付着が認められた。

11-2号人骨は頭蓋骨、歯牙2本、右上腕骨、左寛骨、左大腿骨、左脛骨が遺存している。頭蓋骨の外後頭隆起の発達は弱く、四肢骨が華奢なことから女性と判定され、歯牙の咬耗度から成年と推定される。

これら2体の埋葬順位は、骨の保存状態や出土状態から判断して、11-1号人骨→11-2号人骨であろうと考えられる。しかし当横穴墓から耳環が7個(3対+1か)出土しており、人骨が遺存していたこの

2体の他にも被葬者がいた可能性が高い。

【13号横穴墓】

左右大腿骨骨体と左脛骨骨体が関節はしないもののまとまって出土している。大腿骨の左右は対合関係にあり、粗線の発達は良好で骨幹も太く頑丈であることから成人男性骨と推定される。脛骨も太く成人男性骨であろう。大腿骨、脛骨の形態から、これらは同一個体に属すると考えられ、当横穴には少なくとも成人男性1体の埋葬が確認されるが、玄室内には耳環が7個遺存していることから、人骨は残存していないが他に数個体の埋葬があったと思われる。

【17号横穴墓】

玄室右奥壁付近から人骨が出土している。遺存する骨は、頭蓋骨の前頭部付近の破片と左大腿骨骨体である。頭蓋骨は骨の大きさや厚さから判断して成人骨と考えられるが、破損により性別、年齢を特定できる部位が遺存していない。一方大腿骨であるが、粗線の発達は弱く骨幹が華奢であることから女性骨と判定される。頭蓋骨と大腿骨が同一個体に属するものか判断することは困難であるが、それらの骨がまとまって出土していること、それ以外の人骨が検出されていないことから推測すると、同一個体である可能性が高いといえよう。いずれにしても、当横穴墓には少なくとも成人女性1体が埋葬されていたことは確認される。

【18号横穴墓】

頭蓋骨が4体分出土しており、それらの出土位置から交互に向かい合って埋葬されたと推測できる。四肢骨はそれらの頭蓋骨の間に認められ、各骨の位置関係はすべて乱されており、関節状態を保つ部位はほとんど皆無である。残存する人骨片、その性別、年齢、推定される最少個体数は以下に述べるとおりである。

頭蓋骨：成人女性とみられる頭蓋冠と下顎骨があり、歯牙は下顎右中切歯～第3大臼歯、左第1小臼歯～第3大臼歯、上顎右第1大臼歯が遺存している。その咬耗度は栃原2°bで熟年と推定される。それとは別個体の前頭骨、頭頂骨、後頭骨片、上顎骨、下顎骨片があり、前頭結節の発達具合から女性と判定される。残存歯牙は上顎右第2小臼歯、下顎左第1大臼歯、左右第2大臼歯で、咬耗度から成年と推定される。それ以外に、前頭骨片、側頭骨片、後頭骨片、上・下顎骨片があり、眉弓の発達から男性と推定され、上顎左右第1小臼歯、右第2小臼歯、下顎右第1小臼歯、左右第2小臼歯、左右第1大臼歯、右第2・3大臼歯の咬耗度（栃原2°b）から熟年と考えられる。その他に、筋付着部位の発達から男性と推定される左側頭骨、後頭骨片、これと同一個体の上・下顎骨片がある。歯牙は上顎左右第2小臼歯、右第1大臼歯、左右第2大臼歯が遊離して存在し、咬耗度から成年後半と推定される。

上肢骨：上腕骨、尺骨、橈骨が同定できた。上腕骨は右3本、左4本あり、うち左右各1本の骨体は太く頑丈で男性的である。尺骨は左2本、橈骨は左1本あり、いずれも骨体部の破片である。

下肢骨：寛骨、大腿骨、脛骨が同定できた。寛骨は右大坐骨切痕付近の破片が2個体分、左寛骨臼片が1個体分認められた。いずれも細片で性判定が可能な部位は遺存していない。大腿骨は右6本、左8本ありいずれも成人骨である。うち1対の対合関係が確認でき、骨幹の太さから判断すると女性骨と推定される。残り的大腿骨は、その多くが骨体部の破片しか遺存していないが、少なくとも右1本、左3本の粗線は発達しており頑丈であることから、男性が少なくとも3体は含まれていると推測できる。脛

骨も全て成人骨で、左右各4本が遺存している。うち左1本のヒラメ筋線は発達しており骨幹も太いことから、男性骨であると推定される。

以上より18号横穴墓の被葬者の最少個体数は、頭蓋骨と上腕骨、脛骨からは4体、大腿骨からは8体と推定される。出土人骨は全て成人骨であるが、その内訳は、頭蓋骨と大腿骨の所見から熟年男性、成年後半男性、成人男性、熟年女性、成年女性、成人性別不明3体となる。

体部骨が散乱しているため個々の頭骨との対応関係を特定することができず、個体識別を行うことが困難であったため、各個体の埋葬順位については明らかにすることができなかった。

2. 形態的特徴

小倉谷横穴墓出土の人骨はいずれも腐蝕、破損しており、完存する骨は皆無に近い。また、骨質は脆く破片の接合が困難であったため、計測が可能であったのは頭蓋骨1個体と一部四肢骨の限られた部位のみである。

【頭蓋骨】

計測が可能であったのは、1号横穴墓出土の老年女性人骨の頭骨のみである。主な計測値を比較群とともに表2に示す。

脳頭蓋では他の古墳人・弥生人と比較してやや長頭の傾向が窺え、現代人に近い値をとっている。

顔面は、老化に伴い上顎歯槽部に骨吸収が認められ、顔面の高径について明らかにすることができないが、顔幅に関しては、中顔幅が98mmと他の古墳人と比較してやや狭めの傾向があることが指摘できる。眼窩は幅、高さとも北九州古墳人の数値とほぼ同じで、鼻幅も同様に北九州古墳人の範疇におさまる。鼻根彎曲示数は86.4で鼻根部はやや立体的である。

【下肢骨】

計測結果と比較群を表3・4に示した。男女ともに計測が可能であったのは各2個体ずつである。

男性については、大腿骨、脛骨ともに骨体矢状径・横径が西日本古墳人とほぼ同様の数値をとり、平均的な古墳人の形態に近い。

一方女性は、計測可能であった2個体間に個体差が目立つ。2-4号人骨の大腿骨最大長は他の古墳人や弥生人と比較してやや短い、骨体は太く粗線の発達も良好で頑丈な傾向が見て取れる。他方18号横穴墓の女性人骨は、骨体の太さは他の古墳人とほぼ同じ位であるが、矢状径が小さく断面示数も85.2と小さい。

【推定身長】

2-4号の女性大腿骨に Pearson 式を適用して求めた推定身長は150.3cmで、古墳人の平均的な値に近い。

以上、小倉谷横穴墓古墳人の形態的特徴を概括すると、頭蓋骨にはやや長頭傾向が捉えられるが眼窩や鼻幅の値は北九州古墳人の平均値に非常に近い。四肢骨も男性は他の古墳人と類似しているが、女性の中には粗線の発達する頑丈な大腿骨をもつ個体や逆に華奢な個体もあり多様性が窺えた。小倉谷横穴墓が所在する筑後地域は、いわゆる渡来系形質と古い土着形質が混在する地域と指摘されている（永井、

1985)。今回検討可能であった人骨には北部九州的な特徴が窺えたが、資料数が少ないことから当横穴墓人骨の一般的傾向であるかどうか判断することはできない。今後近隣遺跡からの資料の増加をまって、地域的な傾向はもとより埋葬施設との関連性など、より詳細な検討を期したい。

謝辞

当人骨を調査、研究するに当たって様々なご教示ご助力をいただきました福岡県教育庁の佐々木隆彦氏及び関係諸氏に感謝致します。また、人骨の整理等でご協力いただいた九州大学医学部の古賀英也先生、九州大学大学院比較社会文化研究科基層構造講座の諸先生並びに学生諸氏に感謝いたします。

参考文献

- 阿部英世 1955 「現代九州人大腿骨の人類学的研究」『人類学研究』2。
原田忠昭 1954 「現代西南日本人頭骨の人類学的研究」『人類学研究』1。
池田次郎 1988 「吉備地方海岸部の縄文時代人骨—時代差と地域性の成立」『考古学と関連科学』鎌木義昌先生古稀記念論文集刊行会。
池田次郎 1993 「古墳人」『古墳時代の研究』1、雄山閣。
鑄鍋命達 1955 「九州人下肢骨の研究」『人類学研究』2。
城一郎 1938 「古墳時代人骨の人類学的研究 第三部 下肢骨」『人類学輯報』1。
Martin-Saller 1957 Lehrbuch der Anthropologie, Bd. I. Gustav Fischer Verlag. Stuttgart.
内藤芳篤 1971 「西北九州出土の弥生時代人骨」『人類学雑誌』79-3。
内藤芳篤 1985 「南九州およびその離島—国家成立前後の日本人」『季刊人類学』16-3。
永井昌文 1985 「北部九州・山口地方—国家成立前後の日本人」『季刊人類学』16-3。
中橋孝博 1988 「古人骨の性判定法」『日本民族・文化の生成』（永井昌文教授退官記念論文集）六興出版。
中橋孝博・永井昌文 1989 「弥生人の形質」『弥生文化の研究』1、雄山閣。
枡原博 1957 「日本人歯牙咬耗に関する研究」『熊本医学会雑誌』31. 補冊4。

第4表 主要頭蓋骨計測値の比較（女性）

		小倉谷1号 (老年)	北九州 (古墳) ⁽¹⁾		南九州 (古墳) ⁽²⁾		北部九州 (弥生) ⁽³⁾		西北九州 (弥生) ⁽⁴⁾		西南日本 (現代) ⁽⁵⁾	
			N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
1	頭蓋最大長	176	37	175.6	6	176.7	86	177.0	15	178.1	42	172.8
8	頭蓋最大幅	(133)	33	137.3	5	139.4	84	138.4	15	139.3	42	133.8
17	Ba-Br 高	129	30	139.6	7	131.0	66	130.7	7	127.3	42	131.5
8/1	頭長幅示数	(75.6)	28	78.5	1	76.7	72	78.1	15	78.2	42	77.5
17/1	頭長高示数	73.3	27	74.2	4	73.9	62	74.1	7	71.2	42	76.2
17/8	頭幅高示数	(97.0)	21	93.9	2	93.8	56	94.9	7	92.5	42	98.4
45	頬骨弓幅	—	27	131.2	2	131.5	61	131.3	6	130.2	42	124.3
46	中顔幅	98	31	100.4	8	99.5	67	99.8	11	95.9	42	93.6
47	顔高	—	15	110.4	9	109.1	45	116.3	9	104.9	10	113.0
48	上顔高	—	33	67.7	12	61.0	66	70.1	12	60.9	48	68.6
47/45	顔示数(K)	—	13	83.3	2	83.3	34	88.7	6	81.7	10	90.5
47/46	顔示数(V)	—	12	109.2	6	108.6	39	116.7	9	109.5	10	118.3
48/45	上顔示数(K)	—	23	51.7	2	47.5	49	53.7	6	47.6	40	55.1
48/46	上顔示数(V)	—	27	67.7	7	60.8	57	70.2	11	63.5	40	73.2
51	眼窩幅(左)	40	31	41.3	14	40.7	66	41.6	10	41.1	42	40.7
52	眼窩高(左)	33	34	33.9	14	32.0	65	34.1	10	31.2	42	34.0
52/51	眼窩示数(左)	82.5	31	82.2	14	78.7	62	82.0	10	75.9	42	83.7
54	鼻幅	(25)	32	25.9	12	26.4	72	26.6	12	26.6	42	25.2
55	鼻高	—	32	48.5	14	46.7	71	49.8	12	46.3	42	48.7
54/55	鼻示数	—	30	53.8	12	56.5	69	53.5	12	57.4	42	51.9

(1)3)中橋・永井 (1989)、(2)内藤 (1985)、(4)内藤 (1971)、(5)原田 (1954)

表5 下肢骨計測値（男性・左）

		11-1号	13号	西日本 (古墳) ⁽¹⁾		北部九州 (弥生) ⁽²⁾		津雲 (縄文) ⁽³⁾		九州 (現代) ⁽⁴⁾	
				N	M	N	M	N	M	N	M
大腿骨											
M6	骨体中央部矢状径	27*	27*	22	27.3	162	29.3	47	29.0	59	26.5
M7	骨体中央部横径	26*	27*	22	26.8	166	28.0	47	26.0	59	25.6
M8	骨体中央周	86*	88	21	85.9	161	90.8	47	87.4	59	82.4
M6/7	骨体中央断面示数	103.8*	100.0	22	101.8	162	106.4	47	111.8	58	103.8
脛骨											
M8	中央最大径	27	/	17	28.9	74	32.0	46	32.3	61	27.8
M9	中央横径	20	/	16	21.4	75	22.9	46	20.4	61	21.1
M10	骨体周	75	/	16	80.9	74	86.5	46	84.5	62	78.4
M9/8	中央断面示数	74.1	/	16	74.3	74	72.2	46	63.3	61	76.1

表6 下肢骨計測値（女性・左）

		2-4号	18号	西日本 (古墳) ⁽⁵⁾		北部九州 (弥生) ⁽²⁾		津雲 (縄文) ⁽³⁾		九州 (現代) ⁽⁴⁾	
				N	M	N	M	N	M	N	M
大腿骨											
M1	最大長	398*	/	2	401.0	34	405.5	22	388.2	13	380.1
M6	骨体中央部矢状径	26*	23	23	24.5	112	25.7	45	25.2	13	23.6
M7	骨体中央部横径	28*	27	24	24.7	112	26.3	45	24.2	13	23.2
M8	骨体中央周	84*	78	23	78.1	111	81.3	45	78.0	13	74.2
M6/7	骨体中央断面示数	92.9*	85.2	23	100.0	112	98.3	45	104.5	13	102.0

(1)城(1938)、(2)中橋・永井(1989)、(3)池田(1988)、(4)阿部(1955)・鏑鍋(1955)、(5)城(1938)・池田(1993)

*は右。

V おわりに

小倉谷横穴墓群は、昭和62年から平成6年までの間で総数26基を調査した。しかし、連続した調査でないため、その間数基が破壊されたことが考えられ、全容を把握したか否かは今となっては分からない。ここでは、調査した範囲内で判明した事柄について若干述べてみたい。

(1) 南筑後の横穴墓の分布

福岡県南筑後地域の横穴墓は、主に立花町・瀬高町・高田町などの矢部川の南側に分布しているが、今のところ大牟田市では確認されていない。近年、矢部川の北側に位置する八女市でも矢部川対岸の大字柳島字長浦で2基の横穴墓が調査されているものの、現状では大牟田市を除く矢部川以南が分布域の主流になっている。

南筑後の横
穴墓

分布状況は、瀬高町の山内横穴墓群の56基、長谷横穴墓群の43基、小田山横穴墓群の21基、名木野横穴墓群・山中横穴墓群の13基が確認されており総数160基以上、高田町では調査例はないもののJR濃施駅裏の濃施公園内、飯尾横穴群などがある。立花町では稲荷山横穴墓群27基、山下横穴墓群21基、鬼隈横穴墓群18基、中通横穴墓群14基、上の山横穴墓群14基、浦田横穴墓群11基など総数150基以上存在している。これら分布域については矢部川との係わりが強いようである。

瀬高町の横
穴墓

立花町の横
穴墓

立花町の分布域は矢部川の左岸にある丘陵部が主で、狭隘な谷部に数遺跡が群構成をなしている。これらは、迎春川右岸と左岸、白木川右岸、瀬高町境の左岸の4グループに大別される。

(2) 横穴墓について

今回調査した小倉谷横穴墓群は白木川右岸の一群で、群の中では2グループに別れ、北丘陵の一群と丘陵頂部の一群である。北側丘陵の南斜面の横穴墓の中では3号～5号が単独で頂部に掘られ、他は相接する形で造られており、占地的優位性が想定される。

横穴墓の築造時期は6世紀中頃(11号～13号・17号・22号)に始まり、6世紀後半から7世紀初頭が主で、追葬は7世紀後半頃(18号)で終焉する。立花町で最初に現れる横穴墓は、稲荷山横穴墓群や鬼隈横穴墓群で、始まりが6世紀中頃と位置付けられていることと符合する。

横穴墓の始
まり

横穴墓の形態は、複室が10号・14号の2基で他はすべて単室形態である。玄室の平面形態は、方形19基、長方形2基と「コ」字状に屍床を設ける所謂「肥後タイプ」が5基あり、立面形態はドーム形23基と家形3基があるが、家形を表現する横穴墓は3基とも肥後タイプで造りも整ったものである。周辺での肥後タイプの横穴墓は、小倉谷横穴墓の北東2.0kmの稲荷山横穴墓群や野広尾横穴墓群などでも存在が確認されていて今後増加する可能性があり、527年の火国・豊国とを巻き込んだ磐井の乱との係りと県境という地理的条件とも相まって肥後との婚姻関係を彷彿させる資料である。また、3号横穴墓の造りは、横穴式石室を意識した構造で、床面に框石を据えて羨門部入口の両壁を石積みし天井部に石を架構するタイプで、近隣の例としては、形態的には若干異なるが、

家形肥後タ
イプ

婚姻関係

筑豊地方と
の共通性

門柱を立てて石を架構する瀬高町所在の長谷30号横穴墓がある。このような事例は筑豊地方に多く、飯塚市の池田横穴墓・小池横穴墓、田川市の清瀬横穴墓、桂川町の影塚横穴墓などがあり筑豊地域との人的・技術的交流の証左で興味深い事象である。

白木西原古
墳群

遺跡近辺では、小倉谷横穴墓群の南西500mで平成5・6年に調査した白木西原遺跡からは、5世紀後半から6世紀中頃（一部6世紀後半）にかけて群集墳が築造され、6世紀後半を中心とした集落が形成されている。この古墳群の終焉とともに小倉谷横穴墓群が造られることが偶然とは考えにくく、群集墳から横穴墓群への考え方が容認されるならば、また群集墳より横穴墓が圧倒する地域的な特性と促えるならば、白木西原の集団が奥津城を小倉谷に移行した可能性を指摘できよう。小倉谷横穴墓群が白木西原遺跡の方向、つまり白木川の右岸に形成される河岸段丘方向に開口しており、集落の調査範囲が狭いことで推測の域を出ないが、当然、小倉谷横穴墓群を保有した集団の居住域が想定できよう。

奥津城の移
行

横穴保有集
団

盟主の墳墓

北側傍には町内唯一の前方後円墳で全長34.5mの茶臼塚古墳が6世紀中頃に築造され、時を同じくして小倉谷横穴墓群が造られ始める。その後、横穴墓群の盛行時に東側300mに6世紀後半頃の大塚古墳が築造される。2基の古墳の被葬者はこの一帯の累代の盟主的存在で傘下に置かれた集団が白木西原古墳群・小倉谷横穴墓群を築造したと考えられる。

(2) 出土遺物について

特定の須恵
器供給源

出土した須恵器は、鬼隈横穴墓群の須恵器でも既に指摘されているように、形態の特徴やヘラ記号の共通性から八女市の塚ノ谷古窯跡からの供給であることが判明しているが、今回出土した須恵器類も同じ傾向にあり供給源が特定される。この時期の土師器については、南筑後特有の丹塗り土器や黒塗り土器が供献されている。これらは広川町所在の北の前遺跡の集落から数多く出土しており、6世紀後半頃に丹塗り土器が多く製作されるのも八女地域の特色である。

丹塗り土器
の製作

豊富な馬具

小倉谷横穴墓群から出土した鉄器には、武器・馬具・工具・農具などがあり、激しい盗掘を受けていたにも抱らず武器と馬具が豊富に出土している。特に馬具が多いのが目に付く。これは南筑後、特に八女郡の古墳に共通する傾向であるが、このクラスの集団がこれほどの馬具を保有していたことは、6世紀中頃～後半頃に盟主的存在の茶臼塚古墳と大塚古墳の被葬者を頂点に一種の騎馬集団を形成していたと推測でき、中でも貝製飾金具の出土は注目され、銀象嵌柄頭を副葬した広川町の鬼塚2号墳と瀬高町女山の長谷後期古墳出土（イモ貝製雲珠・県指定）のものをあわせて南筑後で3例目となる貴重な遺物である。

騎馬集団

圖 版



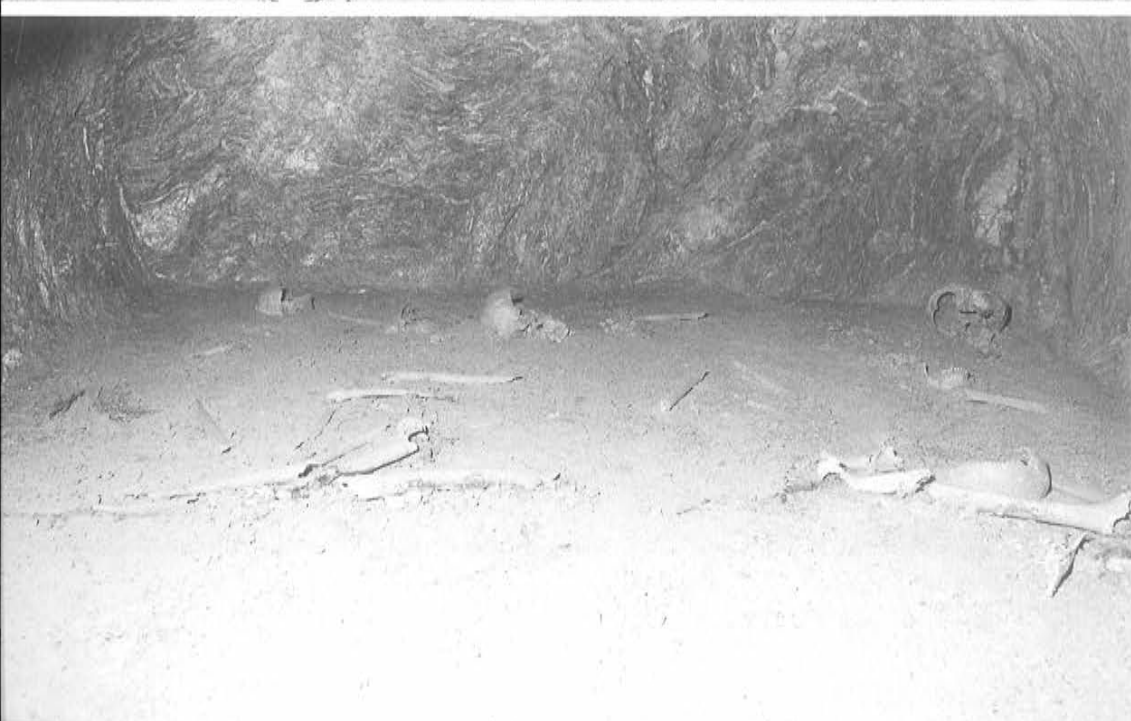
(1)小倉谷横穴墓群俯瞰（気球写真）
 (2)小倉谷横穴墓群遠景（南から）



(1)西側横穴群 (南西から)



(2)1号横穴墓玄室

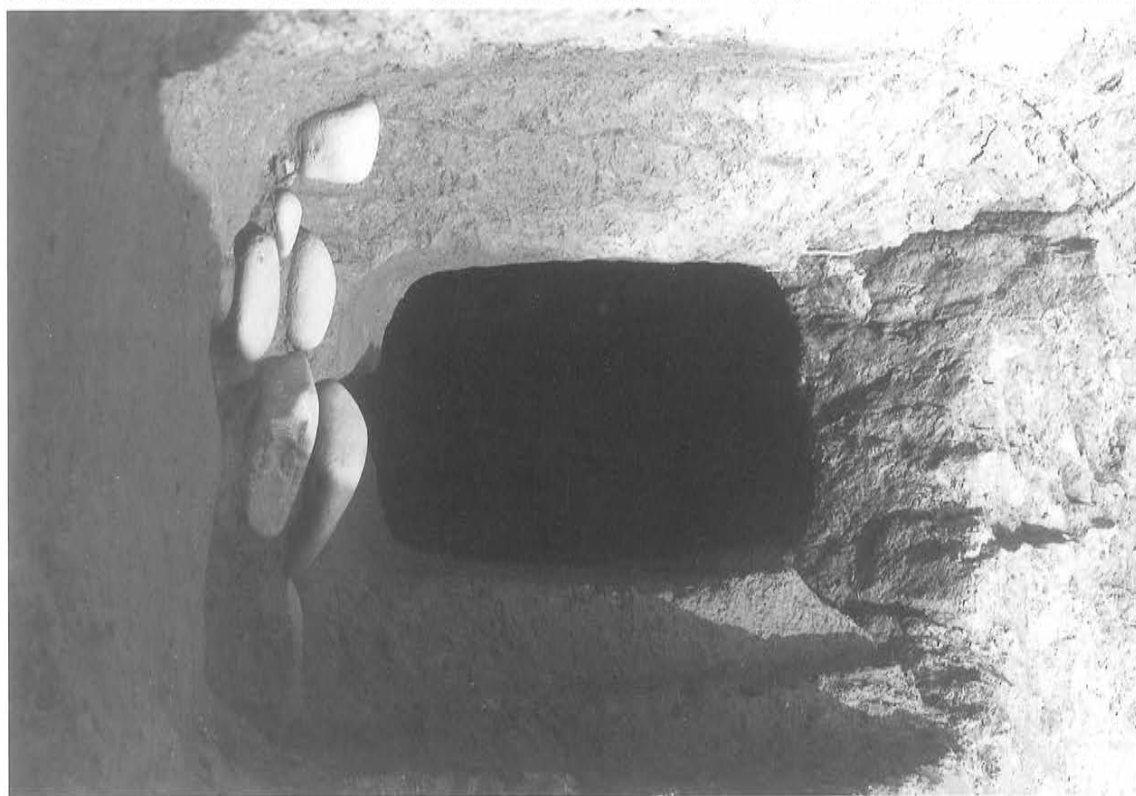


(3)2号横穴墓人骨出土状態

(1) 3号横穴墓発見当時の状態



(2) 5号横穴墓（西から）

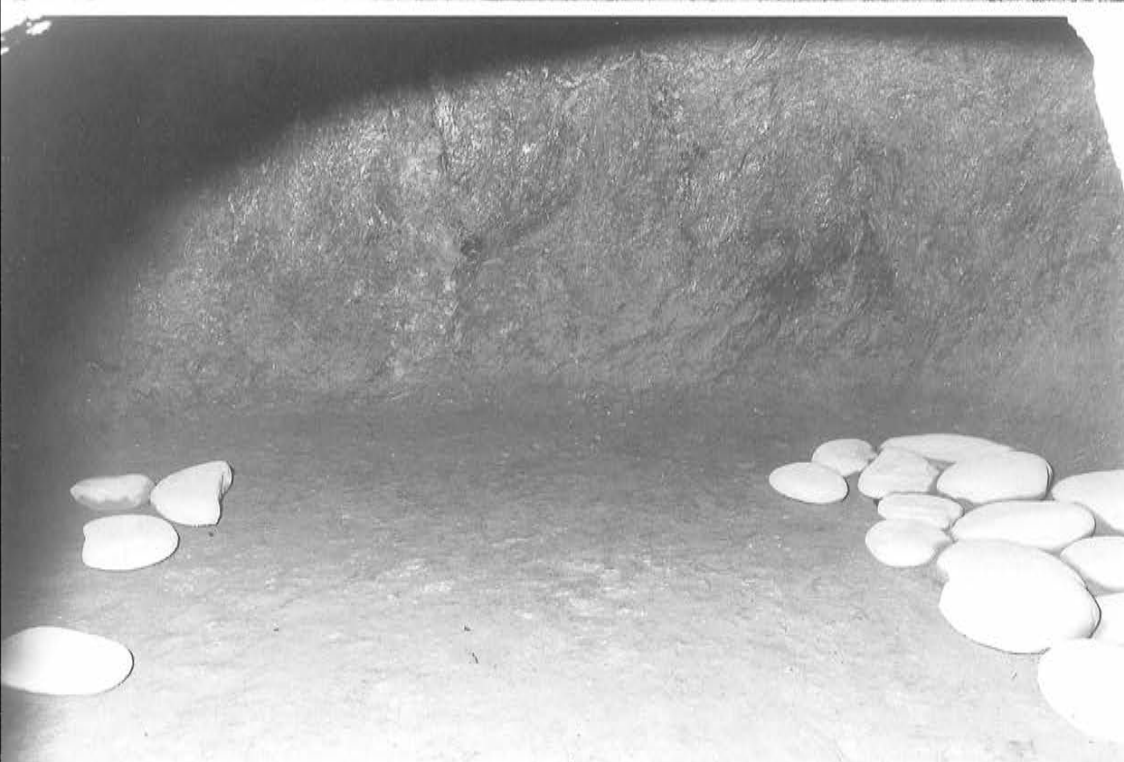


(3) 5号横穴墓玄室





(1) 5号横穴墓道遺物出土状態



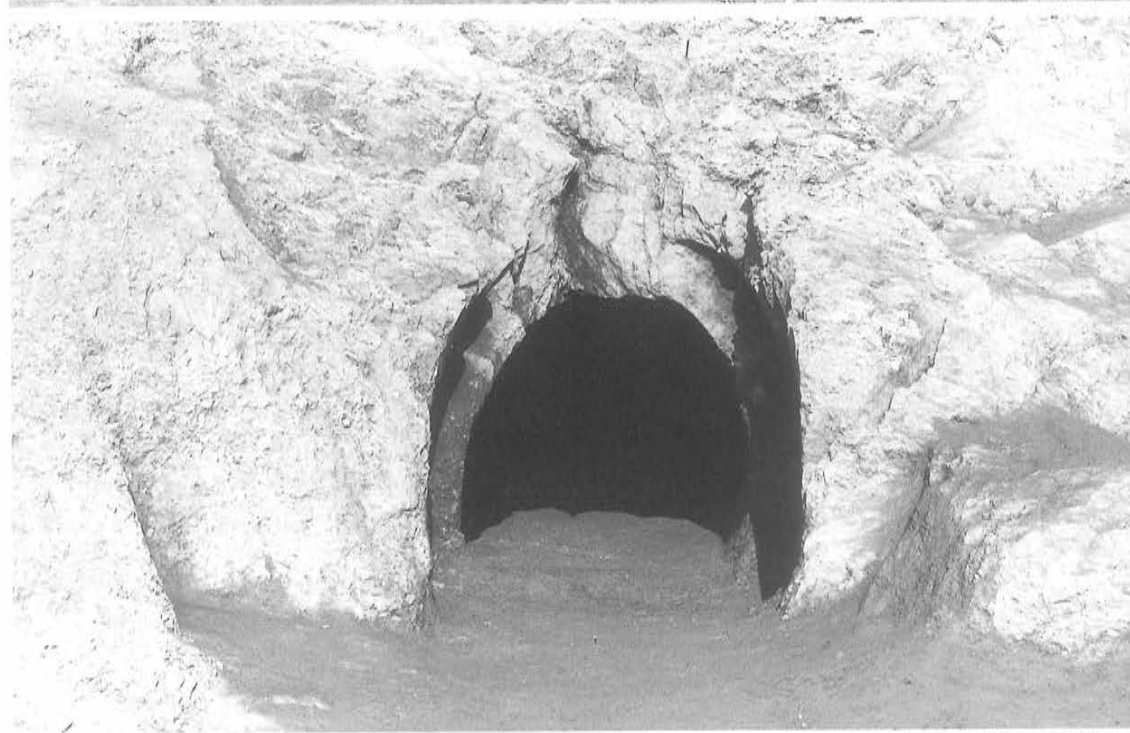
(2) 6号横穴墓玄室



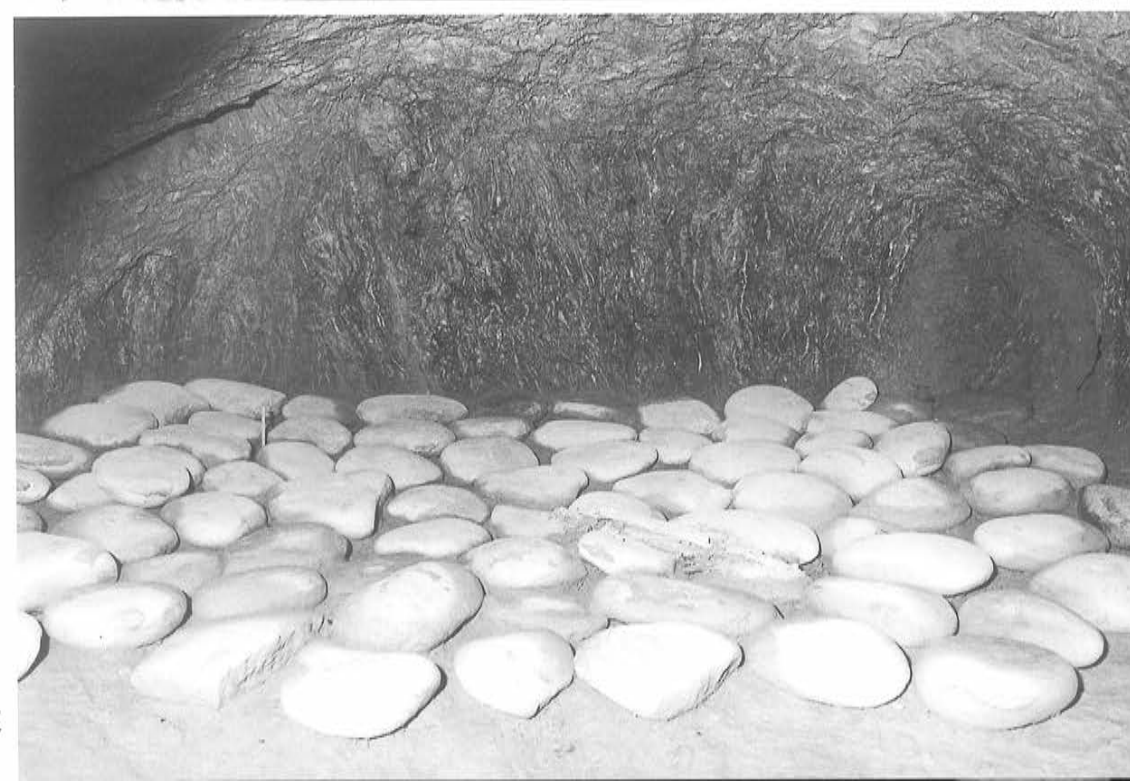
(3) 7号～12号横穴墓（南から）



(1) 7号横穴墓閉塞状態



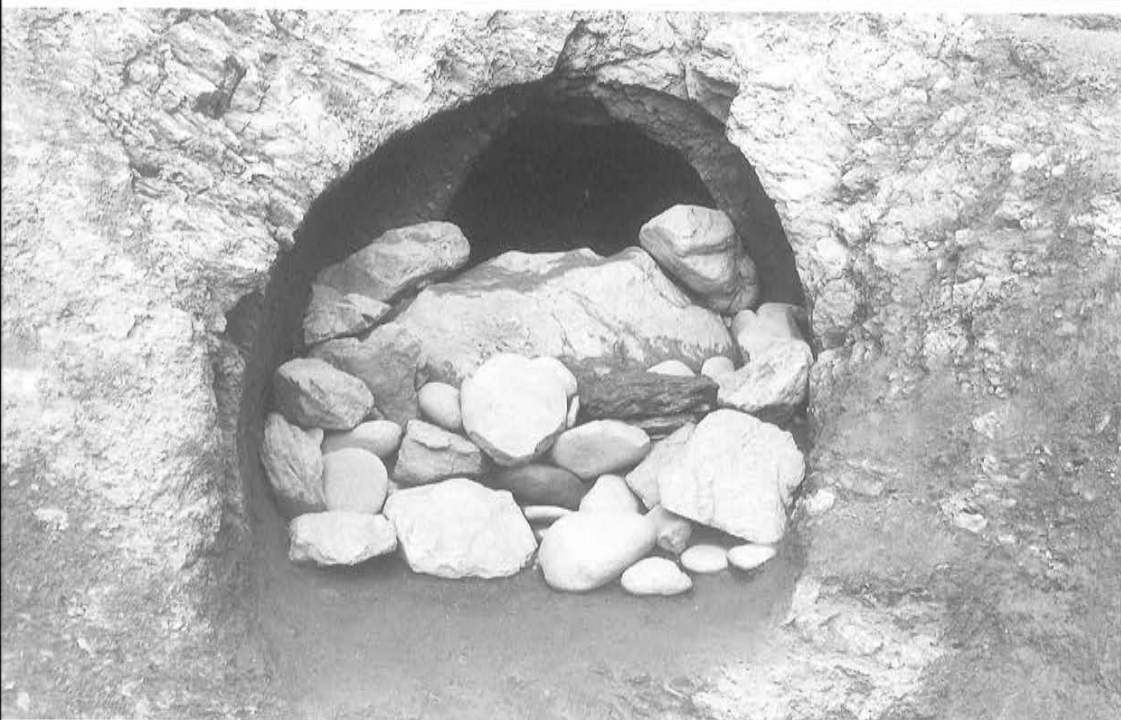
(2) 7号横穴墓閉塞
除去後の状態



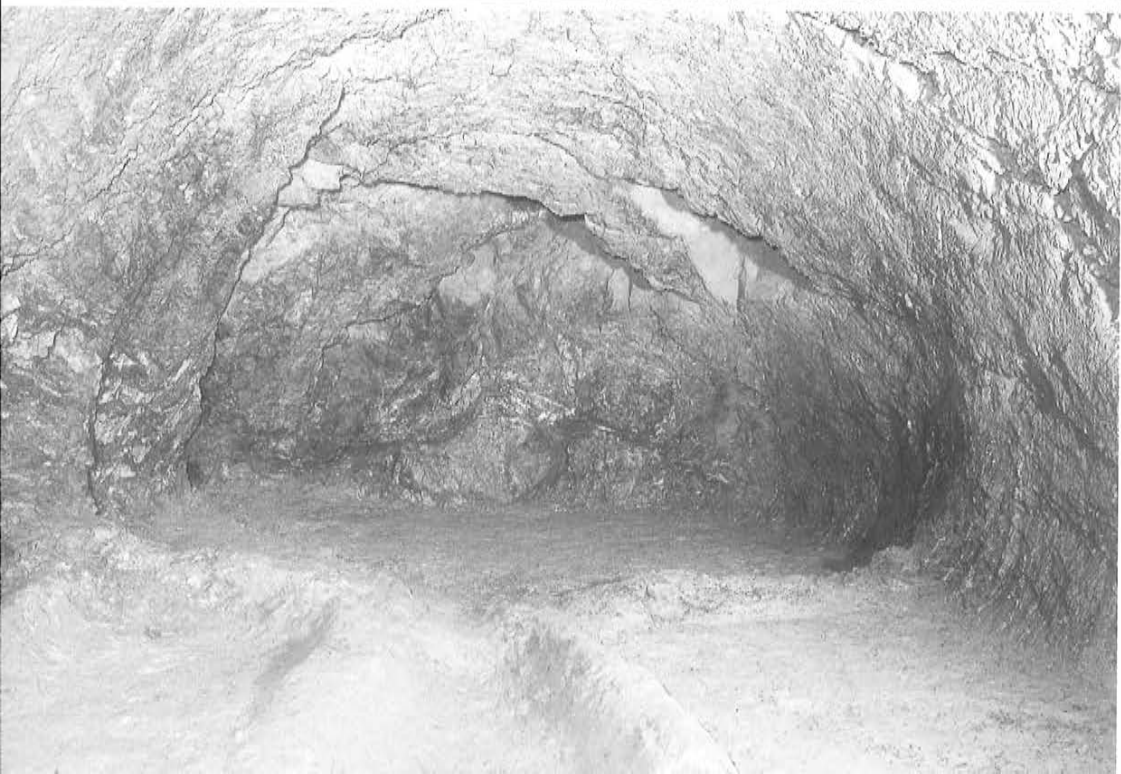
(3) 7号横穴墓玄室



(1) 8号～11号横穴墓
(南から)



(2) 8号横穴墓閉塞状態



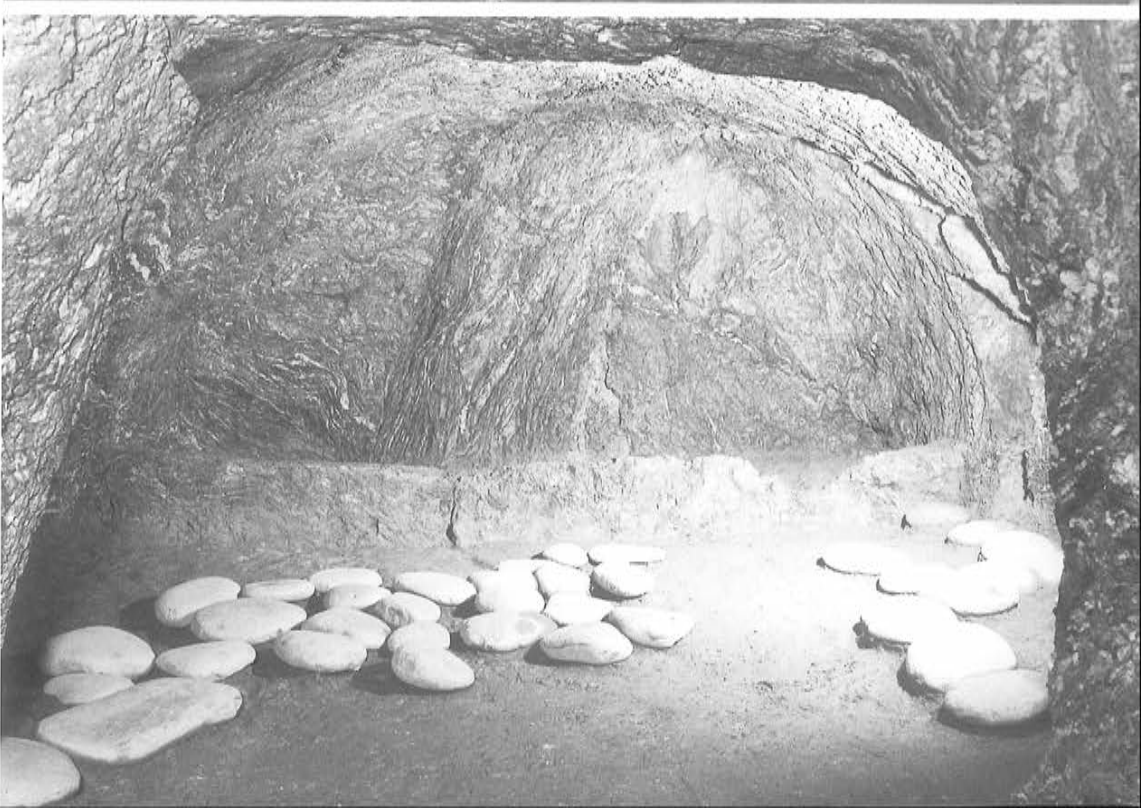
(3) 8号横穴墓玄室



(1) 9号横穴墓玄室



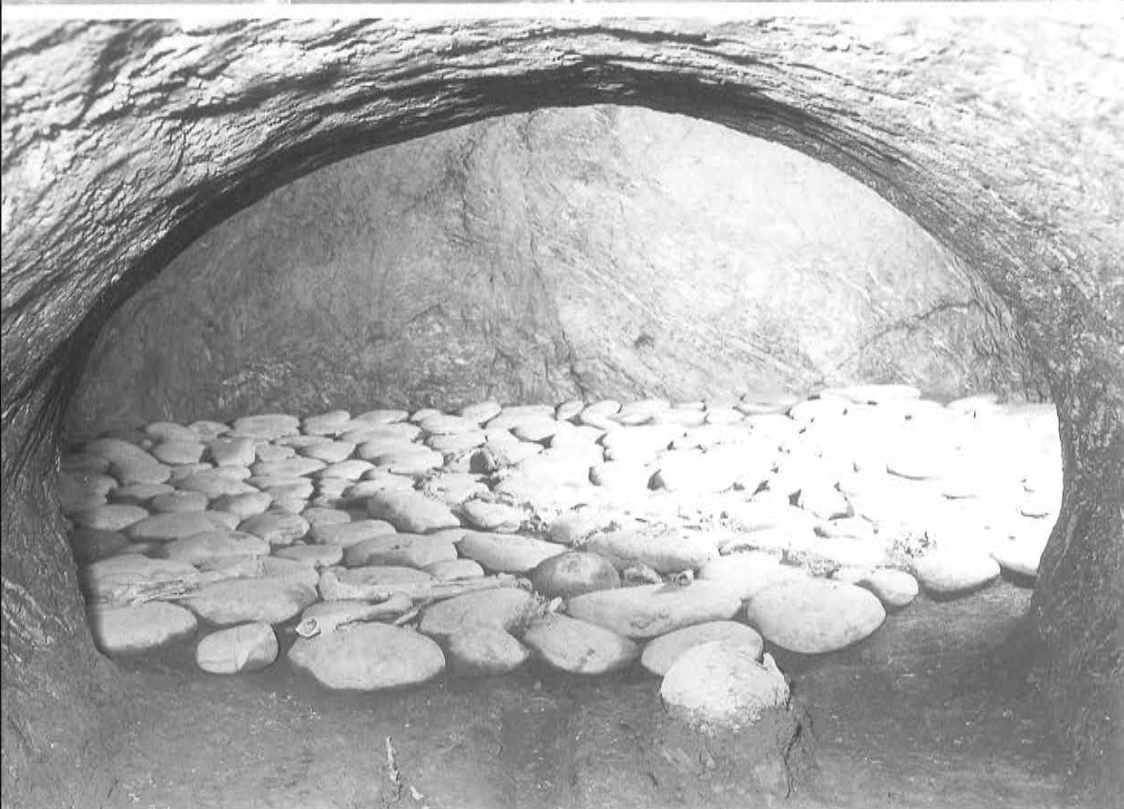
(2) 10号横穴墓羨道から
玄室を望む



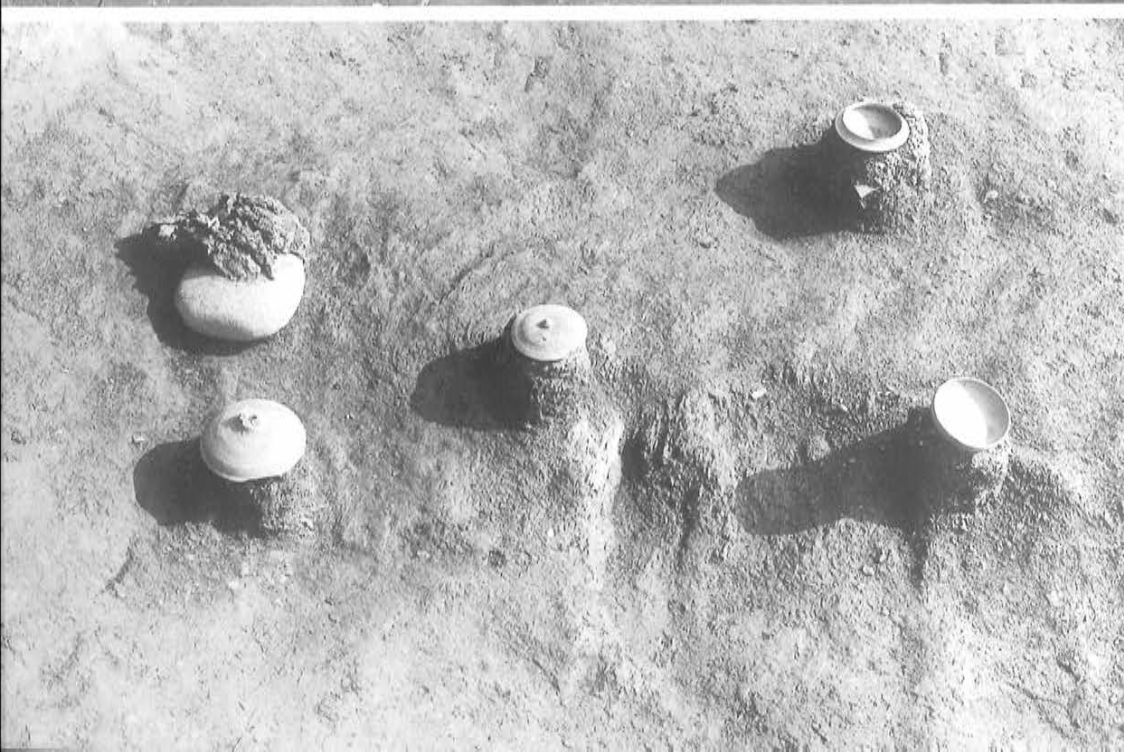
(3) 10号横穴墓玄室



(1)11号～15号横穴墓
(南から)



(2)11号横穴墓玄室



(3)11号横穴墓前庭部
遺物出土状態



(1)12号横穴墓（南から）



(2)12号横穴墓玄室



(3)12号横穴墓前庭部
遺物出土状態



(1)12号横穴墓道遺物
出土状態



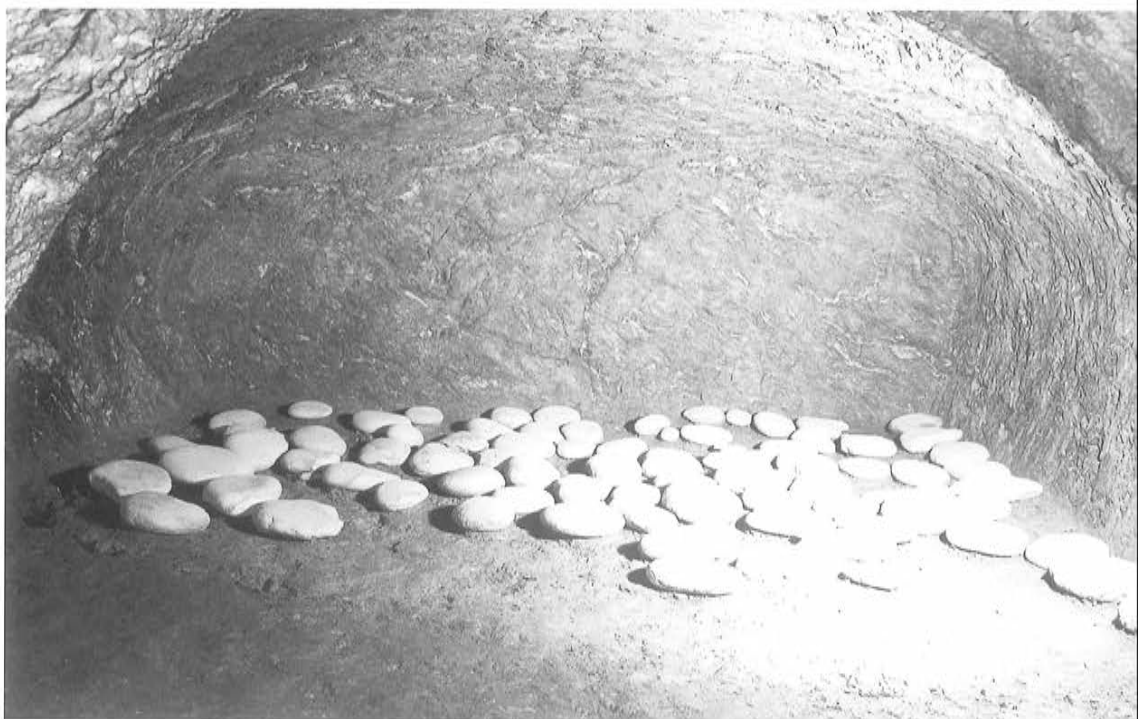
(2)13号横穴墓玄室



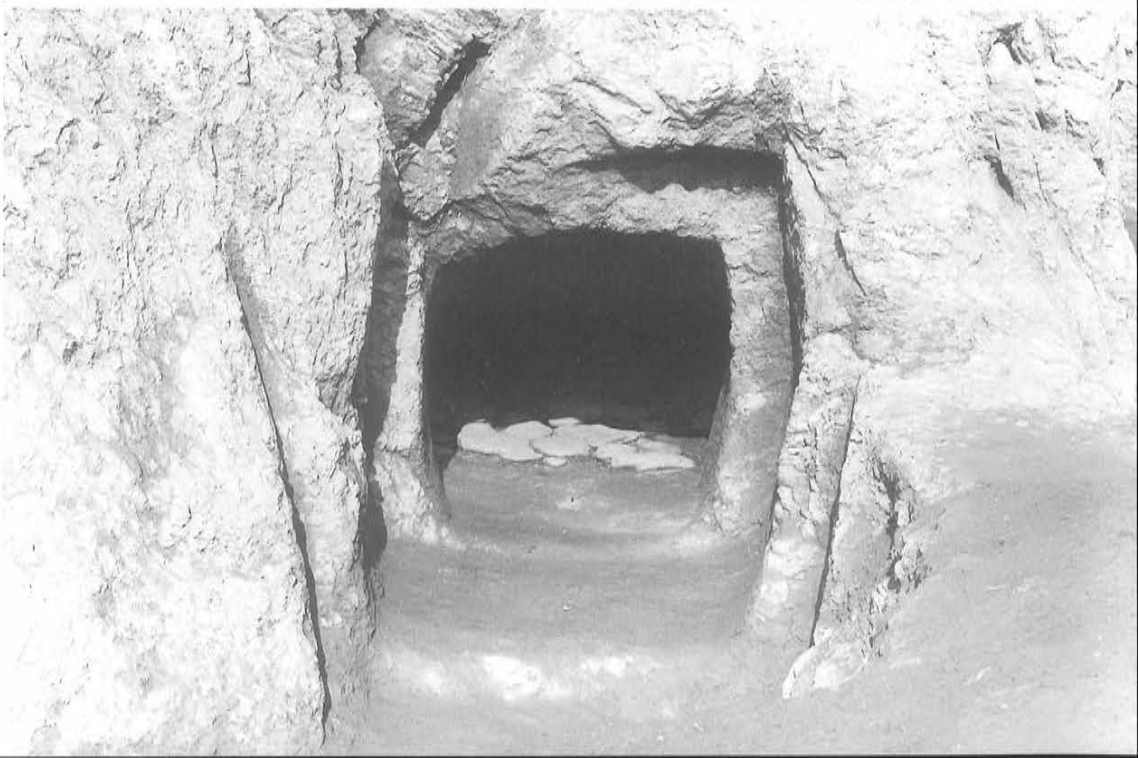
(3)14号横穴墓前庭部と
祭壇遺物出土状態



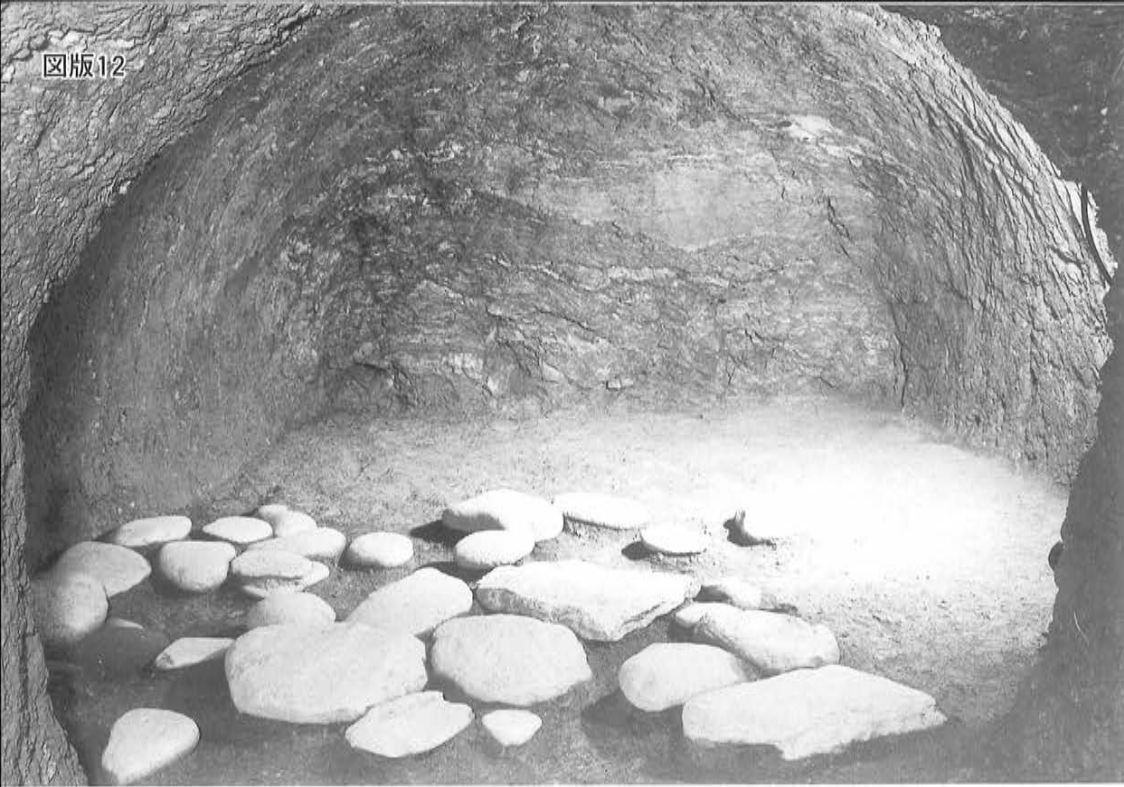
(1)14号横穴墓羨道から
玄室を望む



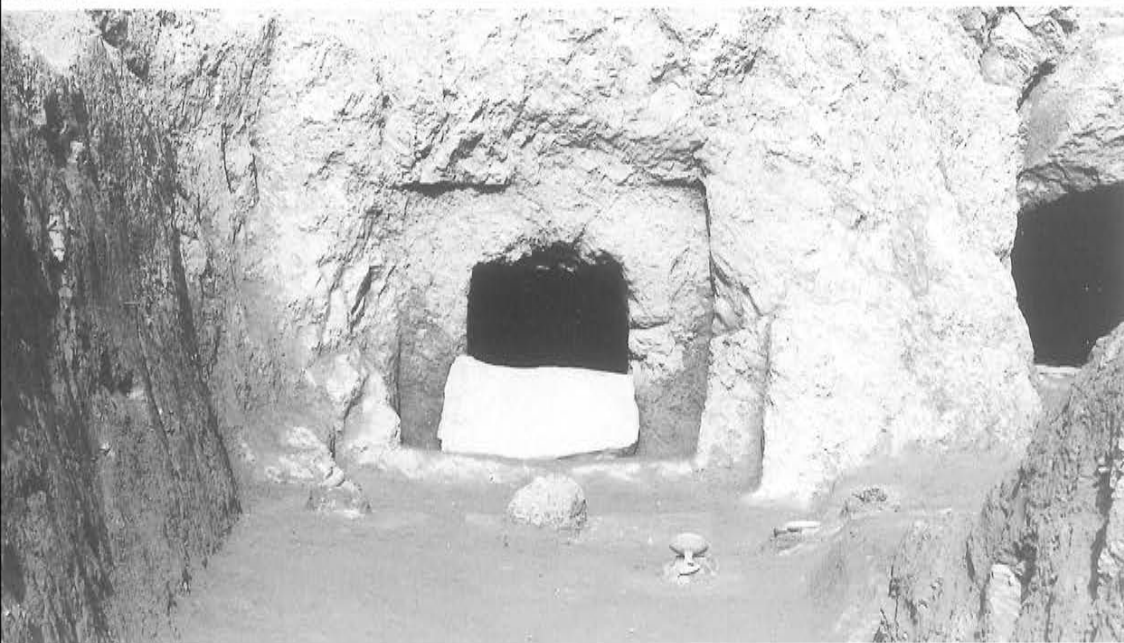
(2)14号横穴墓玄室



(3)15号横穴墓（南から）



(1)15号横穴墓玄室



(2)16号横穴墓（南から）

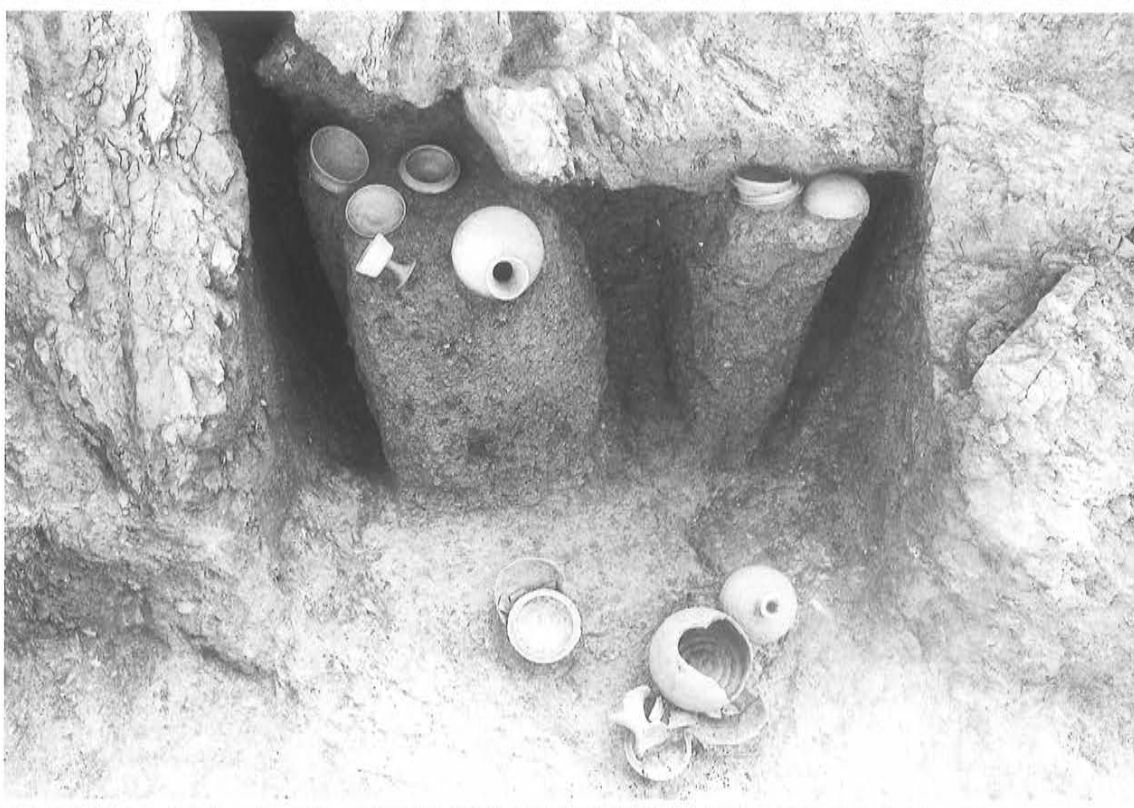


(3)16号横穴墓玄室

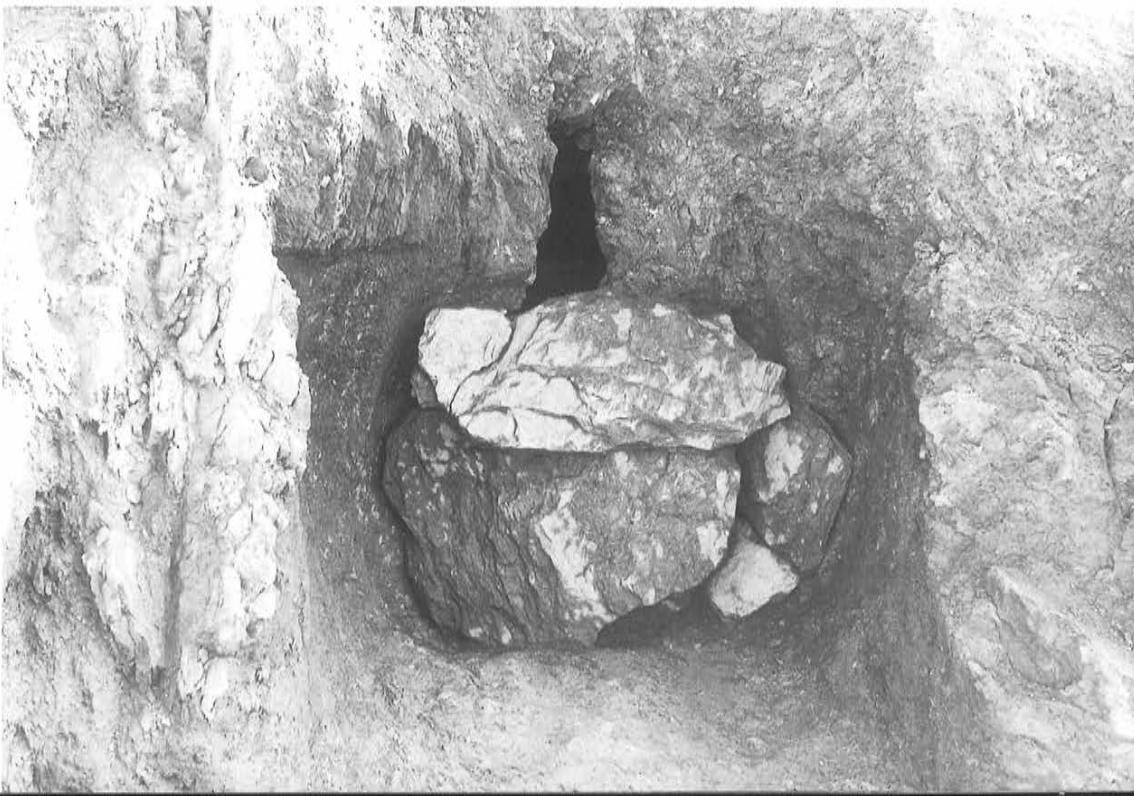
(1)16号横穴墓道遺物
出土状态



(2)17号横穴墓前庭部
遺物出土状态

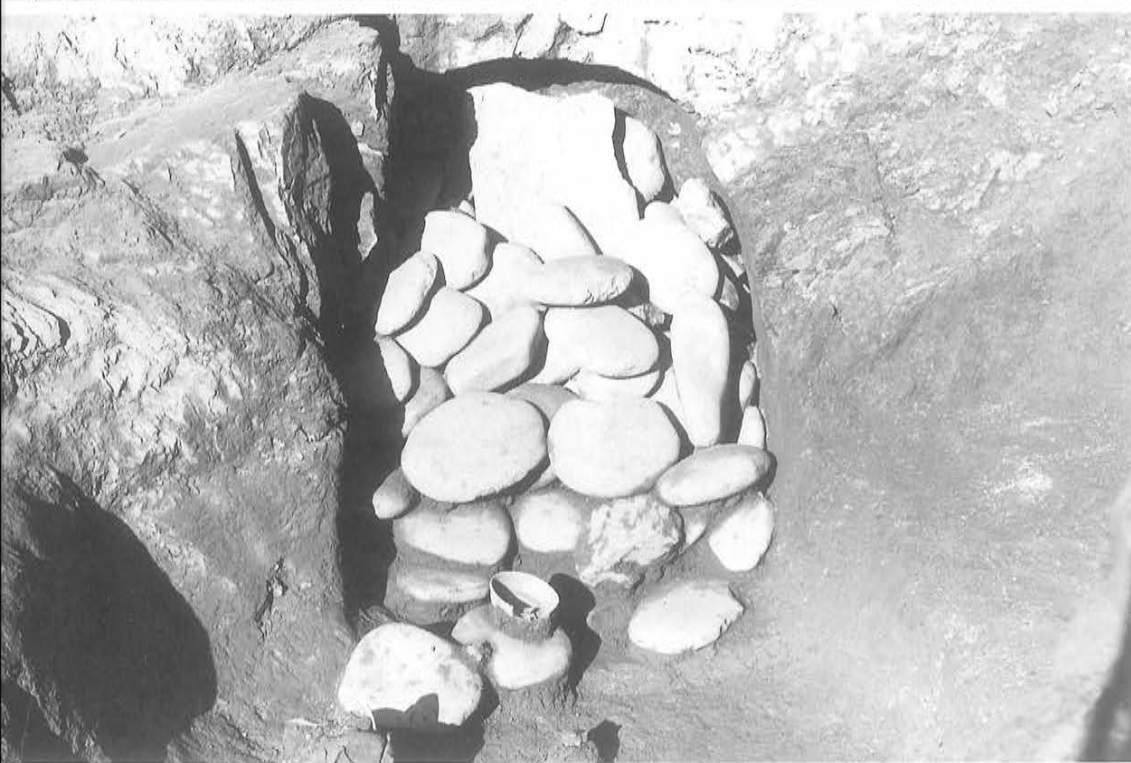


(3)17号横穴墓閉塞状态

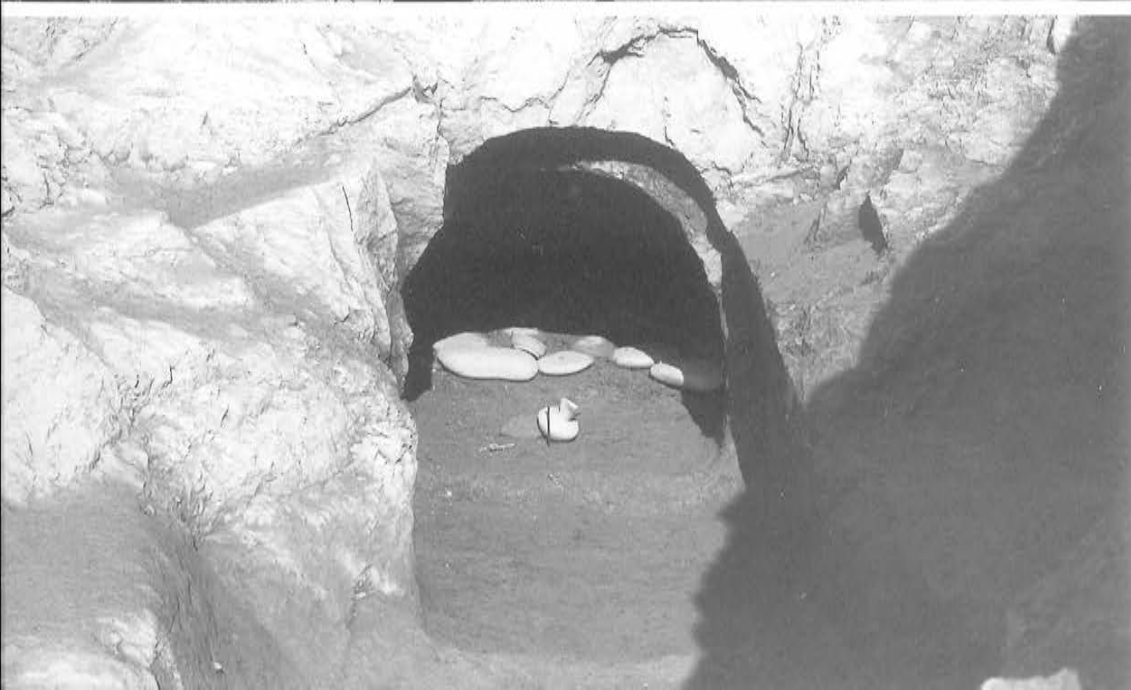




(1)17号横穴墓玄室



(2)18号横穴墓閉塞状態



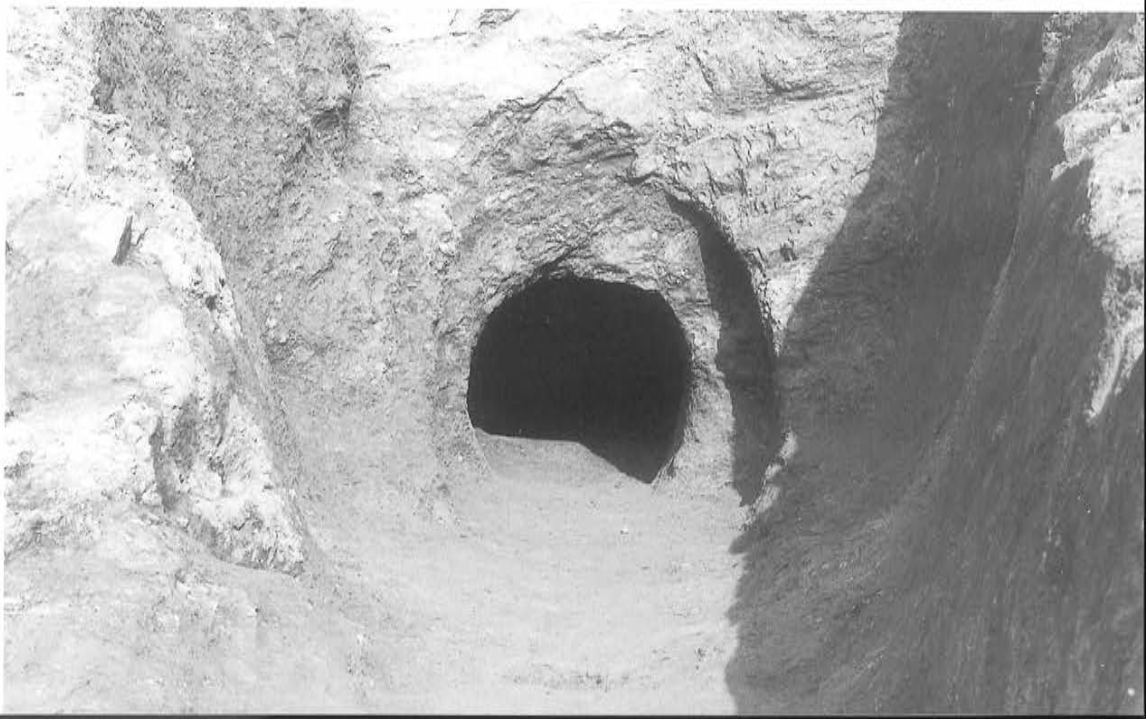
(3)18号横穴墓閉塞石
除去後の状態



(1)18号横穴墓玄室



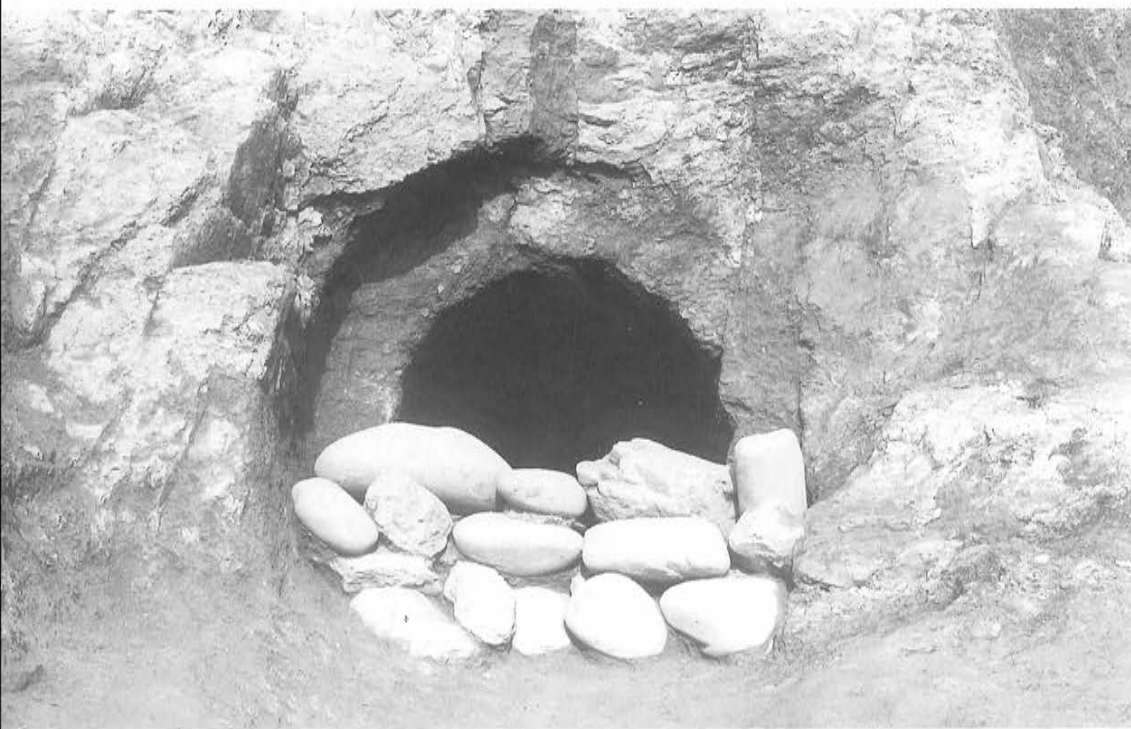
(2)19号～21号横穴墓
(南西から)



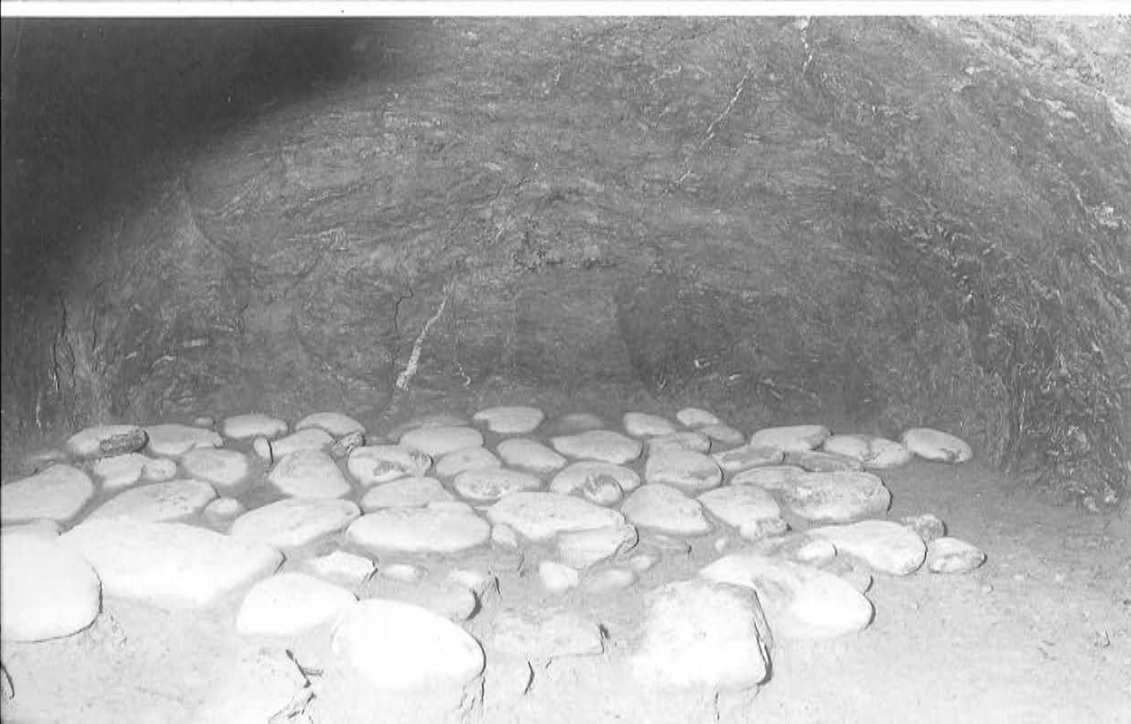
(3)19号横穴墓 (南西から)



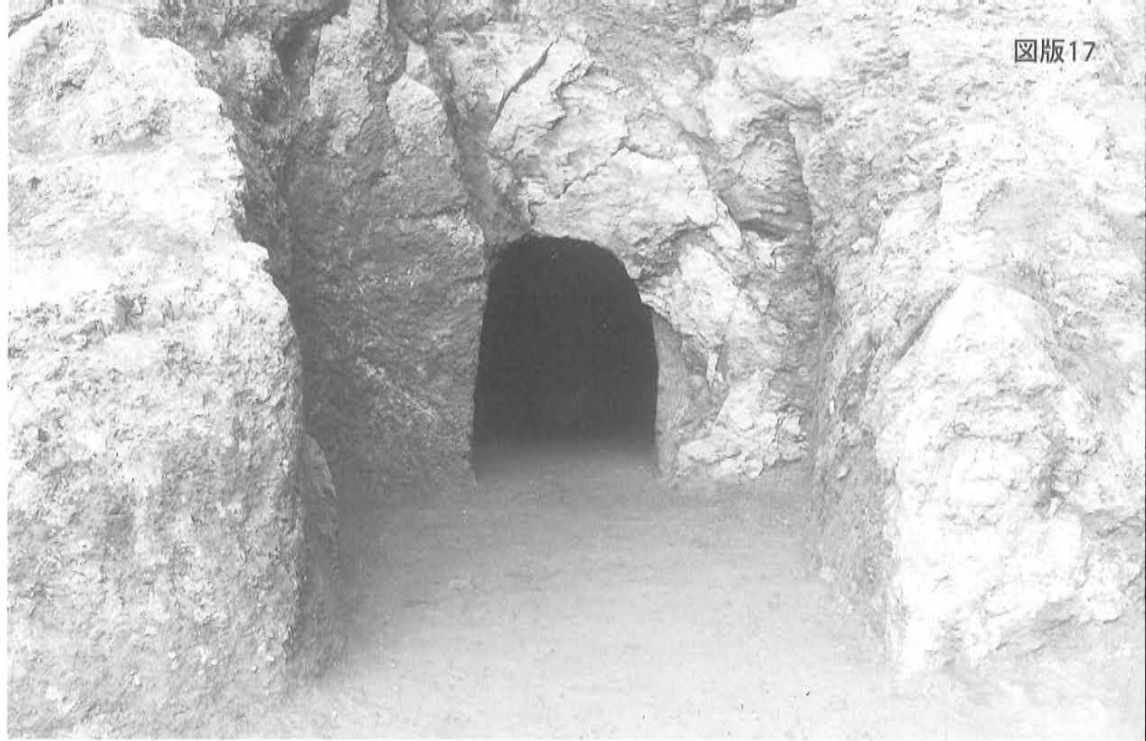
(1)19号横穴墓玄室



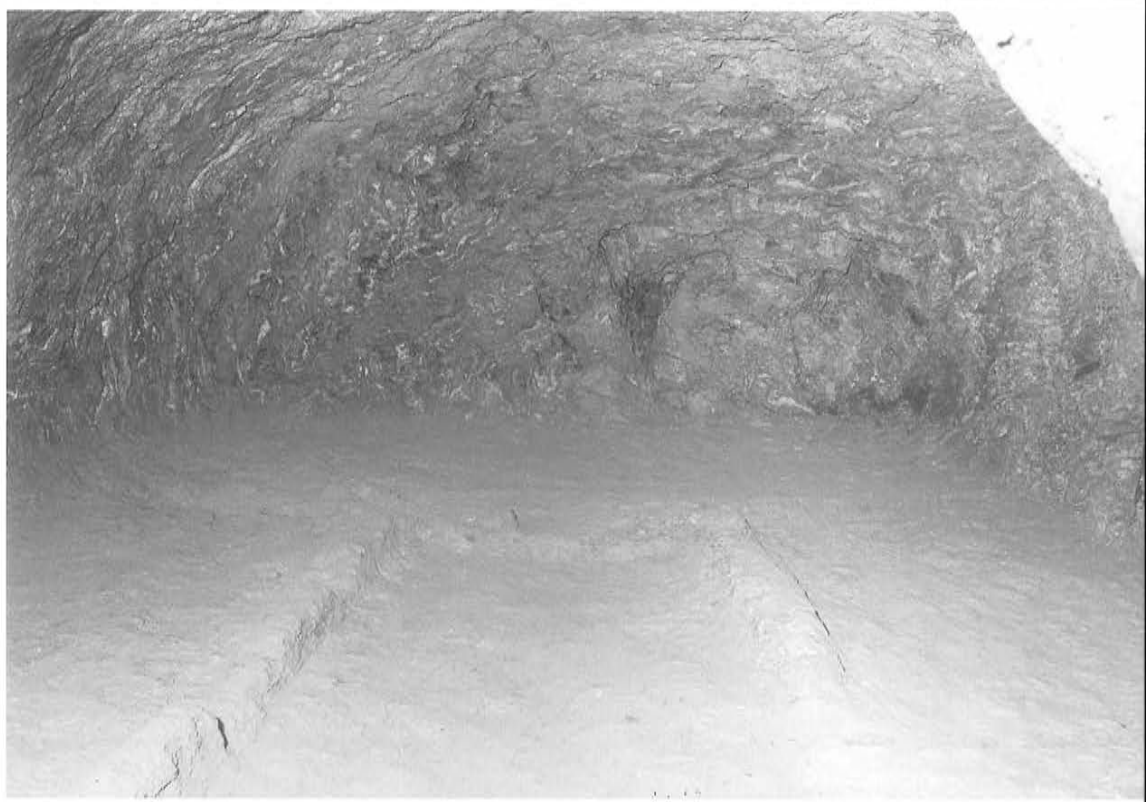
(2)20号横穴墓（南西から）



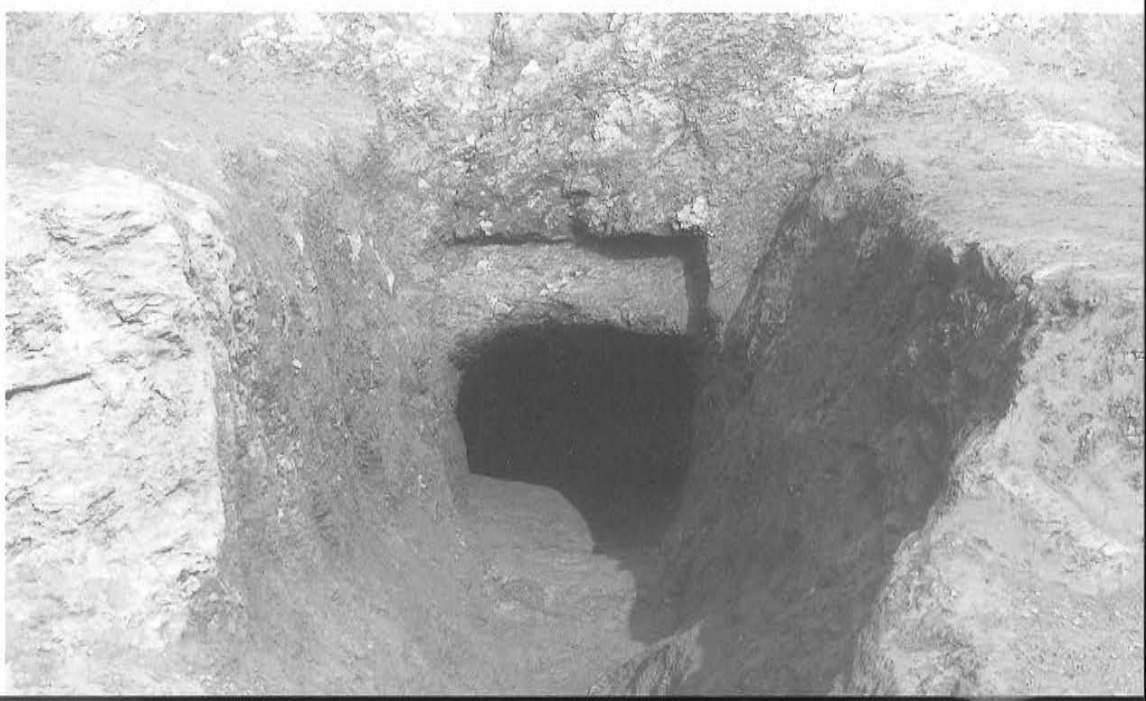
(3)20号横穴墓玄室



(1)21号横穴墓（南から）



(2)21号横穴墓玄室



(3)22号横穴墓（南西から）



(1)22号横穴墓玄室



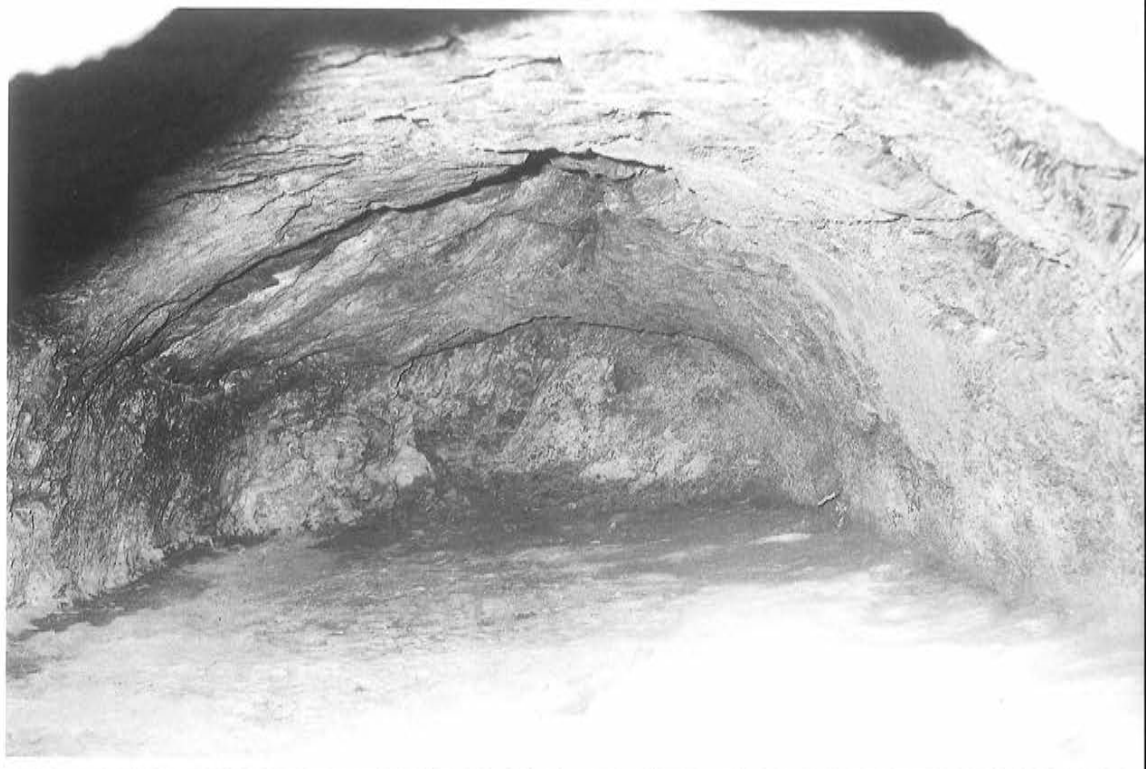
(2)第4次調査地点遠景
(南から)



(3)23号横穴墓(南西から)



(1)23号横穴墓飾縁部



(2)23号横穴墓玄室



(3)23号横穴墓玄室から
墓道を望む



(1)23号横穴墓道遺物
出土状態



(2)24号横穴墓（東南から）



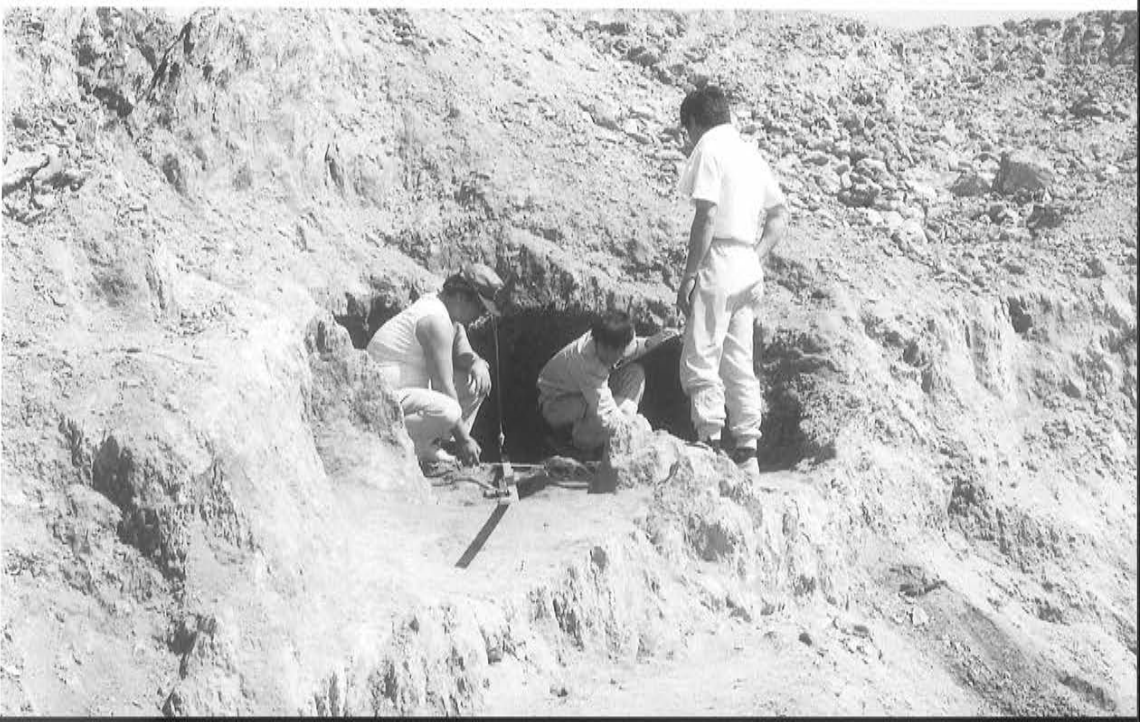
(3)24号横穴墓玄室



(1)25号横穴墓 (南から)



(2)25号横穴墓玄室



(3)26号横穴墓発見当時



(1)26号横穴墓（北から）



(2)26号横穴墓玄室



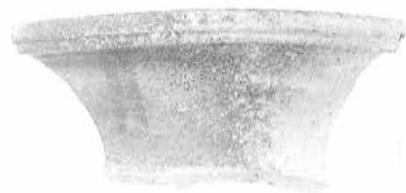
(3)3次調査作業風景



3-4



3-24



3-34



3-5



3-26



3-37



3-6



3-27



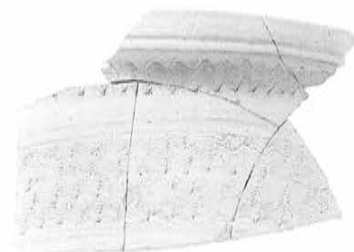
3-40



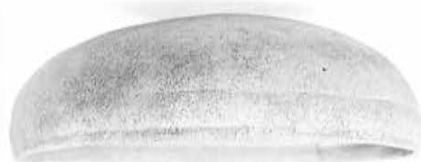
3-8



3-28



4-1



3-13



3-18



3-30



5-1



3-23



3-31



5-2

3号~5号横穴墓出土土器



5-3



5-15



5-22



5-5



5-16



5-25



5-7



5-17



5-26



5-8



5-27



5-12



5-18



5-28



5-13



5-19



5-29



5-21



5-30

5号横穴墓出土土器



5-32



5-38



5-46



5-33



5-39



5-47



5-34



5-35



5-40



6-1



5-36



5-43



6-2



5-37



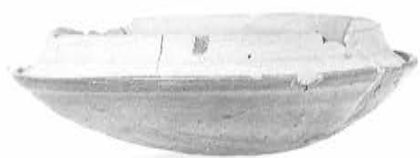
5-45



6-3



6-4



6-5



8-6



8-17



6-7



8-7



8-18



6-8



8-9



8-19



6-9



8-10



8-20



6-10



8-12



8-21



8-2



8-13



8-22



8-5



8-16

6号·8号横穴墓出土土器



8-23



8 · 10 · 11-11



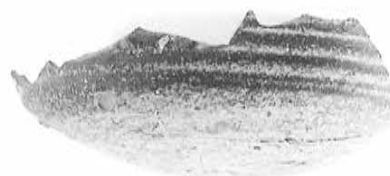
8 · 10 · 11-24



8 · 10 · 11-1



8 · 10 · 11-12



8 · 10 · 11-29



8 · 10 · 11-2



8 · 10 · 11-13



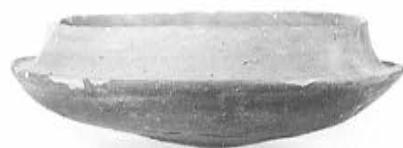
8 · 10 · 11-33



8 · 10 · 11-3



8 · 10 · 11-16



8 · 10 · 11-18



10 · 11-34



8 · 10 · 11-6



8 · 10 · 11-20



10 · 11-35



8 · 10 · 11-7



8 · 10 · 11-21



8 · 10 · 11-22



10 · 11-36



8 · 10 · 11 - 37



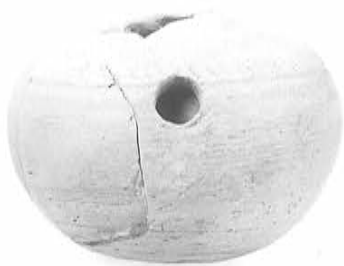
8 · 10 · 11 - 38



8 · 10 · 11 - 40



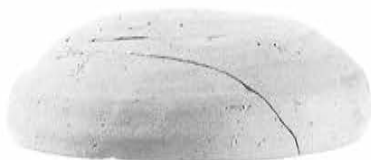
8 · 10 · 11 - 41



8 · 10 · 11 - 45



10 · 11 - 2



10 · 11 - 3



10 · 11 - 4



10 · 11 - 5



10 · 11 - 6



10 · 11 - 7



10 · 11 - 8



10 · 11 - 11



10 · 11 - 13



10 · 11 - 15



10 · 11 - 17



10 · 11 - 18



10 · 11 - 20



10 · 11 - 22



10 · 11 - 24



10·11-25



10·11-35



11-7



10·11-14-27



10·11-37



11-8



11-9



10·11-28



10·11-38



11-10



11-2



11-13



10·11-32



11-3



11-15



10·11-34



11-4



11-6



11-16



11-19



12-10



12-21



12-2



12-11



12-22



12-3



12-13



12-23



12-5



12-14



12-6



12-15



12-27



12-7



12-16



12-8



12-19



12-13-1

11号~13号横穴墓出土土器



12·13-2



12·13-14



12·13-25



12·13-4



12·13·19-16



12·13·15-28



12·13-5



12·13-17



12·13-8



12·13-19



12·13-29



12·13-9



12·13-20



12·13-31



12·13-11



12·13-21



12·13-32



12·13-12



12·13-24



12·13-13



12·13-35



12 · 13-36



13-5



13-17



12 · 13-37



13-8



13-9



13-1



13-10



13-19



13-2



13-11



13-3



13-12



13-4



13-13

13-21



14-2



14-11



15-5



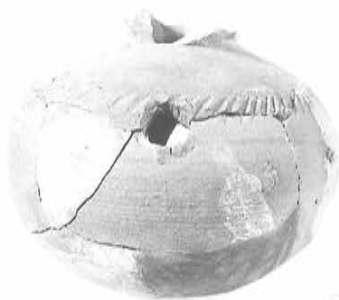
14-3



15-6



14-4



14-13



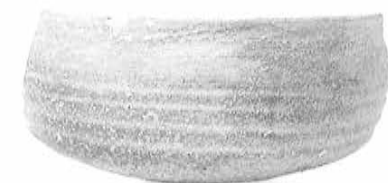
15-7



14-6



14-14



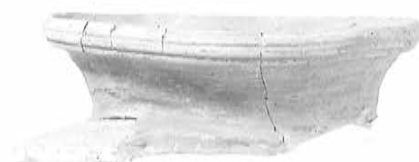
15-11



14-7



14-15



15-12



14-8



15-3



15-14



14-9



15-4



15-15



15-18



15 · 16-6



15 · 16-17



15 · 16-7



15 · 16-1



15 · 16-10



15 · 16-18



15 · 16-2



15 · 16-11



15 · 16-12



16-1



15 · 16-3



15 · 16-15



16-2



15 · 16-4



15 · 16-5



15 · 16-16



16-3



16-4



1 (8 · 10 · 11 · 13)



2 (10~13)



16-5



4 (8~11)



5 (15 · 16)



16-6



16-7



3 (8~13)



17-4



16-8



17-5



17-6



17-1



17-3



17-7

8号~13号·16号·17号横穴墓出土土器



17-8



17-15



18-2



17-9



17-18



18-3



17-10



18-5



17-11



17-20



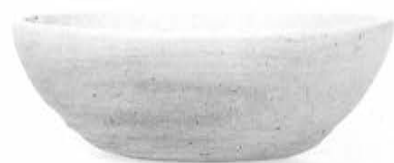
18-8



17-12



18-9



17-13



17-21



18-10



17-14



18-1



18-11



18-12



18-13



18-24



18-34



18-14



18-26



19-1



18-16



18-18



18-30



19-2



18-19



19-3



18-20



18-32



19-4



18-23



18-33



19-5



19-6



19-7



19 · 20 · 22-14



19-8



21



22-7



19-9



22-1



23-1



19-10



22-2



23-2



19-11



22-5



23 · 24-3



19-13



22-6



23 · 24-4



23-5

19号~23号横穴墓出土土器



23·24-6



23-14



25-2



23·24-7



23·24-16



25-4



23·24-8



23·24-17



25-6



23-9



25-6



23-10



23-19



23-11



25-10



23-12



23·24-22



23-13



25-1



25-11

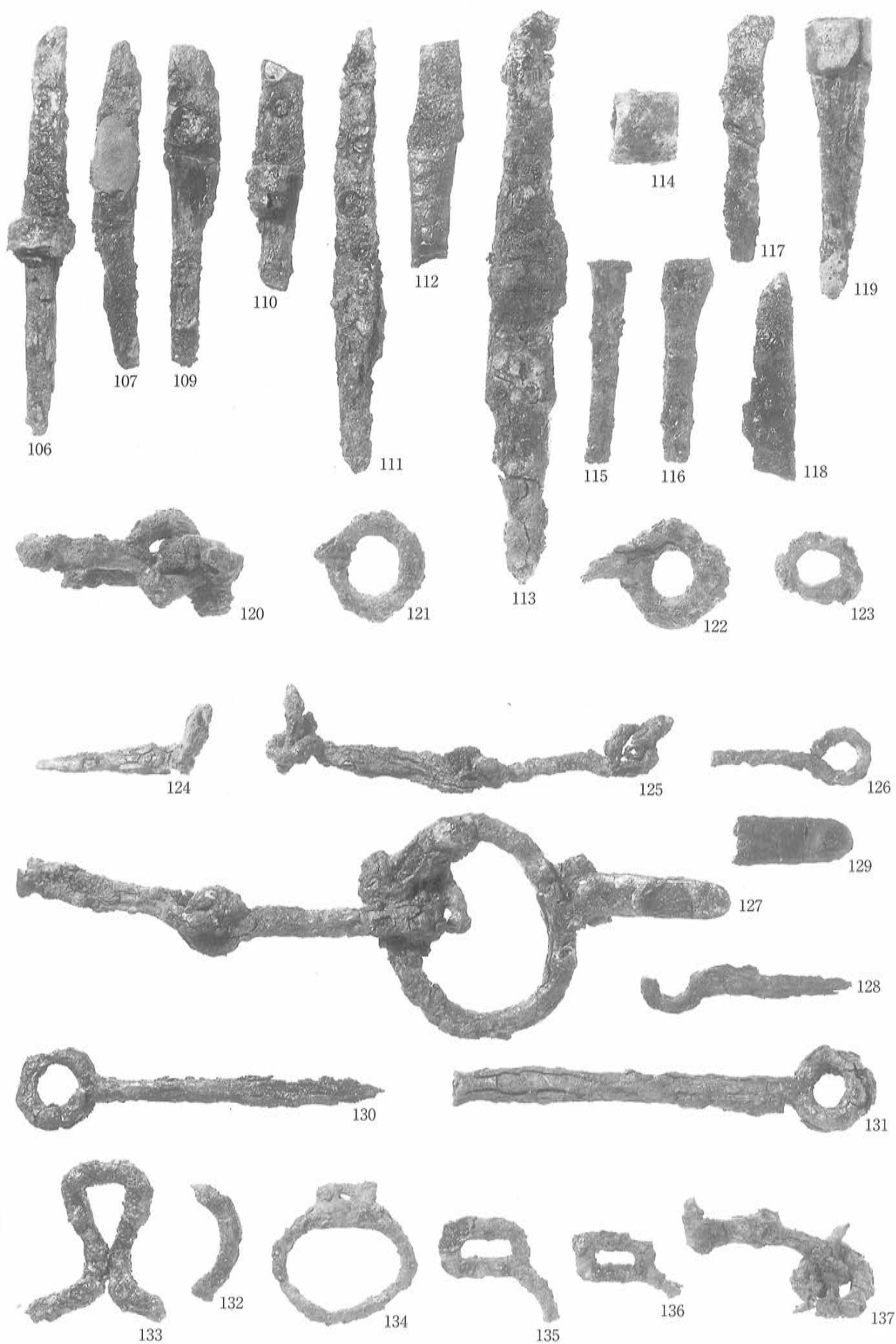
23号~25号横穴墓出土土器



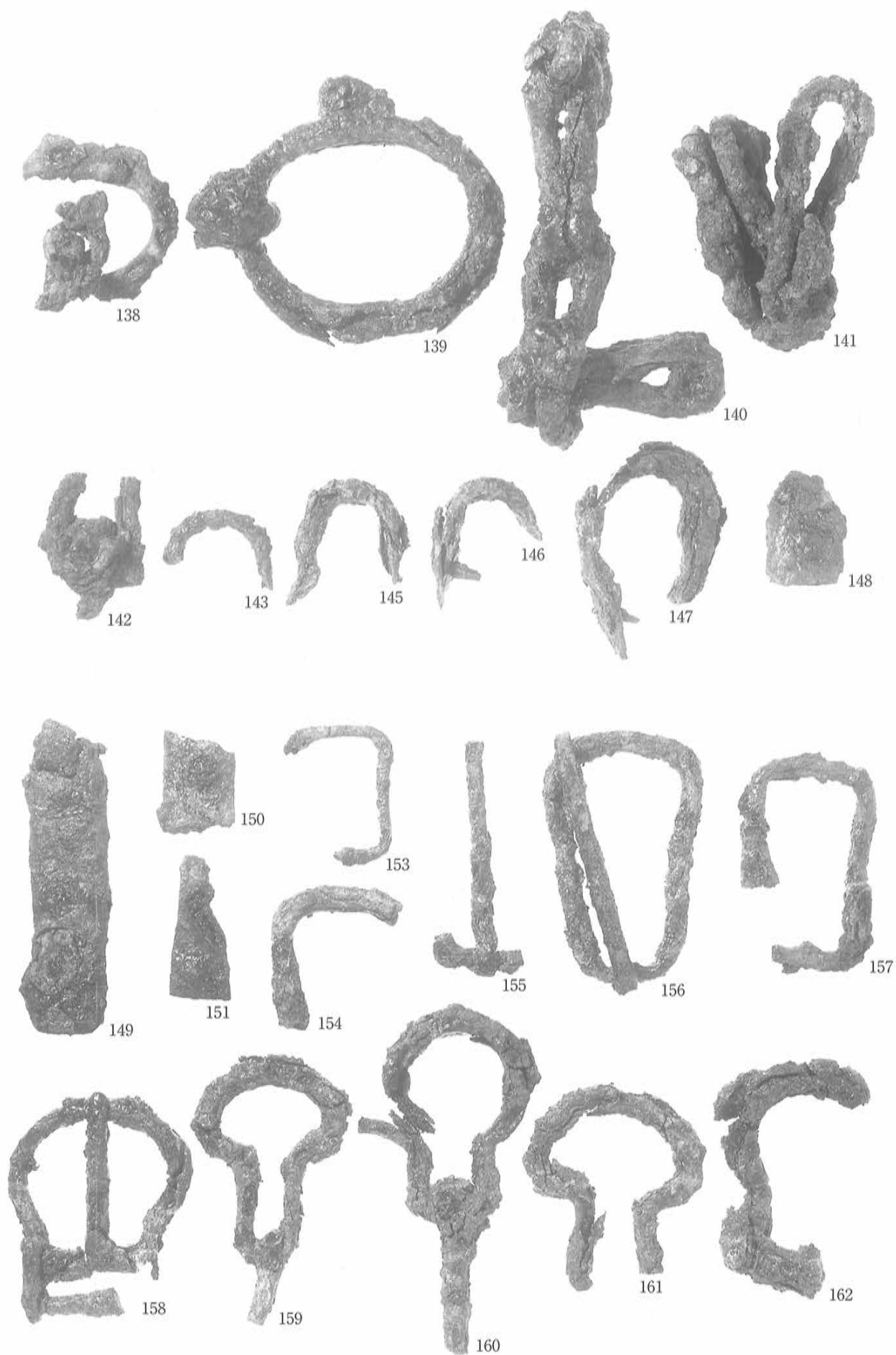
小倉谷横穴墓群出土鉄器



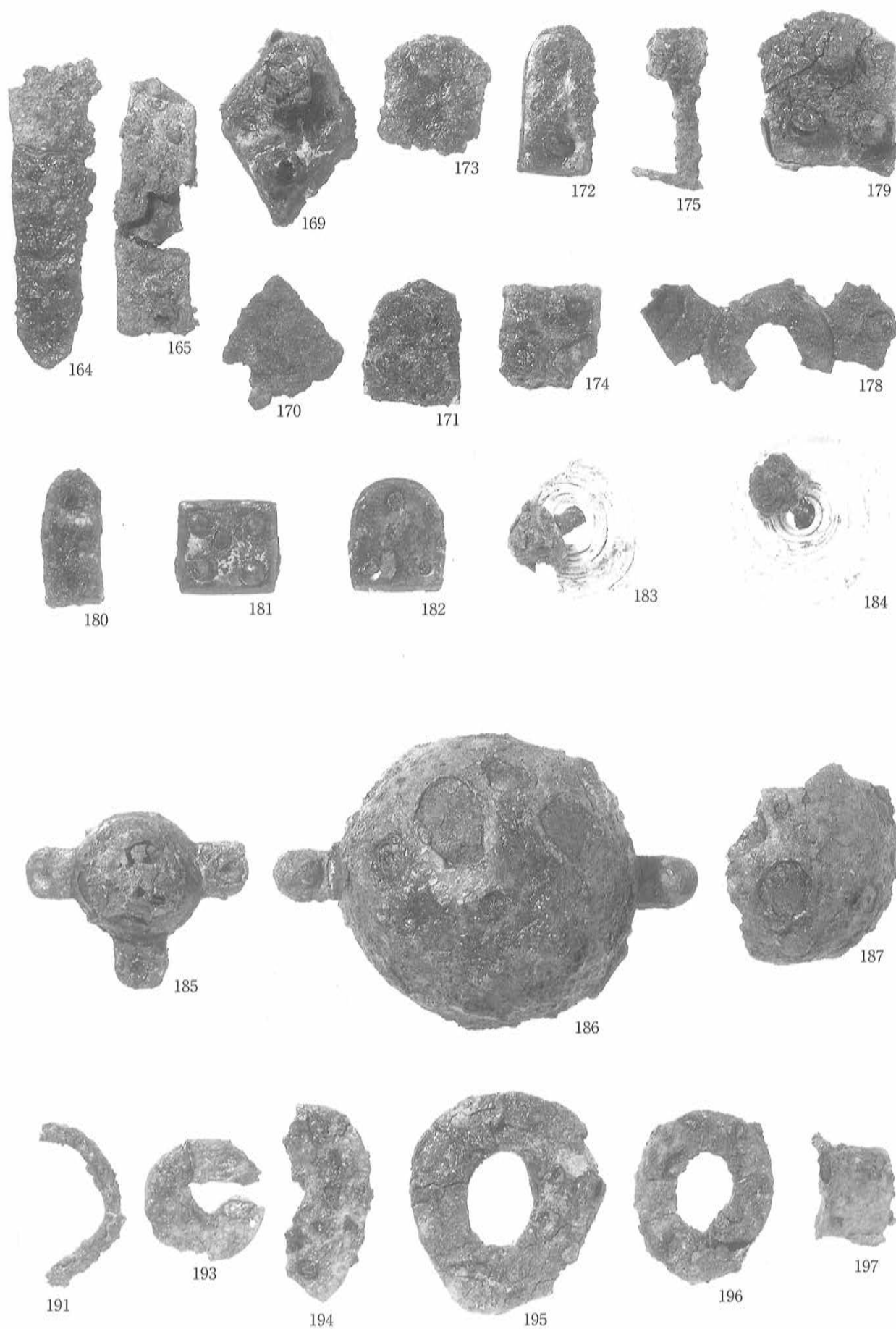
小倉谷横穴墓群出土鉄器



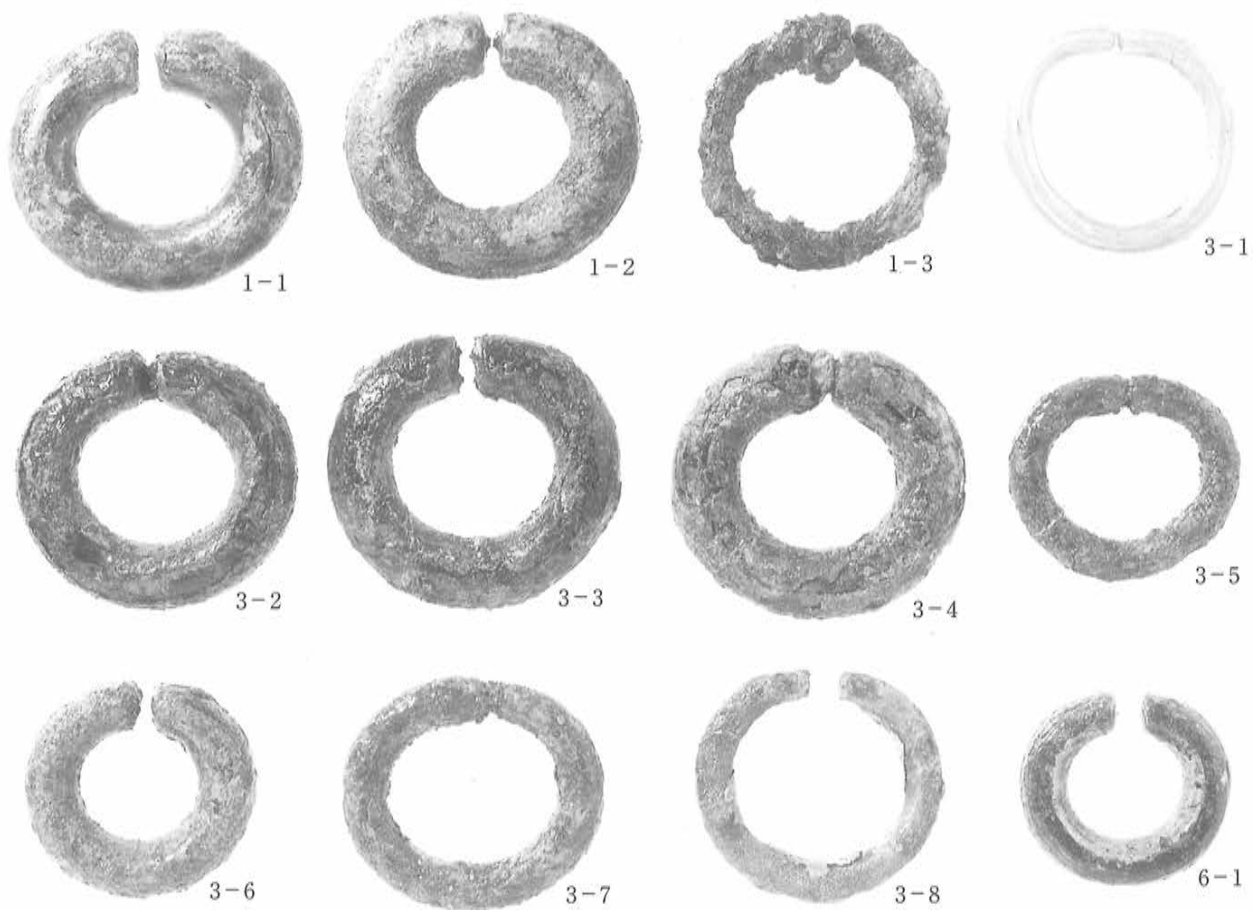
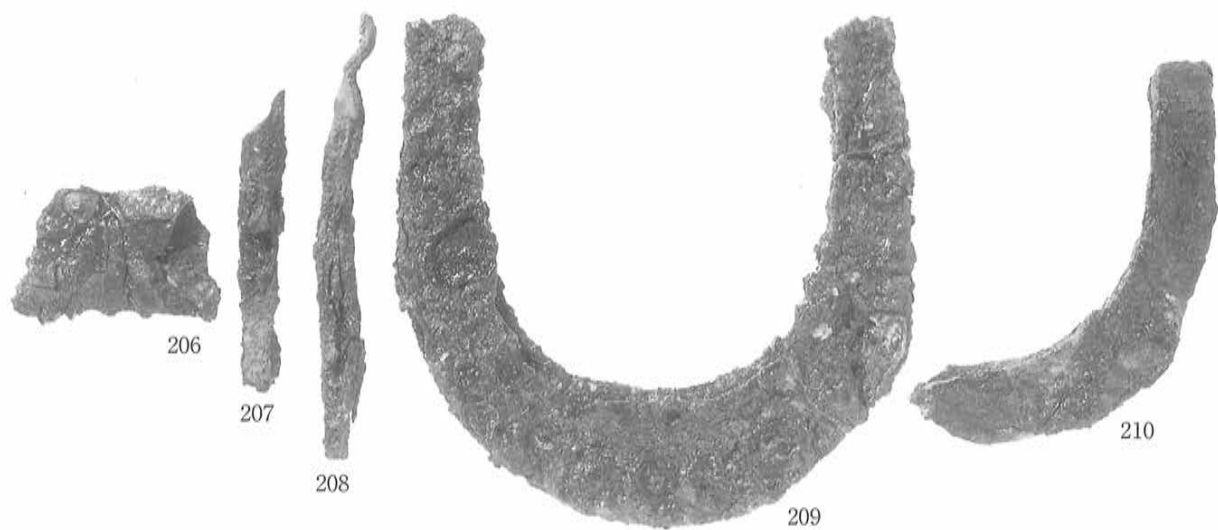
小倉谷横穴墓群出土鉄器



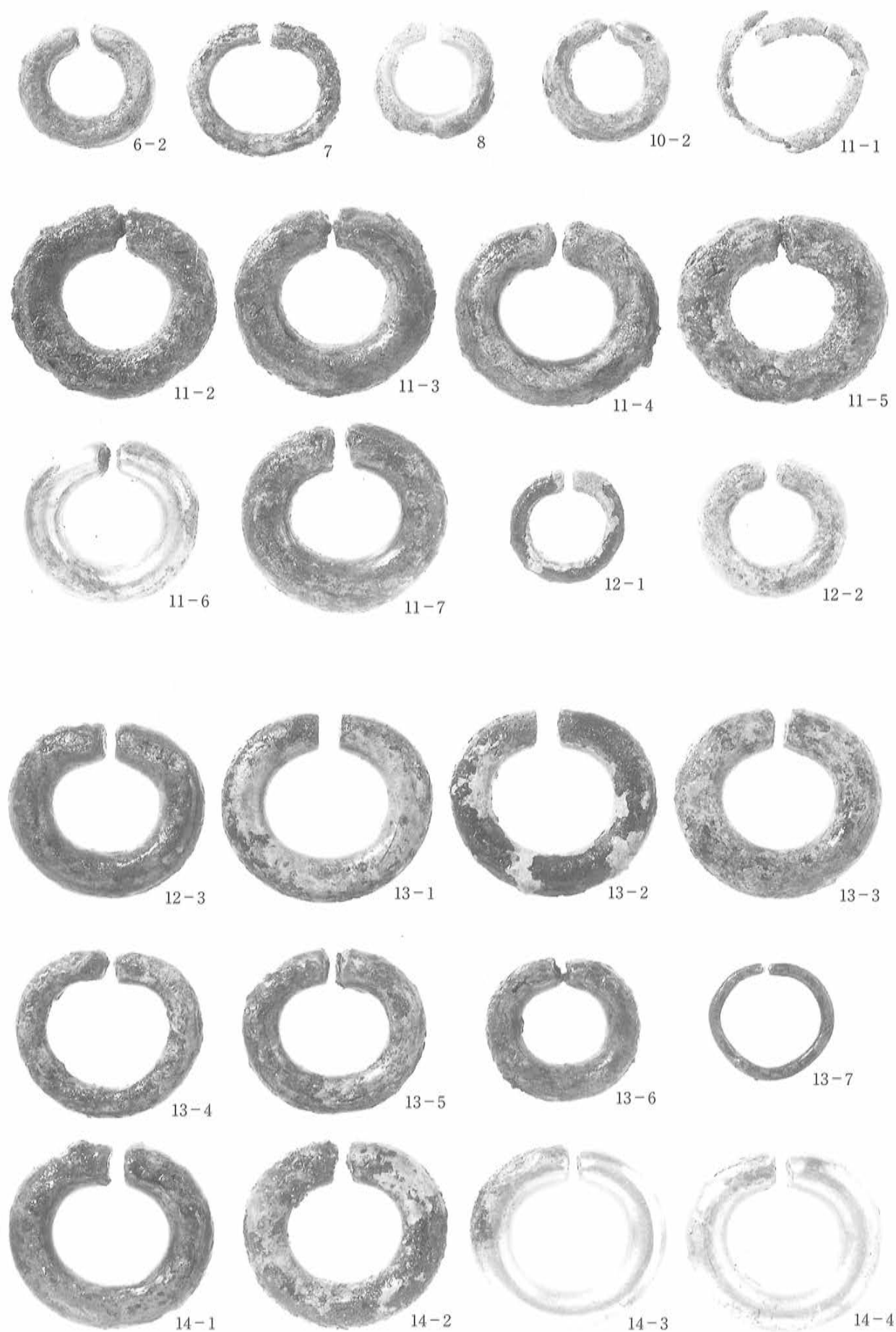
小倉谷横穴墓群出土鉄器



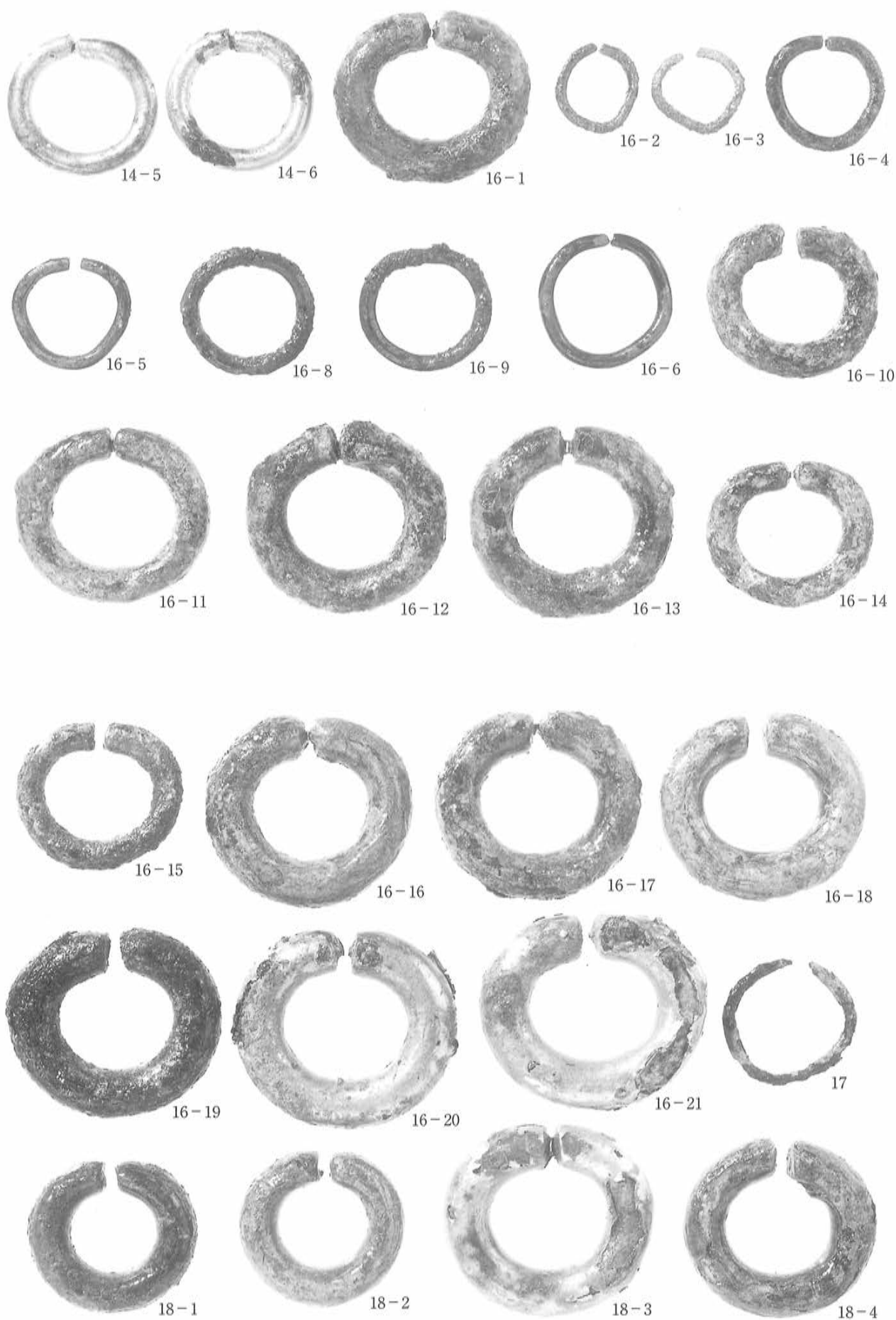
小倉谷横穴墓群出土鉄器



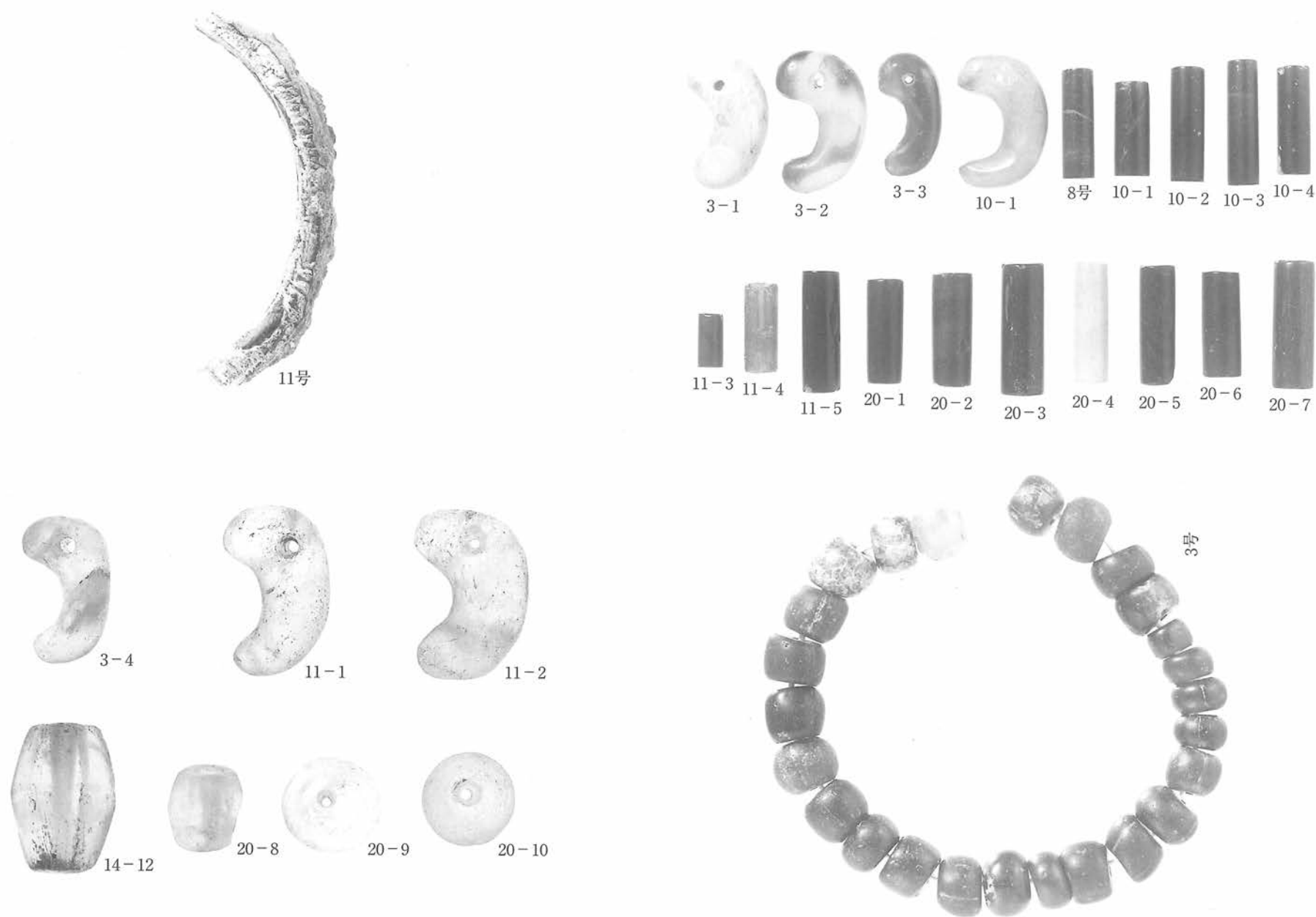
小倉谷横穴墓群出土鉄器・装身具



小倉谷横穴墓群出土装身具



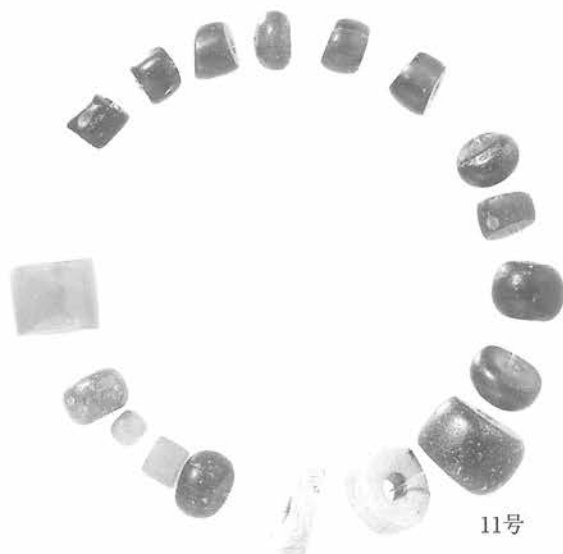
小倉谷横穴墓群出土装身具



小倉谷横穴墓群出土装身具



3号



11号



16号



16号

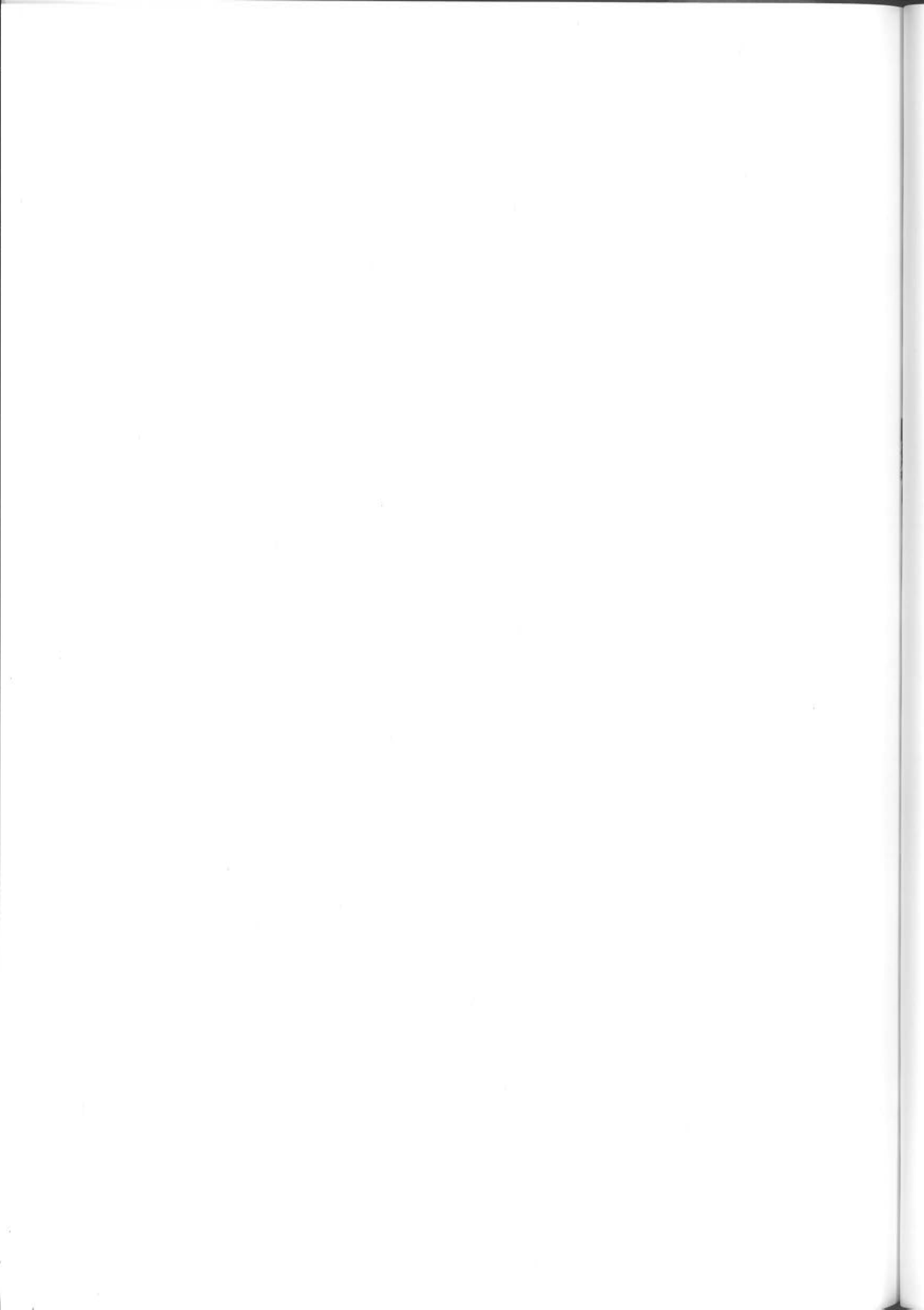


14号



19号

小倉谷横穴墓群出土装身具



報 告 書 抄 録

ふりがな	こぐらたにおうけつぼぐん							
書名	小倉谷横穴墓群							
副書名	八女郡立花町大字北山字茶臼塚所在横穴墓群の調査							
巻次								
シリーズ名	立花町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第10集							
編著者名	佐々木隆彦・中橋孝博・大森 円・永田 寧							
編集機関	立花町教育委員会							
所在地	〒834-0075 八女郡立花町大字原島95-1							
発行年月日	西暦 1999年 3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村 遺跡番号		北 緯	東 経	調査 期間	調査 面積	調査原因
こぐらたにおうけつ 小倉谷横穴 墓群	やめぐんたちばな 八女郡立花 町大字茶臼 塚字小倉	405430	720077～ 720081	33°10′ 40″	130° 33′50″	1989 1106 ～ 1990 0125	2,000	個人の土 取り
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物		特記事項		
小倉谷横穴 墓群	墓地	古墳時代	横穴墓26基	土師器・須恵器 鉄器・装身具 埴輪片				

小倉谷横穴墓群

立花町文化財調査報告書
第10集

平成11年 3月31日

発行 立花町教育委員会
八女郡立花町大字原島95-1
印刷 瞬報社写真印刷 (株)
福岡市中央区天神5-4-16
城戸ビル 3 F